英雄予備軍冒険譚

かっぷ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄予備軍冒険譚

【Ｎコード】
Ｎ７５２６Ｗ

【作者名】
かっぷ

【あらすじ】
飛竜が空を舞い、妖精が草原に歌う幻想の世界。人として生まれた少年ヤマトは、ノエルという少女と出会い、彼女を守ると心に誓う。やがて「冒険者」となった二人は、腕を磨いて経験を積み、互いに信頼を高めて行く。だが次第に離れて行く二人の実力――ヤマトは普通の人間。ノエルは特別で希少な存在「天使」であった。守ると誓った相手に守られるという矛盾に悩みながらも、がむしゃらに進むヤマト。周囲の期待に応えたいと思いつつも、ヤマトと離れたくないと願うノエル。そんな二人に、最大の試練が訪れる。～～

オーソドックスな西洋風ファンタジー世界を舞台に繰り広げられる、
青春冒険活劇～～

序話：ダメ人間と失格天使（前書き）

戦闘シーンなど、残酷な描写が含まれている話がございます。その都度、前書きにて警告表示をさせて頂こうとは思いますが、苦手な方はご注意下さい。

序話：ダメ人間と失格天使

大きな木の下で、年端も行かぬ幼い少女が泣いている。
愛らしい顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃ、白いワンピースは土で汚れて泥だらけ。長く綺麗な金髪には折れた枝が絡まり、膝小僧は擦り剥けて血が滲んでいる。
木から落ちたのだ。
しかし彼女は傷が痛くて泣いているのでは無い。
彼女の背中から生える一対の翼――真っ白な光を放つ美しい翼だ――その翼が、傷付いていた。発光する翼の所々が赤く染まり、一部が裂け、一部が折れていた。抜け落ちた羽は付近に散らばり、風に晒された端から細かな光の粒へと分解され、空へ昇って行く。
天使の象徴たる、純白の翼。
その翼が傷付いてしまった事に、少女は酷く心を痛めていた。翼を失えば天使ではいられない。飛べない天使など、天使では無い。
傷付いた翼を羽ばたかせ、無理矢理飛ぼうと試みる少女。だが折れた翼は風を捕らえる事無く無意味に傷口を広げ、ただ光の粒を撒き散らすだけ。
少女の表情が絶望に染まる。泣き声が大きくなる。

（しょうがねぇ奴だな……）

少年は呟く。
少女の泣き声は彼の耳に届いていた。早く助けてやらなくては。そんな気にさせる泣き声。早く彼女の元へ駆け寄って、手を差し伸べなければならない。
少女がまた羽ばたき、光の粒が舞う。そして更に泣き声が大きくなった。モタモタしてはいられない、早く行かなくては。少年は少女の元へと走る。早く、一刻も早く。悲痛な泣き声が少年を急かす。

胸が締め付けられる。
　少女に近付くにつれて舞い散る光の量が増えてくる。少女から放出され、ゆらゆらと漂う光の粒。その一つ一つが明るく優しい光を放ち、触れればほのかに暖かい。まるで母の腕の中にいるような安らぎ……母を知らぬ少年でさえ、そう感じた。
　だが捻くれ者の少年はその安らぎに反発するするように、あえてぶっきらぼうに言った。

（おい、もう泣くな）

　少年の声に、泣いていた少女が顔を上げる。可愛らしい少女だ。ささくれ立った少年の心に、生まれて初めて大きく熱い物が宿る。

（泣いたってしょうがねぇだろ？　ほら、元気出せよ）

　汚い服で拭った手を、そっと差し伸べる。
　高鳴る鼓動。その理由に少年は気付かない。

（そんくらいのケガなんかツバ付けときゃ治るって）
（で、でもっ！　私、飛べなくなったら……）
（大丈夫だよ、ケガが治ったら飛べる。もし飛べなくても、飛べるようになるまで俺がずっと面倒見てやる。だから心配すんな）
（……うん）

　そっと握り返される手。差し出された少年の手に、少女の手が重ねられる。柔らかく、暖かい手のひら……全ての痛みと苦しみが癒されてゆく、そんな気さえする。

（ありがとう）

言って、少女が笑った。まるで天使のような……いや、天使の微笑みだ。

（お、おう）

その笑顔が眩しくて、思わず目を逸らしてしまう。くすくすと笑う少女。

（何だよ、笑うなって。いま泣いてたと思ったらこれかよ……全く、しょうがねぇな）

光溢れるこの場所で、少年は誓う。この少女を守る事を。二度と傷付かぬように、二度と涙を流さぬように。この笑顔を守り抜くと。

第一話：暗闇の中で（前書き）

戦闘シーンあり。残酷な描写がございますのでご注意下さい。

第一話：暗闇の中で

深い洞窟。暗闇が支配するこの場所では、松明の明りなど蛍火に等しい。しかしそれでも燃え盛る炎は自らの役割を果たし、洞窟の岩壁を明るく赤く浮かび上がらせる。

そこに響くのは足音、水音、激突音。澱んだ空気がふわりと動き、腐った水と湿った土の嫌な臭いが鼻腔へと流れ込む。それはべっとりと顔に付着した泥水の臭いだ。

「ちっくしょっ！」

水溜りに倒れこんだ少年が悪態を付き、片手で顔の汚泥を拭い捨てた。泥を擦った跡が日に焼けた肌に残る。

歳は十五くらいだろうか。多少目付きは悪いが、それなりに整った顔の少年だ。

簡素な革鎧を纏ったその身体は若干小柄で力強さは無いが、無駄が無くシャープで機敏な印象を与える。手にした短剣もまた薄汚れてはいたが、使い込まれた刀身は剣呑な輝きを放ち、切っ先の鋭さに衰えは無い。

着古した服を泥で汚した少年は倒れたままで頭を振り、黒髪から滴る泥水を散らせて視線を上げる……と、そこに鋭く尖ったツノの先端が迫っていた。

「うぇっ！？」

情けない悲鳴を上げながらも身を捻り、突き出される角を辛うじて避ける。革鎧を掠めた角が硬い岩壁を穿ち、盛大な音と火花を散らす。

慌てて起き上がり、数歩後退して体勢を立て直す少年。汗ばんだ

手をズボンで拭いて短剣を握り直し、改めて視線を真正面へと向ける。

そこには赤銅色の肌をした、異形の怪物が立っていた。

逞しい人間の身体に雄牛の頭を付けたような外見。その頭部には鋭く尖った二本の角が生えている。身長は少年の倍。腕や脚、胴の太さは倍以上もある。

その怪物の名はミノタウロス。少年はこの凶暴な怪物を倒すために、暗くジメジメとしたこの洞窟へと足を踏み入れたのだ。

『ぶおぉぉぉぉーっ！』

ミノタウロスが吼えた。腹に響く重低音が洞窟の壁を震わせる。ちょこまかと逃げまわる少年に業を煮やしているのか、怪物の爛々と輝く瞳には闘争心と怒りの色が見てとれる。

がつっ、がつっ。

岩と蹄とがぶつかる音が断続的に響く。ミノタウロスが地面を蹴る音だ。突撃前の牛が良く見せるこの動作の意味が、そのまま眼前の怪物にも通じる事を少年は知っている。

「この牛野郎……ちょっと優勢だからって良い気になりやがって。見てろよ」

呟いた少年は短剣を両手で握り、腰の横で構えた。片手で使う事しか想定されていない短剣の柄は短く、両手では持ち辛い。しかし贅沢を言える状況では無いだろう。

「さぁ来やがれ、ケリつけてやる！」

少年が叫ぶ。それを合図としてミノタウロスが鼻息を噴き出し、頭を下げて姿勢を低くした……次の瞬間！

「うごぁッ！？」

巨大な岩石と勢い良くぶつかったかのような衝撃。少年は数メートルの距離を吹き飛ばされていた。地面に落下してもその勢いは衰えず、更に数メートルを転がって岩壁にぶつかり、ようやく停止する。

この時になって少年は自覚した。自らの予測が甘かった事を。ミノタウロスの突進がいかに恐ろしい物であるのかを。頭を低く下げた時こそ、牛頭人身の怪物が驚異的な瞬発力と比類なき突進力を発揮し、真の脅威となる瞬間だったのだ。

「ぐぇっ、げほっ！　げほげほげほ……がはッ！」

肺から無理矢理追い出された空気が咳となって少年の口から飛び出す。同時に吐血。汚泥が鮮やかな赤で染まる。

血で汚れた口元を拭おうとして、右腕が妙な方向に曲がっている事に気付く。右足も同様に、膝の下で関節を無視して真横に折れ曲がっていた。他にも左の鎖骨に肋骨数本、指も何本か折れているようだ。

「げはっ！　ぐあ……痛ってえぇ」

ダメージを認識すると同時に、痛みがこみ上げてきた。咳き込む度に全身が激しく痛む。

見ればミノタウロスは既に体勢を整えていた。逞しい両腕を広げて真っ直ぐに立ち、少年を威嚇するかのように角をゆらゆらと揺らしている。その頭部からは、元々二本あった角の間に三本目の角が生え出していた。

マズい、このままじゃやられる。

今すぐ立ち上がり、ミノタウロスの追撃に備えなくては。しかしボロボロになった身体は思うように動かず、無理に動かそうとすれば激しい痛みを返してくる。

「くそっ……」

悪態をつき、少年は付近に目を走らせる。衝突の際に取り落とした短剣を探しているのだ。

しかし松明が照らす範囲に短剣は転がっていない。それ以前に短剣が見つかったとしても、砕けた指では手に取る事さえ難しいだろう。

万事休す。

だが少年は諦めない。諦めるわけにはいかない。

挫けぬ強い意思で痛みを押さえ込み、ミノタウロスの動向に気を配りながら手探りで短剣を探す。汚泥に潜む石コロに指が触れる度に目の眩むような痛みが襲ってくるが、集中を途切れさせるわけにはいかない。再度突進を受けたが最後、そこに待つのは確実なる死なのだ。

「……ん？」

ミノタウロスを注視しながら短剣を探す内、少年はある事に気がついた。

怪物の頭から新たに生えてきた三本目の角。その一本だけが他の二本と形が違っている。見ようによっては十字架のようにも見える形、それは少年が今探している短剣の、柄部分の形状に酷似していた。

「もしかして……」

呟いた思いが、現実の物となる。
短剣だ。少年の短剣がミノタウロスの頭蓋に深々と突き刺さっているのだ。

『ぶほっ、ぶほ、ぶっ……ほっ……』

ミノタウロスの荒かった鼻息が途切れ途切れとなって行く。頭の揺れが大きくなり、身体が傾き、膝が折れる。やがて呼吸が途絶えた時、雄牛の巨体は地鳴りと共に汚泥の中へと倒れ落ちた。

「へっ、へへ……やった！　ざ、ざまぁ見やがれ……げほげほっ！」

咳き込みながらも、血まみれの口元を歪ませる少年。
怪物とはいえミノタウロスも生き物には違いない。頭に剣を突きたてられては無事で済まなかったようだ。倒れた後はピクリとも動かず、せいぜいが時折り手足を痙攣させるだけ。白目を剥き、口からは長い舌がだらしなくはみ出している。

「よし、あとは戦利品を持っ……げほっ、げぼ……げぼっ！」

辛うじて強敵を屠った少年。しかしその代償は大きい。
咳き込む度に吐き出される血は、時間と共にその量を増やしている。食道か、肺か、内臓のどこかに損傷を負ったのかもしれない。

「ちょっと……や、やばいかな……」

治療しなくては。腰のポーチに入れてある治療用の薬を飲みさえすれば急場は凌げるはずだ。
辛うじて動く左手でポーチを探り、細いガラス瓶を探り出す。透明な瓶の中には薄水色の液体が封入されており、揺れ動く度に淡い

光を発する。これが魔法の傷薬、通称『ポーション』。飲めばたちどころに傷を塞ぎ、体力を回復させる。少々値は張るが、荒事に関わる者にとっては必須とも言える薬だ。

「痛っ……よっ、んぐぐっ！」

複雑な紋様が刻まれた蓋を開けようと指先に力を込める。しかし思いのほか蓋は固く閉められており、また折れた指が自由にならない事もあって、なかなか開ける事ができない。

「このっ。開けよ、開け……げほっ！　も、もうちょっと……う、げぼっ」

苦しい。喉に溜まった血に溺れてしまいそうだ。指先が痺れて感覚があやふやになり、靄がかかったように目が霞む。体中の痛みがまるで他人事のように感じ始める。それはつまり魂が肉体を離れ、温かな身体が冷たい肉塊へと変わってゆく瞬間でもあった。

「まずい……死ぬ」

朦朧とする意識の中、少年は死を間近に感じた。いつの間にか視界は暗闇に閉ざされ、指先には何の感覚も無い。一瞬でも気を抜けば深い暗闇の中へと引きずり込まれ、二度と戻ってこられなくなる。その確信がある。

「死ん……で、たまる……」

見えない目を開き、感覚の無い身体を動かして死に抗う少年。ポーションを飲みさえすれば、少しでも回復できれば。

しかし流れ出しす血液と共に抗う力も、強固な意思も、彼に宿る

様々な物が流れ出し、土へ吸い込まれて行く。

「……」

間もなく、少年の思考が途絶えた。意識は深い暗闇の中へ。

そこには何も存在せず、何も感じない世界があった。空気も水も光も闇も無く、上下左右さえ無い、ただの空間だ。この空間で待っていればその内お迎えが来て、いわゆる『あの世』へと連れて行ってくれる。少年の魂はその事を知っていた。

そして魂の知識に違わず、お迎えがやってくる。

流れるようなブロンドヘアーに透き通るような肌。光り輝く純白の翼を背中に備えた、愛らしく幼い少女。彼女こそが神の使い、天使。自ら発する輝きを反射して頭上に浮かぶ光の輪は、彼女が本物である事の証明だ。

彼女は少年のすぐ傍に舞い降り、泥で汚れた頬にそっと触れて優しく声をかけた。

『――ヤマト、大丈夫?』

鈴を転がすような声を心地よく感じながら、少年は思う。お前が迎えに来てくれたのか、と。

少年は天使の少女に見覚えがあった。幼い頃に木の下で出会った小さな天使。可愛らしい顔を涙でぐしゃぐしゃにして泣いていた、あの天使だ。

『いま、治してあげる。あまり心配させないで』

少年の全身を淡い輝きが包み込む。その光は暖かく柔らかな羽毛のような優しさでもって、傷と痛みをそっと払い落としてくれる。

――心配させないで――いつの頃からだろう、その言葉を多く聞

くようになったのは。昔はそんな事、無かったのに。

『ほらヤマト、ぼんやりしてないで、そろそろ行きましょう』

――行くって、あの世か？　そうだな、心残りは色々あるけど、お前が案内人ってんなら……それもいいか。

差し出された天使の手を握る少年。身体を包む光が輝きを増し、目の前が真っ白になる。ふわりと浮き上がるような、それでいて落ちているかのような浮遊感に身を任せ、手を引かれるままに少年は光の中へ――。

「……っ！　ヤ……起きてお願い！　ヤマトっ！！」

真っ白な光から抜けると、そこは薄暗い場所だった。澱んだ空気に腐った水と湿った土の臭い。そして目の前には、見目麗しい天使の少女。

少年の手を握りしめ、必死の声をかけてくる彼女。その手の温もりは先ほどまでと何ら変わり無い。だが彼女は幼い天使の姿では無かった。面影はあるものの、その姿は少年と同程度――少女と呼べる外見をしている。

「う……んぅ？」

「良かったヤマト、気が付いた！　んもう、本当に心配したんだからね！？」

今にも泣き出しそうだった少女の表情が、ぱっと明るくなる。

そうだ、この顔だ。あの時、差し出した手を握り返してきた時と同じ、絶望の中にあって希望を感じさせる笑顔。この笑顔を守りたくて、俺は……。

少年は――ヤマトは、未だはっきりとしない頭で天使の名前を呼

んだ。

「……ノエル」

天使の少女、ノエル。子供の頃に木の下で出会って以来、もう十年の付き合いになる幼馴染。

「俺、どうなって……ここ、あの世か？　天国にしちゃあ薄暗いけど、もしかして地獄に落ちた？」

「もう、何言ってんの。地獄に天使がいるわけないでしょ？」

そっと目元を拭うノエル。

「天国でも地獄でもないわ。ここは洞窟、あなたが倒れてた場所よ」

少し怒りながら、それでいて笑っているような複雑な表情で彼女は続ける。

「ヤマトが一人でミノタウロスやっつけに洞窟へ行ったって聞いて私、飛んで来たのよ？　そうしたら血塗れで倒れてるの見つけて……」

ノエルの背中から生える一対の翼が、ヤマトの身体を包み込むように広がっていた。そこから放たれる光の粒子が彼の痛んだ身体に触れる度、心地よい温かさが生まれ、傷が塞がってゆく。

「こうやって治してたってわけ。どう、少しはマシになった？」

「ああ、随分ラクになってる」

ノエルたち天使と呼ばれる種族は、自らが発する光の粒子を操り

様々な奇跡を起こす。ヤマトの身体を癒すこの力も、その内の一つだ。

あれほど苦しかった呼吸は楽になり、咳も出なければ血も吐かない。折れた手足も少しずつではあるが回復し、元通りになってゆく。

「手足が千切れでもしてない限りは治せるわ……って言ってもまだ時間かかるから。完全に治るまで動かないでね」

治療に集中する為に目を閉じたノエル。その整った横顔をじっと見つめるヤマト。

――そうか、天国じゃ無かったんだな。またノエルに助けられたってワケか。

彼女にばれないよう、ヤマトはそっと溜息をついた。彼が窮地を救われたのは、これが初めてでは無い。これまでに何度も救われ、助けられてきた。その度にヤマトは同じ溜息をつく。また助けられてしまった、と。

「……気を落さないでヤマト。人間がミノタウロスと戦って、命があっただけでも大したものよ」

隠したつもりだったが、見透かされていたようだ。微笑を湛えたノエルの優しい慰めが少年の心を、プライドを薄く削り取る。

――お前が来なけりゃ死んでた。

その本音を押さえ込むヤマト。

勝てると思っていた。勝てない相手では無いと。楽勝とはいかないまでも、なんとか倒せるだろうと踏んでいた。ところが蓋を開ければこの有様だ。結局、今回もまたノエルに助けられてしまった。

「もう、また溜息出てるよ？　そんなに卑屈にならずに元気出して。今回の事、本当に凄いって思ってるんだよ？」

「ああ、わかってるよ」

疎ましげに答えるヤマト。もっと上手くやれたはずなのに、という思いが中々頭から離れない。

しかしノエルの言うとおりだ。卑屈になっていても仕方がない、ミノタウロスと相打ちだって大したものじゃないか。そう考え、気持ちを切り替える事にした。何より、彼女の前でこれ以上みっともない姿を見せたくは無い。

「よしっ！」

パチン、と乾いた音が響く。ヤマトは自らの頬を張って陰鬱な気分を払拭すると、驚き顔のノエルを真っ直ぐに見つめて口を開く。

「悪かったよノエル、サンキューな。来てくれて正直助かった。そろそろ腹も減ってきた事だし、治し終わったらさっさと引き上げようぜ！」

「……うんっ！」

明るく頷くノエル。

「それじゃあ早く治しちゃわないとね。もう外は真夜中だよ」

言って、天使の少女は嬉しそうに翼をばたつかせた。舞い散る光の量が増え、治癒速度がぐんと上がる。ぼんやりとした輝きでしか無かった光は、洞窟の壁面を照らし出して余る程の輝きへと光量を増す。

「今日の晩飯、何食おうかな。この時間じゃ日替り定食も終わってるだろうし」

「それじゃあ私が作ってあげようか？」
「お、そりゃ助かる！　けどよ、前の時みたいな野菜尽くしは勘弁してくれよな」

他愛の無い会話。暖かい輝きが屈託の無い二人の笑顔を包み込む。こんな時間がずっと続けば……。言葉にならない気持ちが心を満たす。

だがそんな想いとは裏腹に、安息の時は終わりを迎えようとしていた。

「ん、なんだ？」

先に気付いたのはヤマトだ。

純白の輝きが照らし出す洞窟の岩壁。そこに何かの影が映っていた。それは不気味に揺らめきながら、次第に大きくなっている。

「どうしたのヤマト？」

小首を傾げるノエル。その時、壁に映る影が動いた。

「ノエル！　後ろだっ！！」
「え……きゃっ！」

ヤマトの警告とノエルが弾き飛ばされたのは、ほとんど同時だった。短い悲鳴と共に華奢な身体が洞窟の壁に打ち付けられ、その衝撃は岩壁を揺らし、細かな砂を舞わせる。

「ノエルっ！」

叫ぶヤマトの眼前には、倒したはずのミノタウロスが立っていた。

牛頭の怪物は倒れた時と同じく、脳天に短剣を突き立てられたまの姿だ。深々と刺さったそれによって満足に首も回せない、そんな状態でミノタウロスは立っていたのだ。

精気に満ち溢れ赤銅色をしていた肌は黒ずみ茶褐色に。瞳は濁った血のような深い赤に染まっている。その姿を一言で言い表すなら……。

「……悪魔」

ヤマトの口からこぼれ出た言葉は、図らずも怪物の本質を言い当てていた。

その悪魔が太い右腕を振り上げる。攻撃の瞬間に備え、体勢を整えるヤマト。しかし腕は横合いへと向きを変える。その方向には、壁を背に力無く倒れている天使の少女。

「やめろっ！」

叫び、飛び出すヤマト。矢のような速度でミノタウロスに体当たりを見舞い、殴り、組み付き、爪を立ててすがり付く。治りきっていない手足や内臓が悲鳴を上げるが、構ってなどいられない。

しかしミノタウロスはそんなヤマトなど全く意に介さず、ノエル目掛けて腕を振り下ろす。二度、三度。振るわれた豪腕は確かな精度でもって、天使を硬い拳と硬い岩の間に挟み、叩き潰す。

打撃音と岩が砕ける音が響くたび、白い羽が舞い散る。

「うわぁぁぁっ！！　この野郎！　やめろ、やめろってんだ糞ウシ！　こっち狙いやがれ！！」

気が狂いそうな程の焦燥感と無力感がヤマトを襲う。どんなに頑張っても、死に物狂いで挑んでもミノタウロスを止めるどころか拳

を逸らす事さえ叶わない。これでは何もせずただ見ているのと同じだ。

「畜生っ！」

ミノタウロスとノエルとの間に割って入ろうとするヤマト。しかし腕の一振りで吹き飛ばされてしまう。薙ぎ払われたヤマトは独楽のように回転しながら宙を舞い、地面に叩きつけられる。たった一発で体中の骨が砕け、何本もの筋が千切れた。声すら出す事ができない。

鬱陶しい雑魚を片付けたミノタウロスはノエルへと向き直り、拳を大きく振り上げる。次は渾身の一発を見舞うつもりのようだ。

それをなんとか阻止しようと、ヤマトは砕けた手足で地面を這いずる。しかし……遠い。ミノタウロスとヤマトの間には距離的にも実力的にも、努力や根性だけでは埋まる事の無い開きがあった。

『ぶおぉぉぉっ！』

雄叫びと共に振り下ろされる豪腕。ヤマトをボロボロにした一発を遥かに上回る速度の、体重が乗った鉄拳。それがノエルに叩きつけられる。耳が痛い程の打撃音と共に空気が震え、岩が砕けて壁に亀裂が走る。

「……っ！」

無事を願う叫びさえも掻き消す爆音。それが一瞬の衝撃波となって過ぎ去った。

振動の収まった洞窟に、闇と静寂が戻る。

拳を振るった体勢のまま、ミノタウロスは動きを止めていた。まるで天使を葬った余韻を楽しんでいるかのようだ。

ヤマトは何もできなかった。いや、彼は死に物狂いで頑張ったのだ。だがそれは、全くの無駄に終わってしまった。悔しさ、後悔、哀しさ……様々な負の感情が津波のように押し寄せる。

そして動き出すミノタウロス。壁から引き剥がすように、拳をゆっくりと引き戻してゆく。その光景から思わず目を逸らすヤマト。拳が退いた場所には、ぺちゃんこに潰され無残な姿となった天使が……そう思ったからだ。

しかし彼の想像は、現実と重ならない。

「んぐぐぐ……ん～っ！」

拳と岩壁の間から漏れ出す純白の光。

「よ……よくも好き放題に殴ってくれましたね！　このくらいで天使が倒せると思ったらっ！……大間違いです！！」

光の中にはノエルがいた。驚いた事に彼女はその細腕でミノタウロスの豪腕を受け止め、押し返している。そして翼を大きく広げたかと思うと、気合の掛け声と共に巨大な怪物を投げ飛ばしたのだ。

地響きが起こり、岩盤が砕けて小石が落ちる。そんな中ふわりと空中に浮かび上がったノエルは、凛とした態度でもって倒れたミノタウロスを指差す。

「あなた、悪魔に魂を売りましたね？　死を逃れる為とはいえ……その行為を見逃す事はできません」

輝きの中で佇むノエル。その優雅な姿は絵画に表される天使そのものであり、世界最強を誇る種族『天使』としての威厳に満ちている。

彼女が羽ばたく度に何本もの羽が空に舞い、光へと姿を変える。

それらは大小様々な光の球となり、暗闇の中をゆっくりと漂う。

「悪魔と取引して安易な力を得た事、恥と知りなさい！」

光の球が輝きを増す。危険を察し、ミノタウロスが真っ赤な目を見開き低い唸り声を上げた。そして体勢を低くして頭を下げ、足で地面を掻き始める。突進の準備動作だ。二人の距離はそう離れていない。気を抜けば驚異的な瞬発力で瞬く間に間合いを詰められ、尖った角で串刺しとなる。

ノエル、気をつけろ。

そう叫ぼうと力を振り絞るヤマトだったが、声は出ず微かな呻きが漏れ出すのみ。しかしノエルはそれに気付き「心配しないで」と呟き微笑んだ。その表情には確かな実力に裏打ちされた絶対の自信が見て取れる。そして――。

『ぶおぉぉおっ！』

ミノタウロスが突進を開始した。一瞬、姿が掻き消える程の急加速でもって、ノエル目掛けて真っ直ぐに突き進む。心臓が一回脈打つ程の間に、その間合いは回避不可能な物へ。

「ノエルっ！！」

全く避ける素振りを見せない天使の少女へ、ヤマトの喉奥から声が絞り出された。その声に呼応するようにノエルの周囲に漂う幾つもの光球が、鋭い槍に形を変える。

「悔い改めなさい！」

放たれる光の槍。それはまるで、光の雨。

夜空の星が全て飛来したかのように、無数の輝く槍が一斉にミノタウロスへと襲い掛かり、幾重にも貫いく。その速度は彼の怪物が見せた突進などとは比べ物にならず、真なる光の速さ。人間の動体視力では輝く軌跡を追うのが精一杯だ。

漆黒の巨体を貫いた光の槍は、軌跡を残しつつ地面や壁に当たって跳ね返り、二度、三度と怪物の身体を貫き通す。それが全ての槍で繰り返され、やがてミノタウロスの姿は大きな光の球に包まれ、覆い隠されていた。

「神よ……罪深き者を許したまえ」

ノエルの言葉に見送られるようにして、高く、長く、ミノタウロスの断末魔が洞窟内に響く。

その雄叫びが反響を終え、洞窟内に静けさが戻る頃、光の球は弾け散るように消え、その場には真っ白に燃え尽きた灰のような物だけが残る。これが悪魔に魂を売り、天使にケンカを売った者の成れの果てだ。

傷付いた身体を庇いながら、ヤマトは風に流され消えてゆく灰を複雑な思いで見つめていた。

第二話：ダメ人間と優秀天使

――翌日。

抜けるような青空に日は高く昇り、人々は食い扶持を求め労働に精を出す時間帯。街に何件かある食堂の中でも、値段とボリュームには定評のある店にヤマトはいた。

目の前には焼きたてパンとカットチーズが並び、香ばしい芳香でもって『私を食べて』と誘いをかけている。しかし彼はそんな誘惑に目もくれず、ジョッキになみなみと注がれたミルクをちびりちびりと舐めるように味わうのみ。

ヤマトは、酷く疲れているのだ。と言ってもミノタウロス戦の疲れが残っているわけでは無い。疲れの発生源が現在進行形で目の前に居るからだ。

「ちょっとヤマト、聞いてるの？　昨日のミノタウロス退治、あなた一人じゃ受けられないレベルの依頼だったよ！？」

可愛らしくも厳しい叱責の声が食堂内に響く。

腰に両手を当てヤマトの前に仁王立ちするのは天使の少女ノエル。輝く金髪に純白の翼、ゆったりとした白いローブを纏った姿は優しい天使のイメージそのものだ。しかし、声を荒げる度に頭上で輝く天使の光輪が光を強めるのは、彼女が本気で怒っている証拠だったりする。

「ヤマト！　き、い、て、る、の！？」

「聞いてるよ、うるさいな……」

言葉のリズムに合わせてバシバシと机を叩くノエル。パンとチーズもそれに合わせて跳ね踊る。いい加減無視する事もできなくなっ

て、ヤマトが渋々といった様子で口を開いた。

「別に良いだろ？　何も悪い事したワケじゃねぇし、冒険者規定だって違反してないぜ。何より、ちゃんと依頼達成してる。結果オーライだ」

「良くない！！」

大声と共に、ばんっ、と勢い良く机へ叩きつけられる一枚の羊皮紙。紙には昨日倒したミノタウロスのイラストと共に、生息場所や倒した際の懸賞金、そして注意事項など様々な事柄が書かれている。

「これ、昨日ヤマトが受けた依頼の募集要項よ。ここ、ちゃんと見た？」

ノエルが指差した先には『推奨合計レベル２０以上』と書かれている。

「書いてある意味、わかる？　これはね、一緒に戦う仲間のレベルが、合計２０以上の方にオススメです、って意味なのよ？」

「わかってるよ、そんな事くらい」

「じゃあヤマト、あなたの冒険者レベルは？　組合から認定されてるレベルはいくつ？」

腰を曲げ、ヤマトへ顔を近付けるノエル。パンやチーズとは性質の違う良い香りが少年の鼻腔をくすぐり、屈んだ事によって広がったローブの胸元から、白く柔らかな膨らみが見えそうになっているのだが……。

「あなたのレベルは、い、く、つ、で、す、かっ！？」

急かす言葉に合わせ、ばんばんっと机を叩くノエル。胸元を覗き込んでいる場合では無いようだ。

「よ……4だけど」

「でしょう!?　じゃあわかるよね、レベル4と20の違い！　5倍よ、5倍！　差は16！　これって猫と虎くらいの差なのよ、わかってる!?」

レベルとは、個人の総合的な能力を簡略化して数値に置き換えたものだ。一般人の平均をレベル1とし、経験を積み、功績を重ねて周囲に実力を認められるたびに数値が上昇して行く。つまり大雑把に言えば数字が大きいほど強い、という事になる。

「でもな、絶対に20以上じゃなきゃダメってワケじゃ……」

翼をはためかせて強弁するノエルに反論しようと口を開くヤマトだったが……。

「ダメよ!」

一喝され、口を閉じる羽目になる。

「ヤマト、あなた昨日ミノタウロスと一対一で戦って、勝てそうだと思った?　ヤマトはレベル4だけど、それは数字上の話だけで、本当はレベル20相当の実力があるの?」

真っ直ぐな瞳で見つめられ、ヤマトは言葉に詰まる。

無茶をしているという自覚はあった。だが推奨レベルがいくつだろうと、相手がミノタウロスであれば善戦できる自身がヤマトにはあったのだ。十回戦って、七回くらいは……いや、五回くらいなら

勝てるだろうか？　運の要素が絡むが、勝てない相手ではない。

「確かに俺はレベル２０の奴ほど強く無いけどさ、牛が相手だったら十分勝ち目は……」

「あのねヤマト。レベル２０の人はね、十回やれば十回勝つの。それが『レベル２０のくせに弱い』って言われてる人だとしても、レベル２０に認定されてる人なら、ミノタウロスに危なげ無く勝っちゃうの」

思わず口を噤むヤマトに、ノエルは優しく諭すように語り掛ける。

「冒険者への依頼って、色々危ない事が多いでしょ？　何かと戦ったり、危険な所へ行ったり。だから推奨レベルの所には確実に依頼をこなせるだろうってレベルが書いてあるの」

昨日の自分を振り返るヤマト。もしノエルが来なければ、無茶な依頼を受けて失敗した馬鹿な冒険者として屍を晒す羽目になっていただろう。

「別に推奨レベルが絶対だ、って言ってるわけじゃないの。それにヤマトが弱いとか、そういう事を言いたいわけでも無いの。でもね、わざわざ推奨されてるって事は……」

「はいはい、わかった、わかったよ。人間風情が無茶すんなって事だろ？　いちいち説教臭いんだよ」

天使の至言を口うるさいと切って捨て、ヤマトは強引に会話を終了させた。似たような事を毎回のように言われているのだ。いい加減、聞き飽きる。

「もう、またそうやって卑屈になる……」

「わかったって言ってるだろ。昨日は無茶しすぎた、反省してるよ」

また口を開きかけたノエルだったが、ヤマトの台詞に「全く、もう」と溜息混じりに呟くと、腰のベルトポーチを開いてゴソゴソと中を漁り始める。

「本当に次は気をつけてよね……じゃあ、はいコレ」

ノエルが取り出したのはコブシ大の革袋だった。机の上に置かれたそれは、じゃらりと金属音をさせて形を変える。中身はどうやら銀貨のようだ。

「カネか……どうしたんだよコレ？　結構な額だぞ。盗んだのか？」

「そんなわけ無いでしょ！　ミノタウロス退治の報奨金よ。昨日の内に冒険者組合で受け取っておいたの」

冒険者組合、報奨金。両方ともヤマトにとっては聞きなれた言葉である。

ヤマトやノエルは一般に『冒険者』と呼ばれる者たちの一人だ。様々な危険が予想される事柄を仕事として請け負い、その報酬として金銭を受け取り生活の糧としている。

そして冒険者が仕事を請け負う際に発生する金銭のやり取り、仕事内容の確認などといった事務的な事柄を統括し、取り仕切っているのが『冒険者組合』だ。

冒険者を名乗る者は全員この組合に所属し、組合の定めたルールに則って活動している。

「はい、ヤマト。あなたと私で半分こね。回復してあげたんだから、それで良いでしょ？」

「俺はいいよ。お前が全部取っとけ」

そう言うとヤマトは、革袋をフォークの先で器用に持ち上げてノエルへと投げ渡す。胸でそれを受け、きょとんとした表情でノエルは問い返した。

「どうして？　ヤマトが受けた依頼なんだから、本当なら全部ヤマトが取ったって良いんだよ？」

「バカ言え。一緒に倒したってんならまだしも、結局あの牛を倒したのお前じゃねえか。俺は何にもして無いんだ、報酬なんか貰えるかよ」

「えぇ～！？　確かにトドメは私だったかもしれないけど、ヤマトだって頑張ったじゃない。そんな意地張らなくても……」

がたん、と机を揺らして立ち上がるヤマト。どこへ行くのかを聞こうとするノエルには構わず、ごちそうさまと言い放って店を出る。その後を追いかけようとしたノエルだったが……。

「ちょっと待ちな、天使のお譲ちゃん」

食堂の主人に呼び止められる。

「食い逃げは困るな。彼氏のメシ代、代わりに払ってくれるかい？」

「か……彼氏じゃありません！」

抗議の声を上げるノエルを尻目に、ヤマトの姿は街の雑踏へと消えていった。

第三話：湖の魔物（前書き）

多少ですが残酷な描写がございます。苦手な方はご注意下さい。

第三話：湖の魔物

街を離れ、街道を行くこと二日と半日あまり。そこから道を逸れ、山林へと分け入る。枝葉を掻き分けて進めば、人の手が入った雑木林は早々に終りを告げ、そこから先は森々たる緑色の領域だ。

「もうすぐ目的地ね。そこの丘を越えたら見えるんじゃないかな？」

正午過ぎ、草いきれが蒸し暑い森の中。少女は、背中の白い翼を優雅に羽ばたかせてそう言った。

天使の少女、ノエル。

彼女が羽ばたくたびに振りまかれる光子は柔らかく温かな光を放ち、不快な湿気を優しく押しやって涼を成す。

「ふぅ……やっとかよ。結構遠かったな」

ノエルの隣に立ち、額の汗を拭うのは黒髪の少年、ヤマト。

背負っているバックパックがやけに大きく見えるのは、彼が小柄な為だけではない。空中からの偵察と道案内を兼ねるノエルの負担を減らす為、二人分の荷物を背負っているからだ。

「こんな事なら、もっと荷物絞ってくりゃ良かったぜ」

「頑張ってヤマト。あと少しだよ」

低空をホバリングして木々の隙間をゆるゆると進みながら、汗だくのヤマトへと声援を送るノエル。翼をこちらに向けて送ってくれる風の心地良さが、少年に歩く気力を呼び起こす。

「よっしゃ、行くかぁ！」

踏み出す足に力を込めて、腐葉土に包まれた地面を蹴る。
一歩一歩、確実に。足下を良く見て、滑りそうな所や崩れそうな所は避け、立ち止まる事なく、けれど無理はせず、無心でひたすら両の脚を出し続ける。

「見えたよ、ヤマト！」

明るいノエルの声に顔を上げてみれば、そこは山の頂。いつの間にか登りきっていたのだ。そして眼下に広がるのは一面の蒼。濃い緑の中にあってその蒼色は鮮やかに映え、眼に眩しい。
それは湖だった。四方を山に囲まれた窪地に水が貯まり、大きな湖になっているのだ。どうやらまだ新しいようで、背の高い木が水の中からにょっきりと頭を出しているのが見える。
大きく息を吐いてヤマトは荷物を降ろし、背伸びをして肩のコリを解す。そして懐から羊皮紙を取り出すと、書かれている内容と深い蒼を湛える湖とを見比べた。

「こいつが今回の依頼対象か……でかいな」
「信じられないよね、この湖が全部スライムだなんて」

スライム。
ゲル状の不定形生物である。性質、生態は様々だが総じて知能は低く、暗くジメジメした所を好む。熱や冷気に弱い事が多い反面、物理的な攻撃に対しては高い耐性を見せる。
そのスライムが大量発生しているから排除して欲しい――これが今回、二人が受けた依頼の内容だ。

「物理攻撃に高い耐性ねぇ。厄介だよなぁ」
「切ったり叩いたりしてもやっつけられないって事だもんね」

「量も量だしな……」

話しながら丘を下り、湖のようなスライムに接近する二人。
最初こそ慎重に接近を試みていたものの、手で触れられる程にまで近付いてみても何の反応も見せないスライムの鈍感さに拍子抜けしてしまう。

「スライムと見せかけて、実は普通の湖なんじゃねぇか？」

ヤマトが手近にあった木の枝を、青色の水面目掛けて投げ入れた。
ちゃぷ、と小さな水音を立てて水面に刺さる木の枝。波紋が立つような事は無く、水しぶきも上がらない。だがしばらく見ていると、枝の周辺に細い触手が何百、何千と立ち上がり、枝を幾重にも絡め取って泉の中へと引きずり込んでゆく。

「うぁっ……何も知らずに水に入ると、飲み込まれて溶かされちゃうのね」

白煙を上げて溶ける枝を見ながら、気持ち悪そうに呟くノエル。
周辺に気を配って見れば、一部だけが溶けた木の幹や動物の死骸が点在するのがわかる。
本能の赴くまま、満腹になるまで生物と呼べるもの全てを食べ続ける。それを獲物の豊富な森林で繰り返し、このスライムは湖と勘違いされるようなサイズにまで成長したのだろう。
その摂食行動や成長自体は、自然界の営みとして間違っているとは言えない。しかし肥大化したスライムを警戒してか山林からは獣が消え、地中の栄養が失われた事により、樹木の立ち枯れ被害も出ている。近隣の安全や秩序を考えた場合、このスライムを放っておくわけには行かない。

「おいノエル。俺は火で炙ってみるから、お前は……」
「うん。神聖魔法で攻撃してみるね」

頷き、ノエルは純白の翼から光の粒子を放ち始める。
神聖魔法――先日の洞窟で傷付いたヤマトを癒し、ミノタウロスを葬り去った天使の特殊な能力の事だ。攻撃に限って言えば、神に仇名す存在に対して高い威力を発揮し、逆に神への信仰を欠かさぬ者には効果が薄いという特徴がある。守りや癒しについては、その逆だ。

「例の牛みたく、悪魔に魂売ってりゃ一撃必殺なんだろうけど……難しいだろうな」

荷物から火口箱を取り出し、慣れた手付きで火種を作り始めるヤマト。害のある存在ではあるが、一応スライムも自然界の生き物。ノエルの神聖魔法が効果的であるとは思えない。

「どうだ、ノエル？」

火種を松明に移し、輝く天使を眩しそうに見やる。するとノエルは力無く首を横に振り「見てて」と湖面を指差した。
ヤマトが見ていると、天使の翼より生み出された無数の光球が槍と化し、波一つ無い群青色の湖面に次々と叩き込まれる。先日、ミノタウロスが誇った鋼のような肉体をいとも容易く貫き、焼き尽くした光の槍だ。
しかし今は湖の表面を薄く削るのが精一杯。ある槍は水風船が割れるような音と共に弾けて消え、ある槍は簡単に弾かれて何処かへと飛び去った。そして残ったのは、これまでと大差無く佇む湖の如きスライムだ。

「神よ、罪深き者を許……」
「倒しても無いのにキメ台詞言ってんじゃねぇよバカ。こっち手伝え」
「……なによ、バカじゃないもん」

無粋なちゃちゃ入れに余韻を邪魔され不満気なノエルだったが、すぐヤマトと合流し、作業に加わる。

「んじゃ、出発前の打ち合わせ通りで頼む」

神聖魔法が通じないとなれば、頼りになるのは炎だ。全ての物を平等に焼き尽くす、破壊の権化。進化の過程で人が手に入れた、最も強力な武器とも言われている。

ノエルに手渡される油壷と枯木、枯葉。熱に弱いスライムを炎でもって片っ端から炙る、この手の案件では定番となっている作戦をヤマトは実行しようと言うのだ。

「準備できたよ、ヤマト。指示通りだと思う」

空から枯れ木を運び、油を撒いたノエルがヤマトの元へと戻る。準備は整った。あとは延焼しないように森から距離を置き、逃げられないよう四方から火を掛ける必要があるのだが……。

「向こう岸、私が点火してこようか？」
「大丈夫だ、まあ見てろよ」

申し出を断り、ヤマトが松明を振りかぶる。彼が見つめる先には、こんもり盛られた細い枯れ木と、そこから湖の周囲を囲むようにして繋がる油まみれの木の葉たち。

「そらよっ！」

掛け声と共に松明が弧を描いて飛び、盛られた枯れ木に命中した。
その瞬間、閃光のように炎が瞬いたかと思うと獣が走るような速度で枯葉に燃え移り、見る間に湖岸全てが炎に包まれる。
もうもうと立ち上る真っ赤な炎、灰色の煙。発生する熱量は凄まじく、離れていても肌がヒリヒリと痛む。

「凄いねヤマト！　大成功だよ！！」

ヤマトの鮮やかな手際に、感嘆の声を漏らすノエル。実際ベテラン冒険者も舌を巻く程に、その仕掛けは見事だった。
揮発する油を枯葉で押し止め、燃えやすい枯れ木を導火線代わりに広範囲に炎を広げる。ヤマトも他の冒険者から仕掛けは聞いていたが、試すのはこれが初めて。だが思いのほか上手く行き、会心の手応えを感じていた。

「我ながら上出来だ！　この火力なら日暮れまでにはケリつくだろ」

満足げに頷き、巨大なキャンプファイヤーと化した湖から離れるヤマト。あとは森へ燃え移らないように注意を払いながら、時が流れるのを待つだけだ。

「じゃあ、野営の準備しておくね？」

言って、ノエルが荷解きを始めた。スライムの最後を看取った後、ここで夜を明かしてから山を下ろうという算段だ。
そうしよう、と頷いたヤマトの耳に、バチバチと肉が爆ぜるような音が聞こえて来た。そちらへと目を向けてみれば、湖面の如きスライムが泡立ち、苦しげに波打っている。時折り何本かの触手が現

れては炎に焼かれ、縮れて消える。それを繰り返しながら、スライムは徐々にその体積を減らしていた。

その姿に、感傷を覚えるヤマト。生きようと必死にもがく様は、遥か高みの花を得ようと遮二無二手を伸ばす自分と重なって見える。

スライムだって生き物なのだ。無理に殲滅しなくても、ある程度小さくなった所で逃がしてやれば……。

そこまで考えて、ちらりとノエルの様子を窺う。彼女はなんと言うだろう？

命を大切に思うのは良い事だと同意してくれるだろうか？　それとも冒険者として『スライム退治』という依頼を確実にこなすべく、最善を尽くそうと言うだろうか？

悩む間に時は過ぎる。日は傾いて山に掛かり、陽光は白色から橙色へ。山林を燃えるような色に染め上げる。

「なあ、ノエル……」

「ん、どうしたの？」

火が小さくなってきた。ここで油を追加投入しなければ、スライムは小さくなりつつも生き延びるだろう。そしてまたいつか巨大に成長して、人々の生活を脅かすのだ。

だが、そんなのはずっと先の話。それならば……。

「このスライムなんだけどよ……」

ヤマトがそこまで言った時だ。

びゅるっ、と液体が波打つ音がした。

何の音かと悩む間も無く、次の瞬間にはノエルの身体が無数の触手によって絡め取られる。

「んぅ～っ！？　むぐぐっ！」

スライムだ。炎に焼かれて悶えるスライムが、これまでの緩慢な動きからは考えられない素早さで触手を伸ばしたのだ。
両手両脚、そして翼までも封じられ身動きの取れないノエル。スライムは顔にも張り付き、口を開ける事さえ出来ない。
水溜り程の大きさにまで縮んでいたスライムの、どこにこれほどの余力があったのか？　ノエルに駆け寄るヤマトの視界の隅で、ごぼごぼと沸き立つようにして地面から吹き上がるゲル状の生物。
スライムは炎に焼かれて体積を減じたのでは無かった。熱を嫌い、地面の中に潜っていたのだ。

「畜生！　ノエルから離れやがれ、この野郎！」

ノエルに張り付き、手繰り寄せようとする触手。それ掴み、力任せに引き剥がそうとするヤマト。しかしスライムの体表はヌルヌルと滑る上、千切れたと思ってもすぐに再生してしまう。
掴み取っては捨て、捨てては掴む。必死で繰り返すヤマトだったが、スライムは減るどころか徐々に触手を増やし、ノエルの身体を自らの中心へと引き寄せて行く。
やがてヤマトの手から、白煙が上り始める。スライムに触れる部分の皮膚が溶け始めているのだ。既に掌は爛れて剥け落ち、体液の飛び散った肘までの皮膚はボロボロになっている。そして、それはノエルも同じだった。触手に絡みつかれた部分から白煙が上がり、穴だらけになった衣服が朽ちた木の葉のように舞い落ちて行く。

「くっそおぉぉ！！」

叫び、ヤマトは何度も何度も触手を引き千切る。両手の肉は溶けて見るも無残な有様となり、動かす度に激しい痛みが襲う。だが、気にしている場合では無い。

勝利を確信し、弱者を哀れむ心が招いた危機。情けを掛けようなどと考えず、一気に焼いていれば違った展開があった筈だ。自分の甘さ……油断と慢心が、守るべき少女を危機に陥れたのだ。

「ノエルっ！　ノエルッ！！」

「……！　……っ！」

叫ぶヤマトの声が聞こえているのか、全身をスライムに包み込まれたノエルではあったが、何かを伝えようと必死に口を開いている。だが彼女を包むスライムが邪魔をして、その意図を全く汲み取る事ができない。

「また……こんなっ！　こんな事になるのかよ！！」

ミノタウロスの時と同じだ。悪魔に魂を売り、力を増したミノタウロスに全く歯が立たなかった自分。必ず守ると……二度と傷付かぬように守ると誓ったのに……手も足も出ない。

スライムに包まれたノエルの身体から噴出す白煙。それが周囲の粘液と混ざって濁り、もう彼女の姿は殆ど見えない。更には濁りもろとも、スライムの奥へ奥へと沈み込んで行く。

このまま何もせず、何も出来ずただ見守る事しか自分には出来ないのか？

「ンな事……俺が許せるもんか！！」

スライムの元を離れ、走り出すヤマト。彼は野営予定地に置かれた油壷を手に取ると、頭上に掲げて叩き割った。真っ黒な油が周囲に飛び散り、独特の臭気が満ちる。当然、ヤマト自身にも油は降り掛かった。

その油塗れの状態で彼は、火種に手を伸ばす。

赤熱した木炭に指先が触れた瞬間、少年の身体を真っ赤な炎が包んだ。

「がぁぉぉぉッ！！」

叫び声とも悲鳴とも付かぬ絶叫を上げるヤマト。灼熱の炎は痛んだ肌を舐め、髪を燃やす。息を吸えば喉が焼かれ、目を開けば眼球が爛れた。

だが彼は痛みを堪えて走り出す。全く怯む事なく、全力で走る。泉の底へと沈みつつある天使の下へ。

「ノェ……ッ！」

名を呼ぼうにも酸素が足りず、声が出ない。だが少年は必死で叫び、手を突き出した。燃え盛る手をスライムの中へ。スライムは熱を嫌う。これならばノエルにまで届くはずだ！

手を前に出し、身体ごとスライムに埋るようにして、一歩、更に一歩と奥へ踏み込んでゆくヤマト。高熱の油が爆ぜる音がして粘性の液体が道を開けた……その瞬間、指先に感じる柔らかな感触。間違い無い、これは……！

「ノエルっ！！」

頭からスライムの中へ突っ込み、ヤマトは柔らかな感触を握り締める。すると向こうもヤマトの手を握り返して来た。まだ彼女は生きている！

スライムの海の中、無心で柔らかな感触を手繰り寄せるヤマト。そして大切な存在を、両腕の中にしっかりと抱きしめた。

柔らかく、温かい、心休まる感触。二度と離すものか、たとえどんな事があったとしても。ヤマトが心に誓った……その時だった。

「少年！　動くなよ！！」

野太い声が辺りに響いた。そして突然の風切り音。次の瞬間には、宙に放り出される感覚。

気が付けばヤマトとノエルはスライムの体内から、乾いた地面の上に投げ出された。

一体、何が起こったのか？

痛む両目をこじ開けた、ヤマトの視界に映った物。

それはサイコロのように寸断されたスライムと、剣を構えた複数の人影だった。

第四話：戦いの夜に（一）

暗闇の中、オレンジ色の炎が揺れる。その輝きの中で楽しげに踊るのは、火の精霊たちだろうか？　灼熱の炎は精霊と共に風に乗って舞い、自らを囲む人々に光と温もりを与え続ける。

「本当に助かりました。ありがとうございます」

何度目なのかもわからないが、ノエルがぺこりと頭を下げた。絹糸のような金髪が炎を照り返して赤銅色に輝き、天使の光輪が淡く明滅する。

「いやいや、礼には及ばないよ。困っている時はお互い様……冒険者の教則本にも、そう書いてあるじゃないか」

ノエルの声に応えたのは、彼女と同じく金髪の青年だった。白銀の鎧に身を包み、腰には長剣を携えた長身痩躯の姿。ヤマトやノエルと同じく、彼も冒険者であるようだ。

歳はヤマトよりも少し上……二十歳程に見える。細面で整った顔付きからは華奢な印象を受けるが、身に付けている武具は重厚で、貧弱な者では動く事もままならないであろう重量級の逸品である事が窺える。

「ほら、干し肉が温まったよ……といっても、ノエルさんは天使だから肉は食べないのかな？」

金髪の青年が、焚き火で炙っていた保存用の肉を差し出した。

ここはスライムが居座っていた場所から少しだけ山を登った野営地。眼下に見える深く窪んだ地面が、つい先程までスライムが溜ま

り湖のように見えていた場所だ。
そのスライムが跡形も無く消え去り、日も落ちた今。彼らは焚き火を囲み、静かな夜を過している。

「ありがとうございます。でも、せっかくですが私は遠慮しておきます……ヤマトはどう？」

問いかけたノエルに、隣に座るヤマトは腕を十字に組んで意思を表した。食べたくても食べられない……溶解液と炎で傷めた喉が回復していないのだ。

「全くもう……無茶ばっかりするから」

そう言って口を尖らせ、ノエルは翼から舞い散る光の量を増やした。光は次々にヤマトへと降り注ぎ、熱傷でボロボロになった肌や髪、そして骨が見える程にまで溶け落ちていた両手をゆっくりと癒して行く。

「知ってるでしょ？　私は天使なんだからスライムの溶解液くらいなら耐えられるし、じっとしてれば息しなくても平気だって」

咎めるように言うノエルに、不満気な表情のヤマト。あの時は無我夢中で……と言いたかったが、喉が痛く喋るのも辛い。それに、そんな言い訳をするのも恥かしい。

「溶け難い鉄の棒とかを熱して、ゆっくり突き出してくれたら十分なのに……」

反論が無いのを良い事に、ぶつぶつと小言を続けるノエル。満身創痍のヤマトとは違い、スライムに全身を取り込まれたはずの彼女

は全くの無傷だった。絶対無敵との呼び声高い天使の防御力は伊達ではないのだ。

だが強いて言うなれば……。

「けほっ……よく言うぜ。素っ裸で目ぇ回してたクセに」

やっと喋れるまでに回復したヤマトが、イヤミたっぷりの口調で返した。

天使の防御能力も自分の身体以外の部分……身に付ける服にまでは及ばないようだ。スライムから助け出された時、彼女の服は全て溶け、一糸纏わぬ姿となっていた。スライムに絡みつかれた際に濛々と噴出していた白煙は、服が溶ける事によって立ち上った煙だ。現に彼女は今も素肌の上に毛布を羽織っているだけという、少々恥かしい格好を強いられている。

「し、仕方ないでしょ！？　服はどうしようもないんだもん！　それに目を回してたんじゃなくて、あれは……！」

「はいはい、良いモン見せてくれてありがとよ」

頬を染めて怒鳴るノエルをサラリと黙らせ、金髪の青年へと向き直るヤマト。

「ありがとな、マジで助かったぜ。俺はヤマト。悪ぃんだけど、もう一回アンタの名前聞かせてもらって良いか？」

さっきは耳をやられてて聞こえなかったんだ。そう言って苦笑するヤマトに、金髪の青年は快く頷いて口を開く。

「僕はサークス。さっきも言ったんだけど、礼には及ばないからね？」

サークスと名乗った金髪の青年はゆるやかに微笑み、右手を差し出した。ヤマトもこれに応え、二人は握手を交わす。

華奢な外見に反しサークスの掌は硬く力強かった。弛まぬ修練の痕跡が透し見える、鍛え上げられた冒険者の手だ。これまでに数え切れぬ程の経験を積み、修羅場を潜って来たのだろう。

目に見える経験値とも言える掌を前に、自分の両手を思い苦笑するヤマト。ノエルによって頻繁に癒される手のひらは、傷跡も少なく柔らかい。

多少は傷跡も残った方がベテランっぽくてカッコイイかもしれない――そんな事を考えていたヤマトに、サークスが続けて話しかけてきた。

「ヤマト君。もし、どうしても礼を言いたいというのであれば、相手は彼だ。だってキミたちを助けたのは僕じゃなくて、そっちの――」

サークスが視線で示した先。虫の声さえ聞こえぬ原生林の暗闇から、大きな人影が姿を現した。

身長は二メートル程。全身を真っ黒な体毛に覆われた、二本足で立つ狼。それが人影の正体だった。

彼は厚手の衣服を纏い、簡素な板金鎧を着けて、手には薪にするつもりだったのだろうか？　乾いた枝を何本か持って、真っ直ぐな瞳でヤマトとノエルの二人をじっと見つめている。

「彼の名前は太郎丸。僕の仲間で、種族は見ての通り人狼だよ。この辺りじゃ珍しいよね？」

サークスの紹介を受け、小さく頭を下げる太郎丸。人狼と呼ばれる種族の頭部は犬と変わらない為、鼻先をくいっと下げただけにも

見える。

「二人が気を失ってる間、彼には周辺の索敵を頼んでたんだ。人狼は聴覚や嗅覚がとても鋭いから……で、どうだった太郎丸？」

「問題無い」

短く答える太郎丸。無愛想とも感じられる彼の態度に、サークスが苦笑しながら補足する。

「気を悪くしないでくれ。太郎丸はいつもこうなんだ。必要な事以外、あまり喋らない。だから驚いたよ、キミたちを助ける時に出した大声には」

サークスに言われ、一時間ほど前に聞いた声を思い出すヤマト。スライムの腹にまで響いた、野太い声。その持ち主が太郎丸だったのだ。

――少年、動くなよ！

スライムに飲まれかけていた時だ。そう叫び、森の中から飛び出して来た太郎丸。彼は一足飛びに間合いを詰め、居合い切りの要領で腰の曲刀を抜くと同時にスライムを叩き切っていた。

刃が閃く事、数回。その度に豆腐でも切り分けるかのように、スライムが細切れの立方体へと姿を変える。そしてそれら立方体が地面に落ちるよりも速く、太郎丸はヤマトと、彼が掴んで離さないノエルを、スライムの腹から引っ張り出した。

その時の様子を、溶けかかった瞼の隙間からヤマトは見ていた。

スライムをバラバラに切り裂きながら、自分たちには傷一つ負わせない太刀筋の正確さ。二人の人間を軽々と引っ張り上げる強靭な肉体、そしてバランス感覚。どれもこれも人間離れしており、到底自分には真似出来ない離れ技だ。

そして更に……。

「太郎丸、どけっ！」

遅れること数秒。駆けつけたサークスが叫ぶ。

その声に素早く反応し、ヤマトとノエルを抱えたまま飛び退る太郎丸。

「おぉぉぉッ！！」

サークスは抜き放った白銀の長剣を天に掲げ、雄叫びと共に力を込める。すぐさま剣は不思議な淡い光を帯び、刃からチリチリと電光を放ち始めた。ぎゅっと大気が押し固められて呼吸が重くなり、剣の輝きに光が集まるにつれてサークスの周囲から光が薄く、闇が濃くなって行く。

そして――。

「魔物よ、塵芥に還れッ！　奥義……滅空！！」

叫び、サークスが剣を横に薙ぐ。すると一拍を置いて、剣の軌跡から雷光を纏った衝撃波が扇状に解き放たれた。触れる物全てを粉々に砕き、灰燼に帰すサークスの秘技、光波・滅空刃。発生方向とは真逆に退避しているヤマトたちでさえ、全身を叩かれたかのような衝撃を感じる、それ程の威力だ。

小石を粉砕し、残り火を掻き消して爆音と共に広がる衝撃波。矢のような速度でスライムへ到達したそれは、既にバラバラとなっているスライムを触れる端から粉微塵に砕いて、消滅させて行く。スライムに再生の猶予も、逃げ出す暇さえも与える事無く、衝撃波の通り過ぎた所は綺麗さっぱり何も無い空間と化す。それこそが技名「滅空」の由来だ。

「まだまだっ！　欠片も残しはしない！」

剣に力を溜め、連続して衝撃波を放つサークス。凄まじい破壊力の前に、あれほど大量に居たスライムが、見る間に殲滅されて行く。

自分では、手も足も出なかった強敵が、いとも容易く。

助け出されたヤマトの胸を、例え様の無い無力感が嬲る。ミノタウロスと戦った時に感じたのと同じ、無力感が――。

「……マト？　ヤマト、どうしたの？　ほら、太郎丸さんにお礼くらい言いなさいよ」

ノエルに呼ばれ、我に帰るヤマト。どうやらボンヤリと考え込んでしまっていたようだ。

わかってるよ、うるさいな。ノエルにはそんな憎まれ口を返しておいて、太郎丸へと右手を差し出す。

「助かったぜ、ありがとうな」

「……」

握手こそ受けたものの、表情一つ変えずむっつりと黙ったままの太郎丸。だがヤマトには少しだけ、彼が優しげに目を細めたように見えたのだが……気のせいだっただろうか？

「さて、自己紹介も終わった所で夜も更けてきた。そろそろ寝る準備をしよう」

タイミングを見計らったサークスの提案に、異論を挟む者は誰一人として居なかった。

第五話：戦いの夜に（二）

冷たい夜風が頬を撫でる。

鎧の上から纏う防寒、耐熱効果のあるマント、通称サーコートには夜露が纏わり付き、身を捩る度に珠となって滑り落ちて行く。昼間は汗ばむほどの陽気だったのだが、この季節の山間部、昼夜の気温差は思いの他激しいようだ。

冷えた指先で小枝を掴むと、ヤマトは小さくなった焚き火を掻き混ぜて、暗い空を見上げた。夜明けまでは、まだ少し時間がありそうだ。

彼の側では毛布に包まったノエルが小さな寝息を立てている。その近く、木にもたれて剣を胸に目を閉じるのはサークスだ。

野営の際には交替で見張りを立てて睡眠を取るわけだが、今はヤマトが見張りの順番。深夜から夜明けにかけての、最も辛い時間帯の見張りである。

虫の声さえ聞こえない静かな夜。薪の爆ぜる音がやけに大きく感じられる。

「虫やら何やら、スライムが片っ端から食っちまったからか？」

誰に問うでもなく、静けさへの疑問を口にするヤマト。その声に応えるのはノエルの安らかな寝息だけ……そう思っていた。

「いや……警戒し、身を潜めているだけだ」

背後から、押し殺した低い声が掛けられる。

驚いて振り返ると、そこに居たのは漆黒の毛並みを持つ人狼の姿、太郎丸だ。さっきまでは索敵に出ていたのだが、いつの間にか戻っていたらしい。

太郎丸は黙ってヤマトの隣に座ると、小さくなった焚き火へ乾いた枝を足した。索敵ついでに拾ってきたのだろう。

「お、サンキュ。これで朝まで大丈夫だな」

ヤマトの声に頷く太郎丸。彼が見張りをする順番はヤマトの一つ前……つまり既に見張り番を終えている。だが何故か彼はその後も眠ろうとせず、ヤマトの見張りに付き合っていた。

初対面の自分たちに、まだ警戒を解いていないのだろうか？　太郎丸の横顔を盗み見て、そんな事を考えるヤマト。

まあ無理もない。清廉潔白でまかり通る天使のノエルはともかく、ヤマトはどこの馬の骨ともわからない人間だ。出会って半日で気を許すなど、まともな神経を持つ冒険者であるなら考えられない。

だがヤマトはなんとなく、こうも考えていた。

太郎丸は案外、付き合いの良い奴なのかもしれない、と。これといった理由は無い。ただ、なんとなく、だ。

「なあ、アンタ達ってパーティー組んで長いのか？」

パチっと弾けた薪の音に後押しされ、ヤマトが沈黙を切り崩し声を掛ける。

パーティーとは、一緒に冒険をする仲間の事だ。今の状況であればヤマトはノエルと。太郎丸はサークスとパーティーを組んでいるという事になる。

「いや……三ヶ月程前からだ」

短く答える太郎丸。会話を嫌がっている風では無い。単に口下手なだけなのだろうか？

「そうなのか？　案外短い付き合いなんだな。こなれた連携してたから、てっきり長いのかと思ったぜ」
「サークス殿に誘われてな。それまでは独りだ」

腰の曲刀を鞘から少しだけ抜き出し、刃の調子を確認しながら太郎丸は言葉を返す。
ほぼ全身の毛が真っ黒の彼だが、手と足の先端だけは手袋でもしているかのように真っ白だ。それが月と炎の光を反射して、やけに目立つ。

「お主は？」
「俺？　俺はノエルと結構長いな……幼馴染だし、もう十年くらいかな？　腐れ縁ってヤツか」

十年前……ノエルと二人で冒険者となった時は、共にド素人でありレベル１だった。近隣の野犬を追い払うのでさえ苦戦し、二人で逃げ帰る事さえあった程だ。
しかし次第にノエルが天使の能力を自在に操れるようになると、状況が変わる。
ほぼノーコストの治癒能力。無敵とも呼ばれる防御能力。汎用性の高い光を操る能力に加え、飛行能力、交渉に有利な美貌。更には神の道から外れた邪悪な存在に対する強力な攻撃能力。最後には世間一般の気高い天使というイメージが放つ、抜群のブランド力……それら全てが高く評価されたノエルがレベル２０の認定を受けたのは、ヤマトがまだレベル２と３の間を行き来していた頃だった。

「俺もアンタくらい強けりゃな。一人旅でもして一気にレベル上げすんだけど……」
「無理、なのか？」
「ああ。実力不足ってのもあるけど……俺が一人で依頼受けようと

すると、コイツがいつも勝手に付いて来るんだよ」

言いながら、ヤマトは隣で寝息を立てる天使の鼻を摘む。やがてノエルが顔をしかめ、うんうんと寝苦しそうに身悶えし始めると、彼はイタズラっぽく笑って手を放すのだ。

そして自嘲気味に笑って続ける。

「とか言っても、ノエルからしたら俺はスゲぇ頼りなく見えるんだろうな。だから援護してやらなきゃ、って感じで付いて来るんだろ……まあ十年冒険してレベル４じゃ、そう思うのも無理無いよ」

普通の人間が冒険者として名乗りを挙げ、十年間ひたすら頑張った場合の平均レベルは１０前後。一年に一つレベルが上がるという計算だ。そう考えればヤマトのレベルは平均の半分にも満たないという事になる。

「実際ノエルには、いっつも助けられてばっかりで……あ～あ、強くて頼れる男になりたいぜ」

自らの言葉を誤魔化すように、大きく伸びをしたヤマト。

すると、堪えきれなかったのだろう。太郎丸が小さく吹き出した……笑っているのだ。

「な、なんだよ？　笑う事無いだろ？」

「ふふ……いやなに、すまぬ。ヤマトといったか……お主、ノエル殿から『そんなに卑屈になるな』と言われたりせぬか？」

「え！？　なんで……？」

驚きの声を上げるヤマト。初対面の相手に普段の言動を見抜かれた動揺が、大っぴらに表へ出てしまう。

そんな素直な反応を返すヤマトへ優しげに目を細め、太郎丸はゆっくりと立ち上がって言った。

「ヤマトよ、自信を持て」

大きな声では無い。間近の者にしか聞こえないような、小さな声だ。だが太郎丸の言葉はやけに鮮明な音となりヤマトの耳へ届いていた。

「為したい事に実力が追い付かぬ、もどかしさはわかる。それ故に落ち込む気持ちもな……だが考えてみるが良い。本気で頼りないと思う男の側に十年近くも身を寄せる、そんな馬鹿者は居るまい」

座ったまま、漆黒の人影を見上げるヤマト。無口だと評された人狼の言葉は、聞き流す事の出来ない重みでもって心を満たす。

「ノエル殿は、お主と一緒に居る事を望んでいるのだ。他の誰でも無い、お主だからこそ共に歩もうとしている」

太郎丸の言葉に、ヤマトは驚きが隠せない。

冗談であれ社交辞令であれ、そんな事を言われたのは、これが初めてだった。

幼馴染という立場を利用して、希少な天使を占有する雑魚冒険者。お人好しのノエルが断れないのを良い事に、つまらない冒険へと連れ出しては天使の恩恵を受ける恥知らず。それが一般的なヤマトの評価だ。

ノエルの実力であれば、もっと大きな依頼……例えば国家の存亡に関わるような冒険へと旅立ち、仲間と共に喝采を浴びるような活躍する事もできるだろう。それが世の為であり、ひいては彼女の為だ。だがヤマトが無理矢理連れて行くものだから、それが出来ない

……二人を知る者の大半は、このように考えている。
しかし太郎丸の意見は違っていた。ノエルは自ら望み、ヤマトの側に居ると彼は言う。

「お主は自分で思うよりも遥かにノエル殿から頼られ、信頼されているのだ。それを自覚し、胸を張るがいい」
「ははっ、何を言い出すかと思ったら……気休めのつもりか？　タチの悪い冗談にしか聞こえないぜ」

苦笑するヤマト。そして思う。
初対面のお前に、俺たちの何がわかるんだよ。証拠も何も無く、知った風なクチ聞いてんじゃねぇよ！　と。
だが……。

「けど……あんがと。ちょっとだけ、報われたかも……しれねぇ」

ヤマトは俯き、呟く。

「俺、もっと……」

語尾が掠れていたのは、朝靄が喉に入り込んだ為だろう。落ちた雫も朝靄が生んだ物に違いない。
太郎丸は少年に目を向ける事無く、東の空をただ真っ直ぐに見やる。
気が付けば空は白み、朝日が四人の冒険者を照らし始めていた。

第六話：新しい風

酒と油の匂いが混ぜこぜとなった店内。朝食を取ろうと集まった人々を、波間を泳ぐように掻き分け、小柄な少年が壁際の席を目指す。

「ヤマト、こっちこっち！」

人込みから、ぴょこんと頭一つ抜け出して手を振る天使の少女ノエル。地面から少しだけ浮び上がり目印となっているのだ。ゆっくりと浮かぶ程度であれば背中の翼を羽ばたかせる必要は無く、人々の中にあっても邪魔になる事は少ない。

「お待たせ！　いやぁ、今日も込んでるなぁ」

ノエルのもとへと辿り着いたヤマトが、トレイに載せたミルクとハムサンドをテーブルいっぱいに広げる。数量は四人分……ヤマトとノエル、そしてサークスと太郎丸の分だ。

「なんだか悪いね、朝食をねだる様な真似をしちゃって……」

ヤマトの向かいに座るサークスが遠慮がちに言った。だが、そんな彼の言葉をノエルはすぐさま否定する。

「なに言ってるんですか！　あれだけお世話になったんですから、このくらい当たり前ですよ！」

「そういうこった。さ、安物だけど遠慮なく食ってくれ」

朝食を並べ終えたヤマトも言って、食事を促す。

そういう事なら……と、サークスと太郎丸の二人はパンに手を伸ばし、賑やかな喧騒に包まれた、和やかな食事が始まった。

ここはヤマトとノエルが拠点を置く街の宿屋兼食堂「ほろ酔い亭」。一階が食堂となっており、二階は主に冒険者が間借りする宿となっている。その為、ほろ酔い亭に集まる人々の大半を冒険者が占めていた。ヤマトたち二人も例に漏れず、それぞれ二階に部屋を借りて自室としている。

スライム退治の依頼を終えたヤマトとノエルは、サークスたち二人と共に本拠地であるこの街へと戻り、仮宿を探す二人にせめてもの恩返しと、朝食をご馳走する事にしたのだ。

「これは……凄く美味いね。陳腐な表現だけど生地が柔らかくて、こう……もちもちしている。それにこのドレッシングも絶品だよ」

「ですよね！？　私もお気に入りなんです」

ハムサンドを頬張り、サークスが絶賛の声を上げる。焼いたパンにハムとチーズ、刻んだ野菜を挟んだだけのシンプルな料理ではあったが、シャクシャクと歯ざわりの良い野菜と、ハムの塩気。あらゆる要素が互いを引き立てあって絶妙の味わいを醸し出している。一言も喋らずパンに齧り付く太郎丸も、いつの間にやら二個目を平らげようとしていた。

「スライム退治の報酬も入ったし、二人とも遠慮するなよな？　どうせ、これくらいしか騎れねぇし」

「そうかい？　じゃあ遠慮なく……」

サークスも二つ目のパンを手に取って微笑む。

焼きたてのパンは香ばしい上に表面はサクサクで中は柔らかく、固い干し肉に慣れた口にはこの上ない食感だ。しかも貧乏な冒険者

でもたらふく食べられる程に安いのだから、文句のつけようが無い。

「あ、そういえば……」

パンを千切って口に運んでいたノエルが、思い出したようにサークスたちへと話を振った。

「お二人とも、凄く高名な冒険者だったんですね。すいません、私ったら全然知らなくて……」

「そうそう、厨房のオッサンも言ってたな。確かアンタの二つ名……白銀のサークス、だろ？　その歳で二つ名って凄いよな、びっくりしたぜ！」

ヤマトたちに言われ、サークスがはにかんだ笑顔を見せる。

たまたま、幸運が続いて名前だけが売れたんだ。そう言った白銀のサークスだが、聞けばレベルは３２だと言う。偶然や幸運だけで辿り着けるレベルでは無い。

人間の限界レベルが５０と言われている現在、世界でも有数の使い手であろうと思われる。

そして太郎丸もまた確かな使い手だった。レベルは１７。サークスとは比べるべくも無いレベルだが、もともと冒険者として活動している人狼が少ない為、過小評価されているきらいがある。事実、スライムを寸断した剣閃はレベル１０中程では不可能な鋭さを持っていた。

「街に帰ってから、やけに見られてんなぁとは思ってたけど、みんなアンタたちを見てたんだな」

「悪いねヤマト君、余計な気を使わせちゃって。この辺りには殆ど来た事無かったから平気だと思ったんだけど……」

太郎丸と合わせて白黒のコンビだから良く目立つんだよ、との言葉を飲み込んだヤマト。太郎丸の黒は毛色だから仕方ないとして、サークスの白銀鎧は、ちょっと……自分の趣味じゃない。白銀には魔を退ける効果があると聞くが、流石に銀ピカの鎧は派手すぎやしないだろうか？　まあ一定以上の実力があれば、多少目立つくらいの方が都合が良いのかもしれないが……。

「……サークス殿」

ヤマトの思考を断ち切るように、食事を終えた太郎丸がボソリと何事かを囁いた。

そういえば、太郎丸と二人で話したあの夜以降、流暢に喋る彼の姿を一度も見ていない。ヤマトが見聞きしたのは全て、夢か幻だったのでは無いかとさえ思える。

「ああ、そうだね。例の件、二人に相談してみよう……ちょっと良いかな？」

断りを入れ、サークスが傍らのザックから一枚の羊皮紙を取り出しテーブルに広げた。冒険者をしている者であれば、頻繁に目にするその紙は……。

「仕事の依頼書……か？」

ヤマトの声に頷くサークス。彼は丸まった羊皮紙の隅にジョッキを置いて重石代わりにし「とりあえず目を通してくれないか」と促した。どれどれ、と興味深そうにヤマトとノエルの二人は依頼書を覗き込む。

そこに書かれていた内容を簡単に言ってしまえば、良くあるお使いの類だった。ちょっと遠くにある、ちょっと珍しい物を取ってき

て欲しいという、時間こそ掛かるものの危険も少なく比較的簡単な仕事依頼だ。

「ちょっと前に見つけてキープさせて貰ってたんだけど……うっかりしててね」

サークスが羊皮紙の上に指差す先。そこには「推奨レベル：２０以下」と書かれている。

「良い仕事だとは思うんだけど、僕と太郎丸だと平均レベルが２０を越えてしまって、請けられないんだ」

「ああ、それで……」

冒険者への依頼に推奨レベルが書かれているのには、幾つかの理由がある。

一つは危険を避ける為。低レベルの冒険者が誤って、手に余る仕事を請けてしまわないようにするのが目的だ。

そして二つ目は、強力な冒険者が美味しい仕事を全部持って行ってしまわないようにする為。簡単で実入りの良い仕事を初心者にも残し後進を育てようと、冒険者組合が考え出した苦肉の策なのだ。

「私たち四人がパーティーを組めば、平均はえっと……」

「１８ちょい、か。イケそうだな」

意外にも早い暗算でヤマトが答えた。高レベル認定を受けている三人を前に、自分だけがぶっちぎりで低レベルである事が気にはなったが……。

『自信を持つのだ。何も恥じる事は無い』

太郎丸の言葉が頭を過ぎり、落ち込みそうになる気持ちを支えてくれる。

「どうする、ヤマト？」

小首を傾げて問いかけるノエル。だが問うとは言っても半ばポーズのみで、二人の答えは殆ど決まっている。

「なあサークス。アンタたちさえ良ければ、この仕事俺たちも……」

ヤマトが最後まで喋るより早く、サークスの頬が緩む。そして差し出される右手。

「決まりだね。よろしく！」

「ああ、こっちこそ」

男二人がテーブルを挟んで握手を交わし、こうしてレベルのバラつきが酷い四人パーティーが誕生した。

第七話：幻の琥珀色（一）

渋柿の長持ち。呪うに死なず。雑草はたちまち茂る……そんな言葉たちがある。

悪い物、憎い何かに限って世に出て威勢を振るう。そんな意味の言葉だ。憎まれっ子世に憚る、とも言うだろう。

サークスと太郎丸。二人の厚意を受け、一緒に冒険へと旅立ってから既に一週間が過ぎた。だがノエルは未だに、依頼人の事を思い出すと冒頭の言葉が頭に浮かんでしまう。

「おい、ノエル」

隣を歩いていたヤマトが、自分の眉根辺りをツンツンと突いて知らせる。また、しかめっ面になっているぞ……そう言っているのだ。

いけない、いけない。天使は笑顔が命！

頷き返して、ノエルは無理に口角を上げて笑顔を作る。あまり良い笑顔とは言えないだろうが、難しい顔をしているよりは断然マシだろう。

「はは……まあ確かに、ノエルさんがそんな顔をする気持ち、僕もわかるよ」

先頭を行くサークスが軽く振り返って苦笑混じりに言うと、隣で太郎丸が頷いて見せる。

彼らは今、二列縦隊で木々の合間を縫うように続く小道を進んでいた。森の奥深く、依頼人ご所望の品が取れる集落を目指しての旅路だ。

「すいません、せっかく誘って下さったのに。お仕事が嫌というわ

けでは無いのですけど……納得が行かないというか、なんというか……わぷっ！？」

顔面に蜘蛛の巣を受けて、ノエルの言葉が途切れる。

これでもう何度目だろう？　翼を広げ、低空をふわふわ浮いて移動するものだから、少し高い位置に張られている蜘蛛の巣に片っ端から引っかかってしまう。誰も行き来しない高さであるから、巣が除去されていないのだ。

「ううう……もうっ！　どうしてこう……あぶっ！？」

蜘蛛の糸を取る事に集中するあまり、また新たな巣に激突するノエル。

「もうお前、普通に歩けよ……」

「むぅ～、飛んでる方が楽なのに」

ヤマトの呆れ声に、ノエルは少し不満そうに地面へと降り立つ。と同時に……。

「ひやぁっ！？」

湿った苔に足をすくわれ、尻餅をついてしまった。

手はドロドロ。スカートと下着も、苔の湿気を吸い取ってぐっしょり。肌に冷たい感触が伝わって来る。

こんな事なら軽装のサンダルではなく、しっかりとした靴を買ってくれれば良かった……そう思ったが、後悔先に立たず。不快指数がぐぐっと上昇する。

「ほらノエル、掴まれよ。ンな不機嫌そうな顔して……あれもこれ

も、全部依頼人が悪いんだ！　ってかぁ？」
「そんな事……」
からかいながら手を差し伸べるヤマトに、そんな事は無い！　と反論しかけたノエルだったが……。
「そんな事……あるっ！」
不満気な表情を露わにし、認めたのだった。

時は遡り、一週間前。
サークスと太郎丸に連れられ、今回の仕事を依頼した人の所へと赴いた時だ。
目の前に聳えるのは、城壁と見紛うばかりの巨大な門。見渡す限りの広大な庭。そして王侯貴族の宮殿を思わせる規模の、煌びやかな邸宅。そのどれもが隅々まで管理が行き届き、ゴミはおろか落ち葉一つ、チリ一つ落ちていない。
超お金持ちの趣味を地で行く、贅の限りを尽くした住まいの主。彼こそが今回の依頼人、エフティー・ノーウェイその人だった。
「お前たちが、名乗りを挙げた冒険者か？」

謁見の間を思わせる広い室内。一段高い場所で豪奢な椅子に腰掛けた小太りの中年男性が、両脇に半裸の美女をはべらせて問い掛けてきた。
その問いに肯定であると返し、礼法に則って頭を垂れるサークス。太郎丸は半歩後ろで顔色一つ変えずに立っている。だがヤマトは……。
「ぐはっ……ヒールだ、ヒールくれノエル……」

大人っぽい美女の露わな姿態を前に、鼻血を流して最後尾でしゃがみ込んでいた。

「何してるのよ、もうっ」

慌ててハンカチを取り出し、捻ってヤマトの鼻に詰め込む。

斜に構えてはいるが、基本的に真面目なヤマト。女性に免疫が無いのはわかるが、ちょっと色っぽい人が居たくらいで鼻血を出さなくても良いのに……。

翼を広げ、少年の首の後ろ側をトントンしながら癒しの力を使っていると、件の半裸美女たちがこちらを見て微笑んでいるのが見えた。

はずかしいなぁ、もう……。動揺など微塵も見せず、今も依頼人と交渉の最中にあるサークスや太郎丸を、ヤマトも少しは見習って欲しい。

赤面して、俯くノエル。もうちょっと格好良くキメられないものか？　そうすれば私だって堂々と……。

「何をゴチャゴチャとやっている？」

ノーウェイがノエルとヤマトに目を止めた。珍しい物でも見るようにクリクリと瞳を動かして、興味津々といった様子だ。

まあ確かに、女の裸くらいで鼻血を出す者が彼と接見するなど珍しい事なのだろう。

「なんだお前、女の裸が珍しいか？　この女が欲しいのか？」

妙に嬉しそうなノーウェイ。美女を立ち上がらせてヤマトに見せつけ、動揺する彼の様子を楽しんでいるのだ。

趣味の悪い事を……と内心で思うノエルだが、辛うじて顔には出さない。不快感を露わにしては、パーティーの代表として振舞っているサークスに迷惑が掛かってしまう。

だが……。

「こんな物で良ければ、報酬代わりにくれてやるぞ」

そう言うと、ノーウェイは美女を蹴り飛ばした。突然の事に対応できず、無様によろめき、段上から滑り落ちて倒れる美女。剥き出しの素肌に、薄っすらと血が滲む。

「それには、既に飽いた。だが奴隷商にでも持ってゆけば、それなりに値が張るだろう」

慌てて駆け寄ったヤマトたち四人へ、見下した視線を投げ掛けるノーウェイ。

こんな物？　飽きた？

ノーウェイが発する言葉に、ノエルの憤りは限界を超えた。怒りが言葉となって口から溢れかけた……その時だ。

「よっしゃあ！　んじゃあこの人、俺が貰った！　予約した！！」

倒れた美女とノーウェイの間に立ち、ヤマトが大声で叫んだ。

「売値と報酬を差し引いて、残りは銀貨でくれ！　おいアンタ、後でやっぱり女を返せとか言うなよ？　俺が予約したんだからな！」

有無を言わさぬ強い口調に漲る気迫。ほんの少し前まで鼻血を流していた少年と同一人物とは思えない。

そうして自身が注目を集める傍ら、そっと仲間たちへと目配せを

送る。その意味を即座に察し、倒れた美女へ治療を施すノエル。そんな彼女へ、勝手な事をするな……と言いかけたのだろう。段上にて口を半開きにした状態のノーウェイが、サークスと太郎丸の気迫に圧倒されて言葉を吐けず、酸欠になった金魚のように口をパクパクとさせている。

「んで？　俺たちに何か取ってきて欲しいんだろ？　ちゃちゃっと行ってくるから、言ってくれ」

「う……うむ。では……」

ヤマトに促されて金魚状態から脱し、ノーウェイが召使いへと指示を出す。

すぐさま駆けて来た召使いから、依頼の詳細が書かれた羊皮紙と地図を奪うようにして受け取るヤマト。

「じゃ、行ってくるけど……その女は俺の報酬なんだから大事にしとけよ！　傷物になってたら違約金貰うかんな！」

「う……わ、わかった」

ヤマトに気圧されて冷や汗を流すノーウェイの様子に、すっきりと溜飲を下すノエル。天使としてはどうなのかと自分でも思ったが、感情はどうしようもない。ざまあみろ、だ。

こうして、脅迫じみた捨て台詞を残し、ヤマトたちは今回の冒険へと旅立ったのだった。

そして時は戻り、くねくねと続く山道を行く四人。

「……確かに最低の依頼人だったけど、金払いは良いって話だからね。ちゃんと仕事さえこなせば全部丸くおさまるよ」

「ま、そうなる事を期待するしか無ぇな」

どこか楽観的に話し合うサークス、そしてヤマト。二人の間には、とにかく仕事をキッチリとこなして、話はそれからだと達観した雰囲気がある。

しかしノエルの気分は晴れない。

あの後、ノエルは誰にも内緒で、屋敷の使用人たちにノーウェイについての話を聞いてみた。

最初は警戒していたのだろう。誰も彼も口は固く、主人であるノーウェイを多く語る者は居なかった。しかし天使であるノエルにだけはと、口々に主人の悪行を吐露し始めたのだ。

使用人たちへの不当な労働環境に始まり、後ろ暗い者たちとの繋がり、多岐に渡る違法な取引。それら全て、いっそ清々しい程に「金の為なら何でもやる」と宣言するかの如き所業の数々。

とはいえ、使用人たちの証言を全て信用してしまえる程、ノエルもお人好しでは無い。彼女は穢れ無き天使であるが、同時にシビアな冒険者でもあるのだ。しかし疑いの眼差しで使用人たちを見渡してみても、ノーウェイが悪党であるという結論だけは同じだった。彼ら使用人たちは、主人を犯罪者だと主張するリスクを犯してなお、口を開いているのだ。

バレればタダでは済まない事を承知の上で、この天使なら……ノエルならば状況を打開してくれるかもしれないと一縷の望みを掛けて。

「……はふぅ」

「なに溜息ついてんだよノエル？　ほら、もう着くぞ」

ヤマトに言われて視線を上げれば、木々の間から小さな集落が見え隠れし始めていた。

第八話：幻の琥珀色（二）

半分壊れた窓から、湿った空気と共に朝靄が進入してくる。
そんな中、ヤマトたち三人の男は長椅子に腰掛けて、出発の準備に余念が無い。
剣を鞘から抜いて具合を確かめ、鎧のベルトを締め直している。
素早く慣れた手付きでありながら、慎重かつ丁寧なチェックだ。
ここは山中にある人口五百にも満たない集落、その隅にある今は使われていない建物の中。持ち主である村長の許可を得て、冒険の拠点となる仮宿として使っているのだ。
慌しい朝。
彼らが身支度を整える間、鎧を身に着ける必要も無く武器も持たないノエルは、自分の準備を終えてすっかり手持ち無沙汰となっていた。
なんとなくポーチの蓋を開け閉めしていると、丸まった真新しい羊皮紙が目に止まる。今回の依頼について書かれている依頼書だ。

「世にも珍しいコーヒーねぇ……」

依頼書を広げ、呆れた、と言いたげな表情でノエルが呟く。
小人閑居して不善をなす……とまでは言わないが、お金持ちが暇を持て余した場合も、似たような事になるらしい。
今回、ノーウェイから取って来るようにと依頼を受けた品は、現地の言葉でコピ・ルアクと呼ばれる非常に珍しいコーヒー。生産量が少ない為、市場に出回る事は殆ど無い幻の逸品なのだという。

「たった一杯のコーヒーの為に冒険者を雇うだなんて……」

馬鹿じゃないの？　という言葉を辛うじて飲み込む。

美味しい物が食べたいだとか、特定の何かに入れ込む気持ちはわかる。だが、それにしたって時と場合によるだろうとノエルは思う。

今回支払われる予定の報酬は、屋敷で見かけた使用人全員の食事、数か月分に匹敵するであろう大金だ。こんな事にお金を使う余裕があるのなら、もっと先にすべき事があるのでは無いだろうか？

まあ、その報酬を得ようと名乗りを挙げた自分たちに、ノーウェイを悪く言える義理が無い事はわかっているのだが……。

「ノエルさん？　考え込むのも良いけど、油断だけはしちゃ駄目だよ」

サークスの声に、ノエルはハッとして頭を振る。

そう、油断は禁物だ。何故なら、自分たち以外にも多くの冒険者がこの依頼を受け、全員が失敗しているのだから。

「他の連中、どうして失敗したんだ？」

「さあ？　なんでも、目的のコーヒーを手に入れる事が出来なかった、としか聞いてないな」

話しながらヤマトとサークスが立ち上がった。どうやら準備が終わったようだ。太郎丸も立ち上がり、軽く頷いて準備完了を告げる。

「じゃ、そろそろ行こう。暗くならない内に収穫したいからね」

サークスがそう言うのを待っていたのだろうか？

けたたましい音と共に、入り口の扉が勢い良く開かれる。

咄嗟に身構えるヤマトたち。だが……。

「もう、準備良いんでショ？　サッサと行くよ！」

入り口に立っていたのは、日に焼けた肌が健康的な、齢十にも満たない小さな少女。コーヒー収穫のガイドとして雇った、この集落に住むスミという娘だ。

乱雑に頭のてっぺんでまとめられた、落ち着いた赤色の髪。穴を開けた布に頭を通し、腰の部分を紐で縛っただけの簡単な服装。交易用として広まっている標準語の発音も、少々怪しい所がある。

あまり豊かでは無いこの集落を象徴するような少女だった。

「なにシてるの？　モタモタしてると、日が暮れちゃうよ！」

「何を言ってんだか、このチビは……まだ太陽は昇ったばかりだっての。ほれ、見てみろよ……っても、お前の身長じゃ見えねぇか」

出発を急かすスミを、ヤマトがからかう。彼にしてみれば、軽口を叩いた程度の認識だったのだろうが……。

「うるサい、糞チビ！　糞シて寝てろ！！」

「あイテっ！　こ、このやろ……！」

何気ない台詞が、スミの逆鱗に触れたようだ。ヤマトの脛を思い切り蹴っ飛ばし、短い手足でチョコマカと駆けて行くスミ。俊敏な動きで木の陰に隠れると、ヤマトへ向けて舌を出し、アホだのバカだの、レベルの低い挑発を繰り返す。

「こんにゃろ……待ちやがれ！」

そんなスミを追いかけ、駆け出すヤマト。

「あ、ちょっとヤマト！　もうっ、大人気ないんだから……」

「さあノエルさん、僕たちも行こう。幸い、二人の向った方向と目的地は同じだ」

微笑を湛えて出発を促すサークスと、溜息をつきながら採集用の袋を担ぐノエル。太郎丸も無言のまま、それに続く。

こうして冒険者一行とガイド一名は、希少なコーヒーを求めて森の奥深くへと向ったのだった。

第九話：幻の琥珀色（三）

ツヤツヤとした緑色の葉っぱは、大きな手のひらのような形。太い幹は高く伸び上がり、見上げれば首が痛くなる程。その所々に小さな赤黒い果実をつけた樹木が辺り一面、所狭しと繁っている。

「これだよ、コーヒーの木。間違い無い」

ヤマトの背中に乗ったガイドのスミが太鼓判を押し、色めき立つ冒険者たち。

森に入り込んで、約一時間。いともあっさり、彼らはコーヒーの木群生地へと辿り着いていた。

「どぉだ糞チビ、見たかアタシの実力！」

「へぇへぇ、大したチビだよお前は……」

鼻息荒く、ヤマトの後頭部を叩くスミ。ヤマトの相槌は随分と適当ではあったのだが、どうやら褒められたと思ったのだろう。彼女は薄い胸を反らして顔を紅潮させている。

コーヒーの木を探しながら追いかけっこして互いに罵りあう内、スミはすっかりヤマトに懐いていた。追いかけっこで疲れたスミをヤマトが背負ってからは特にそれが顕著で、コーヒーの木のガイドを雇ったのか遊び相手として雇われたのか、わからなくなってしまう程だ。

「それじゃ、早速収穫しようか」

「俺とノエルが木から落すから、みんなは下で拾ってくれ」

スルスルと器用に木を登り、緑の葉生い茂る天辺付近で声をかけ

るヤマト。ノエルも小刀を手にフワリと舞い上がり、ふとスミに問いかける。

「ねえスミちゃん。コーヒー豆って種だから、実の外側は少しくらい傷ついても大丈夫なんだよね？」

「え……っと。あ、う……うん」

ノエルの何気ない問い掛けに、なにやら口ごもるスミ。ちょっと人見知りしてしまったのか、それとも知らない事を聞かれて困ったのか。

「ま、なるべく傷付けないようにすりゃ良いだろ」

「そうだね。それじゃ、落しま～す！」

言うが早いか、腐葉土の積もった地面にコーヒーの実が次々と落下し始める。

誰も摂る者が居ないのか、たわわに実った果実の量は非常に多く、回収が追いつかない程だ。それらを一つ一つ丁寧に袋へと収めて行く。

傷付いた果実から濃厚なコーヒーの匂いが溢れて付近に漂い、目を閉じて深呼吸すれば、上等なカフェにでもいるような錯覚を覚える。ただ一人、極端に鼻の利く太郎丸だけはしきりに鼻を擦り、ゲフゲフと苦しそうにしていたが……。

ともかく、一時間も経った頃だろうか。

「ストップだ、ヤマト君。もう袋が一杯で持ちきれない」

サークスの声がする方へ注目してみれば、両手でやっと抱えられるようなサイズの、ずっしりと重そうな麻袋が四つ出来上がっていた。ここまで何のトラブルも無く、驚くほど順調な行程に、拍子抜

けの感さえある程だ。

「ふぅ、こんだけあれば十分だよね？」

「そうだな。んじゃあ、引き返すか」

ノエルと頷き合い、木から降り立ち額の汗を拭うヤマト……と、その視界の端に、一瞬動く物が映った。

それに最も早く反応したのは太郎丸だ。跳ねるような動きで体勢を整えると、腰の剣に手を掛け、重心を低く身構える。

「何かいるぞ！」

警告を発する太郎丸。

やっと事態に気付いたノエルが翼を広げて臨戦態勢を取り、スミが身を固くしてヤマトにしがみ付く。サークスは少し遅れて、取り回しの良い短剣を抜き放った。

軟らかな土を蹴立て、木々の間を何か小さなモノが走り回る。かなり機敏な動き。一瞬だけ赤茶色の毛並みが見えたが、その程度でしか目に止まる瞬間が無い。

「気をつけろ、みんな！」

油断無く短剣を構え、サークスが考えを巡らせる。

木々が生い茂り、腐葉土に足を取られる森の中ではこちらが不利だ。一匹くらいならどうとでもなるだろうが、複数体が現れた場合、足手まといを守りながら戦うのは難しい。ここは一旦、撤退を……。

そう考え、全員に伝えようと口を開きかけた時だった。

「みんな、チョッと待って！」

その足手まといこと、スミが大声で叫んだ。

「静かに！　大声を出せば狙われるぞ！」
「大丈夫、襲われたりしない！　大丈夫、大丈夫だカラっ！」
「そうは言うが、一体何が大丈夫だと言うんだ！？」

スミの声に多少の苛立ちを感じながら、サークスが身構えたままで尋ねる。彼女は大丈夫だとしきりに訴えているが、根拠の無い子供の妄言に踊らされ、パーティーを危険に晒すわけには行かない。警戒を維持し、このまま安全圏へ下がるのが良策だ。
しかし、そんな妄言に踊らされる者が居た。

「ああ？　スミ、大丈夫なのか？　なんだよ、ビビって損したぜ」

スミを庇い、最後尾へと下がっていたヤマトだ。彼はそそくさと短剣を仕舞うと、足手まといと共にスタスタと前衛へと歩いて来る。

「待て、ヤマト君！　まだ安全は……」
「いいえサークスさん、どうも大丈夫みたいですよ？」

緊張の維持するサークスに、上空からゆっくりと降りてきたノエルが優しい声を掛けた。

「ほら、あそこを見て下さい……可愛いですよ」

彼女の指差す方向……そこに居たのは、小さな猫だ。
赤茶色の毛並みと、シャープな身体つき。街で見かける野良猫よりは精悍な顔付きをしていたが、それでも確かに猫だ。尻尾は細く、手足は頼りなげで、ふかふかの毛並み。どうやら、まだ子供のようだった。

「な!?　どうしてこんな所に、こんな小さい幼獣が……」

訝しむサークス。普通、人間が騒いでいるような所に野生の獣はやって来ない。来るのは交戦的な魔物くらいだと彼の経験は言っている。

そんなサークスの警戒心を感じ取っているのだろうか？　猫は冒険者一行を警戒しながらジリジリと移動し、落ちていたコーヒーの果実を一つ咥えた。そして慌てて木の後ろへと逃げ込むと、シャリシャリと齧り始める。

「ははっ、どっかのチビみたいな動きだな。腹減ってんのか？　ほら、もう一個食えよ」

ヤマトがコーヒーの実を放り投げると、猫は少しだけ身体を強張らせたものの、すぐに実を咥えて木の陰に隠れ、今度はあぐあぐと何度も噛み潰して飲み下して行く。

「なんだよ、可愛いなコイツ。目付き悪いけど」
「そうだね……ほら、もっと食べる？」

すっかり和むヤマトとノエル。その後ろでは、サークスがようやく緊張を解いて、スミに話しかける。

「そうか、スミちゃんはこういった猫がコーヒーを食べに来る事を知っていたんだね？　それならそうと、最初に言っててくれれば……」
「う、うん……ゴメン」

叱られた為だろうか？　気落ちしたような表情を見せるスミ。

「子供とはいえ、一応はガイドとして……」
「まあ良いでは無いかサークス殿。最初から危険が無いと知っていては、我々の警戒も緩もうというもの。結果的に、これで良かったのだ」

まだ何か言い足りなそうだったサークスを、太郎丸がやんわりと宥める。普段喋らない彼だけに、口を開いた時の存在感には無視できない物があった。サークスもそれを感じたのだろう。「それもそうだね」と引き下がり、大人気なかったとスミに詫びる。

「う、ううん。ゼンゼン大丈夫、気にしないで！　ほら、いつまでもネコと遊んでないで、行くよ糞チビ！」
「糞とかチビとか言うんじゃねぇよ！」

明るい笑顔を取り戻したスミが走り出し、大きな麻袋を担いだヤマトが追う。
そんな二人を見送りながら、ノエルは感じていた。
漠然とした違和感と、奇妙な不安を。

第十話：幻の琥珀色（四）

自らの容姿を引き立てる化粧も、やりすぎれば逆効果となるように、素晴らしい香気も時と場合によっては台無しになる。コーヒーの香りが、まさにそれだ。

「ぐっ……けふ、けふっ……」
「おい、大丈夫かよ太郎丸？」

室内にコーヒーの香りが充満している。
ここはヤマトたちが冒険の拠点として借りている、集落の隅に建つ小屋の中。

「少し休憩するか？」
「いや、それには及ば……けふっ、けふっ！」

四人の冒険者たちは採集してきたコーヒーの実を、飲料用コーヒーとする為の作業の真っ最中。全員が口元を布で覆っての単純作業。身を潰し、種を取り出し、炒る。ひたすら地道に手を動かし続けるだけの、簡単ではあるがちょっと面倒な作業だ。
しかし問題は作業の難易度では無い。煎られた種子より燻り立つ、濃厚なコーヒーの香りだ。

「けふ……けふんっ！　げふっ！！」
「やっぱり一旦休憩にしましょう？　太郎丸さん、私と一緒に来て下さい。治療しますから」
「か、かたじけない……！」

ヨレヨレの太郎丸を連れて小屋の外に出る冒険者たち。山間を抜

けて吹き付ける、木々の香りを含んだ風が疲れた身体に心地良い。

「ふう～……っ。楽勝かと思ったけど、結構キツいなぁ」

口布を外し、深呼吸するヤマト。コーヒーは嫌いでは無いが、あまりに強烈な香りを長時間嗅いでいた物だから、少し頭が痛い。人間である自分がそれなのだから、凄まじく鼻が利くといわれる人狼の太郎丸には耐え難い苦痛だろう。

そう思いながら周囲を見渡せば、ノエルに連れられて木陰で休む太郎丸の姿が目に入った。

「太郎丸さん、ゆっくり深呼吸して、気を楽にして」

木の幹にもたれ掛り、ぐったりと座り込んだ太郎丸。その身体をノエルの翼が優しく包み込む。

淡い輝きを放つ純白の翼。その光が徐々に膨らみ、やがて太郎丸の全身も同様の光を放ち始める。

「どうですか？」

「む、これは中々……心地良い物だ」

ウットリとした表情で呟く太郎丸。先程までしきりに出ていたクシャミとも咳ともつかない症状も治まり、苦しげだった呼吸も緩やかになっている。

「私の治癒、即効性は無いですけど、使えば無くなるというような物ではありませんから。いつでも、遠慮なく言って下さいね」

「……心得た」

普段は見る事の無い穏やかな表情で目を閉じ、優しい暖かさに身

を委ねる太郎丸。ノエルの放つ光は彼の、クシャミや咳以外の小さな切り傷や打撲の類も、全部まとめて治して行く。

そして数分が経ち、そろそろ太郎丸の体調も万全に戻った頃だ。

「ねえ天使のお姉ちゃん、ちょっとイイ？」

集落に戻るなり姿を消していたスミがひょっこりと姿を現し、ノエルの服を引っ張った。傍らには杖を突く高齢の男性が、震える足でスミに寄り添うように立っている。ノエルの記憶が確かなら、確かこの男性は集落の代表者であったはずだ。他の者から長老と呼ばれているのを聞いた覚えがある。

「どうしたのスミちゃん？」

「あのね……」

問いかけたノエルに、スミはちょっとだけ迷い、俯いて遠慮がちに、小さな声で神の使いである天使へ「お願い」をした。

「おじいちゃんの足……診て欲しい」

スミの連れてきた高齢の男性は、ノエルの記憶通り集落の長老であると名乗り、あわせて自分は足が不自由であると明かした。元々は健常であったのだが、何年か前に転び、足と腰を痛めてからは歩くのにも苦労しているという。

「この通り、歳も歳でな……用を足すにも小さな娘を煩わせる始末。あまりに心苦しい」

片手で杖を突き、逆の手ではスミの肩を借りる長老。若い頃は元気だったのだろう。彼の表情に落ちる影は深い。

ノエルは黙って彼の話を聞き続ける。

「ならば駄目で元々、幸いにも訪れた天使様にお頼みをと思うて……。天使様にこのような老人が願い出るなど、厚かましい事は承知の上なのですが……」

「お願い、お姉ちゃん！　お金なら……」

そう言って、懐から小さな革袋を取り出そうとするスミ……と、その幼い手に天使の手のひらが重ねられる。

「大丈夫だよ、そんなの。私たちを手伝ってくれたスミちゃんのお願いだもん」

微笑むノエルに、曇っていたスミの表情が一気に晴れ渡る。

「おぉ、天使様……！　なんとありがたい……っ！！」

「そんな、どうぞ顔を上げて下さい。私たちもスミちゃんには力を貸してもらったのです。何もお気になさらず」

しきりに頭を下げ、恐縮する長老。そんな彼を宥めながら、ノエルはスミに言った。

「じゃあスミちゃん、私からもお願いして良い？　あのね……」

慌てて駆け寄ったスミは、フンフンと鼻息荒くノエルの「お願い」に耳を傾ける。

そして――。

「な……何事だい、あれは？」

近くの川で手を洗い、ついでに顔も洗って小屋へと戻ったサークスは、我が目を疑った。自分たちが借りている小屋の前に何十人も……いや、何百もの人が集まり、ごった返しているのだ。

小さな集落である。これだけの人数ともなれば、もしや住民全員が集まっているのではないだろうか？

「サークス殿、戻られたか」

目を丸くするサークスに、木陰で休んでいた太郎丸が声を掛ける。驚きを隠しきれないサークスは太郎丸の調子伺いも程ほどに、目の前の有様について尋ねる。

「人だかりの、中央付近を見られよ」

そう言われ、サークスは木に取り付いて少し背伸びをし、人込みのど真ん中へと視線を走らせる。

そこでは純白の翼を大きく広げた天使が、目を閉じて微笑を湛え、周囲に光の雨を降らせていた。

「あれは……」

「ノエル殿だ。彼女が住民を癒している……無償で、片っ端からな」

馬鹿な！

サークスはその一言を、辛うじて飲み込んだ。

ありとあらゆる傷や疾患を癒すと噂される天使の他者治癒能力。その力は神の愛が如く無限であり、尽きる事は無いとされる。しかし天使とて生物である以上、能力を使えば疲れが溜まり、どこかで必ず限界が訪れるはずだ。無限などというのは言葉のあやだろう。とりあえず目的のコーヒーは手に入れたものの、冒険はまだ半ば。そう考えた時、無駄に力を使うのは愚の骨頂といえる。

「帰り道の事もある。程々で止めるように言わなければ」
「無駄だ」
険しい顔で歩き出そうとしたサークスを太郎丸が止める。
「無理はするなと伝えたのだが、大丈夫へっちゃらです……との事だ」
「そうか……」
その言葉に、サークスも諦めがついたのか木陰へ腰を下ろす。太郎丸が言って聞かなかったのだ。自分が言っても同じだろう。
天使の少女は、こんな山間の小さな集落で力を振るって、一体何がしたいのか。どうしても治療が必要な急患が居る様子も無いというのに。多少住民から喜ばれる事はあっても、ただそれだけ。お礼にと、小銭を握らされて終り……といった所が関の山だ。
「全く、困った事だ。異種族……特に天使や悪魔といった種族は、僕ら人間には理解し辛い部分があるね」
目の前の光景を呆然と見つめるサークス。光を纏い、人々を優しく癒すノエルの姿は、天使の名に相応しい神々しさであり、目を覆いたくなる程に気高く、美しい。
そして美しい天使の周囲には、小柄な少年、ヤマトの姿もあった。声を上げ、集まった人々を整理し、効率良く並ばせている。何やら「こちら最後尾」と書かれた手製の看板まで持っている様子だ。
「どうもヤマト君は、随分と手馴れているようだね」
「うむ。毎度の事なのだろうな」

感心したように、半ば呆れたように、サークスと太郎丸は呟く。

「まだしばらく時間が掛かりそうだ。少し早いが、食事にするかい？」

「……うむ」

二人は頷き合い、小屋の中へと姿を消した。

第十一話：幻の琥珀色（五）

冒険者たち四人が集う小屋にスミを伴った長老が姿を現したのは、ノエルの治療が一段落付き、各家々からは夕食の香りが漂い出す、そんな時間帯の事だった。

もうすっかり足の傷が癒えたらしい長老は、しっかりとした足取りで冒険者たちの下へと歩み寄ると、深々と頭を下げてこう言った。

住民全員にお恵みを頂き、我ら皆、感謝して余りある。そこまでして頂きながら、何も返す物が無いどころか、我らは皆様に隠している事がある。せめてもの恩返しに、それを今からお伝したいと思う。

「その隠し事が、コレか……」

夕焼けに染まる山林に、冒険者たちとスミ、合わせて五人の若者はやって来た……いや、戻ってきた、というべきかもしれない。

ここは昼間にコーヒーの実を集めた森。まだ記憶に新しい香り漂う、見覚えのある場所だ。

「なるほど、この猫がね……道理で、コーヒーの実を食べるわけだよ」

そう呟くサークスの前には昼間見かけた猫が、無邪気な表情で佇んでいる。また食べ物でも貰えるとでも思っているのだろうか？警戒する様子は無く、手を近づけても指先に鼻を擦り付けてクンクンするくらいで、全く逃げようとしない。

「希少なコーヒー、コピ・ルアク。コピとはコーヒーの事。そしてルアクとは猫の事……すなわち、猫のコーヒー」

長老は言った。コピ・ルアクとは、山猫の食べたコーヒーの果実から作られると。

コーヒーの果肉は消化され、腹には種だけが残る。その熟成された種を腹から取り出し、炒った物が希少なコーヒー豆として世間に伝わっているのだと。

「アタシたち、たまに猫の毛皮を取るから……その時にお腹から出た豆を使うの。でも、ほとんど取れないから……」

スミが小さな声で言った。産出資源に恵まれない山間の集落において、柔らかくしなやかな猫の毛皮は、貴重な資源。もしもコピ・ルアクの取り方が世に知れ渡り、幻のコーヒーを求めて件の猫が乱獲されるような事になれば、集落にとって大きな打撃だ。あっという間に猫は絶滅し、コピ・ルアクは本当の意味で幻となるだろう。

「なるほど、他の冒険者たちがコーヒーを手に入れられなかった理由がわかったよ。肝心の生産者に口を噤まれちゃあ、どうしようも無い」

「……ごめんなさい」

しょんぼりと俯くスミ。その頭を、ノエルが軽く撫でる。

彼女としても、せっかく仲良くなれた人たちに隠し事をするのは辛い物があったのだろう。撫でられた頭をノエルの服に押し付け、鼻を啜っている。

「さて、それじゃあ……」

すらりと長剣を抜き放つサークス。そんな彼へ、少し疲れた表情のノエルが躊躇いがちに声を掛けた。

「やっぱり、殺すんですか？」

その声にスミが首をすくめ、猫は小首を傾げる。

「ああ、長老の好意を無駄にはできないし……僕たちは冒険者だ。いけ好かない相手ではあるが、依頼人にコーヒーを届けなくちゃならない」

表情を曇らせ、サークスが言う。子供に聞かせるような事では無いと配慮したのか、多少抑え目の声だ。

「この猫は可哀想だが……せめて苦しまないように、一撃で首を刎ねるよ。汚れ役は、僕がやる」

皆に離れるように言って、構えを取るサークス。

「あ……う……」

何か言わなければ、と口を開くノエルだったが、言葉が詰まって出てこない。

確かに何の罪も無い猫を殺す事に強い抵抗はある。だが奇麗事だけで人は生きられない。清廉潔白を由とする天使ノエルではあるが、理想と現実に開きがある事くらい知っている。危険でシビアな世界に生きる冒険者であるなら、尚更だ。

ここで猫の腹を裂き、コピ・ルアクを得なければ依頼は失敗してしまうのだ。サークスの意見は一方で正しく、止めたくても、その為の言葉が見つからない。

これは魔物を排除するのと同じ事。必要な犠牲なのだと、目を閉じ耳を塞ぎ、心に蓋をしてやり過ごす以外に無いのだろうか？

「では……ッ！」

サークスが剣を振りかぶった。スミが身体を固くして目を閉じ、ノエルは目を背ける。

夕焼けの赤い光を反射した銀の刃が、真っ赤な軌跡を残して猫の首を通り過ぎる――。

だが、猫の首が飛ぶ事は無かった。かわりに響いたのは、甲高い金属音。

「……何のつもりだい？」

銀の刃は、鋼の刃に阻まれ猫の寸前で止まっていた。サークスと猫の間に身体を割り込ませ、ヤマトが剣を受け止めたのだ。

「あ、危ねぇ……！　俺ごと叩き斬られるトコだったぜ」

緊張の中に薄笑いを浮かべ、ヤマトが呟く。あと一瞬でも遅ければ、ヤマトと猫の首が、仲良く地面に転がっていた事だろう。

「どいてくれないか、ヤマト君。猫へ下手に恐怖を味あわせる方が、僕は酷い思う」

「ちょっと待ってくれ！　少しで良いんだ、時間をくれ！　俺に考えが……」

ヤマトの背中に庇われた猫を半泣きのスミが抱き上げたのを見て、サークスは溜息と共に剣を引いた。そして厳しい口調で言い放つ。

「考え？　それはもしや、猫に豆を吐かせる……なんてアイディアじゃないよね？　それくらいなら僕も考えたさ。だが猫の腹で熟成

が必要だという事を考えた場合、確実性に欠ける」
「い、いや。まあ確かに似たような事ではあるんだけど……」
言いながら、その場にへたり込むヤマト。剣を受けた衝撃によるものか、それとも恐怖による物か、彼の両手足には震えが来ている。
「ふぅ、ちょっと痺れが取れるまで待ってくれよ」
「……まあ良い。どちらにせよ……」
猫を抱くスミをちらりと見て、サークスは再度大きな溜息を吐く。
「この状態の猫を斬れる程、僕は鬼畜にはなれない。キミの話を聞こう」
ほっと息を吐く一同。
そしてヤマトは、ぽつぽつと自分の考えを話し始めた。

第十二話：幻の琥珀色（六）

あいも変わらず豪奢な室内。

無駄に高い天井と、毛足の長い絨毯。壁には良くわからないが値の張りそうな絵画が掛けられ、その隣からは立派な角を持つ鹿の剥製が首を突き出している。そして、どこを見ても何を触っても、とにかく広く大きいのだ。

集落を後にして依頼人であるノーウェイの屋敷へと帰還したヤマトたち四人は、依頼を受けた時と同様、だだっ広い部屋へと通されていた。

「ほぉ！　この芳醇な香り……そしてこれまでに無い深みとキレ！　程好い酸味と、僅かな苦味。クセは多少強いが、それがまた……」

傅く冒険者たちの正面、広い室内の上座にあたる段上では、コーヒーカップを片手にノーウェイがどこで覚えたのかも知れない御託を長々と垂れ流していた。

「もう一杯だ！　コピ・ルアクを淹れよ！」

上機嫌でおかわりを要求するノーウェイ。召使いと思しき女性が慌てて黒色の液体をカップへ注ぎ足し、逃げるようにして立ち去る。

「うむ……素晴らしい味わいだ。良くやったぞ冒険者。流石は噂に名高い白銀のサークスと、天使ノエルよな！」

「お褒めに預かり、光栄です」

ゆっくり頭を下げるサークス、そしてノエル。美男美女の優雅な立ち振る舞いに、召使いたちの間から甘い溜息が漏れる。

「ケッ！　何が素晴らしい味わい、だよ。どぉせ味なんかわかりもしねぇクセに」

どこからか聞こえてきた呟きに、美男美女は身体を固くして冷や汗を流す。二人の背後に控えるヤマトの声だった。

「ん？　何か言ったか？」
「い、いいえ。何も……んっ！」
「んギャ……！！」

言いながら、ノエルは踵でもって背後に立つ誰かの足を思い切り蹴飛ばした。ヤマトに良く似た、押し殺した悲鳴が聞こえたような気もしたが、きっと空耳だろう。

「まあ良い、大儀であった。報酬は使いの者を宿へ遣らす故、後で受け取るが良い」

コーヒーを啜って満足げに息を吐き、空いた手を、まるで野良犬でも追い払うかのようにヒラヒラとさせるノーウェイ。そして思い出したように続けた。

「そうそう、報酬の一部は中古の女で支払う約束であったな。余は、ちゃんと覚えておるぞ」
「……はい。では我々は、これにて失礼致します」

舌打ちをするヤマトを余所目に、顔色一つ変えずサークスが言った。腹立たしくはあるのだろうが、それを表に出す程子供では無いと言う事だろう。

踵を返し、扉へと向う冒険者たち。

これで、この嫌な感じの依頼人ともこれっきりだ……全員がそう思った時だ。

「これ、時にお前たち。このコーヒーをどうやって手に入れた？」

唐突に、ノーウェイがそう聞いてきた。

「これまで何人もの冒険者を雇ったが、誰一人として持ち帰った者は居なかった。お前たちは、どうやってコピ・ルアクを手に入れた」

この何気ない質問に、ノエルは全身の毛穴から嫌な汗が噴出すのを感じていた。

言えない……猫の体内から取り出したのです、とは。それを言ってしまえば森の猫は乱獲され、長老の不安が現実の物となってしまう。かといって、適当にはぐらかす事も難しいだろう。手に入れてきたコピ・ルアク其の物の信憑性を疑われかねない。そして本当にどうやって手に入れたのかは、絶対に……絶対に言えない。

横目でサークスの様子を窺えば、どうやら自分と同じ所で思考停止しているようだった。丹精な顔に、一筋の冷や汗が流れ落ちる。

「どうした、どうやって手に入れたのかと聞いているのだ。余の質問に……」

どう答えたら良い？　なんとはぐらかせば良い？　どうすればみんな幸せになる事が出来る？

答えの見えないまま、ノエルがとにかく何か喋って時間を稼ごうとした……その時だ。

「クソだよ」

広い室内にヤマトの声が響き渡った。
驚いてノエルが振り返れば、仁王立ちするヤマトと、その隣で頭を抱える太郎丸の姿が映る。

「くそ……とな？」
「ああ、そうだ。あのコーヒー、コピ・ルアクってのは現地の言葉で猫のコーヒーって意味でなぁ……」

意地の悪い目付きで、ニヤニヤと薄笑いを浮かべるヤマト。幼馴染としての直感が、ノエルの警鐘を打ち鳴らす。
まずい、急いでヤマトの口を塞がなきゃ！
慌ててヤマトへと駆け寄るノエル。だがその行動は、ほんの僅かに遅かった。

「なんと、猫の糞から取れるんだよ！！　クソの中から取れるコーヒー豆を、向こうじゃコピ・ルアクって言うんモガモガモガ……！」

言っちゃった……！
言っちゃいけない、本当の事を。

「そ……それは、まことか？」

ノーウェイの問い掛けに冒険者たちは目を逸らし、誰も答えようとしない。ただ口を塞がれたヤマトただ一人だけが、とても楽しげな表情で段上を見つめている。
その沈黙こそが、コピ・ルアクの真実を雄弁に語っていた。

一週間前。
一匹の猫が命拾いをした、しばらく後。
集落付近、コーヒーの木が生い茂る原生林にて、ヤマトは見事に

コピ・ルアクを見つけていた……猫の糞の山から。

「ほらな！　見ろよ、あると思ったんだ！　この種って結構固いだろ？　そう簡単に消化できないって事になったら、最後にはケツから出すしか無いもんな」

嬉しそうに語るヤマト。彼の眼前には、たくさんの糞と、それに塗れたコーヒー豆。どうやらこの付近の猫は、一箇所で用を足す習性があるようだ。

彼は猫のソレを解し、細かく選り分けて……いや、多くは語るまい。

「大したものだ、ヤマト君。キミのお手柄だ、僕が浅はかだったと認めざるを得ない」

「や、やったねヤマト……」

「げふっ、けふけふ……」

「……」

そんなヤマトを、遠巻きに見つめるサークス、ノエル、太郎丸。

そしてスミ。

「いやぁ、それほどでも……木の上から見た時にさ、猫の糞してあった所から、なんか芽が出てたんだ。だからもしかして、とは思ってて……それはそれとして、お前らも少しは手伝ってくれよ。結構大変なんだよコレ……」

糞を選り分ける作業を続けながらヤマトがぼやく。だが……。

「キミの手柄を横取りするほど、僕は恥知らずな男じゃないつもりさ」

「私はその……天使ってキャラクター的に、ちょっと……」
「げふっ……けほっ！」

誰もが彼を遠巻きに見守り、一歩たりとも近寄ろうとしない。しかしそれも無理からぬ事だろう。雑食性である猫の糞は、多少距離を取っていてもなお、かなり匂う。

「何だよお前ら、冷たい連中だぜ。それでもパーティーか！　なあスミ、お前は手伝ってくれるんだろ？」

名を呼ばれたスミは、猫を抱いたままヤマトを正面に見据えて、悲しげにボソリと呟く。

「アンタ本当の意味で、糞チビになっちゃったね……」
「おいコラぁ！　クソとか言うんじゃねぇよチビ！　そもそも俺が居なきゃなぁ……！」

と、こうしてヤマト一人の手によって幻のコーヒー豆コピ・ルアクは穏便な方法によって集められ、冒険者たちは無事にノーウェイの元へと届ける事に成功したのだった。

そして現在。

「……つまり余は、猫の糞まみれの物を口にした、という事か？」
「一応、洗ってはあるけど……まあ、そういう事になるな」

ここまでバレては仕方ない。そう達観したノエルの束縛から解放されたヤマトは、この上なく嬉しそうにノーウェイと向き合う。タチの悪いイタズラのネタばらしを楽しむ、意地悪な男の子そのものといった風情だ。

「こう言っちゃなんだけど、苦労して取ってきたんだぜ？　戻って来る間、何回手を洗ってもニオイが消えねぇし……ああ、ニオイってのはウ〇コのニオイな」
「……！」

ヤマトが一言喋る度にノーウェイの顔色が、どんどん赤みを増して行く。カップを持つ手は震え、両脚も痙攣してガタガタと椅子を揺らす。その様はまるで、癇癪を起こして泣き喚く幼児のようだ。
そして部屋の片隅からは、普段虐げられる立場の召使いたちが、怒りに震える主人の様子を心底楽しそうな表情で覗き見ている。

「こ……この痴れ者が！　何故先に教えぬ！？　知っておれば、そのような汚い物ッ！！」
「でもウマかっただろ？　ウ〇コのダシが利いてて」

一瞬の静寂。それを破ったのは……。

「ぷふっ！」

笑いを堪えきれず、太郎丸が吹き出した声だった。

「ふっ、ふはははははっ！」
「あはっ！　あはははは！」
「ゲラゲラゲラ……」

太郎丸につられて、至る所から次々に上がる笑い声。これまでの鬱憤を晴らすかのように、冒険者たちも屋敷の使用人たちも、全員が大声で笑い出す。
これほど楽しく、痛快な事があるだろうか？　皆が心の中に抱え

る「ざまぁみろ！」が、笑い声となって溢れ出したのだ。
腹を抱え、涙を流し、笑いすぎて咳き込む者もいる。それでもなお楽しげな笑い声は止む事を知らず、屋敷全体に響き渡る。

「うひひひひ……」
「あはは……あはっ、あはは……」

笑い声は絶え間無く続き、やがて、皆が笑い疲れた頃だった。

パリンっ！

頼りなく、切ない音が室内に響いた。
それがコーヒーカップの割れる音だとわかった時、笑い声が次第に小さく、少なくなって行く。

「よくも……余を謀り、コケに……ッ！」

音のした方向には、椅子から立ち上がり、冒険者たちを睨むノーウェイの姿があった。
激しい恥辱と怒りの為か、その顔は林檎のように真っ赤に染まり、今もなお赤みを増して行く……その色は本当に赤く……まさに真紅と呼ぶべき色だ。

「おい、アイツ……な、なんか……大丈夫なのか？」

動揺の混じる声で、ヤマトが呟く。
皆が見守る中、ノーウェイは頬も、唇も、耳の先も、目の中にまでも赤色が広がり、首や手も同色に染まって行く。そして林檎のようだった赤は深みを増し、血のような色へ。そして暗く錆び付いた鉄のような色に変わる。

「みんな……気をつけて！」

誰に言うでもなく、そう呟いた時。天使ノエルは感じていた。

悪魔の到来を。

第十三話：幻の琥珀色（七）（前書き）

残酷なシーンがございますので、苦手な方はご注意下さい。

第十三話：幻の琥珀色（七）

高価な調度品が並ぶ広い室内。その奥まった一段高い場所に立つ男から、目に見えない力の波が断続的に放たれている。その波を受けた時、人はただ立っているだけで肌が粟立ち、脚が震える。

耐え難い恐怖の為に。

「皆さん、逃げて下さい！　今すぐにっ！！」

鋭く大きな声でノエルが叫んだ。我へと帰った使用人たちは、か細い悲鳴を上げながらアタフタとこの場を離れ始める。

恐怖を発散しているのは、屋敷の主人であり、冒険の依頼人でもあるノーウェイだ。しかし今となっては彼をノーウェイと呼んで良い物かどうか疑問が残る。人というカテゴリを、大きく逸脱しつつあるのだ。

顔から全身に広がった赤色は深みを増し、濁った血のような色に。そして彼の四肢にはブクブクと丸いブドウのような塊がいくつも飛び出し、内側から服を押し破ってどんどん増殖を続ける。更には胴体部分も革袋に水を注ぐかの如く肥え太って行き、垂れ下がる脂肪で目は塞がり、腹には何段もの肉ヒダが出来上がる。

「こいつは……悪魔憑きか！」

生き物が、地獄からの囁きに耳を傾け堕落した姿。それが悪魔憑きだ。

非常に強い欲望や欲求、恐怖といった感情を感じ取って悪魔はやってくる。そして彼の甘言に身を委ねた瞬間、身体も魂も、全て悪魔の物となってしまう。

「おいノエル！　悪魔憑きになるのって、生きモンが死ぬ時くらいじゃねぇのかよ!?」

震える手で短剣を抜き放ち、ヤマトが叫ぶ。

ちょっと前に彼が戦った牛の怪物ミノタウロスは、死の間際に悪魔憑きと化して猛威を振るった。死の恐怖と生への執着が、件の怪物を悪魔憑きとさせた原因だろう。

だが目の前に居るノーウェイは違うはずだ。

「多分、死ぬほど恥かしかった……この恥辱を味わうくらいなら、悪魔に魂を売った方がマシだと感じたのだろうね」

言いながら最前線へと踏み出し、サークスも剣を抜いて構える。

「憤死、という言葉もある程だ。屈辱だったのだろうな」

隣に並び立つ太郎丸。彼も臨戦態勢で、いつでも抜ける構えだ。

「つまりヤマトのせい……」

「俺かよ!?　いや、ちょっとからかったくらいで死ぬほどキレなくても良くないか？」

「冗談よ、ヤマト。きっとノーウェイさんは、ずっと前から目を付けられてたんだと思う……それに悪いのは誰でも無い、人の弱みに付け込む悪魔なんだから……！」

翼を広げて浮かび上がるノエル。彼女を守るかの如く男たちは陣形を組み、戦いの準備が整う。

「理由はどうあれ、生きとし生けるもの全ての敵である悪魔に、交渉の余地はありません！　戦い、滅するのみですっ！」

ノエルの凛とした声が響く。それは神の使いであり悪魔と相反する存在、天使としての言葉であると同時に、この世界に生きる者全ての常識でもある。

甘い誘いでもって生き物を堕落させ、魂を奪おうと目論む悪魔たち。そのしもべとなった者を、野放しには出来ない。

「ギザマら……許サヌぞ……コノ恥辱……」

しゃがれた声を上げて赤黒い身体をぶるりと震わせ、段上で一歩を踏み出すノーウェイ。質量保存の法則を無視して膨れ上がった重量で床が砕け、片足がめり込んだ。

その瞬間、戦いの火蓋が切って落された。

「これ以上待つ道理も無い！　先手を取らせてもらう！！」

言うが早いか、サークスと太郎丸が飛び出した。

段上のノーウェイだったモノ目掛けて突進して一気に間合いを詰め、至近距離で放つ必殺の一撃。

「食らえ、滅空ッ！！」

魔力迸る銀の剣が振り下ろされ、空間が歪む程の衝撃波が生み出される。巨大なスライムを塵へと帰した技だ。

ノーウェイを中心として、毛足の長い絨毯が激しく放射状に波打ち、余波を受けた椅子が砕け散り、床材が粉々になって宙に舞う。更には壁に大穴が開き、隣の部屋まで瓦礫と一緒にノーウェイを吹き飛ばす。

「ふっ！！」

壁を蹴り、空中の瓦礫さえも足場として、吹き飛ぶ最中のノーウェイへ追い付いた太郎丸が、裂帛の気迫と共に間髪入れず斬撃を叩き込む。

未だ滅空の威力が残る衝撃波の中心。舞い上がる粉塵のキャンパスに、物差しで引いたような美しい直線が三本刻まれた。すり抜け様の、目にも止まらぬ剣閃だ。

「ぐガァッ！」

ノーウェイが獣のような呻き声を上げて仰け反り、瓦礫の中へと倒れこむ。一発で止めを刺すには至らなかったが、かなりの痛手を与えたようだ。プドウのように膨れたイボが千切れ落ち、ダブダブの腹にも深い傷を負っている。そして、そこからは真っ黒な液体がドロドロと流れ出していた。

「このまま押し切る！」
「おおっ！！」

サークスが再度、滅空を放つ為の集中に入る。その数秒という時間を、太郎丸の畳み掛けるような連続攻撃が稼ぎ出す。

幾重にも重ねられた剣閃。それら一つ一つは、悪魔憑きとなり高い防御力を得たノーウェイの致命傷とはならない。しかし確実に彼から体勢を立て直すチャンスを奪い、反撃の手を封じていた。

「よし、もう一発……ッ！　避けろ、太郎丸！！」

サークスが剣を斜めに振り下ろし、爆風と共に二度目の衝撃波が放たれた。

体勢を崩したままのノーウェイに回避の術は無く、またも直撃。

周囲の瓦礫同様に肉は千切れ、身体の末端から順に粉々に粉砕されて塵になって行く。
だが……。
「ぶふっ……ブフははは っ！　コノ程度か、白銀のサークス！！」
鋼さえも塵と化す滅空の勢力範囲から、ノーウェイの笑い声が響く。彼は一連の攻撃を耐え切ったのだ。
身体の表面を削り取られてタールのような体液を垂れ流してはいたものの、重要器官にはダメージが無かったようだ。一度は千切れたブドウのような肉豆も黒い体液の中からみるみる再生し、元以上に身体全体を覆い尽くして行く。
「今の技ガ、切り札ナノダろう？　ブフハッ！　笑止千万！　多少痛イが、恐レるに足りヌぅ！！」
身体を揺らし、真っ黒な体液を飛び散らせて笑うノーウェイ。垂れ下がった瞼の下で、赤黒い眼が不気味な輝きを増す。
「今度ハ、コチラの番……だ！」
ボンッ！　と、ゴム鞠が弾むような音。気がつけば、ノーウェイは高々と飛び上がっていた。全身の肉豆をバネにして跳ねたのだ。そして天井にぶつかり、再度ゴム鞠のような音を響かせて反射。斜めに飛んで、壁にもぶつかって、更に反射。繰り返す度、速度が徐々に上がって行くのがわかる。
その体型からは想像し難い敏捷さと凄まじい速度。反射のたびに天井や壁が悲鳴をあげ、弱っている箇所には穴が穿たれた。
更に二度、三度。壁や柱を蹴って加速すると、遂に方向を定めて真っ直ぐにサークスへと迫る。

「マズは、貴様だ！」
「くっ！！　だが……甘いッ！」

高速で飛来するノーウェイに対し、サークスの対処は冷静だった。素早く身を屈めると、イボだらけの肉塊を両断すべく、その進路上へ垂直に剣を差し出す。しかし……。

「ぐあぁぁッ！？」

サークスの剣が命中した直後、甲高い金属音と共にガリガリと岩肌を削るような音が響き、激しい火花が散った。悲痛な声はサークスの物。彼が握っていた銀の長剣は手を離れ、床の上を滑って行く。その刃は所々が欠けてボロボロになり、鋭利だった切っ先は削れて丸くなっている。

「どうヤラ、甘かっタのは、オマエの方だったなサークス」

部屋の中央付近、床を大きく窪ませて停止したノーウェイが、嬉しそうにたるんだ頬肉を歪ませた。剣が命中したと思われる胴部には金属の擦れた跡は残るものの、傷とはなっていない。しかもその痕跡さえ時間と共に消えて行く。

悪魔との契約は、傲慢な男にゴムのような弾力性と金属並の強度を持つ身体。そして化物じみた再生能力を与えていた。

「噂に名高いオマエも……」

足下に滑り来た銀の剣。それに一瞥をくれて脚を乗せ、軽々と踏み割るノーウェイ。

「我がチカラの前には、無力！」

彼が力を誇示し悦に浸ると、ブクブクと泡立つようにして全身の肉豆が更に増えた。

最早四肢と呼べる部分と胴体部分の区別すら曖昧で、イボイボの付いた赤黒いボールに小さな突起として頭が乗っているような状態だ。

「お次ハ誰ヲ……」

声も濁り、元の肉声を留めていないノーウェイ。ゴボゴボと汚泥から湧き上がる気泡のような不快な声だ。

剣を失い、手を負傷した様子のサークスを戦力外と見極め、ノーウェイが獲物を求めて首を廻らせると……頭上に眩いばかりの光が見えた。見上げれば、赤黒い身体が漂白されるような純白の輝き。天使が放つ、光子の煌きだ。

「悪魔と取引をして安易な力を得た事こそが恥と知りなさい！」

ノエルが光を解き放つ。

気付いた時にはもう、ノーウェイの身体は光の中にあった。

蛍のように漂う無数の白い輝きが、緩急をつけて彼の身体を貫き通す。

「グブぉ……！」

悪魔の肉を貫いた光は別の光とぶつかり、元来た方向へと戻る。その際にもう一度肉を貫き、更に別の光とぶつかって別方向へと走る。そしてまた肉を貫き……そんな事がノーウェイの周囲で、何千、何万回と繰り返される。

周囲から見てそれは、光の残像が紡ぎ出す細い糸によって、輝ける繭が生み出されて行くかのような光景だ。

「こ、これが天使のチカラ……なんて、美しい……！」

痛む手首を押さえながら、サークスが呟く。

強力かつ無慈悲な光の奔流は、神々しい輝きを放つ天使の姿と共に、青年の心に強烈な印象を刻み込んだ。

それは人がどれほど望んでも届かぬ高み。神の領域。

この瞬間、サークスの中で何かが変わった……そんな気がした。

第十四話：幻の琥珀色（八）（前書き）

残酷なシーンがございますので、苦手な方はご注意下さい。

第十四話：幻の琥珀色（八）

床は砕けて瓦礫と化し、調度品は砕けて価値を失った。
ゴミ一つ落ちていなかった先程から一転。廃墟の如く変わり果てた室内。
埃の舞う部屋の中央付近で眩い光を放ち、音も無く、激しく渦巻く光子の群れ。その中心では悪魔に魂を売り渡した男が、神々の怒りによって容赦なく身体を焼かれている。
なんとも凄まじい威力。天使の御業に目を奪われたサークスと太郎丸の心に安堵が宿り、身体から緊張が抜け落ちる。
これで終わった。自分たちの勝ちだ。

「ダメです、二人とも油断しないで！」

しかし天使の少女ノエルは光を操りながら、未だ緊迫した声で言った。

「まだ……あと少し足りないっ！」

光が、次第に弱く、細くなって行く。
そして光の繭から現れ出でたのは、赤黒い塊。燃え残った肉のような、醜悪なる肉塊だ。

「いや、ノエルさん。確かに完璧では無いかもしれないが、流石にこれでは……」

生きてはいないだろう。微動だにしない肉塊を前に、サークスがそう言ったのも無理は無い。
無数のイボによって倍近くにも膨れ上がっていたノーウェイの身

体は、その大きさを人並みにまで減じていた。そして、その身体自体も光によって貫き焼かれてクズ肉のようになり、時折り笛のような音を立てて褐色の肉汁が飛び出す以外、なんの反応も見せない。

「いいえ、まだです。悪魔はこうして人を欺き、油断を誘……ッ！！」

言葉を最後まで続ける事無く、突然ノエルの身体が勢い良く吹き飛ばされ、天井に打ち付けられた。

見れば焼け焦げた肉塊の中程から、真っ赤な色をした真新しい触手が勢い良く伸び、ノエルを押し上げている。

「チッ！　馬鹿な人間と違って、手の内がバレてイル天使の相手は厄介ダナ」

肉塊の中から声が聞こえてきた。先程まで聞いていたノーウェイの声から雑音を取り払い、不快な要素のみを残した、ある意味で洗練された声。

そして声に続き、肉塊から腕が突き出される。触手と同じ真っ赤な肌、尖った爪。その手の持ち主は肉を無造作に掻き分け、引き裂いて、その姿を冒険者たちの前に現した。

「……ヤア。ハジメマシテ」

その姿は肌が赤い以外に、人の物と大差無いように思えた。

ノーウェイから贅肉を削ぎ落としてシャープに整え、少々爪を伸ばしたような姿。大きな身体というわけでもなく、小さすぎるという事も無い。人間のごく平均的な体型、平均的な顔付きに見える。

ただ特徴的なのは、ノエルを突き上げた長い触手……尻尾だった。腰の中程から腕の半分くらいの太さを持つ、グネグネと動く尻尾が

生えている。

「ソコのキミ……サッキは、凄ク痛カッタヨ」

土煙が爆ぜた……と思った時、その赤いノーウェイは太郎丸の眼前に迫っていた。

「ぐほぁッ！？」

腹部に衝撃。太郎丸の口から、鮮血と空気が押し出される。続けて下顎が蹴り上げられた。

目の前の景色がグルグルと回る……と思った時には、身体が空中で何回転もして床と壁に叩きつけられていた。

その時、太郎丸は何の痛みも感じていなかった。ただわかったのは、腹部に受けた一撃は背骨ごと身体を貫いて反対側に抜け、次の一撃でもって下顎と頚椎を砕かれただろう、という事だ。

剣を振るう間もなく倒されるとは、不覚の極み……だが、それを口にする事さえ叶わない。

「太郎丸さんっ！！」

天井に打ち付けられた格好のまま、ノエルが叫ぶ。

こんな事なら、あと少し……あと少しだけ光を集めて攻撃に移れば良かった！

後悔の念が、少女の胸を押し潰す。

普段とは違う連携。先手必勝を期すサークスと太郎丸の攻撃は激しく速く、この上無く強烈な物だったが……ノエルには早過ぎた。悪魔を滅する聖なる光。それを集めるには時間がかかるのだ。

二人の攻撃が止み、ノーウェイが攻撃に転じて動きを止め、隙を見せた時がチャンスだと思った。しかし、光の収束が不十分だった。

もっと弱い相手であれば倒せていたかもしれない。だがノーウェイに取り付いた悪魔は思いの他強力で、彼の敵にはあと少し……時間にして四秒ほど足りなかった。

「このぉっ！」

全力を振り絞って尻尾を振りほどき、太郎丸の元へ急ごうとするノエル。

「ソウはサセ無イ」

言葉通りの意図でもって、ノーウェイは尻尾の先を八つに割いてノエルの身体に絡ませた。そして手足の爪を床に付き立てて踏ん張ると、渾身の力でもって振り回し、所構わず叩き付け始める。

「きゃ……！」

「コレナラ、チカラを溜メル事、叶ワヌ。アノ獣が死ヌマデ、コウシテ遊ンでクレヨウ」

天使であるノエルは、神の加護によって悪魔の攻撃でダメージを受ける事は殆ど無い。だが掴んで振り回されては、光を集めて行使する天使の能力自体が使い辛い。集中が出来ないのだ。

しかもノーウェイの能力は先程までよりも更に上昇していた。人としての肉体や自我を失い、より純粋な悪魔に近付いた為だ。

早く、早く尻尾を引き千切り、太郎丸の元へ行かなければ。腹部に受けた傷は間違いなく致命傷だった。一刻も早く治療を行わなければ、彼の命はもう……！

「さ……サークスさん！　ポーションを、太郎丸さんにっ！」

全回復には及ばないだろうが、即効性のある回復薬であるポーションを与えれば、太郎丸生来のタフネスと相まって多少の延命措置くらいにはなるはずだ。振り回され、目を開ける事さえ困難な状況の中で、命の灯火を繋ごうとノエルは必死に叫ぶ。

「あ、あぁ……」

弱々しい返事がサークスから返る。だが彼は動けなかった。怖かったのだ。

自らの誇る必殺技。それを大きく上回る天使の攻撃。それらを持ってしても悪魔は倒れる事無く、逆に太郎丸を一瞬で打ち倒してしまった。

今の自分は完全に戦力外であり、相手にされていない。だがもしも、下手に動いて目立ったなら……次は自分の番かもしれない。その思いが、無意識下での恐怖が。サークスの足に釘を刺し、その場に繋ぎ止めてしまう。

「サークスさんっ！！」
「ククク、ヤハリな。臆病者メ」
「くっ……！」

ノーウェイも、こうなる事を予測していたのだろう。それ故に太郎丸を先に打ち倒し、サークスを後回しにしたのだ。

焦るノエル。もう時間が無い。こうする内にも太郎丸の腹からは血が大量に流れ出し、心臓の鼓動が弱くなる。呼吸は……既に止まっている！　早く、なんとかしないと……！

「はい、そこまで！！」

唐突に、ノーウェイが体勢を崩した。踏ん張っていた手足が床か

ら離れた……というよりも、踏ん張っていた床が周囲から切り離されて、足場としての機能を失ったのだ。
この気を逃さず、渾身の力で尻尾を振り払うノエル。

「チッ！　コノ……！」

舌を打ちながらノーウェイが振り返り、尻尾の先端を見る……が、既にノエルは脱出済み。まんまと天使に逃げられてしまった。
一体何が起こった？
足下に微かな気配を感じて視線を落せば、いつの間に忍び寄ったのだろう？　短剣でもって足元の床を引っぺがすヤマトの姿が映った。

「あ、見つかっちまった。よう、はじめまして……か？」
「雑魚が、味ナ真似を」

戦闘が始まるや否や姿を消していた一番の臆病者。この四人の中で最も弱い小僧であり、最もムカつく糞野郎。それがノーウェイの、ヤマトに対する認識だ。そんな雑魚が、今更何をしに来たというのか。
とりあえず蹴りの一発でも見舞ってやれ。それだけで脆弱な小僧の身体は真っ二つとなり、即死するだろう。
そう考え、ノーウェイが軸足に力を込めて蹴り脚を振りかぶった瞬間……多量の細かい砂が顔にぶつかり、視界を覆い尽くした。

「グッ、ブァっ！？」

凄まじい速さの蹴りが、砂煙を真っ二つに切り裂く。そこにヤマトの姿は無い。

「目潰シとは小癪ナ……！」

悪魔と化したノーウェイは、砂が少々目に入ろうと痛みは無い。だが視界が悪くなるのは必然だ。

コーヒーの件といい、今回の目つぶしといい。このヤマトとかいう小僧は要所要所で顔を出し、邪魔をする。取るに足らない雑魚でありながら、この上なくうっとおしく、腹立たしい。

「ソコかッ！」

「おっと！」

目の端に映った動く物体目掛け、鋭い爪を見舞おうとする。だが、またも何かがノーウェイの視界を覆い隠した。

今度は砂では無い。目の前に現れたのは、ヒラヒラと薄く大きな布……見覚えある、屋敷のカーテンだ。戦闘開始から姿を消していた間に、どこかの窓から拝借したのだろう。

苛立ちと共に爪で薙ぐと、小気味良い音を立てて横一文字に引き裂かれるカーテン。その隙間から見えた景色に、またもヤマトの姿は無い。それとほぼ同じタイミングで、横合いから同じようなカーテンが投げ掛けられ、再度ノーウェイの視界を奪う。

「フザケルな小僧ッ！！」

ノーウェイの苛立ちは頂点に達した。

両手と尻尾を使い、顔に纏わり付くうっとおしい布地を細切れに破いて捨てた。ようやく開けた視界。その正面に、表情を強張らせるヤマトの姿を捉える。

「悪魔をココまで愚弄シタのだ。小僧、覚悟は良イな！」

「く……」

これ見よがしに腕を構え、ヤマトに刺すような視線をぶつけるノーウェイ。脆弱な肉体を引き裂かんと爪が鋭さを増し、骨ごと捻じ切ってやろうと腕の筋肉がはちきれんばかりに膨らむ。

そして悪魔は、レベル４の少年に死を贈ろうと一歩を踏み出す…

…が、その場で足を絡ませて転んでしまった。

「な、何ッ！？」

「くっ……ぷははっ！　蹴躓いてんじゃねぇよ、ばぁか！」

ヤマトはそう言って笑ったが、ノーウェイにはわかった。何かに躓いたのでは無い。足に何かが絡まっているのだ。

自らの下肢を見れば、ロープの両端に錘が付いたボーラと呼ばれる道具が両脚に絡み付いている。狩りの時などに、獲物の足止めを目的として使われる投擲用の道具だ。カーテンに気を取られている隙に、投げ付けられていたのだろう。

「ほれ、もう一丁！」

「ガァッ……！」

ヤマトの投げたボーラが、今度はノーウェイの顔に命中する。更に何本も何本も投擲され、これでもかというくらい幾重にも絡みつくボーラ。これも先程の砂と同じだ。痛みは無いが視界は遮られ、蜘蛛の巣が顔に絡まったかのような不快感。うっとおしい事この上無い。

「ヤマト！　太郎丸さんに……！」

「わぁってるよノエル！　おらよっ！！」

ボーラを右手で操りながら、ヤマトは左手でベルトポーチから数

本のポーションを取り出し、太郎丸へと投げ付ける。
ガラス容器に入れられたポーションは血塗れで倒れた人狼の身体にぶつかり、粉々に砕けて降り注ぐ。直後、傷の周辺から湧き上がる魔法の光。

「これでとりあえず、血は止まるだろ。後はノエルっ！」
「うん！」

頷き合う二人。ノエルは大きく羽ばたいて舞い上がり、ヤマトは腰を低くして短剣を構える。
その様子に、焦りを感じたのはノーウェイだ。
もう時間が無い。あと十数秒もすれば天使は力を溜め、降魔の光を放つだろう。本来なら逃げたい所だが……小賢しい小僧の道具類が厄介で、天使を振り切れるとは思えない。
こうする間にも、光が天使へと収束して行く。
それならば……！

「一瞬で小僧を殺シ、天使を叩キ落シテクレル！」

可能な筈だ。人狼さえも反応できない悪魔の瞬発力を持ってすれば、トロい人間に一撃を加える事くらい容易い。さっきは目潰しを食らい外したが、今度は外さない！
両の脚に力を込め、思い切り床を蹴るノーウェイ。弾け飛んだ床材が地面に落ちるよりも早く、ヤマトの眼前に迫る。そして繰り出すのは硬く握り締めた拳。こいつで、どてっぱらに風穴を開けてやる！
だが流石に無警戒の相手とは違う。目で追いきれてはいないようだったが、ヤマトは反射的に腕を下げてノーウェイの拳をガードしていた。
しかし、甘い。

スローモーションのように感じる世界の中、ガードした腕の肉がひしゃげ、骨が折れる感触がノーウェイの拳に伝わる。皮が裂け血が噴出し、折れた腕もろともに拳は胴体に命中。貫くには至らないが、肋骨の大半と内臓のいくつかに深刻な損傷を与えた手応えがある。

拳を振り切ると、小僧の身体はいびつに曲がって反対側の壁まですっ飛んで行った。勢い良く壁に激突し、力無く地面に横たわる膳寂な人間。命はあるかもしれないが、これで戦闘不能だ。残るは天使のみ！

頭上を見上げれば、天使の娘は未だ力を溜めている最中だ。無防備な今なら、容易に攻撃を加える事が出来る。

「貰ッ……！！」

高く跳躍しようと、身体を縮込めて備えた時だ。突然、後頭部に強い衝撃を受けた。

よろめき、膝を付くノーウェイ。瞬時に硬い物がぶつけられたのだと悟った彼が見たのは、甲高い音を立てて床を叩く鋭い曲刀。それは瀕死の太郎丸が、力の全てを振り絞って投げ付けた愛刀だった。

「半死人が、ヨクモヤッテクレタ物ダ」

先に死にかけの人狼を片付けるか？　いや、今は天使が優先だ。ノーウェイが見せた、一瞬の迷い。その一瞬で、またも事態が動く。

「舐めてんじゃねぇぞ、オラァ！！」

立ち上がりかけていたノーウェイは、またも唐突に側頭部への打撃を受け、床に手を付いた。

今度は、助走を付けた飛び蹴り。相手は……致命傷を与えたはずのヤマトだ。

「何故……！？」

混乱するノーウェイ。ヤマトには、かなりの痛手を与えたであろう事は間違い無い。骨は折れて内臓は傷付き、とても飛び蹴りを放てるようなコンディションでは無いはずなのに！

「ばぁか！　ポーションに決まってんだろ！」

あらかじめダメージを受けるとわかっていたヤマトは、それを見越してポーションを飲んでおいたのだ。

例えば高い場所から飛び降りる時などにあらかじめポーションを服用する事で、着地の衝撃を受けた直後から回復が始まり、結果的に傷を浅くする事ができる。ポーションは効果時間が短い為、直前に使用しなければならないのがネックではあるが、生存率を上げる為に冒険者の間では良く使われるテクニックである。

「太郎丸へ投げるついでに、自分も飲んでおいたんだよ。気付かなかったか？」

気付かなかった。顔に絡まったボーラを取る事に専念していた為だ。

「まぁ弱い奴には、弱い奴なりの戦い方があるって事だ。わかったか、バカ！」

なんという邪魔臭さ。なんという腹立たしさ。

雑魚だからトドメは後回しで良いと考えたのが、そもそもの間違

いだったのだ。一番ムカつくこの小僧を、一番最初に殺すべきだった！

「つっても、俺は使用人逃がすのにウロウロしてて、最初ここに居なかったけどな」

「小僧……ッ！」

怒りに全身を震わせ、ゆっくりと立ち上がるノーウェイ。

今度は油断しない。今度は如何なる動きも見落とさない。一挙手一投足を観察し、小僧が得意とする不意打ちの類は絶対に許さない。確実に首を刎ね、回復の及ばぬ世界へと一撃で叩き落してくれる！

「貴様は殺ス！！」

「やなこった！　食らいやがれ！！」

案の定、ノーウェイが動きを見せるとヤマトも動いた。ポケットの中に隠し持っていた何かを流れるような動きで取り出し、投げ付けて来る。

「見切ッタ！！」

予想通りの行動。

ノーウェイはその場で踏み留まると、ヤマトが投げ付けた小さな何かを凄まじい動体視力で見極め、鉤爪で両断した。その上で爆発物の類を警戒し、顔を庇う。

「……？」

だが、何も起らない。

両断された小さな何かは、力無く地面に落ちて転がった。

それは、一粒のコーヒー豆。

「もう、ネタ切れだ」

ヤマトの声に、ハッとして顔を上げたノーウェイが見たのは、会心の笑みを浮かべるヤマトと、自分の周囲に漂う清浄なる光の粒。

警戒しすぎたのだ。コーヒー豆などに構わず、思い切って突っ込んでいれば間違いなくヤマトの命は奪えた。だが何かあると思い、二の足を踏んでしまった。

自らの過ちに気付いた時、もう既にそこは、引き返す事のできない場所であった。

「終りです……悔い改めなさい」

「ヌオオォォォ！！　糞ガアァァァァッ！！」

周囲に漂う光の粒が槍と化し、ノーウェイの身体を幾重にも貫く。光の槍は互いにぶつかり反射しあい、輝く軌跡が重なり合って輝く珠が形成される。

そんな中、獣のような絶叫が屋敷に響く。

「ヤマト、覚エてイロ！！　貴様ダケは、何千、何億回生マレ変ワロウとも見ツケ出シ、最高の屈辱と絶望を与エテ……」

ノーウェイが……いや、彼に取り付いていた悪魔が最後に発した呪いの言葉は、途中から断末魔となって虚空に消えた。降魔の光は闇の住人に対して容赦する事無く、完膚なきまでに存在を抹消する。

やがて輝きが消え、静寂なる時が訪れた時。

疲労困憊、満身創痍の冒険者たちの前には、神に逆らった者の成れの果て……真っ白な灰だけが残されていた。

第十五話：変わらぬ日々、変わる明日

良く晴れた昼下がり。
冒険者たちが集う食堂兼宿屋『ほろ酔い亭』には、妙に食欲をそそる安っぽい油とビールの匂いが漂っていた。
昼食を済ませ、腹を満たし終えた冒険者たちはそれぞれのパーティごとにテーブルを貸し切り、様々な話に花を咲かせている。
色々な人種、色々な職業が集まるこの場所。かなり特異な外見であっても、数分もすれば溶け込み、馴染んでしまう。そんな懐の深さがある。
だがそれでもなお、目立ってしまう人たちというのは、どこにでも居るものだ。

「申し訳ございません……なんだか、私が目立ってしまっているようで……」
「気にすんなよ。別に悪い事してるワケじゃねぇし」

丸テーブルを囲む五人の男女。ヤマトとノエル、サークスと太郎丸。そして長身の美女がその「目立つ人たち」だ。
有名人のサークスと太郎丸。そして存在そのものが珍しい天使のノエルに加え、どこか浮世離れした雰囲気の美女が注目度に拍車を掛ける。更にその美女は、美しいという事以外にも注目を集める理由があった。

「んだけど、その尖った耳は隠しといた方が良いかもな」
「は、はいっ！」

ヤマトに言われた美女が、青みがかった長い髪で、鋭く尖った耳をそそくさと隠した。

「しかし、まさかアデリーネさんがエルフだったとはね。本当に驚いたよ」

サークスが集まる視線に苦笑しながら言った。

エルフ。

深く古い森に住み、森の民とも呼ばれる少数種族。妖精の一種とも言われている。

魔力の扱いに長け高い知能を誇り、非常に寿命が長く、人間の十倍以上の時を生きる者も珍しく無い。外見的な特徴としては、鋭く尖った耳。そして人間の美的感覚から見た場合、種族全体が美男美女揃いである、という事に尽きるだろう。

ただし非常に排他的であり、他種族との積極的な係わり合いを避ける傾向にある。

「申し訳ございませんサークス様。私、お屋敷以前の記憶が曖昧で、世間の事を殆ど知りませんので、自分がそんなに珍しい種族だなんて思っても無くて……」

「いやいや、責めたんじゃないんだ。むしろ嬉しかったくらいさ。エルフと天使が同席するシーンなんて、そう簡単に見れる物じゃないからね」

優しく微笑んだサークスに、エルフの美女ことアデリーネが少し緊張を解いた。

彼女は先日までノーウェイの妾であり、ヤマトが報酬代わりに身請けを申し出ていた女性だ。元主人たるノーウェイが悪魔憑きとして討たれた今、彼女は事前の約束に従ってヤマトたちのパーティーに身を寄せていた。

高い水準で整った顔。優しげであり、憂いを帯びた瞳。細身でありながら女性的な起伏に富んだ身体つきと、長い手足。そしてさら

さらの長い髪は腰の辺りまで伸びて、涼しい青色に輝いて見える。
一般的なエルフの水準からしても、アデリーネはかなりの美女である。その出自やエルフという種族自体の物珍しさもあってか、人目を引く事この上無い。

「まあ子供の時からずっとノーウェイさんの家に居たのなら、無理も無いですよね」

冷たいオレンジジュースをストローですすり、ノエルが言った。
アデリーネの話では、ごく小さい頃に屋敷に来てからというもの外に出た事は一度も無く、今では子供の頃の記憶も殆ど残っていないと言う。屋敷の中での出来事が彼女にとって世界の全てであり、ノーウェイに仕える事を疑いもしなかったのだ。

「はい……ですので私、少し常識に欠けている部分があると思います。ご迷惑をお掛けするかとは存じますが……」
「いいよ、気にするなって。ほら、良かったら食いなよ。腹減って無い？」

ヤマトの気遣いに、嬉しげな微笑みを返すアデリーネ。大人っぽい容姿とは裏腹に、その表情はまるで初恋を覚えたばかりの少女だ。
その時、ノエルの表情がほんの一瞬だけ強張った事に気付いた者は居ただろうか？

「ところで、次の依頼についてなんだけど」

あまり空気が読めない性分なのか、それともあえてそうしたのかは判らないが、唐突にサークスが口を開いた。
彼はテーブルの上を軽く片付け、前回したのと同じように丸まった羊皮紙を広げて、カラのジョッキを重石にする。

「一応、僕の方に『伝説の武具を探す』って依頼が舞い込んでる…
…ま、依頼というか宝探しの類だけどね」

冒険者は何も、他者からの依頼のみで成り立つ商売では無い。時には自ら進んで迷宮に赴き、魔物を倒して腕を磨き、隠された財宝を探したりする事もある。

「あ～……悪いけど、俺と太郎丸はパスだな。傷がまだ癒え無いんだ」

ヤマトが言って、袖を上げて見せた。ノーウェイの拳を受けた彼の腕は内出血が続いている為に赤紫色で、腫れも引いていない。脇腹も同じ状態で、動くと痛むのだ。

太郎丸の症状は更に酷く、腹には血の滲む包帯が何重にも巻かれ、首は石膏と包帯で固定されている。普通に歩き回る事くらいは出来そうだが、戦闘を含めた激しい運動は難しそうだ。

「悪魔の攻撃には呪詛が乗ってるから、治りが悪いの」

傷を見たノエルが、申し訳無さそうに言う。

ノーウェイとの戦いから一週間。二人に対しては毎日のようにノエルが治療を行っていたが、全回復には程遠い。悪魔の呪いに最も効果的なのは、本人の自然回復力。時間が薬、というわけだ。

「ごめんね。私の能力が、もう少し強ければ……」

パーティーの治癒は天使の役目。悪魔の呪いに阻まれて、自らの役目を果たせていない事に負い目があるのだろう。ノエルの声が沈む。

「バカ。太郎丸なんか、ポーションだけじゃ危なかった。下手すりゃ死んでたんだぞ？　俺らは、お前のお陰でここまで良くなってんだよ」
「……うん」
ヤマトの声に、ノエルが頷いて少しだけ身を寄せる。他人からはわからないくらいの、ほんの少しだけの接近だ。
「そうか……全員で行きたかったが、無理は出来ないものな。いや実はこの宝探し、期間限定でね……この機会を逃すと、次は五年後なんだ」
心底残念そうにサークスは言った。
宝探しの舞台は海底洞窟。五年に一度だけ口を開く洞窟に、伝説の武具は眠るという。
潮の香り漂う、深く暗い洞窟。湿った岩壁を伝い歩き、海水が穿つ岩の隙間を潜れば、見た事も無い海洋生物が魔物として襲い掛かってくる。そうして数多の困難を退け辿り着いた先には、フジツボがびっしり付いた宝箱に詰まった光り輝く金銀財宝――。
事の真偽はともかくとして、冒険者と名乗る者であれば一度くらいは体験してみたいシチュエーションではある。
「というわけなんだ。だから……これはもう、完全に僕のワガママなんだけど……もし皆が許してくれるのなら……」
依頼内容をざっくりと説明したサークスは、多少躊躇いがちに言葉を続ける。
その後ヤマトたちは最後までサークスの話を聞き、どうして彼がそんなにも言い難そうにしていたのか、その意味を知るのだった。

第十六話：記憶の中の故郷（一）

蔦が幾重にも重なり絡まりあって、天然のトンネルを作り出す。ざわめく葉の隙間から僅かに差し込む日光が、落ち葉の道に斑模様を描き出し、大自然と言う名の芸術家の偉大さを歩く者たちに思い知らせている。

時折り、優しい風だけが通り抜けるその道。だが今日は、珍しい客人の姿があった。こんな事は何年ぶりだろうかと森の精霊たちは囁き合い、虫たちは蔦の葉に身を隠す。

「お二人とも、本当によろしかったのですか？　こんな事にお付き合いして頂いて……」

蔦のトンネルを行く三つの人影。その内の一つ、アデリーネが遠慮がちに聞いた。

ノーウェイの屋敷で着ていたセクシーな服装から一転。彼女はシックな装いの動きやすそうなパンツルックに身を固め、背中には小さなザックを背負っている。長い髪はアップにしてまとめ、エルフの特徴である尖った耳も隠す事無く露わにしていた。どこか清楚で、知的な装いだ。

「良いんだよ。俺も、太郎丸も、リハビリみてぇなモンだ」

小柄な身体に少し大きめの荷物を背負ったヤマトが、そう言って顔を上げた。後に続く太郎丸も、無表情ながら頷いて肯定の意思を表す。

彼ら三人は前回の依頼に引き続き、森へやってきていた。誰も踏み入る事の無い森林の奥深く。秘密の通路を通らなければ行き着けないと噂されるエルフの隠里を目指して。

「それに例の宝探しに行けなくて退屈だったしな」

汗を拭いながら、ヤマトは数日前、ほろ酔い亭でサークスが言った言葉を思い出していた。

「この宝探し、俺と……ノエルさんの二人で行かせてもらえないか？」

「え……えぇっ！？」

この提案に最も驚いたのは、他ならぬノエルだった。まさか自分の名前が出るとは思っていなかったのだ。

「本当なら全員でと思った。けれど太郎丸とヤマト君は本調子で無く、荒事に向かない。かといって信用の置けない他の冒険者とは組みたくない。しかし僕はどうしても、この案件に挑戦したいんだ。たとえ一人でも」

サークスは、なるべく要点だけを冷静に淡々と語っているつもりだったのだろう。だが言葉の端々から、この『伝説の武具を探す』という話にかける想いの強さが滲み出している。

「だが、挑むからには当然成功を収めたい。そこで考えた。付き合いは短いがノエルさんなら信用できるし、能力は言うまでも無い。だから、こんなチャンスは滅多に無いから……僕の我侭である事は重々承知しているんだが……」

思いついた単語をそのまま口に出すかのような、あまり上手とは言えない語り口。だが、だからこそ彼の真剣さが窺えた。

「ヤマト君とノエルさんがコンビを組んでいるのに、それに割り込むような形で……しかも怪我を負った太郎丸を置いて行くなど、相当な恥知らずだとは思う。だけど、僕は……」

サークスの冷静さは、既に氷解していた。机の上で握り締める拳には力が入って血の気が失せ、爪の先まで白く変色している。

「僕は……伝説の武具を探したい！　五年は……長すぎる」

語り終え、俯くサークス。

誰も、言葉を発しない。食堂という喧騒の中にあって、静かな時間が流れる。

そんな中で、ノエルは悩んでいた。

サークスはきっと、伝説の武具に強い思い入れがあるのだろう。何度も世話になった彼に恩返しの意味も込めて、協力してあげたいとは思う。

だが同時に、強い抵抗も感じていた。

ノエルは、ヤマト以外の誰かと二人で冒険へ出た経験が無い。というよりも、もともと冒険という行為そのものに大した興味は無いのだ。そんな彼女が危険と苦労を伴う冒険へと赴く理由。それは……。

「……」

ちらりとヤマトの様子を窺うノエル。彼は口をへの字に曲げて腕を組み、何事か考えているようだった。

私、どうしたら良いと思う？

そう問えたら、どれほど楽だったろう。

行っちゃ駄目だ。

そう言ってくれるなら、どれほど嬉しかったろう。

「……わかりました、サークスさん。今回の宝探し……私で良ければ、同行させて頂きます」

自分から、そう言うしか無かった。

ヤマトに聞いたとしても「行ってこい」と言っただろう。十年以上も同じ時を過したノエルにはわかる。あれだけ真剣な様子を見せたサークスさんの気持ちを無視できるヤマトでは無いと。

「あ……ありがとう、ノエルさん！」

嬉しそうな表情を見せるサークス。ノエルとしては心中複雑であったが、幾分か救われた気がした。

「いいえ、こちらこそ。よろしくお願いします」

言って、ぺこりと頭を下げる。

一度決めたからには、もう気持ちを切り替えなくてはダメだ。サークスの期待に応えられるよう頑張らなくては。

話を聞く限りでは、この町の近くでは無さそうだ。移動を含めて一ヶ月か二ヶ月か……かなり長期間の冒険となるだろう。

そうなってくるとノエルの脳裏には冒険とは別の、新たな悩みが浮上してくる。

「あ、あの……ノエル様？　私の顔に、何か？」

アデリーネの怪訝そうな声にハッと我に帰ったノエルは、慌てて視線の意図を誤魔化した。無意識のうちに凝視してしまったようだ。

自分が留守の間、彼女は……アデリーネはどうするのだろう？

成り行きとはいえ、一応彼女はヤマトに買われた身。主人と召使

いの関係だ。そしてヤマトは怪我人。となれば、いくら無茶が服を着て歩いているような彼であっても、依頼を受けて冒険に出るような事はしないだろうし、そもそも怪我人に仕事を頼む依頼人もいないだろう。となるとヤマトとアデリーネは宿に留まり、いつも一緒という事になる。朝も昼も、そして夜も。

偏見を持つのは良くないとは思うし、それ自体について善悪を語るつもりも無い。だがアデリーネは屋敷にいる間、あんな事やこんな事をして主人であるノーウェイの歓心を得ていたという事実がある。

女性に免疫の無いヤマト……誘われるまま、あっさりコロっと骨抜きにされてしまうのではないか？　そんな不安な感情を頭の中から消し去る事が出来ない。

「すいません、ちょっと宜しいですか？」

暗澹たる思いにノエルが囚われている中、不意にアデリーネが何かを思いついたように口を開き尋ねた。

「もしヤマト様のお許しを頂けるのでしたら、実は……私も少しお暇を頂きたいのです」

突然何を言い出すのかとキョトンとするノエル。

そんな彼女に、アデリーネは意味有り気な微笑を返して言ったのだ。

「私の、生まれ故郷を見てみたいのです」

そして今。

アデリーネの故郷を目指し森を行く三人の最後尾で、ひたすら押し黙り一連の成り行きを見守っていた太郎丸は、こう考えていた。

天使とエルフ。知力が高い事で知られる両種族であるが、こと男女の機微に関しては、エルフが一枚上手である、と。

太郎丸の想像ではあるが、唐突にアデリーネが故郷を見たいと言い出したのは、ノエルを慮っての事だったろう。ヤマトから遠ざかろうとしたのだ。もしかすると、ずっと以前から里帰りを望んでいたのかもしれないが……あのタイミングでは多少、不自然に思えた。

「へぇ、凄ぇなココ。通路も何もかも全部、生きてる植物やらで作ってあるんだな！　初めて見るモンばっかりだ」

「私もです。外の世界は久しぶりですし、故郷の記憶も曖昧ですので、見るもの全て珍しく映ります」

太郎丸の前を、他愛の無い雑談に興じながら進む二人。その様子に、人狼は人知れず溜息を漏らす。

前述したアデリーネの気遣い。それを台無しにしたのがヤマトだった。一人で故郷へ向うと言うアデリーネに、ヤマトは同行を申し出たのだ。自他共に認める世間知らずの女一人での旅路は、あまりにも危険だからというのが理由だ。それに、怪我をしていて暇だからとも付け加えた。

確かにその通りであると思うし、この申し出は純粋な、ヤマトの善意であり優しさだったのだろう。

だが、太郎丸は思った。

お前から二人きりになってどうする！　空気を読め馬鹿者！！

と。

案の定、アデリーネは困惑の表情。大人しく休養してて欲しいとヤマトに説くものの、効果は薄そうに思える。そしてアデリーネの逆サイドでは、ノエルがあからさまに不満げな表情で手元のパンを千切り、粉々にして皿の上に並べていた。……ちょっと怖い。サークスは能天気に洞窟のマップなど眺め、この微妙な空気に気付いてさえいないようだ。

これはもう、仕方が無い。

「某も行こう」

こう言う以外に無かった。自分も同行するとなれば、ノエルも多少は安心するだろう。正直、傷の痛みは酷いが、見て見ぬ振りは出来ない性分だ。

「お、トンネル抜けるぞ。そろそろ居住区か？」

「いいえ、確かもう少し距離があったような……」

静かな森に響く声を聞きながら、またも太郎丸は思う。

ヤマトよ、もう少し女心というものを考えろ、と。

先程から会話を続ける二人ではあるが、注意して聞いていれば積極的に話題を作り、話しかけているのはヤマトの方だ。多分、彼には下心など無く、急激な環境の変化に心細いであろうアデリーネを気遣っての事だろうと思える。

だが、それを端から見た場合どうだ？　ノエルが心配するのも良くわかる。

ヤマトはまだ若い。そんな彼に、男と女の心理まで考えた上での気遣いを行動を要求するのは、あまりにも酷であり難しいだろう。

これから多くの経験を積んで、徐々に慣れてゆく物ではあるが……今、正にその技術が必要だという時だというのに……。

「……？」

不意にアデリーネが立ち止まった。そして振り返り、太郎丸と目が合う。

こちらの視線が気になったか？　そう太郎丸が考えた時だ。アデリーネが、苦笑して見せた。

『ヤマト様からこんなにも優しく、色々と気を使って頂けるのは凄く嬉しいのですが……少し、ノエル様に申し訳無いです』

そんな声が聞こえた……気がした。

なるほど、ヤマトの無邪気な優しさも、太郎丸が同行した意味も、全て察しているという事か。エルフの高い知力と、長い寿命に基づく人間観察力、人生経験は伊達では無いらしい。

それならば……。

ゴツン、と鈍い音が森に響く。

「ぐはっ!?　何すんだよ太郎丸!　痛ぇじゃねぇか!」

「おぉっと、失礼した」

太郎丸は剣の鞘で、軽くヤマトの頭を叩いた。軽くとはいっても女たちの鬱憤により多少の威力上乗せがあったかもしれないが、概ね『軽く』の範囲内であったろう。

「カンベンしてくれよ～。今回はノエル居ねぇから回復出来ないんだからさぁ」

痛む頭を擦りながら、さらりと女の名を出すヤマト。

そして再度、ゴツリと鈍い音。

「痛ぇ!!」

「む、すまぬ」

そんなにヒョイヒョイ脳裏に浮かぶ名であるなら、もうちょっと気を使ってやるがいい。

この女泣かせが!!

第十七話：記憶の中の故郷（二）

視界の全面を埋め尽くす深い緑。息をすれば空気が濃く感じられ、静寂の中に耳を澄ませば柔らかな葉の擦れ合う小気味良い音や、植物が水を吸い上げる音さえも聞こえてきそうだ。

木々の生い茂る森の中、所々に架けられた橋や、木材を加工して作ってある道具の類が微かな生活臭を感じさせる場所。ここがアデリーネの生まれ故郷、エルフの隠里だ。

「どうだ、アデリーネ。懐かしいモンとかあるか？」

「はい……景色は、私の記憶とは随分違っています。ですが所々に懐かしさを感じさせる物があります」

愛しげに樹木を撫でながらヤマトの問いに答えるアデリーネ。

自分がこの郷を離れてから、どれくらいになるだろうか？　木は育ち、あるいは枯れ果て、目に見える物は随分と変わっている。だが空気は……郷の雰囲気は、あの頃のままだ。

視線を上げれば、樹上に細い枝を組み合わせて作られた家のような物が見える。そこから垂れ下がる蔦を使い、子供の頃の自分は、この広い郷の中を思うがまま自由に走り回っていた。木と木の間に備え付けられた、朽ちた板。それを的に、弓矢の練習に励んだ日々が蘇る。

風の音、森の香り、落ち葉の感触。

何故、忘れていたのだろう？

きっと、屋敷での生活には必要が無かったからだ。思い出しても辛いだけだと、記憶の底に沈み込んでいたのだ。

「ヤマト様。私、少し見て回って来ても宜しいでしょうか？」

「おう、行って来いよ。俺たちはココで待ってるから」

ヤマトと太郎丸にぺこりと頭を下げると、アデリーネは軽やかなステップで土を蹴り、郷の緑に溶け込むようにして木々の隙間へと消える。その何気ない所作の中に、エルフが森の人と呼ばれ理由の一端を垣間見るヤマトたち。

「……自分の家とか、見に行ったのかな？」

「わからぬ。だが長い時間を生きる彼女らにとって、過去と向き合う事は何か特別な意味があるのだろう」

喋りながら、適当な倒木に腰を下ろすヤマトと太郎丸。二人ともずっと我慢していたが、この郷に入ってからという物、ノーウェイから受けた傷が地味に疼く。この場の清浄な空気に、悪魔の呪詛が反応しているのかもしれない。

二人は申し合わせたかのようにザックから水筒を取り出し、口に運んだ。少し温い液体が喉を潤す。水筒の中身は、ノエルが作ってくれた薄めのポーションだ。レモン風味で、ほんのりと甘い。

「過去ねぇ……そんなモンかぁ？　昔の事なんざ、どうでも良いと思うけどな」

「周りにとっては、そうだろう。しかし本人にとっては、重要な事もある」

諭すように言った後、何かを思い出しているのか、自分の手をじっと見つめる太郎丸。どこか、寂しげだ。

ヤマトは彼の過去について何も知らない。知っているのは、ここよりもずっと東の出身で、剣の扱いが得意だから冒険者になったという事くらい。家族や恋人の有無も、故郷を離れた理由も、そういえばちゃんとした年齢さえも知らない。

少しくらいは、詮索したい気持ちもある。だが……どうでも良い。

太郎丸が実は財閥のおぼっちゃんでも、勇者の血を引く子孫でも、凶悪な犯罪者だったとしても、今の自分にとっては関係が無いと思える。短い期間ではあるが一緒に旅をしている内に、理屈では無くそう感じるようになった。

「そういやぁ……ここって、人の気配がしねぇな」

ヤマトは話を変える事にした。昔話は、また今度で良いだろう。本人が必要だと感じた時で。

「……エルフは、長寿故に出生率が低い。その為、何かしらの理由で数が極端に減った場合、あっさりと全滅してしまう事があると聞く」

太郎丸が答える。出発前、サークスより聞き及んだ知識だ。そして、彼はこうも言っていた。

「アデリーネ殿は子供の内にここを去り、詳細は覚えていないと聞く。いくらエルフが賢く、魔力に長けるといっても、子供を一人で郷の外へ行かせるような真似はせぬだろう。ならば当時、子供を一人行かせねばならぬような理由が……緊急避難が必要な何かが、ここで起ったのではないか？」

「緊急避難ってオマエ……例えば山火事とか？　けど、そんな風には見えないぜ。それに、全員で逃げりゃ良いじゃねぇか。一人で行かせる意味がわかんねぇ」

太郎丸の語る推論に、ヤマトが疑問を返した。答えを期待したわけではなく、そうでなければ良いな、という期待を込めた反論だ。

「何があったのかはわからぬ。だが、そう考えればアデリーネ殿の

記憶が曖昧な理由と人が居ない理由に、とりあえずの説明が付く。緊急事態が発生し、子供にとってはワケのわからぬまま、大人のエルフによって逃がされた、とな」

そこまで喋った後、一旦口を閉じる太郎丸。実はサークスは、まだもう少し予想を語っていた。アデリーネが何かを隠し、嘘を付いているのではないか、との予想だ。

だが、それをここで言うつもりは無い。

「単にココに飽きて他所へ移ったんじゃね？　街からも遠いし、不便だろ」

「馬鹿な。単身者の引越しでは無いのだぞ。そんな気楽には……」

「そうですよヤマト様。ここはここで、良い所もあります。住めば都なのです」

いつの間に戻っていたのだろう？　アデリーネが木陰から姿を現した。本人に隠れていたつもりは無かっただろうが、あまりに自然な振る舞いであった為、周囲の緑に同化して認識できなかったのだ。

「おう、おかえり。どうだった？　なんか良い物でも見つけられたか？」

「良い物、といいますか……太郎丸様のお話を、半ば裏付けるような物でしたら多少」

アデリーネの言葉に身を硬くするヤマトと太郎丸。自分たちの話を、どの辺りから聞いていたのか？

だが今はそれよりも、太郎丸の話を裏付ける物というのが気になった。

「見て頂きたい物がございます。お二人とも、こちらへどうぞ。そ

の場所へ、ご案内致します」

百聞は一見にしかず。

そう考えたのだろう。アデリーネは多くを語らず、二人を郷の中央へと誘うのだった。

第十八話：記憶の中の故郷（三）

エルフの隠里が、隠里でいられる理由――それが今、ヤマトの目の前に聳え立っている。

視界の全てを占拠する太い幹。見上げれば、空を覆いつくす程に生い茂る濃緑の枝葉。郷の中央に生えるその木は、とても太く、とても高く、とても大きく――古くから森に生きるエルフの長い歴史を象徴するような、見事な大木だった。

「これが、私たち郷の者の間で御神木と呼ばれている、大切な木です。この木は大地から魔法の力を吸い上げ、周囲に迷い道の魔法を掛けていると伝えられております。その魔法のお陰で、この郷は隠里として存在できるのです」

アデリーネが丁寧な口調で、どこか誇らしげに語ってくれた。エルフである彼女にとって、自慢の代物なのだろう。

「魔法を使う大木かぁ」

「はい。お二人には確認し辛いと思いますが、魔法の素養がある方でしたら木が魔力を放っている様を見る事ができるはずです」

そう言われ、ヤマトは目を凝らしてみた。自身に魔法の素養が無い事は知っているが、もしかしたら多少は見えるのではないか？そう思ったのだ。

「見えたか、太郎丸？」

「いや……」

囁きあう二人。

そんな男たちに微笑みながら、アデリーネは傍らの苔生した石の側へとしゃがみ込む。両手で抱えられる程度の、それほど大きくない石だ。

「魔力の流れは見えなくても大丈夫……本題は、こちらですから」

そう言った後、彼女は石に生えていた苔を丁寧に剥がして見せた。丸くスベスベとした石。全体的に白く、所々に薄くヒビが入っているようだ。

「アデリーネ殿。それは……？」

「はい。エルフの、頭骨です」

言って、石を……石と思われていた頭蓋骨を、そっと抱き上げるアデリーネ。中程まで土に沈み、所々が欠けてはいたが紛れも無い。それは確かに頭蓋骨だった。

そして、その事実に気付いた今ならばわかる。

木の周囲を見渡せば、他に幾つも目に付く白っぽく丸い石。そして枯れ木と思われた白っぽい枝の数々。

「全て確認したわけではありませんが、元々ここに住んでいた皆さんの、遺骨だと思います」

「これ全部が！？」

ヤマトが驚きの声を上げる。骨の多くは土に埋もれ、木の陰や茂みの下に隠れていたが、目に見える範囲だけでも百や二百は下らないだろう。

「それと、これを……」

アデリーネが改めて頭蓋骨を差し出した。良く見れば、その側頭部にあたる位置に大きな切れ込みが入っている。鋭い刃物で切り裂かれたかのような深い傷跡。この傷が頭蓋骨の持ち主が亡くなる原因となった事は、容易に想像できた。

「多くの骨に、このような傷が。それ以外にも、木や岩にもそれらしき痕が散見されます」

「って事は、太郎丸が言う緊急事態ってのが、この傷を付けたってワケか」

言って、もう一度周囲を見渡すヤマト。木々の隙間から垣間見える骨の数々に、辛く、苦しい思いが込み上げて来る。

今は骨になってしまっているが、かつて、これだけの数のエルフがここで血を流し倒れたのだ。静かな森に悲鳴と怒号が飛び交い、濃い血の匂いが漂ったのだ。

「……」

気が付けば太郎丸が目を閉じ、遺骨へ向けて正座で手を合わせていた。彼の故郷における、死者の魂を慰める所作の一つだ。

ヤマトの故郷に、そういった風習は無い。だが太郎丸の隣に座り、形だけでも真似て手を合わせる。

安らかに眠れ、名前も知らないエルフたち。アンタたちが助けた娘は、今ここで生きてる――。

伝わらないかもしれないし、的外れかもしれない。けれど、これだけは伝えたかった。

アンタたちの死は、決して無駄じゃ無い。

「ヤマト様、太郎丸様……」

ヤマトの傍らに膝を付いたアデリーネが口を開きかけた時、風が流れた。不意の事に違和感を感じた彼女が風の吹く方を見てみると、いつの間にか人が立っているではないか。

人といっても、人間では無い。人型をした何かだ。

薄っすら蒼く発光する半透明の身体。大きさは人間の大人くらいで、全体的に女性的でやせ細ったようなシルエット。地面からは少し浮かび上がり、風にたゆたう羽毛の如くフワフワと揺れ動き、眼球は無く、代わりに蒼い発光体がこちらをじっと見つめている。

「な、なんだコイツ？」

「面妖な……！」

突然現れた正体不明の相手に警戒し、構えを取るヤマトと太郎丸。それに反しアデリーネは、懐かしい物でも見たような様子で表情を和らげる。

「あなたはシルフ……！　まだここに残っていたのね？」

風の精霊、シルフ。

世界の根幹を成す四元素、地、水、火、風の内、風の属性を司る代表的な精霊の一つだ。知性は低く、本能で行動すると言われている。

風の吹く場所であれば、そこかしこに存在する精霊ではあるのだが、「精霊使い」と呼ばれる特殊な才能を持つ者でなければ目視する事が出来ない。だが気まぐれに、こうして人前に姿を現す事もある。

「大丈夫です、お二人とも。このシルフは、私がここに居た頃からずっと存在し続ける精霊です。郷の緩やかな風の如く、優しく、穏やかな性質ですから」

言いながら、シルフに近寄るアデリーネ。もぬけの殻となっていた故郷に見知った顔を見つけたのだ。その喜びや安心感は、筆舌に尽くし難い物があるだろう。

「お願いシルフ、私に教えて。ここで何があったのか……私のお父さんと、お母さんはどうなったの？」

問い掛けて、シルフへと手を伸ばす。触れ合う事で意思の疎通を……そう思ったのだろう。

だが、横合いからそれを阻む者があった。

「危ねぇ！！」

ヤマトのタックルを受け、倒れこむアデリーネ。背中をしたたかに打ちつけ、一瞬息が出来なくなる。

「いたた……何をなさるのですかヤマト様。何も危険な事は……？」

頬に落ちてきたヌルりとした液体。それを指先で掬い取った時、不満を訴えるアデリーネの言葉は止まった。

それは真っ赤な血だ。ヤマトの肩口から滴り落ちた、彼自身の血液だ。

「早く！　この場を離れるのだ！！　ぐぉあッ！？」

そしてヤマトの背中越しに見えたのは、身体を盾にして何者かの攻撃を受け止めている太郎丸の姿。既に全身血だらけで、こうしている間にも風切り音と共に傷がどんどん増えている。

「こ、こっちだアデリーネ！」

わけもわからず、ヤマトに手を引かれて大樹の陰へと身を隠すアデリーネ。

こんな事がずっと昔に、あった気がする……。

「無事だったか、二人とも？」

「おう、太郎丸。お陰さんでな。そっちも……大丈夫そうだな」

アデリーネが既視感に囚われていると、すぐに太郎丸も同じ場所へ逃げ込んできた。体中に切り傷を負い、黒い体毛が真っ赤な血に染まってはいたが、意に掛ける様子も無い。

「とりあえずは回復だ。太郎丸、ポーション持ってるか？」

「うむ、十分に有る。心配無用だ」

男たちが無事を確認しあい、傷を癒し始めた頃。アーデリネの心は思い出の中にあった。

そう、かつてこの郷から逃げ出した時の事。

突然やってきたのだ。真っ赤な身体をした者たちが。そして森に住まう、穏やかなはずのシルフが暴れ始めた。

理由はわからない。だが多くの同胞が真っ赤な者たちによって薙ぎ倒され、シルフの鋭い風によって切り裂かれた。自分は両親に手を引かれ、木の陰に逃げ込んだ。その時、両親は傷を負っていた。深い傷だ。だがポーションで治療すれば大丈夫だと思った。けれど……。

「ヤマト様、太郎丸様……その傷は、ポーションでは治りません」

アデリーネが、はっきりとした声で言った。そして、その言葉に

男たちが疑問を挟むより前に、彼女は続ける。

「曖昧だった記憶が、私の中に戻ってきたのです。今すぐ包帯で止血して下さい、お手伝いします」

呆気に取られる男二人の身体へ、ザックから取り出した包帯をグルグルと巻きつけて行くアデリーネ。何がなんだかわからないヤマトだったが、傷に関して言えば確かに彼女の言うとおりだ。

シルフの放った風の刃からアデリーネを庇い、背中に受けた傷。普段であればポーションの二、三本でも飲むか、傷口にかけるかすれば大した問題もなく治る傷だ。しかし今回は痛みこそ和らいだものの、劇的に回復する様子は無い。そしてそれは、太郎丸の傷も同じ状況であるようだった。

「アデリーネ殿。記憶が戻ったと仰られたか？　では、あのシルフは一体……？」

自らを止血しつつ聞いた太郎丸。その問いにアデリーネは表情を曇らせ、それでもしっかりとした口調で、手早く答えた。

「彼の精霊は、悪魔の毒気に当てられているのです」

第十九話：記憶の中の故郷（四）

かつてエルフの隠里を襲った悲劇。
平和な郷へ突然現れた、悪魔の群れ。
今となっては何故悪魔がエルフの隠里を襲ったのか、襲うことができたのか、その理由は定かでない。だが事実として、襲撃は起った。
暗闇の中、真っ赤に光る目が木々の合間で閃く度に誰かの悲鳴が上がり、命の炎が消えた。悪魔の力は圧倒的だった。
しかしエルフたちとて、ただ無様にやられ続けたわけではない。最初こそ劣勢であったエルフ側だったが、地の利と人の輪によって体勢を立て直すと、エルフ族に伝わる秘法の力と、郷に住まう風の精霊シルフの力を借りて反撃に転じる。そしてついに悪魔たちを退ける事に成功したのだ。
だがしかし、本当の悲劇はそれからだった。
味方であったはずのシルフが狂い、エルフを襲い始めたのだ。

「確か両親の話では、精霊であるシルフは物質界の生き物よりも魔法的な存在であるから、悪魔の呪詛を強く受けたのだろう、と……」
「物質界って俺らの居るこの世界の事か？　まぁ良くわかんねぇけど、悪魔に混乱させられちまったって事だな」

大きな岩陰から、少しだけ身を乗り出して話すヤマトとアデリーネの二人。その視線の先には、竜巻のような風を纏って触れる物全てを切り刻む、狂えるシルフの姿がある。
しっかりと何かに掴まっていなければ吹き飛ばされてしまいそうな暴風が吹き荒れ、無作為に、無造作に、ただただ力を振るい暴れ回る姿は、時に大自然がもたらす無慈悲な自然災害そのものだ。

「シルフから受けた傷がポーションで上手く回復しないのも、悪魔の呪いが関係しているからでしょう」

岩にしがみ付いたアデリーネが、風の音に負けないよう声を張り上げる。

彼女の両親は、悪魔の呪いのせいで亡くなった。蘇った記憶の中には、温もりを失って行く手の感触と共に、そう刻まれている。

「んじゃ、野郎が郷の仇って事で……やっちまって良いんだな？」

「はい、ダメージを受けて力を失ったシルフは精霊界へと還ります。同時に悪魔の呪いからも解き放たれるでしょう。死ぬわけではありませんから、遠慮なく。ですが……」

アデリーネが乱れた髪を整えて、ヤマトへと向き直る。

「ヤマト様、あのシルフ……このまま放置しておいても良いのですよ？　きっと、この郷のエルフたちは全滅しているでしょう。そうなれば私以外、ここを訪れる者も居ないはず。それなら危険を冒し……むぐっ！？」

「ほい、そこまで」

喋るアデリーネの口を、ヤマトが無造作に押さえて黙らせる。

「あのシルフ、お前の知り合いなんだろ？　だったらブン殴って、正気に戻してやろうぜ」

そう言って、ヤマトは顎の先で少し離れた場所にある岩の陰を指し示す。そこには木や石の破片を一箇所に集め、蔦で縛って巨大なボール状に加工している太郎丸の姿があった。

「太郎丸も言ってただろ？　安寧の享受を由とするなら、冒険者などしておらん！　とかなんとか。危ないから止めとこうって考えるような奴が、冒険者なんかやってねぇよ」
「そ、それはそうかもしれませんが……」

戸惑うアデリーネ。ヤマトや太郎丸の好意は嬉しいし、シルフを正気に戻したい気持ちは誰よりも強いつもりだ。しかし先にも述べた通り、理屈で考えれば、いま無理をしてシルフに挑む必要は無い。主力たる二人の男は怪我を負っているし、戦闘を想定していたわけでは無い為に準備も不足している。せめて一旦引き返し、傷を癒してから再度来る方が良い。そうに決まっている。

「ほら、行くぜアデリーネ。シルフの野郎がお待ちかねだ」

未だ迷いの消えない彼女にヤマトが言った。両手に革のグローブを嵌めて何度も握りなおし、調子を確認している。完全にやる気の表情だ。

太郎丸もそれは同じようで、準備が整ったと親指を立て、こちらへ合図を送っている。

「きっとシルフの野郎も、懐かしいお前を見つけて嬉しかったんだ。それで正気に戻して欲しくて出てきたんだろうぜ。だったら今しか無ぇ！　また今度だとか、次の機会だとか、あるかどうかのチャンスを待ってる場合じゃねぇ。やるんだ！　今、この時に！」

効率的では無いし、理に適ってもいない。だがヤマトの言葉は妙にアデリーネの胸に響いた。

自分はエルフだ。人よりも遥かに長い時を生きる。だからだろうか？　チャンスを待つ事が、当たり前になっていた。今よりもっと良い機会が訪れる。明日か明後日か、あるいは何百年後かもしれな

いが、準備を整えてチャンスを待てば良いと考えていた。
だがヤマトは違う。不確実な未来に希望を賭けたりしない。今この瞬間に出来る限りの努力を惜しまない。常に全力で走り続けているのだ。

「……ノエル様が苦労なさるはずですね」
「ん？　何か言ったか？」

苦笑するアデリーネ。疲れる生き方だと思う。こんなにも全力疾走されては、付いて行く方がたまらないだろう。
だがそれでも付いて行きたいと願ったのなら……。

「わかりましたヤマト様、お願いします。あのシルフを……精霊界へ還す為、お力をお貸し下さい！」
「よっしゃ、任せろ！　一発ブチかましてやろうぜ！！」

それを合図として、吹き荒ぶ風の中をヤマトは岩陰から飛び出した。飛ばされそうになりながらも地面に取り付き、手近な石を拾ってシルフへと投げ付ける。

「こっちだ、こっち！　このスケスケ野郎！　風吹かすだけの能無しか、このヘボ！！」

あからさまな挑発を行いつつ、次々に石を投げ付けるヤマト。狂えるシルフが言葉の意味を理解しているとは思えないし、石も届く事無く竜巻に巻き上げられてしまったが、それでも下劣な悪態と投石は続く。

「無視ってんじゃねぇぞコラァ！」

そんな掛け声と共に投げた細長い石。それが偶然にも風に乗り、爆風の壁を掻い潜ってシルフの元まで届いた。そして見事に喉元へ命中……したかに見えたが、まるでそこには何も無いかの如くシルフをすり抜け、反対側の爆風によって粉砕されてしまう。

「チッ！　やっぱりかよ」

予想した通りだった。シルフはヤマトたち物質界とは違う、精霊界の住人だ。アデリーネの言葉を借りるなら、より魔法的な存在といえる。そんな精霊たちに干渉する為には、物質界の物では駄目なのだ。

「アーデリネの言う通り、魔法か、魔法の掛かった武器じゃねぇと触る事も出来ないってワケか」

ノエルの操る光の魔法や、サークスの剣技『滅空』のように直接魔法力を放出する技。あるいは魔法の武器でなければシルフには傷をつける事さえ出来ない事になる。

だが希少品である魔法の武器など持ち合わせている筈も無く、ヤマトも太郎丸も魔法と絡めた剣技など習得していない。そして魔法を操る素養があると思われるアデリーネも、その術を知らなかった。

つまり今この場にいるメンバーに、シルフを倒せる者は居ないという事だ。

「でもまあ、ここまでは予想通り……おっとぉ！」

賑やかに喋るヤマトの目に一瞬だけ、ほぼ無色透明なブーメランのような物が見えた。辛うじて身をかわすと、足下の土が派手に抉れて宙に舞う。シルフの繰り出す風の刃だった。それが次々に生み出され、甲高い風切り音と共にヤマト目掛けて飛来する。

無差別に猛威を振るっていた狂えるシルフが、彼一人に狙いを定めたのだ。

「やっと本気になりやがった。俺相手に手を抜くとか、ちょっとナメ過ぎなんだよオマエは！」

ヒョイヒョイと身軽に動き、風の刃を避けるヤマト。だが強気な口先とは裏腹に、その動きは鈍い。先の戦いで負った傷と、強烈な風が彼の動きを妨げているのだ。

「ぐっ……ヤベぇ、風が強くて……！」

シルフの周りを守っていた竜巻が、全てヤマトの周辺に集まる。叩きつけるような爆風に、一瞬でも気を抜けば遥か上空まで巻き上げられてしまいそうだ。

しかも風の中に地面から巻き上げた枝や小石が混ざり込み、凄まじい勢いでヤマトの身体を殴り、突き刺す。特に守る物の無い剥き出しの腕や頭には多くの枝が突き刺さり、飛礫によって次々に青アザが刻み込まれて行く。

「畜生……！」

身を守るのに精一杯で、身動きの取れないヤマト。このまま嬲り者にされるか、あるいは風の刃で……と思われた時、太郎丸がシルフの背後に雄叫びと共に現れた。

「おオォォォッ！！」

彼は先に準備していた蔦で固めた巨大な球を、全身を使い、渾身の力でグルグルと振り回す。ミシミシと筋肉が軋み、傷口が開いて

鮮血が噴出した。だが構う事無く蔦の球に十分な速度を持たせ……。

「どっせえぇぃ！！」

勢いを付けてシルフに叩きつけた！

唸りを上げて飛来する巨大な球を、咄嗟に竜巻で防御するシルフ……本来、物理的な攻撃の影響を受けない精霊には必要の無い防御だ。しかしそれは、生物が本能的に持つ防衛反応だったのだろう。目に物が飛び込んだ時、人が咄嗟に瞼を閉じるように、シルフは竜巻で防御を行った。

爆風に煽られ、粉々に砕け散る蔦の球。だが同時に、竜巻の回転も乱れていた。風の力だけでは蔦球の大きな質量を受け止める事が出来なかったのだ。

瞬間、強く吹き荒れていた風が止まり、凪となる。

『今だ！　アデリーネ！！』

「やあぁぁぁぁぁッ！！」

男たちの叫びに合わせ、タイミングを計っていたアデリーネがシルフの元へと駆け込む。その手には、魔法の輝きを宿す棍棒――エルフの御神木、その枝をへし折って作った、即席の魔法棍棒だ。

アデリーネは走る勢いを乗せ、手にした棍棒を大きく振りかぶる。そして力一杯、全力で持って狂えるシルフの頭を……ブン殴った！

ごつん、と鈍く重い音が響く。彼女の握る無骨な棍棒は、眩い輝きを放ちながら、狙い違わずシルフの頭をカチ割った。更に二度、三度。アデリーネは大上段から棍棒を振り下ろす。薄い手の皮が裂け血が滲んだが、構う事無く渾身の力を込める。

「えいっ！　えぇいっ！！　……はぁっ、はぁっ……！」

何度、棍棒を振るっただろう？
自らの血で汚れた棍棒を手に、肩で息をするアデリーネ。彼女の前では、元々半透明だったシルフが更に透明度を増し、殆ど透明な状態となって宙に浮かんでいる。その姿はまるで風に漂う綿毛のように、ただ流されるままの力無い存在であるかのようだ。
もう、この世界に留まる力を失ったのだろうか？　そう思った矢先だ。

「っ！？　キャアァァッ！！」

鋭い突風がアデリーネを襲った。風の刃に切り裂かれ、細い髪や服の切れ端と共に、血煙が空に広がる。
狂えるシルフが最後の力を振り絞り、巨大な竜巻を起こしていた。これまでで最も大きな竜巻だ。周囲の物を巻き上げ、木々を巻き込み、蔦球の残骸も全て上空へと放り上げて行く。
烈風を伴い、あらゆる物を粉々にする強烈な竜巻。だがこれは、シルフにとっても我が身を削る諸刃の剣だった。半透明の身体が端から削れ、風と共に消え失せて行く。
このまま、この竜巻を耐え忍べばシルフは力尽きる。そうなれば自分たちの勝利だ。
しかし！

「もう、待たせたりしない！」

アデリーネが、棍棒を手に立ち上がった。体中に受けた傷からは血が滲んでいたが、彼女の固い意志の前に障害とはなり得ない。
吹き付ける風の中を、一歩、また一歩と地面を這いずるようにしてシルフに近付く。彼が自ら消えてしまう前に……これまで自分を待っていた彼への、ケジメを付ける為に。

「きゃ……！」

だが軽量のアデリーネでは、シルフへ近付くにも限界があった。あまりの風に身体が浮き上がり、前に進む事はおろか踏ん張る事さえ出来ない。

もう時間が無いというのに……どれほど強く願ったとしても、駄目な物は駄目なのだろうか？

「あきらめんな！　こっからが本番だろ！！」

間近でヤマトの声がした。同時に、風が緩む。

風上にヤマトと太郎丸が居た。互いに肩を組み、地面に爪を立てて踏ん張って、身体を風除けにしてアデリーネの願いを力強く支える。

「アデリーネ殿ッ！！」

「お前の意地、野郎に見せてやれ！」

狂えるシルフへと続く、道が出来た。

「はいっ！！」

アデリーネが駆け出す。ヤマトと太郎丸が作った風のトンネルを突っ切り、消えかけているシルフの元へ。そして……！

「てやあぁぁぁぁッ！！」

棍棒を眼前に構えたまま、走る速度を殺す事無く身体全体でぶつかる。そうしてシルフを背後に聳え立つエルフの御神木へと、まさに全身全霊を込めて叩きつけた！

太い幹に雷のような輝きが走り、無数の葉が舞い落ちる。手元の棍棒は砕け、破片が鮮やかな輝きを撒き散らしながら飛び散った。そしてシルフも……。

「……」

雪が溶けるかの如く、身体の端から順に解れ、光の粒となって消えて行く。この世界で精霊としての形を維持する力を失い、元居た精霊界へと還るのだ。

言葉は無く、音も、何も無い。ただ一陣の優しい風だけが、アデリーネの頬を撫でて空へ、高く高く流れて行く。

『こんな方法しか取れなくてごめんなさい。長い間、ほったらかしてごめんなさい。逃げようとして……ごめんなさい。あっちで、ゆっくり休んでて』

古いエルフの言葉を風に乗せ、アデリーネは目元を拭った。

そして傷付いた手のひらを、棍棒と同じ輝きを放つエルフの神木に添えて、祈りを捧げるのだった。

第二十話：深海に眠る伝説（一）

ぽつり、ぽつりと水滴の滴り落ちる音と、生臭い磯のニオイ。暗闇に閉ざされた洞窟の中は外に比べ、格段に気温が低く肌寒い。

奥の方から流れ来たヒンヤリとした空気が服に入り込むのを感じ、ノエルはローブなんて物を着る選択をした半日前の自分を酷く責める。

「大丈夫かい、ノエルさん？　いま少し、震えてたように見えたけど」

「いいえ、お構いなく。天使は寒冷耐性もあるので平気です」

軽く振り返り、後ろに居るサークスへと笑顔で応えるノエル。光を操って明りとする為、今は彼女が先頭なのだ。

天使に寒冷耐性があるのは本当だが、平気というのは嘘だ。冷気で傷を負うような事は無いが、寒い物は寒いし、鳥肌だって立つ。そしてノエル個人としては、温かい所の方が好きだ。

「そうかい？　流石は天使だね。僕なんて寒がりだから、鎧より防寒装備の方が重いくらいだよ」

そう言ってサークスは、白銀の鎧の上に羽織る二重のサーコートを指して見せた。鎧の下に着ている服も、普段より分厚い物にしているようだ。

正直、羨ましい。

そのサーコート、一枚貸してくれないかな……と思ったノエルだったが、言い出せない。何故ならば、彼女は天使だからだ。天使は厚着をして着膨れなんてしないし、寒さに歯を鳴らしたりしない。いつも純白のローブを身に纏い、優しい笑顔で微笑む……そういう

物なのだ。

「それにしても、広い洞窟ですね……」

こうなれば話を変えて、気を紛らわせるしかない。

ノエルは身体から放つ光を増やし、明りの届く範囲を大きく広げた。

どこまでも続く湿った岩肌。そこに張りつくフジツボが、普段この場所が海の中にある事を示している。

ノエルとサークスが訪れたこの洞窟。これこそが五年に一度、地元民の間で『水無し』と呼ばれる大潮の日にだけ姿を現す海底洞窟だ。

「このどこかに、伝説に名を残す武具の手掛かりがある……という話なんだけどね」

サークスが地図を広げ、明りにかざす。海の底にあった洞窟入口を潜って、既に半日。分かれ道や目印を書き記す地図の記号も、随分と増えていた。

潮が引いて洞窟探索の出来る時間は、丁度丸一日。帰りの方が早く移動できると考えても、そろそろ引き返し始めないといけない時間帯だ。

「ノエルさん、もう少しだけ進んで……何も無ければ、引き返そう」

「……はい」

残念そうなサークスの声。無理も無い事だろう。この海底洞窟に、彼はたとえ一人でも挑戦したいと言っていたのだ。何の成果も無く引き返すなど、相当に後ろ髪引かれる物があるに違いない。

この洞窟は以前より、伝説の武具に纏わる噂の絶えない場所だっ

た。その為、五年ごとにある大潮の日には多くの冒険者が訪れ、彼らによって入り口近辺は隅々まで探索し尽くされている。
今回、二人が訪れているのは入り口から更に一歩奥へと踏み込んだ深層部。未探索で、地図もろくに書かれていない未知の領域だ。危険だが、それ故に何かがあるのでは？　と期待してしまう。

「すまない、ノエルさん。せっかく来てもらったのに、無駄に終わるかもしれない」

ノエルが放つ光を頼りに、更に奥へ。天井が低くなり、道が細くなって来た。
これまでの経験から、こういった道は行き止まりになっている事が多い。サークスの言葉は、それを感じての物だったのだろう。

「いいえ、無駄だなんて……私は見聞が狭いので、良い経験になります」
「そう言ってくれると、ありがたいな」

道は細くなりつつもまだまだ続き、気温も更に下がる。
付近の岩にはフジツボも、海草の類さえも付いていない。いま二人が歩いている場所は、普段ならば海の底にあって、本当に深く暗く、太陽の明りも温もりさえも届かない場所なのだろう。

「ノエルさんは、いつもヤマト君と一緒に活動しているの？」
「ええ……実を言うと、ヤマト以外と組んでコンビで冒険に出たのは、これが初めてです」

ノエルの答えに、サークスが意外そうな声を上げる。天使ならば引く手数多だろうに、これまでに一度もパートナーを違えた経験が無いだなんて。そう、彼は言った。

サークスの驚きは勿論だとノエルも思う。実際、とても多くの人たちからパーティーに誘われ、引抜きにあった。半ば脅迫に近い事をされた事さえある。

だがその全てをノエルは断った。ヤマトと一緒でなければ、彼女にとって冒険など何の意味も無いからだ。

「それが、どうして僕と？　どういった心境の変化があったのか、聞かせてもらっても良いかな」

「ああ、それは……」

ヤマトに行けと言われそうな気がしたから。

「サークスさん、この冒険に随分思い入れがあるようでしたから。私で力になれるのなら、と」

「なるほどね……そうか」

返事をしたサークスの声には、どこか残念そうな響きが混じっていた。

「まあ確かに、この冒険……というか伝説の武具という存在について、かなり強い執着を自分でも感じている」

「目標や夢という事ですか？」

「うん。正確には僕の夢では無いけれどね」

そうして会話を交わす内、終着点が訪れる。

「行き止まり……ですね」

先細りの通路は、人が一人立てる程度の広さだけを残して途切れていた。あるのは、足元の水溜りだけ。

「残念ですけどサークスさん、引き返し……」
「いや、ちょっと待ってくれ」

ノエルを避けて前に出て、サークスが行き止まりにしゃがみ込む。そして剣を抜くと、足元の水溜りへ差込んだ。
すぐ底にぶつかるとか思われた剣だったが、その刃はスルスルと水に飲み込まれ、柄の部分を水上に残してもまだ底には届かない程だ。

「これは……深いな。ノエルさん、明りを！」

眩い明りによって照らし出される水溜り。水の透明度は高く、かなり深くまで視線が通るようになる。だがノエルの光をもってしても、その底は未だ暗闇に閉ざされていた。そして微かに、横道が更に奥へと続いているように見える。

「まだ、この向こうに道が続いてるんだ！」

ここは行き止まりでは無かった。多くの冒険者は水溜りの中に続く通路に気付かず、あるいはここで時間切れとなり、引き換えしたのでは？　もしくは水の中を進めず諦めたのでは無いか？
サークスが熱の篭った声を上げる。

「行こう、ノエルさん！　隠されて何かに、僕らは近付いている！」
「でも……」

既に半日が過ぎている。今から大急ぎで引き返したとしても、潮が満ちるまでに入り口まで戻れるかどうか微妙な所だ。それに、この水中の道がどこまで続いているかわからない。そもそも何かがあ

るとは限らない。だからここは安全策を……とは思う。
だがサークスは行く気だ。止めたとしても振り切って行くだろう。どうしても行きたいと、強い意志を湛えた彼の目が雄弁に語っている。

「……わかりました、行きましょう。でもサークスさんはここで待っていて下さい。私が行ってきます」
「え!?　いや、しかし……」

ノエルの意見に驚きの声を上げるサークス。そんな彼へ、天使の少女は落ち着いた声で、諭すように言葉を紡ぐ。

「私ならしばらくの間呼吸をしなくても平気ですから、水路が長くても大丈夫。それに明りの問題もありません。水中でも光子を噴射して、普通に泳ぐよりも速く移動できます。ですから……」

最後の言葉を飲み込むノエル。言わずとも彼女が何を言いたいのか、サークスにもわかった。
自分一人の方が良い。貴方がついて来ては、足手纏いだ……遠まわしに、ノエルはそう言っている。
肩を落すサークス。確かに、自分がついて行った所で、足を引っ張るだけであろう事は火を見るより明らかだ。本当なら自ら水路を進み、隠された伝説を垣間見たい……だがその思いをぐっと飲み込んで、サークスは言った。

「ノエルさん、キミに任せるよ」
「はい、任せて下さい。朗報をお伝え出来るように、頑張りますね」

こうしてサークスの夢は、ノエルの双肩に託されたのだった。

第二十一話：深海に眠る伝説（二）

天使御用達の白いローブを脱いで下着姿となったノエルに、太陽の恵み届かぬ海底洞窟の寒さは容赦が無い。ふかふかの翼で身体を覆っても、岩肌と直に触れるつま先は冷え切って、気を抜けば歯がカチカチと演奏を開始してしまいそうだ。それに加え、今から水に入らなくてはならない。軽く触れた水面は氷のように冷たく、骨まで凍ってしまいそうだ。自分で言い出した事とはいえ、どうしてこんな事になってしまったのか……悔やんでも悔やみきれない。

「ノエルさん、本当に大丈夫かい？　なんだか寒そうにしてるような……」

「い、いえ。その、ちょっと緊張で……武者震いですかね？」

少し離れた通路で、背中を向けたサークスが気遣わしげに言った。彼の目にはしっかりと目隠しが施され、天使の柔肌を見る事は叶わない。彼は、その手に握られたロープでノエルが寒そうにしている気配を感じたのだ。ロープはノエルの足首にしっかりと結び付けられており、緊急時には無理矢理にでも引っ張り上げる事になっている。

「それでは、行って来ます！」

「うん、気をつけて」

いよいよだ。覚悟を決めて足先を水に漬けると……。

「〜〜〜っ！！」

凍えるような冷たさが、震えと共に頭の先にまでやってきた。全

身に鳥肌が立ち、翼は羽毛が逆立って一回り大きくなる。
色々な意味でサークスに目隠しをしておいて良かった。こんなみっともない姿、とても見せられない――。そう思いながら、今度こそ本当に覚悟を決めて、ノエルは水中に身を投げ出した。

「……えいっ！」

どぷん、と空気と水が混じる音の後、突然訪れる静寂。そして下着や髪、翼に入り込んでいた空気が抜けて行くカプカプともコプコプともつかぬ音が聞こえ、今度こそ本当に、長い静寂が訪れる。
水は冷たかったが、だからといって支障をきたすような身体でも無い。ぐっと我慢して意識を集中、光を操って視界を確保した後、身体を反転させて水路を潜り始める。
入り口こそ狭い水路かったが、水中にはそれなりの広さがあった。両手、両脚を伸ばしても壁までにかなりの余裕がある円柱の内側……その苔さえ生えないゴツゴツとした黒い岩壁が、ノエルの光を反射して不気味に輝く。一応周囲に警戒しながら慎重に縦穴の底まで潜りきると、そこには水上からも微かに見えていた横穴が存在していた。

（かなりむこうまで続いてる。ロープ、足りるかな？）

ロープを手繰り寄せて長さに余裕を持たせると、ノエルは横穴へと身体を滑り込ませる。これも縦穴と同じく、入り口こそ狭いが進入してしまえばそれなりの広さがあった。進む先の末端までは光が届かず、闇に閉ざされている……随分と長い。
それにしても奇妙な光景だった。蒼い海の中であるにも関わらず、そこには何の生命も見当たらない。魚はおろか、海草の類も皆無だ。何度か海に潜った経験のあるノエルだったが、こんな場所は初めてだった。

（ヤマトに見せたら、どう言っただろ？）

不意に、そんな考えが頭を過ぎる。

もう彼とは半月ほども顔を合わせていない。幼い頃に、とある木の下で出会って以降、こんな事は初めての経験だった。それ故に、顔や声を時々は思い出さないと忘れてしまうのでは無いかと不安になってしまう。

最後にヤマトを見たのは、彼がエルフの隠里へと旅立つ日の朝だ。忘れ物は無いか、薄めたポーションは水筒に入っているかと問い質す自分に、ヤマトは言った。

「俺の事はいいんだよ。お前こそ、早く戻って来い」

あの鈍い彼の事だ。何かを意図して言った言葉では無かっただろう。だが戻って来いとの言葉が、無性に嬉しかった。

だが同時に、辛くもあった。

ヤマトの肩越しに、こちらを見つめるアデリーネの姿を見止めたからだ。彼女は自分へと一礼し、申し訳無さそうな笑顔を見せた。不安にさせてごめんなさいと、彼女の目は言っていた。

（違う……謝らないといけないのは、私の方だ）

アデリーネは気付いていた。ノエルが見せた、微かな不信感に。万人に無限の愛を与えなければならない天使が見せた、僅かな偏見に。

かつての主人であるノーウェイにそうしていたように、アデリーネがその美貌と身体を武器にヤマトに近付くのでは？　一瞬ではあるが、ノエルはそう考えてしまった。

（天使、失格だよね……）

生きる為に頑張っていたアデリーネ。その生き様を蔑むような事があってはならない……絶対に。だが他ならぬヤマトが対象だった為に、一瞬の嫉妬心が呼び起こした後ろ暗い気持ち。それをアデリーネは敏感に感じ取っていたのだ。

天使といえば、世間的には悪魔以外の全ての生命を慈しむ聖なる存在として知られている。そんな天使に疑いの目を向けられる事が、どれほど彼女の心を傷つけたろう？　であるにも関わらず、アデリーネには気を使われ、太郎丸にまで気を回されて、自分の未熟さを痛感したノエル。

（ヤマトもきっと、私が手を出すたびに、こんな気持ちになってたんだろうな……）

考えるうち、真横に向っていた水路は次第に斜め上へ。そして、程無くして垂直に昇り始める。

行く先に、揺らめく水面が見えた。自分の放つ光とは別の輝きも見える。ゴールはもうすぐだ。

「～……ぷはっ！」

水面を突き破って飛び出した先。そこは岩壁によって形成された、ドーム状の空間だった。球を半分に切ったような構造で、水の無い部分だけでちょっとした部屋くらいの広さがある。空気が溜まっており、何故か部屋全体が薄っすらと輝いていた。

「これ……魔法の明りだ」

羽ばたいて水から上がり、光を操ろうとして気付く。熱を伴わず

薄く青みがかった光は、魔法の力によって生み出された、照明の為にだけ存在する光の特徴だった。
その青みがかった光の発生源。それが部屋の中央にある、小さな石だ。
大きさは5センチ程。手の中に握りこめる程度の、いびつな形の石。部屋の中央で何の支えも無く空中に浮かび、虹のように表面の色彩を変えながら光の魔力を放っている。

「何だろう？　魔法の品物なのは間違いなさそうだけど……？」

小石に近寄るノエル。その時、ふと見た自らの翼に、何か文字が浮かび上がっている事に気が付いた。驚いて良く観察すれば、翼だけでは無い。肌や髪、身に付ける下着や、滴る水滴にさえ同じような文字が！

「この石の光……この光が文字になってて……距離や色に応じて、見える文字が変わってる！」

驚きの声を上げ、翼に映る文字に目を凝らすノエル。そこには現在では使われていない古代語で、何かの隠し場所についての記述がある。ノエルの知識では詳細まではわからなかったが、サークスの話と総合して考えれば……。

「これが伝説の武具の在り処……とか？」

これはもしや、大発見なのでは？　十年近く冒険者をしていて、初めての経験だった。ノエルの頭に明るい未来が想像される。
この石を持って帰り、謎の言語を解読して、みんなで宝探し！
サークスさんは念願の伝説的武具を手に入れて夢を叶え、太郎丸さんも同じように装備を充実させる。同時に金銀財宝も手に入って、

アデリーネさんは平穏で優雅な生活を。そしてヤマトも何か、生存率が上がるような魔法の御守りを手に入れて、毎日気楽に冒険しながら充実した生活をして……それで私も……！

凄く良い。とても素敵な生活だ。きっとみんな喜ぶ！

ニヤけた表情のまま、石に手を伸ばすノエル……と、これまで虹色だった表面が、突然深い青色に変化した。その途端！

「キャッ……！！」

あっ！　と思った時、ノエルは硬い岩壁に叩きつけられていた。魔法の小石から放たれた凄まじい衝撃波……というよりは絶え間なく押し寄せる圧力によって、彼女は弾き飛ばされたのだ。

「ぐっ……うぐぐ……！」

信じられない程の圧力。ミノタウロスの怪力を押し返した天使の力を持ってしても、抗う事が難しい。叩きつけられた岩壁が徐々に砕け、身体がめり込んで行く。空気や光さえも部屋の中央から押しのけられて壁際で圧縮され、濃い青色の輝きを放つ。上昇した空気圧によって呼吸は出来ず、光と共に視界さえも歪む。とてもではないが、普通の生物が耐えられる圧力では無い。だが……。

「てやあぁぁぁぁッ！」

天使としての能力を全開にしたノエルが、押し寄せる圧力を押し返した！

純白の翼と天使の光輪から放たれる白い光。それを身体の前面で盾のように展開し、青色の光として認識できる圧力波を防ぎ、相殺して行く。

「んぐぐぐっ……！　このくらいっ……！」

大瀑布の如く押し寄せる光の奔流を押し退けながら、ノエルは部屋の中央に輝く小石に手を伸ばす。

これがあれば、きっとみんな幸せになれる。私だって満ち足りた生活を……ヤマトと一緒に……！

「てっ……天使、なめるなあぁぁぁっ！！」

純白の光が爆発するように広がり、全てが眩い輝きを放ち、影が消え失せた。そして何もかもが白一色で塗りつぶされる。岩壁も、水面も、魔法の石も――ノエルの意識さえも。

――そして、どれほどの時間が経ったのだろう？

彼女が意識を取り戻した時。目の前には緑の木々と、抜けるような青空。そして見知った男性の顔があった。

「……ルさん！　ノエルさん!?　良かった、気が付いた！　本当に良かった!!」

「あれ……サークスさん？　ここは？　私、何を……？」

安堵の表情を浮かべるサークスに、ノエルは尋ねた。まるで寝起きであるかのように頭がボンヤリとして、考えが纏まらない。

どうやら毛布の上に寝かされていたようだ。身体にはサーコートが掛けられており、近くから打ち寄せる波の音が聞こえて来る。

「ここは、海底洞窟の外。入り口の近くにある砂浜だよ。ええと、行き止まりの水路へノエルさんが潜った――そこまでは覚えてる？」

「ええ、確か足にロープを結んで……」

手渡された水を飲む内、ノエルもようやく頭がはっきりとしてきた。

「キミが潜ってしばらく後、物凄い地震があったんだ。その直後、洞窟の中に水が入ってきて……」

順を追って、丁寧に説明するサークス。

どうやら地震が起ったのは、ノエルが石の圧力に弾き飛ばされたのとほぼ同じタイミングであるようだった。危険を感じたサークスは慌ててノエルに繋がったロープを手繰り寄せ……。

「そうしたら驚いたよ。ノエルさん、ぐったりして意識が無いんだもの！　その場ではロクな応急処置も出来なくて、悪いとは思ったけど肩に担いで脱兎の如く……ってわけさ」

「そ、そうだったんですか、助かりました……そっか、私あの時に気絶して……」

良くわからないが、石に拮抗しようと力を振り絞った結果、意識が飛んでしまったようだ。

サークスには感謝しなくてはならない。もし自分一人であったなら、死ぬ事は無いにせよ、誰も訪れなぬ冷たく寒い水牢へ、半永久的に閉じ込められる羽目になっていたかもしれないのだから。

「本当にありがとうございます、サークスさん。助けて頂いたのは、これで二度目ですね」

「いや、お礼を言いたいのはこっちの方さ！　一つは……これ！」

サークスが取り出した小さな革袋。その中に、見覚えのある小石が入っていた。

「ノエルさんが、大事そうに握ってたんだ。この輝き……魔法の品だ。水路の奥で手に入れたんだよね？　きっと、何か伝説の武具に纏わる物に違いない」

満面の笑顔で、サークスが言った。まるで子供のような、無邪気な表情だ。

魔法の小石は初め見たような淡い蒼の輝きを湛え、静かに革袋の中で転がっている。ノエルを壁に叩きつけた、荒れ狂う光の奔流が嘘であるかのようだ。

「それと、もう一つ……お礼というか、役得というか……これも二度目かな？」

「……？」

首を傾げるノエルへ、顔を背けながら、綺麗に折り畳まれた衣服を手渡すサークス。

「ゴメン。急いでたから、着せる暇が無かった。それにまさか、丸裸になってるとは思わなくて……」

「……えっ？」

小石のあった部屋で受けた岩さえも粉砕し得る強烈な衝撃と圧力に、薄く柔らかな下着が耐えられるはずも無い。

ノエルの素肌へと掛けられたサーコートの下は、まさしく一糸纏わぬ姿。サークスと出会った日、スライムから助け出された時と同じ、完全なる素っ裸だ。

「天使って、ピンチになると服を脱ぐ習性でもあるのかい？」

「きっ……！！」

良く晴れた砂浜に。

「キャアアアアアアアッ！！」

ノエルの甲高い悲鳴と、ビンタの快音が鳴り響いた。

第二十二話：色々あっても山河あり

どこまでも続く新緑の草原。爽やかな風が駆け抜けると、ざわめきが波となって草木に見事な波形を描き出す。

そんな野原の小さな丘の上に建つ、小ぢんまりとした木造の一軒家。軒先に干された少量の洗濯物。玄関横に置かれた小さな農具。裏手には簡素な柵で仕切られた農場があり、太った牛が一頭、のんきに草を食んでいる。

「……ん、誰か来たのかな？」

家の中。

夕飯の準備に勤しんでいた幼い少女は、遠くから聞こえて来る足音を耳聡く聞き取って、不意の来客を予感した。

近隣の村からも遠く離れ、見る物も何もないこんな場所までわざわざ来る者は、そう多くない。今は町に出て働いている兄か、物騒な物取りか。このどちらかだ。

草を踏みしめて近付く足音はテンポが良く、しっかりとした足取りの若者を想像させる……それが複数だ。しかも足音の一つは、やけに重そうな音をさせている。きっと大柄な体型なのだろう。

小さな頭をフル回転させて考える少女。この家にやって来るのは、兄か、物取りかのどちらかだ。そして兄は小柄であり、いま聞こえている足音は大柄な人の物。という事は……間違い無い、これは物取りだっ！！

少女は肩口まで伸びた茶色の髪を素早く頭上にまとめると、火に掛かっていたフライパンを手に、戸の影に隠れる。

どんどん近付いてくる足音。その音はやがて玄関前で止まり、ドアがノックされ……。

「御免。こちらに、スダ……」
「せぇい！！」
「ぶぐォ……ッ！？」

先手必勝、不意打ち上等！　少女は、戸口から現れた人影に、良く焼けたフライパンを目一杯叩き込んだ。
鼻先に会心の一撃を受け、よろめき、跪く人影。良く見れば全身を包む真っ黒な体毛と、がっちりとした身体が目に入る。前に兄から聞いた、獣人の一種だろうと思った。だとすれば……！

「た、食べられて、たまるもんかーーーっ！」
「い、痛っ！　ちょ……暫し待たぐはっ、ぎゃんっ！？　きゃいんっ！」

物取りだけならまだしも、命まで取られてたまるものか！
少女は必死でフライパンを振り下ろし、黒毛の獣人（犬っぽい顔をしている）を叩いて叩いて、叩きまくった。
その回数が、果たして二桁に届いた頃だろうか？

「あわわわ……ちょっと待って下さい！　私たち、怪しい者ではありません！　私たちは……！」
「えいっ！　ていっ！　このっ！！　ド変態！　犬畜生！！　糞外道っ！！」
「聞いて下さいっ！　私たちは、ヤマト様のっ……！」

長身でスラリとした美しい女性が、獣人と少女の間に割って入った。知的な雰囲気を漂わせる、少女の憧れる女性像そのものの女性である。唯一気になる点といえば、尖った耳……そうか、この人はエルフだ！　だが、こんなに綺麗な女の人がウチに何の用があると言うのだろう？　死ね、死ねっ！　と連呼していた為に良く聞き取

れなかったが、一瞬聞き覚えのある名前が出たような気もした。

「ぜぇっ、ぜぇっ……な、何のご用ですか？　うちは貧乏で、盗って行くような物は何もありませんから！」

いい加減疲れた事もあり、とりあえず手を止めて、フライパンを構えたままで問う少女。

そんな警戒心丸出しの少女を刺激しないように、エルフの女性はゆっくりと、丁寧に話し掛ける。

「貴女はスダチさん……ですね？　私たちはヤマト様と一緒に旅をしている者です」

「……！　お兄ちゃんの、お友達……？」

「そ、そうです！　ああ、良かった……」

やっとわかって貰えた！　多くの尊い血が流れたが、やはり話せばわかるのだ。

エルフの女性ことアデリーネはホッと安堵の息を吐き、ようやく警戒心の和らいだ少女スダチに事の次第を話せる喜びに包まれていた。

「実は貴女のお兄様なのですが、この近くで動けなくなってしまいまして……」

事情を話すアデリーネ。

そして、数刻程の後――。

「ご……ごめんなさいっ！」

草原の一軒家にて、深々と頭を下げるスダチの姿があった。

彼女の前には、フライパンで殴られまくった黒毛の獣人こと、人狼の太郎丸。その隣ではアデリーネが苦笑し、更にその隣では、ヤマトがベッドに横たわりながら可笑しそうに笑い続けている。

「顔を上げられよ、スダチ殿。この程度、某にとっては何でもない。お気に召されるな」

スダチの前に膝を付き、低い声で語りかける太郎丸。本人としてはなるべく穏やかに喋ったつもりなのだろうが、どこか威圧的な響きがあるのは如何ともし難い。

恐る恐る顔を上げたスダチは潤んだ目で太郎丸を見上げ、口元をワナワナさせながら呟く。

「だ、だって鼻が……」

「む……いや、皆まで言われるな。委細構わず、武士に二言無し。大丈夫、何でも御座らん」

豪気なる太郎丸。だが彼の鼻の先には、少しだけ赤い物が滲んだ白い布が当てられている……フライパンの一撃を受けて、鼻血が出たのだ。

「おいスダチ、そんなに気にする事ねぇよ。さっきから言ってるけど、太郎丸は丈夫なんだって。それに本人が大丈夫って言ってるんなら、大丈夫だろ」

「でも……」

ようやく笑いが治まったのか、ベッドの上から声を掛けるヤマト。だが元気そうな声とは裏腹に、顔色はあまり良くない。

半身を起こし、よろめきそうになるのをアデリーネに支えられながら、彼は精一杯の元気でもって妹のスダチに軽く頼みを伝える。

「それよりさ、俺たちみんなハラ減ってるんだ。適当に何か作ってくれねぇか？」
「え……？」
「何でもいいからさ。な、頼むよスダチ」
「う、うん……わかった。ちょっと待ってて！」

跳ねるようにして起き上がり、軽く歪んだフライパンを手に台所へと駆けて行くスダチ。その後姿を見送ると、ヤマトは深く息を吐いて、再度ベッドへと横になった。

「……大切な妹さんなのですね」

ベッドの端に座り、気遣わしげに、優しい微笑を湛えるアデリーネ。

「そんなんじゃねぇけど、あんま心配させんのも悪ぃかと思ってよ……」

ぶっきらぼうに言って、視線を逸らすヤマト。その肩には幾重にも包帯が巻かれ、今も血が滲み出している。

彼はシルフと戦った際、背中に深い傷を負った。応急処置だけを行い帰路に付いたものの、深い森の中で予後が悪化。手持ちのポーションは既に使い切っており、立ち往生してしまったのだ。

太郎丸やアデリーネも傷が完全には回復しておらず、動けないヤマトを連れての長距離移動は難しい。仕方なく、最も近くの知り合い……つまりはヤマトの実家であるこの場所へ、妹のスダチを頼りやってきたというわけだ。

「仕送りはしてっけど、ずっと留守にしてんだ。たまに帰ってきた

兄貴がズタボロじゃ、安心してらんねぇだろ？」
「うむ、全くだな。だが、それ故にスダチ殿は逞しく成長されているようだ」
「ははっ。悪かったな、太郎丸。ウチのお転婆が無茶しちまって」
鼻の頭をさすりながら、太郎丸がニンマリと口の端を歪める。殴られた事を気にしてはいないようだが、相当痛かったようだ。
「まあ、流石にフライパンの角でしたからね……」
「うむ」
情け容赦の無い一撃だった。と、遥か後まで太郎丸は語り継いだと言う。
そうこうしていると、どこからか良いニオイが漂って来た。
「はい、お待たせ。出来たよお兄ちゃん」
スダチがボロ板に載せて持ってきたのは、柔らかく煮た豆とニンジンに少量の肉を加え、甘い味付けで整えた定番の田舎料理だ。
「こんなので良かったら、お二人も……」
「あら、有り難う御座いますスダチさん」
「かたじけない」
ヤマトのベッドを囲み、暫し食事に興じる四人。
スダチの手料理は簡素ではあったが中々の味わいで、保存食に飽きた冒険者の舌を楽しませるには十分すぎる物だ。
「へぇ、お前料理上手くなったんじゃね？」
「本当、とても美味しいです。スダチさん、良いお嫁さんになれそ

うですね」
「うむ……相違ない」
口々に料理を褒める三人にスダチは赤面し、モジモジと身体を揺り動かす。そして口の先を尖らせ、多少の不満を込めて言った。
「お兄ちゃん、いつも急に帰って来るから……先にわかってたら、何か用意するのに」
「無茶言うなよ。ノエルだったら定期的に来るんだから、良いじゃねぇか」
その台詞に、ますます不満の表情を深めるスダチ。
この男はまた、何もわかっていない――そんな思いを胸に抱きながら、苦笑を噛み殺す太郎丸とアデリーネ。どれだけ自分に対して無関心なのかと呆れ返る。
「そういえば、お兄ちゃん。今日はノエルさん一緒じゃないんだ？」
「ん……まあな。アイツは別件で出張中だ」
「ふぅん？　珍しいね、いつも一緒なのに。何してるか気にならない？」
そう無邪気に問われ、一瞬言葉に詰まるヤマト。
気になるかと言われたら、そりゃあ気になる。だが、自分が気にしてどうこうなる事では無い。何故ならノエルは、自分には不釣合いな……生きとし生けるもの全ての財産とも呼ぶべき、希少な天使なのだから。引き止められるならそうしたいし、これまではそうして来たのだが……。
「いや、まぁ気になるって言うか……こっちにも色々と事情が……」
「ノエルさんはきっと寂しがってると思うよ？　帰ってきたら、優

しくしてあげてね」
「……！」

言葉を失い、口をパクパクとさせるヤマト。
お前に言われなくても！　と言い返そうか、そんな事ねぇよ！と怒鳴ろうか。
好き勝手言いやがって、こっちも何かと考える所があるんだよ！……と思ったヤマトだったが、口には出せない。下手な事を言って素直に突っ込まれると、それこそ困ってしまう。

「ぷっ。どうやらスダチ殿の方が、ずっと大人であるようだな」

太郎丸が可笑しそうに、軽く噴出す。

「そのようですね……ヤマト様、優しくしてあげて下さいね？」

口元を押さえ、クスクスと肩を揺らしてアデリーネも笑った。

「う……うるせぇよお前ら！　メシ食ったら、さっさと寝やがれ！！」

ヤマトの怒鳴り声と他三人の楽しげな笑い声は、草原の風に乗って夜遅くまで響いていた。

第二十三話：英雄の凱旋（一）

大小、様々な建物が入り乱れた町並み。大勢の人々が行き交い、色々な店が軒を連ねる雑多な大通り。

雑踏と喧騒に塗れながら、ヤマトは久々に訪れた街の雰囲気を楽しんでいた。

結局、実家に逗留し続けて数週間。傷を癒しながら太郎丸に剣を学び、アデリーネから知識を得た。

冒険者組合を尋ねてエルフの隠里に関する報告をしたり、狂ったシルフについての情報提供も行った。その際、ヤマトにとって嬉しい事があったのだが……それはまた、後程。

ともあれ、淡々と続く晴耕雨読の日々。危険や死が隣り合わせの冒険と違い、退屈ではあるが穏やかな日常に生きる悦びのような物を感じるヤマトではあったが、ただ一つの焦燥感が彼を冒険者としての日常へと引き戻した。

「流石にノエルの奴も戻ってるとは思うけど……」

そう呟きながらヤマトが訪れたのは、冒険者の雑貨を扱う道具屋だ。松明やランタン、毛布や食器といった日用品に近い物から、ポーションやマッピング用方眼紙といった冒険者御用達の品まで、雑多な物を扱っている。

「ポーションを1ダース。あとランタン用オイルも」

カウンターの中年男性にテキパキと注文を伝え、使い果たしていた道具類を補充する。ノエルと一緒に行動していると忘れがちだが、回復薬や明りに纏わる物など、旅の中での消耗品は意外に多い。今回などは特にそれが顕著で、普段の冒険で自分がどれほどノエルに

頼っていたのかを、何度も痛感させられていた。

「……ちょっと、礼でもしとくかな」

そう思って見渡した道具屋の片隅に、目を引く物があった。

布張りのケースに収まった、小さな髪留め。淡い色合いの花びらがさり気無く散りばめられた、シンプルではあるが趣味の良い代物だ。

「なあ、オッサン。これ……いくらだ？」

何気なく出た自分の言葉に、ヤマトは多少の驚きを感じていた。

それと同時に、しばらく前に聞いた妹の言葉が脳裏を過ぎる。

『ノエルさんはきっと寂しがってると思うよ？　帰ってきたら、優しくしてあげてね』

柄でもないとは思うが、無視できない程度には胸に残っていたようだ。まさか自分よりも遥かに小さな小娘の台詞に影響されてしまうとは。

「……こんなモンで、アイツは喜ぶかねぇ？」

道具屋を去り際、ポーションとは別の、軽く包装された小さな包みを懐に仕舞い込み、ヤマトは独り呟いたのだった。

そして――。

「な、なんだこりゃ？　何の騒ぎだ！？」

普段から冒険の拠点として定宿にしている「ほろ酔い亭」に足を

運んだヤマトは、目を丸くして叫ぶ。
一階の食堂に押し寄せる大勢の人、人、人……それらが生み出す熱気と喧騒。食堂の許容量はとっくに超えており、外にまで溢れ出して混乱を増大させている。

「あ、ヤマト様。こちらです！」

人込みの中に見知った顔があった。アデリーネと太郎丸だ。実家から街までは一緒に行動していたが道具屋で別れ、二人は一足先にノエルやサークスの所へ向っていたのだ。

「どうなってんだコレ？　凄い人だな……お食事無料キャンペーンでもやってんのか？」
「いいえ。付近の方に話を聞いた所、どうやらサークス様とノエル様が凄い発見をなさったとか……」

凄い発見？　確か二人は、伝説の武具とかいう胡散臭い代物を探しに出ていた筈だ。それが見つかったという事だろうか？

「ヤマトよ、某が肩を貸そう」

太郎丸に言われ、ヤマトは彼の肩に飛び乗った。そうする事で長身の太郎丸よりも更に一段高くから辺りを見渡せるようになり、大きく視界が開ける。
幾つもの人垣の先……食堂の、いつも自分たちが集まっていたテーブルに、彼らは居た。
ノエルと、サークス。それと見覚えの無い獣人が二人、同じテーブルに付いている。
彼らは周りの者からしきりに声を掛けられ、その度に誇らしげな笑顔で何事かを返す。そしてサークスの前には見覚えの無い中型盾

が、恭しく真っ赤な布の上に置かれて人々の注目を集めていた。

「どうやら、あの盾が噂の中心であるようですね」

太郎丸にしがみ付き、同じように高い位置からの視線を手に入れたアデリーネが囁く。

「私たちがここを出る際、サークス様は『伝説の武具の手掛かりを探す』と仰ってましたよね？」

「ぬ、むぅっ。あ、アデリーネ殿……その、もう少し……」

柔らかな胸を側頭部に押し付けられて困った様子の太郎丸だったが、そんな事はお構い無しでアデリーネは続ける。

「きっと首尾良く手掛かりを手に入れる事が出来たのでしょう。そして……」

「俺たちが休んでる間に、手掛かりを頼りに探索へ出かけて、あの盾を手に入れた？」

「はい。一緒にいらっしゃる獣人のお二方は、その道程における同行者ではないかと」

太郎丸の頭上で交わされる二人の会話は、大した根拠も無い想像の産物ではあったが、見事に真実を言い当てていた。そして、その裏付けはすぐに成される事となる。

「あ……あっ！　ヤマト！　帰って来てたの！？」

人込みから上に飛び出していたヤマトに気付いたのだろう。ノエルが大きく手を振って声を上げた。その視線を追って、人々の注目がサークスたちからヤマトたちへと移る。

有形無形のプレッシャーを感じつつ人込みを掻き分けていつものテーブルまで移動すると、待ちきれなかったかのように、ノエルが口を開いた。

「みんなお帰り、遅かったね。大丈夫だった？」

「まぁな。それより……」

テーブルの上に置かれた盾だ。

その盾は五角形の中型盾で、腕に固定して使うタイプの物だ。それ以外の基本的な構造自体は、ごく一般的な物と同じであるように見えた。

特徴的なのは盾の表面に刻まれた魔法文字。まるでデザインであるかのように偽装されているが、これが伝説に残る程の逸品であるのなら、何らかの意味をもってそこに刻まれているのであろう事は疑いようも無い。

「これ、何か特殊な魔法とか掛かってんのか？」

「興味津々、という感じだねヤマト君」

サークスだ。椅子に座って腕を組み、穏やかな笑みを湛えた彼が落ち着いた声で話しかけて来る。

「冒険の結果とか、色々と話したい事はあるんだけど……それよりも、その盾の能力を見てもらう方が理解が早いかな？」

そう言って彼は、手近なテーブルからエールが注がれたジョッキを手に取ると、一気に中身を飲み干してヤマトに渡す。

「騙されたと思って、このジョッキで盾を思い切り叩いてみなよ」

「……？　思い切り、か？」

ちらりとノエルの方を窺うヤマト。するとノエルも笑顔で「やってみて」と促している。

いくらヤマトが非力とはいえ、金属製の盾に打ち付ければジョッキは容易く砕けるだろう。だが、あえてそれをやってみろと言うからには……。

「じゃあ、本気でやるぜっ！」

大きく振りかぶり、勢い良くジョッキを振り下ろすヤマト。ジョッキの砕ける乾いた音が食堂に響く……と思いきや、耳に聞こえたのは『ごつり』という、粘土でも叩いたかのような鈍く小さな音だけだった。

「……！？　全然手応えが無いぞ！　なんか、凄く柔らかい毛布を殴ったみてぇな……」

渾身の力であったにも関わらず、ジョッキは割れるどころかヒビさえ入っていない。更に何度か叩きつけてみたが、結果は同じだった。

ヤマトの素直な反応に頬を歪め、サークスが傍らのザックから羊皮紙を取り出してテーブルに広げる。

「それは『消撃の盾』と呼ばれる魔法の盾。受けた衝撃を完全に打ち消してしまう、絶対に貫けない無敵の盾さ」

サークスの言葉通り、テーブル上の真新しい羊皮紙にはその旨が書かれていた。

「へぇ……凄ぇな！　んでも、この羊皮紙は？　やけに新しいみて

ぇだけど……」

首を捻るヤマトに、横合いからノエルが言った。

「話せば長くなると思うから、部屋に移動しよ。そっちも何があったのか、ゆっくり聞きたいし」

その提案に全員が頷いてその場はお開きとなり、久々の会談は部屋へと場所を移したのだった。

第二十四話：英雄の凱旋（二）

宿の部屋は多少広めの四人部屋であったが、それでも七人が詰め込まれるとなると、かなり狭い。加えて三人は身体の大きな獣人である。

「な……なんだか部屋の中がオトコ臭くなっちゃうから、窓開けるね」

ノエルの手によって窓が開かれカーテンが踊り、涼しい風が清涼な空気を運んで来た。それを合図に、サークスが口を開く。

「さて……まずは最初に謝らないといけない。もう気付いてるだろうけど、僕とノエルさんはキミたちが留守の間に、件の盾を探す冒険に出た。そこの二人とパーティーを組んで、ね」

そこの二人と言いながら示した先に、先程から黙って様子を見ていた獣人たちが居た。

片方は太い腕に鋭い爪を生やす、虎の獣人。もう一人は筋骨隆々逞しい、馬の獣人だ。

「俺はガイラン。格闘による近接戦闘がメインだ。レベルは１６、よろしく頼む」

虎の獣人こと、ガイランが言った。それに馬の獣人が続く。

「俺様はバラ。レベル１５の重戦士系ってヤツさ。前からサークスの大将にゃ、ちょくちょく世話になっててさ。お前らよりは付き合い長いと思うぜ？」

多少、不遜な態度でそう言ったバラに苦笑して、サークスが軽くフォローに入る。

「以前、しばらくパーティーを組んでいたんだ。こんな調子だが、腕は確かだよ」

初めてサークスと会った時、彼は無愛想な太郎丸に苦笑いしつつもフォローを入れていた。それを思い出し、苦労人気質なのだろうと微かに同情するヤマト。

そうして互いに初対面同士の者が軽く自己紹介を済ませて行くのだが……。

「どした、太郎丸？　腹でも痛いのかよ？」

ヤマトは、普段よりも更に無口になった太郎丸が、じっとガイランを見ていた事に気が付いた。

「知り合いか？」

「……いや」

二人の会話はそこで打ち切られ、話の続きが始められる。

「続けて良いかな？　それで僕たちは盾を探して、西の火山に行ったんだ。知ってるよね、たまに噴火してる山だよ」

一応、といった感じで全員に確認を取る。その火山は割と有名ではあるが目ぼしい洞窟も魔物も居らず、冒険スポットとしてはマイナーな場所だ。

「そして色々と苦労はしたけど……結果は見ての通り、大成功さ！　これで、伝説の武具の手掛かりとされるコレが、確かな物であると証明できた」

サークスが首に掛けていた革の小袋を引っ張り出し、中身を見せる。入っていたのは、蒼く輝く小石……ノエルが海底洞窟で見つけた物だ。

「この石の光が、武具を探すヒントになっている。不思議なのは、光を当てる物や距離によって、浮かび上がる情報が変わる点だろうか」

言いながら、試しに石から出る光を机に投射して、次に天井へ投射してみる。

「本当ですね。先程とは違う文字や図形が浮かび上がって見えます」

「面白いでしょ、アデリーネさん。でもヒントを頼りに探索するのに、毎回こんな事をするのは不便だからって事で……」

ずるり、と重そうなザックから引き摺り出される羊皮紙の束。果たして何百枚あるのだろう？　凄まじい量だ。

「可能な限り書き留めてみた。中には読めない文字や意味不明な図形も多かったから、書き留めたというよりは、模写に近いけれどね。明日からはこれを元にして、また別の場所へ探索に出かけようと思ってる」

そこまで喋り、サークスは一旦口を閉ざす。次はそちらの番だ、という事らしい。

「では僭越ながら私の方から、ヤマト様と太郎丸様にご同行して頂いた行程について……」

一歩前に進み出るアデリーネ。馬面のバラが器用に指笛を鳴らし「待ってました、アデリーネちゃん！」などと茶々を入れる。

そんな中、ヤマトは隣に腰掛けるノエルへ、耳打ちでもするように小声で囁いた。

「よう……久しぶりだな」

「そうだね。かれこれ二ヶ月……ううん。三ヶ月ぶりくらい？　あんまり遅いから、心配したんだよ？」

少しだけ口を尖らせ、怒ったような口調で返すノエル。そんな仕草も久しぶりに見れば、以前より少しだけ大人びたような気がしなくも無い。

「危ない事とか、しなかった？」

ああ、全然。何の問題も無かった……と答えかけたヤマトだったが、アデリーネの説明が終われば全てバレてしまう。だから話を逸らす……いつもの手段だ。

「そういうお前はどうなんだよ？　誰も見つけられなかったお宝とか、危ない所にあったんじゃねぇのか？」

「ん……まあ、少しだけ。でも知ってるでしょ？　私、天使だもん。危ない事なんて、無いよ」

「そうかぁ？　お前、そそっかしいからな。まぁとりあえず、無事で何より……安心したぜ」

そんな事を呟いていたヤマトは、ノエルがやけに嬉しそうな顔で

自分の方を見ている事に気付いた。
間近で見る、幼馴染の顔。
風になびく髪。潤んだ瞳。白い頬に薄っすらと赤みが差し、濡れた唇は柔らかく、触れれば溶けてしまいそうな雰囲気だ。

「な……なんだよ？」
「ううん、別に」

何か、ノエルを喜ばせるような事でも口走っただろうか？
先程からの会話を思い出すヤマトだったが、特に思い当たるフシは無く、彼女の喜ぶ理由も思い当たらない。
だが一つ、アレの事を思い出した。ノエルにくれてやろうと、買った物の事を。

「そ、そう言やぁお前さぁ……」
「ん？」

唐突に手渡すのもなんだか気が引けて、適当な話題を振ってから……と思った矢先の事。ノエルの髪に、何かキラキラと光る物が付けられているのに気が付いた。

「あ……これ？　なんかね、伝説の盾を見つけたお祝いだって言って、サークスさんが……」

それは、金の髪飾りだった。翼をイメージさせる細かな細工。深みを感じさせる光沢。所々で輝く石は宝石だろうか？　ノエルの美しい金髪と光輪の輝きに紛れて気が付かなかったが、かなりの高級品だと一目でわかる、見事な飾りだった。

「に、似合うかな？」

「おう……良く似合うぜ」

本当に良く似合う。ノエルの為に作られたのでは無いかと感じさせる程に。

それに比べればどこかで見た小さな髪留めなど、子供の玩具程度の陳腐な品でしか無い。とてもでは無いが……渡せない。

「……というわけで帰還が少々遅れてしまったわけですが、これは安全を期す為に……あ、あのヤマト様、ノエル様？　聞いてます？」

「お！？　お……おう、聞いてるぜ。なんかまぁ、色々大変だったよな！」

「そ、そうみたいだね！　あははは……」

誤魔化し、曖昧な笑顔を見せる二人を前に、アデリーネは軽く溜息を吐いた。話を聞いてないのは、別にどうでも良い。だけど……特にヤマトへ問い正したい。

コソコソと仕舞いこんだ、その布張りの箱……本当に渡さなくて良いのですか？　それで後悔したりしませんか？　今、この時に頑張るのでは無いのですか？

そして最後に、誰にも聞こえぬように呟くのだ。

「この、いくじなし」

第二十五話：地獄に近いこの場所で（一）（前書き）

この話には残酷な表現が使われております。苦手な方はご注意下さい。

第二十五話：地獄に近いこの場所で（一）

硬い土を踏みしめるレザーブーツの音。それが幾重にも重なって、独特のリズムを生み出す。そのリズムは谷間から吹き上げる風に乗り、高く、どこまでも響いて山々に知らせて回るのだ。

奴らがやってきたぞ、と。

「目の前にある深い谷……この底に伝説の『賢者の鎧』がある」

サークスは羊皮紙を広げ、地図のようにして描かれている図面のバツ印部分を指し示した。

「多分、ここだ。先発隊はロープを使って崖を伝い谷底へ降りた後、各自で探索を行う。パーティー編成については先に渡した文書を参照してくれ」

あらかじめ打ち合わせをした通りの内容を各人に告げ、その場で解散。一応の確認ではあるが、冒険にはトラブルが付き物。準備については慎重過ぎて損は無い。

「本当に見つかるだろうか？」

水筒の中身を口に含んで一段高い岩の上に立つサークス。付近を見渡すと、目に止まるのは茶色い岩肌むき出しの切立った岩山。そして武器と鎧に身を固めた多数の人々……全て冒険者だ。

サークスは賢者の鎧を探すにあたり、大勢の冒険者を募った。総勢五十余名。ほぼ全員がレベル１０以上のベテラン揃いだ。それは探索の成功率を少しでも高めると同時に、伝説装備の独り占めを妬む、他の冒険者たちの不満を散らす為でもあった。

伝説の武具、その手掛かりを掴んだという事実。本来ならば黙っていたかったのだが、サークスとノエルの知名度がそれを許さない。海底洞窟での探索成功は、瞬く間に余人の知る事となってしまう。

件の青い石が指し示すヒントを頼りに消撃の盾も手に入れ、手に入れた伝説の手掛かりが本物であると公に知れた以上、他の冒険者も雇うなどして独り占めするつもりが無い事をアピールしなければ、何度寝込みを襲われるか知れた物ではない。他の武具を探す際にも同じ手法を取り、安全と見かけ上の公平性を保つ。その予定だ。

「自分が見つけるか、全く見つからなければ、それまで。もし他人が見つけたなら……頭を下げて、買い取らせてもらえば良いさ」

そのくらいの金は持っているつもりだ。人間では五本の指に入るレベル３２の実力と資本力は伊達では無い。それに全ては、自らの夢を叶える為に使う金。惜しくは無い。

「サークス様、ロープの準備が整ったそうです。いつでも降りられます」

「ありがとう、アデリーネさん。みんなを集めてもらえるかな」

わかりました、と一礼して駆けて行くアデリーネ。知的で、美しい女性だ。眼鏡など掛けたなら、すこぶる似合う事だろう。事業でも起こすのであれば是非とも傍らに居て欲しい存在だ。加えて希少なエルフである、というのもポイントが高い。何故ならきっと自分が生きている間には、彼女の美貌が老衰によって損なわれる事は無いのだから。

だが、現在に至るまでの経緯が問題だ。あのノーウェイに身体を差し出していた……それが引っ掛かる。何らかの事情があったのだろうとも察するし、女性を差別するような事はしたくないが……これればかりは別問題だ。深い仲となる事も考えるなら、当然、考慮す

べきだろう。まあ口先では何とでも言えるのだが……。
だが、あまり深く考える必要も無い。彼女に関して所有権はヤマトにあるのだから。言い方は悪いが、彼のような者がアデリーネ程の美人をモノに出来るチャンスなど、屋敷での、あの瞬間を置いて他に無かっただろう。アデリーネ本人も随分とヤマトに恩を感じているようだし、丁度良いのではないかと思う。

「これより、ロープを伝って谷底に降りる。先発隊は僕に続け！後発隊はその間、ロープとベースキャンプの防衛！　後発隊の指揮は……」

見渡せば、並み居る冒険者たちの端に、腕を組み目を閉じる黒毛の人狼が映る。

「後発隊の指揮は太郎丸だ！……頼むぞ」
「うむ……心得た」

ゆっくりと目を開き、短く答えて頷く太郎丸。頼りになる男だ。
狼の獣人である彼は、忠義に厚く義理堅い。質実剛健を絵に描いたような性格で、豪胆でありながら繊細。人間の限界を遥かに超える筋力と俊敏性を持ち、異様なまでに鋭い嗅覚も備えている。
前線で戦わせても強いが、後方で部隊指揮を任せてもそつなくこなす柔軟性も持ち合わせた、まさしく戦場の申し子のような存在だ。
ただ唯一、無愛想で口数が少ないのが球に瑕。コンビを組んでの冒険など、話が続かなくて非常に困る。コミュニケーションも取り辛いから、何を考えているか良くわからない事も少なくない。
今もそうだ。腕を組み、何を考えていたのか……余計な事で無い事を願っておこう。

「ノエルさんは、太郎丸と一緒に崖の上に残って、もしもの時に備

えて……あの、ノエルさん？　聞いてる？」
「あ、はいっ！　大丈夫です。負傷者が出た場合は、花火で知らせてくれるんですよね」
「そういう事。滑落者が出るかもしれないから、敵が出なくても気を抜かないでね」

ノエル……この上無く可憐な、天使の少女だ。最近は『聖女』の二つ名で呼ばれる事も多くなってきた。
出会った当初は天使の能力を持て余す、見た目だけの女かとも思ったが……実際にパーティーを組んでみてわかった。
彼女は、強い。
高い能力も然る事ながら、的確で冷静な判断力。いざという時の行動力。そして女性的な気配りにも長けていて、彼女がパーティーに居るだけで空気が華やぐ。安心感が違う。レベル２０程度と評価されているようだが、とんでもない話だ。パーティー全体に与える影響を考えれば、レベル３０……いや、４０以上と評価されても良いだろう。
最初は少し他人行儀な感じがしたが、最近では随分打ち解けて来た。このまま良好な関係を維持し、これからは、これまで以上に親密な関係を築きたい。
だが、その為には……。

「サークス、もう行くのか？　大丈夫だとは思うけどよ、気をつけてな」
「ああ……ヤマト君も。もしもの時は、頼む」

いま声を掛けてきた黒髪の少年、ヤマト。彼が、ノエルを惑わせる障害となっている。
レベルはたったの４。とはいえ、近くで見ていると不当に低すぎる気もするが……理由はわかる。

彼はノエルの幼馴染だ。その関係を利用して都合良くノエルを独占状態にしていた。その為、彼の実力はノエルあっての物と評価されている事、そして天使の独占を快く思わない者の評価が低すぎて、実力よりも低いレベルと評価されているのだろう。

と言っても、その実力もそれほど抜きん出た物では無い。多少の機転は利くようだが、身体的には一般人に毛が生えた程度。戦闘技術もまだまだ未熟で、特に非力さが目立つ。冒険者としては半人前……正当に評価したとして、精々レベル6か7程度だろう。

今回の探索にも、本来ならば同行できないレベルだ。だが彼だけを仲間外れにするもの気が引けるし……何より、ヤマトが参加する事を条件とする参加者が三名も居たのだ。

太郎丸、アデリーネ。そして……ノエル。頼りにならない故に、保護欲が働くのか？　ともかく、彼の参加を認めないわけにはいかなかった。

「よし、出発！」

今もヤマトは、せっせと予備のロープを運んでいる。非常に働き者である点は高く評価出来るのだが……自分が足手まといである事、彼だってわかっているはずだ。冒険における花形から外され、後方支援どころか荷物持ちのロバ同然だと気付いているはずだ。なのに何故、彼は何の文句も言わず探索に同行しているのか？　さっぱりわからない。

「この谷……やはり、かなりの深さだな。石の時といい盾の時といい、どうやってこんな場所に隠したのやら」

ロープに身体を預け、岩壁を蹴って少しずつ、慎重に下って行く。岩は脆く崩れやすく、細かな砂が積もって滑りやすくなっている為、十分に気をつけなければならない。唯一つ、気休め程度の安心点は、

もし滑落しても即死でさえ無ければノエルが居るという事。もし滑り落ちても絶対に諦めるなと、先発隊には通達してある。同時に、だからといって気を抜くなとも伝えてあるのだが……。

サークスがそう考えていた矢先。ガラッ、と岩の崩れる音。そして誰かの悲鳴が上がる。

「……落ちたか」

天使と言う存在が生む安心感、それは油断に繋がる。一瞬の油断が命取りとは、よく言った物だ。

直後、滑落した冒険者を追いかけ、上空からもの凄い勢いでノエルが急降下して行くのが見えた。運が良かったら助かるだろう。……仮に死んだとしても、ある意味アウトローである冒険者が美しい天使に看取られて逝けるのだから、それはそれで幸運かもしれない。

そうこうする内、ブーツの底にしっかりとした地面の感触が届いた。谷底に到着したのだ。

魔物の牙の如く、乱雑に並び立ち鋭く隆起した谷底の岩盤。平地は無いに等しく、太陽の光も遥か遠く頭上にあり、薄暗く、ほのかに寒い。漠然とした不安が、腹の底に溜まって行く。

「あるいは、ここにベースキャンプを張ってゆっくり探そうと思っていたけど……無理みたいだね」

サークスに続き、他の冒険者たちも次々と谷底へ到着する。それとは逆に、羽ばたく天使が誰かを抱えて崖の上へと飛んで行った。ノエルが負傷者を運んでいるのだろう……果たして助かったのだろうか？

「よし、ではパーティーごとに別れて、それぞれのエリア探索を……？」

サークスはここで、妙な事に気が付いた。
辺りが、やけに静かなのだ。
いや、静かなのは構わない。ここは生物を拒む切立った岩山の、深い谷の底なのだから。自分たち以外に動物を目にする事も無かったわけだから、静かで当然だ。だがどうして、自分たちの声さえしない？　土を踏む音や、鎧の擦れ合う音、風の音や、それに伴う様々な音がするはずだ。

「何かおかしい……みんな、気をつけ……！？」

音も無く、何かがサークスの足にぶつかった。驚いて足下を見れば、そこには馬の獣人……バラだ。バラが白目を剥き、口から舌をだらりと出して倒れている。

「お、おいバラ！　しっかりしろ、バラッ！」

バラを抱え上げるサークス。すると彼の太い首が、中程からがくりと折れ曲がる。それもその筈、バラの首は、骨ごとザックリと中程まで抉れ、ピンク色の肉が覗いていたのだ。
瞬く間に傷口より噴出す真っ赤な液体。この傷は深い、間違い無く致命傷だ。だがしかし、まだ助かる……助かるはずだ！

「ノエルさん！　早く来てくれ……ノエルさん！　ノエルッ！！」

上空を見上げて叫ぶ。天使の力があれば、この程度の死を遠ざけるなど容易い事のはず。だが光り輝く天使の姿は遠ざかるばかり……サークスの声に気付く様子は無い。

「くそっ！　聞こえないのか！？　いや……」

やけに静かな谷底。音も無く倒れ、ぶつかってきたバラ。

「音か！？　音が……声が遮断されている！」

その方法や理屈はわからないが、音の伝達が妨害されている。彼に他人の声は聞こえず、他人にとってもサークスの声は聞こえない。さっきからやけに静かなのも、それが理由だろう。

普段であれば、大した問題とはならないだろう。だが事態は逼迫している。少なくとも、レベル１５のバラを一撃で戦闘不能に追い込める何者かが、これを好機として襲い掛かっているのだ。

「みんな気を付け……と言っても聞こえないのか」

音が聞こえない以上、視力に頼るしか無い。なるべく平らな場所を選んでバラを寝かせ、辺りの様子に気を配る。他の冒険者たちは、まだ事態に気付いていないようだ。音の異常にさえ気付いていない者も多いだろう。経験豊富なサークスだからこそ、いち早く異常に気付く事ができたのだ。

「と、とりあえずバラに応急処置だ。ポーションを……いや、ハイポーションを！」

道具入れからポーションと、その濃縮版であるハイポーションを探す。回復薬など使うのは何年ぶりだろう？　ここの所、楽勝だったり魔法での回復に頼りっきりで、薬など使おうとさえ考えなかった。

常備しているポーションは二本、ハイポーションは一本。バラの傷を癒すには、全く足りない。荷物になるのを嫌い、どうせ使わないからと数を減らしていたのだ。

「これではヤマト君を笑えないな」

常に十本以上のポーションを持ち歩くヤマトを、ノエルが居るのに不要だろうと茶化した物だが……備えあれば憂い無し。どうやら、彼の方が正しかったようだ。

少し埃の積もったガラス容器を取り出し、蓋を開けるサークス。淡い魔法の輝き……ちょっと古いが、効果は失われていないはず。そう期待を込めて、抉られたバラの首へ液体を振り掛ける――。

（無駄だよ）

どこからか、声が聞こえた。

（無駄だって……ハイポ、高いんだろう？　無駄遣いは止めろよ）

油断無く、周囲に視線を走らせるサークス。声はすぐ近くから聞こえて来る……だが、周囲に怪しい人影は無い。そもそも音の遮断されたこの状況で、どうやって声を伝えるというのか？

（ほら見ろ。一応血は止まったけど、傷は塞がらないだろう？　この馬は死ぬ。キミには、どうしようも無い）

声は、サークスの頭の中から聞こえていた。そして声の通り、バラの傷は塞がらない。ポーションを全て使っても駄目だ。あまりの深手に、命を繋ぎ止める事さえ叶わない。

（そうしてサークス、キミも死ぬ。ほら、周りを見てみろよ）

慌てて周囲を見渡し、驚愕する。

いつの間にか、そこかしこで真っ赤な触手が蠢いていた。岩と岩の間を縫うように、脈打ちながら谷底いっぱいに広がっている。

サークスは、この触手に見覚えがあった。いつかノーウェイの屋敷で見た悪魔……膨れ上がった人の肉体を突き破り現れた、真っ赤な悪魔の尻尾。それに酷似している。

（おっと、虎の獣人が気付いたみたいだ。中々やるじゃないか……でも、遅い）

異変に気付き、こちらに駆け寄ろうとした虎の獣人ガイラン。だが数歩を踏み出す間に、地面から突き上げられた触手によって両腕を千切り飛ばされ、次の瞬間には胸板を貫かれて動きを止める。

（ふふふ……他愛の無い。もしかして、他の連中も似たり寄ったりなのかな？）

悪魔だ……間違いない。あの時、ノーウェイの屋敷で見た赤い悪魔が、この場に現れているのだ！　消える間際に奴は言っていた。何千、何万回生まれ変わろうと復讐すると。その第一歩が、これだと言うのか！？

剣を抜くサークス。このまま黙って殺されるのは真っ平御免だ。他の冒険者たちもようやく異変に気付き、散り散りとなって逃げ出して行く。ある者はロープにしがみ付き、ある者は岩陰に身を隠して震え始める。

（やはり、天使が居なければこんな物か。あの女を引き離せた時点で、私の勝ちだったな）

そうか。最初の滑落は、こいつの仕業だったのか。そうやってノエルの手を塞ぎ、こちらへの救援を遅らせたというわけだ。更には

谷底の音も消して連絡網を絶つとは……中々やってくれる。

（少し違うね、谷底の音については元々さ。伝説を求める者にそういう試練が用意されていたんだろ）

恨むならキミ達の先人を恨みたまえ……頭に響く声がそう告げた。

（それではサークス、さよならの時間だ。祈りの言葉を唱える時間？　それなら心配はいらない……ゆっくり苦しめながら殺してやる。時間なら、たっぷりとある筈だ）

鞘に納まる銀の剣を、しっかりと握り締めるサークス。

こんな所で……夢を目の前に、死ぬわけにはいかない。死にたくは無い！

幼い頃から父と共に冒険を繰り返して来た。父の夢は……伝説の武具を揃える事、唯一つ。夢半ばにして倒れた父の想いを引き継ぎ、自分も同じ目標を掲げて今日まで生きてきた。至極当たり前の事として。

そして親子二代で捜し求めた夢のゴールが、もう目の前に見えている！

「死ねるものかあぁぁぁぁッ！！」

命を賭け、サークスは剣を抜き放った。

第二十六話：地獄に近いこの場所で（二）

その時に起った様々な出来事をノエルが正しく認識したのは、これよりもずっと後。事態が取り返しの付かない事になってからだった。

まず最初に聞こえてきたのは、岩の崩れる音。そして誰かの悲鳴だった。

「一人落ちたぞ！」

そんな声がベースキャンプのテント内に聞こえた時、ノエルはテントから飛び出し、崖下へと身を躍らせていた。

今から追えば谷底へ叩きつけられる前に拾えるかもしれない。そう思い、思い切り羽ばたいて加速し、谷間を急降下して行く。

翼を折り畳んで風の抵抗を減らし、制御可能なギリギリの速度で後を追うと――見えた！　その男性冒険者はまだ崖の中程を、突き出した岩壁に叩きつけられながら落ちている最中だった。

まだ、間に合う！！

「くっ……！　てぇい！！」

目前に谷底が迫る中、辛うじて落ちて行く男性に追い付いたノエルは彼と落下速度をあわせ、腰にしっかりと手を回して翼を大きく広げる。そして急減速。男性の重み、そして武具の重みがズシリと両手に掛かり肩や肘が軋んで悲鳴を上げたが、絶対に手を離すわけにはいかない。これが命の重みなのだ。

そして……刃のように尖った地面に叩きつけられるギリギリの所で、停止する事に成功した。

「だ、大丈夫ですか？　いま、上まで運びますからね」
「う……す、スマん……」

良かった、生きていた！
男性は全身を強く岩肌にぶつけて何箇所も裂傷や骨折を負っていたが、まだ息がある。助けられる！　谷底に叩きつけられる前に確保できたのが大きかったようだ。

「良く耐えて下さいました！　生きてて下さって嬉しいです。もう少しの我慢ですからね、頑張って！」

なるべく負担を掛けないように、それでいてなるべく迅速に。ノエルはゆっくりとベースキャンプを目指し上昇する。その間にも光を操り治癒を行ったが、痛みを和らげる気休め程度にしかならないだろう。本格的な治療は、上に戻ってからだ。

「おいノエル、そのオッサン生きてるか？　それならこっちだ、テントを空けてある！」
「うんっ！　皆さんどいて下さい、怪我人です！」

崖上に戻ると、すぐヤマトが駆け寄ってきた。勝手を知る彼に導かれ、すぐさまテントへ。そこで急いで男性の治療に入る。
迅速かつスムーズな一連の流れ。当たり前のようだが、これまでに何度もやっているからこその、阿吽の呼吸だ。もしもノエル一人だったなら……あるいは顔見知り程度の他人しか居なかったなら、彼女は未だ怪我人を抱え、テント前でまごまごしていただろう。

「ん、もう大丈夫ですからね……気を楽にして、ゆっくりと呼吸して下さい」

苦痛に歪んでいた男性の顔が、次第に安らかな物となる。優しい光が体内を巡り、血を止めて傷を塞ぎ、骨を再生させて行く。

これでもう安心だ。ノエルが安堵の息を吐いた……その時。

地面が揺れた。

「……爆発？」

「いや、違うな……何の音もしなかった。近くで地震……か？」

テント内が、そして後発部隊として備えていた冒険者たちの様子が、俄かに慌しくなる。

「ちょっと外を見てくる。ノエルはここに居ろ」

ヤマトがテントを開けて、外へ出る。その時、入り口の隙間から具間見えたのは、谷底から勢い良く吹き上がる物凄い量の粉塵。一時、空が覆いつくされ日が陰る程の、赤茶けた細かな砂の群れだった。

火山の噴火を思わせるその現象は、サークスたちの向った谷底で何かがあった事を指し示していた。

どうする？

ノエルは迷った。ヤマトに言われた通り、この場で待機しておくべきか？　それとも急いで谷底へ向い、何かしらのサポートを行うべきか？　この状況下、彼女の知り得る情報。それら全てを鑑みても、どちらを選択すれば正解であるのかは誰にもわからない。

そんな中、ノエルは選択した。

この場で待機する事を。

「外が少し騒がしいですけど、私はここに居ます。安心して、リラックスしてて下さい」

不安そうな顔をする怪我を負った男性冒険者に、優しく語り掛けるノエル。彼を放っては行けない。現場へ向うよりも今は、自分に与えられた仕事を優先するべきだ。彼女はそう考えたのだ。

外へはヤマトが向った。太郎丸さんも居る。あとアデリーネさんだって頑張ってる事だろう。何もかも自分ひとりで出来るわけじゃない。だから、みんなを信じよう。

「きっと、大丈夫です」

そう呟き、にっこりと笑うノエル。その感情が、その考え方が。天使にとって非常に珍しい物である事に、彼女自身は気付いているのだろうか？

ともあれ、そのような判断を下したノエルだったが、根底にある不安が解消されたわけでは無い。音の無い地響きは断続的に続き、火山の噴火を思わせる谷底からの粉塵噴出も、未だに治まる気配が無い。

サークスは無事だろうか？　あと二人の獣人……バラとガイランも大丈夫なのだろうか？　みんな、かなりの実力者である事は知っている。だがしかし、この胸を打つ根拠の無い不安感は一体何なのだろう？

「……おい、見ろ。誰か上がって来るぞ！」

治療を続けていると、外からそんな声が聞こえて来た。どうやら事態が動いたようだ。

ノエルは自分の膝元に横たわる男性冒険者を見る……いつの間にか彼は、安らかな寝息を立てていた。今なら、少しくらい席を外しても大丈夫だろう。

「すぐに戻りますからね」

聞こえてはいないだろうが、そんな囁きを残し、テントを出るノエル。
辺りには粉塵が漂い、埃っぽく、靄がかかったような空気だった。
そんな中、崖の辺りに多くの人が集まっているのが見える。

「ちょっと失礼しますね」

ざわつく人込みを飛び越え、砂煙の先へと目を凝らすノエル。すると、微かに人影が見えた。何者かが大荷物を抱え、暗い谷の底から、ロープを伝い登って来る。

「……サークスだ」
「おぉっ！　サークスだ、白銀のサークスは無事だったぞ！」

冒険者たちの間から、明るい声が上がる。
確かにそれはサークスだった。
白銀の鎧は血と砂に汚れて激しく痛み、剣は鞘ごと中程で折れている。額からの激しい出血によって美しい金髪はべったりと頬に張り付き、なんとも凄惨な有様だ。
そして右手には馬の獣人バラを抱え、左の小脇には縄で胴に縛りつけた、虎の獣人ガイランを引き摺っている。二人とも血塗れで、気を失っているようではあったが……その身体に目立った傷は無く、命に別状は無いようだ。

「大丈夫……みんな、無事だ。じきに……上がってくる」

酷く疲れた様子でそう呟いたサークスは、その場で膝を折って倒れた。だが酷く満足げな……それでいて、今までに見た事の無いような、どこか不敵な表情で微笑む。

「作戦、成功……だ」

そう告げた彼の背中には、誰も見覚えの無い、古びた箱が大事そうに縛り付けられていた。

第二十七話：馬鹿な男

賢者の鎧探索から全員が無事に戻って、今日で二日目。
いつもの街の、いつもの「ほろ酔い亭」は、いつもよりも少し賑わっていた。

「この間はありがとう、お陰で鎧を見つける事が出来たよ」

食堂の中央で、サークスとノエルが探索の参加者に銀貨の詰まった袋を手渡している。冒険の成功報酬だ。
笑顔でそれを受け取った冒険者たちは口々に賢者の鎧発見を喜び、サークスを、そしてノエルを褒め称える。

「あっという間に伝説級の装備を二つも揃えるとは。やはり噂の二人がコンビを組むと一味違うな」
「しかも誰一人犠牲者を出さずに、だからな。格が違うよ」

困ったように笑う、サークスとノエル。だが同時にどこか誇らしげでもあり、満更でもないといった様子だ。

「どうだい、二人とも。もう結婚でもして、ずっと二人で冒険してみたら？」

銀貨の袋を受け取って嬉しそうな年配冒険者が、からかうような口調で言った。
照れて笑うサークスと、曖昧な笑顔を浮かべるノエルに、周りから賛同の声が上がり、冷やかしの口笛が鳴り響く。

「……チッ」

そんな中、笑顔の中心から離れた食堂の隅で、小さな舌打ちがなされた。
ヤマトだ。独りテーブルに腰掛け、硬いパンを齧りミルクを啜って、明るい声に聞き耳を立てる……そして舌打ち。これで何度目だろう？
気に入らない。何もかも、気に入らない。
まず、ノエルとサークスがいつの間にかカップルのように認識されていると言う事が気に入らない。
別にヤマトはノエルと付き合っているわけでも無いし、保護者というわけでも無い。だから口出しする権利など全く持って無いのだが、楽しげに笑う二人を見るだけで癪に障る。頭に来る。
サークスがさり気無くノエルの腰に手を回しているのも気に食わないし、ノエルの奴がそれを拒まず、サークスから貰ったと言う金の髪飾りを、ずっと大事そうに着けているというのも、非常に気に入らない。
そしてもう一つ。

「どうして誰も疑問に思わねぇんだよ……」

それは二日前、サークスが谷底から生還した時の状況だ。
サークスの鎧と剣には、明らかに戦いの痕跡があった。直前に響いた地響きも、彼の凄まじい剣技がもたらした物だろう。
だが崖上へとサークスが生還した時、彼は傷を負っていなかった。血痕は残っていたが、血は止まって傷は塞がり、打撲も殆どが癒えていた。これは治療をしたノエルが言ったのだから、間違い無い。
そして彼はその時、驚くべき離れ業をやってのけた。気を失った大柄な獣人を二人も抱え、背中に重い鎧を背負ってロープを昇ったという事だ。
皆は「火事場の馬鹿力だ」とか「流石は高レベル冒険者だ」とか

言って持て囃したが……本当にそんな事が、人間に可能なのか？
サークスよりも一回り大きいバラとガイラン。二人とも逞しい筋肉を持つ、非常に大柄な獣人だ。きっとヤマトでは、一人を持ち上げる事さえ難しいだろう。
物凄いピンチだったから信じられない力が出た？　確かに有り得る事だ。だがしかし、それにしたって異様過ぎないだろうか？

「……チッ！」

思わず舌打ちが出る。
誰かにこの事を相談したい。誰かの意見を聞きたい。だが、ヤマトには相談相手が居ない。
ノエルは最近、サークスにぺったりだ。とても話を出来る状況では無い。
太郎丸は例のガイランという獣人を見かけた日から普段にも増して無口になり、一人で何事か考えている時間が増えた。今日も朝から、どこかへと姿を消している。
アデリーネはと言えば、伝説の武具の在り処を写した羊皮紙を片手に、毎日のように街の書庫に篭っている。彼女なりに何か思う所があるのだろう。
そしてこの街に住む大半の者は、ヤマトの事を快く思っていない。聖女ノエルを独り占めしていた、ろくでなしの屑……そんな意見が大勢を占めているのだ。
つまり今、彼の周りには親しい者が誰一人居ないのだ。

「どうしたモンかねぇ……」
「何が、どうしたんだい？」

ヤマトの独り言に応える者があった。
サークスだ。いつの間にかヤマトの居るテーブルに歩み寄り、椅

子の背に手を掛けて優雅に佇んでいる。

「よう、サークス。ご苦労さん。傷の方はもう大丈夫か？」

「ああ、おかげ様でね。流石はノエルさんだよ、あっという間に全快さ」

嘘だ。傷は、崖の上に戻った時点で塞がっていた。

「バラとガイランって言ったっけ？　あいつらも？」

「うん、元気だよ。今日は鎧の鑑定に、魔法屋へ行ってもらってる」

確かその二人も、かなりの出血をした痕跡があった。鎧に血が溜り、全身の毛が血で真っ赤に染まる程に。だがサークスと同じく崖の上で見た時に、そんな傷は見当たらなかった。

どうする？　カマを掛けてみるか……？

「そういやサークス、あの時谷の底で何かと戦ったんだよな？　それ……」

「そんな事より、ヤマト君」

ヤマトの声を遮り、サークスが持っていた革袋を勢い良く机の上に置いた。他の冒険者に配っていたのと同じ、報酬の入った革袋だ。だが少しだけ開いた口から覗いているのは、眩いばかりの金色の輝き。

「おい、これって……」

「そうだよ、金貨だ」

重そうな革袋には、金貨が目一杯詰まっていたのだ。その価値は銀貨の百倍に及ぶ。これだけあれば何年も……慎ましい生活をする

のであれば一生だって、のんびりと暮らして行けるだろう。

「何だよ、これ？　随分多くないか？」

「ああ、これはね……」

言葉を区切り、一呼吸置いてサークスが言った。

「手切れ金さ」

どういうつもりだ？　そう聞こうとしたヤマトよりも早く、サークスが答える。

「ヤマト君。キミに……パーティーを抜けて欲しい。そしてノエルさんとも手を切り、二度と僕らの前に姿を現さないで欲しいんだ」

チッ！

ヤマトの舌打ちが響く。

「これだけあれば、当分は生活には困らないはずだ。たしか……妹さんが居るんだよね？　だったら兄妹で仲良く慎ましく……」

「断る」

即座に答えるヤマト。

「サークス、テメェにゃ悪いが、俺は冒険者を辞めるつもりは無ぇ！　ノエルと手を切るつもりもな！」

「そうかい。それは……ノエルさんの事が好きだから？」

ストレートな質問だった。

ヤマトはこれまで、ノエルに対する正直な気持ちを一度も口にし

た事が無い。だからだろうか？　今更、言葉にしてしまう事が憚られ、思わず口篭ってしまう。

「……悪いかよ」

だが、ここで引いたら負ける。そんな気がして、辛うじて、それだけを口にした。

「そうか、まぁ気持ちはわかるよ。身分違いだとはわかってても、熱い想いは止められない……ってヤツだね。ま、あれだけ美しい天使なんだ。近くに居て、好きにならない方がおかしいさ」

納得し、頷くサークス。どこか上から目線に感じるのは、ヤマトのひがみ根性あっての事か。

「これでキミがノエルさんと離れたがらない理由はわかった。でも、ノエルさんの方は？」

一瞬、サークスの表情が邪悪に歪む。

「実はキミから離れたがってるんじゃないか？　考えてみたまえ、もし仮に告白したとして、だよ」

椅子に両手でもたれかかり、薄い笑いを浮かべて続ける。

「昨日まで弟のように可愛がってた男の子に、突然告白されるノエルさん。困るよね？　困るだろう。キミを傷付けたくは無いが、かといって受諾も出来ない。だって、所詮は弟だもの……男としては見れない」

常に頭の片隅でモヤモヤとしている考えを、言葉として明確にされ、ヤマトの心が軋む。まるで打ち身痕を強く押すような、鈍く、それでいて耐え難い痛みだ。

反論したかったが、言葉が出てこない。なぜなら自分の中にある悪い予想。それと合致しているのだから。

「でも良かったじゃないか、これまで一緒に居れたんだから。もう満足だろう？　ヤマト君は大金を手に入れて冒険者を引退。ノエルさんには相応しい仲間が見つかった上、キミの面倒も見なくて良くなった……そう考えれば、万々歳じゃないか」

と、そこまで一気に喋ったサークスがふと喋るのを止め、少しだけ声色を落して聞いた。

「それとも……ノエルさんには、キミと一緒に居たいと思う、居なければならない理由でもあるのかな？」

先程までの明るい調子から一転。深く、澱んだ声。

「例えば、キミが近くに居ないと、ノエルさんが力を発揮できない……とか？」

唐突なサークスの質問に、ヤマトは言葉に詰まる。

「何言ってんだ？　そんなワケねぇだろ。サークス、お前……」

「いやなに、そんな事を聞いたのに深い理由は無いんだ。これまで、どうして彼女が格下のキミとずっと一緒に行動してたのか気になってね。もしやと思ったんだが……違うのか」

この男……サークスは一体、何を考えている？

ヤマトは眼前の優男に底知れぬ気味の悪さを感じ、知らず知らず背中に嫌な汗をかいていた。このまま放っておいたら、大変な事になるんじゃないか？　そんな予感がある。

「だっておかしいじゃないか。血の繋がらない男女が二人一緒に十年近くも居て、何も無いだなんて。他の理由を勘ぐらない方がおかしいだろ？　現に、この数ヶ月。キミが居ない間に僕たちは……」

また明るくなったサークスの声色。そこから次々に飛び出す言葉に、少年の胸が嫌な高鳴りを覚える。それ以上は聞きたくない……そう思った時だった。

「どうしたの、二人とも。難しい顔して？」

話題の中心たるノエルが、ひょっこりとやって来た。どうやら何も知らないらしく、無邪気な表情でヤマトに話し掛けて来る。

「今回の報酬、貰ったんだよね？　私、また近い内にスダチちゃんの所に届けて来るよ。良かったら、いま預かっとこうか？」

「あ、あぁ……いや……」

ノエルの優しい笑顔を前にどうして良いかわからず、曖昧な返事を返すヤマト。

全ての疑問をこの場でぶっちゃけて、サークスに確信を迫るべきか？　それとも信頼できる仲間……ノエルや太郎丸、アデリーネに話をして意見を聞くべきか？

ヤマトが悩んだ一瞬を、サークスは決して見逃さなかった。

「ノエルさん」

「はい？」

ノエルが返事をして、サークスの方へと振り向いた瞬間だ。

「……！！」

サークスはノエルの身体を抱き寄せ、彼女の唇を奪った。

時間にして、数秒程の事だったろう。だが、永遠にも感じられる程……長い、長い瞬間だった。

「なっ……何をなさるんですかっ！？」

両手でサークスを突き飛ばし、唇を拭うノエル。自分のされた事が信じられない、そんな様子だ。

「良いじゃないかノエル、このくらい。海辺で肌も露わなキミに口付けた事、忘れたのか？」

「あれはっ……！」

海底洞窟で青い小石を取った際、ノエルは気を失ってしまった。その後、助け出されたものの呼吸をしていなかった彼女に、サークスは応急処置として人工呼吸を施したのだ。後でそれを告げた際、サークスは何度もノエルに謝っていたが……。

「事実じゃないか。そうだろ、ノエル」

「あ……で、でも……！」

確かに嘘では無い。だが細かな事情を、この場で説明するのは憚られる。特にヤマトの前では……。

「わかってもらえたかな、ヤマト君。僕たちは既に、こういった関

係にあるんだ」

サークスの台詞に、ヤマトは何の反応も示さなかった。ただ驚愕に双眸を見開いたまま、微動だにしない。

「ち……違うの、ヤマト！　そうじゃないのっ！！」

酷く狼狽し、違う、そうじゃないを繰り返すノエル。その髪には、サークスから贈られた金の髪飾りが美しい輝きを放っている。これまで、アクセサリになんて興味が無い風だったのに、これだけは毎日欠かさず付け続けている。

そうか、そういう事か――。

だからサークスが、急にパーティー抜けろとか言って来たのか。

「ああ、わかったよサークス。俺が、馬鹿だった……って事だな？」

「ま、そういう事になるのかな」

椅子から立ち上がるヤマトに、ノエルが駆け寄り声を上げる。

「違うのヤマト、そうじゃない！　話を……私の話を聞いて！？」

だがヤマトに、彼女の声は届かない。すがる様にして服の袖を掴むノエルの手を乱暴に引き剥がし、ヤマトは拳を握り込む。

そして……。

「おぉぉぉッ！　サークスッ！！」

次の瞬間、ヤマトは雄叫びと共にサークスへと殴りかかっていた。

第二十八話：決別

赤味がかった夕焼け空はいつの間にか分厚い雲に覆われ、遠く山からは湿った空気が流れ込んでいた。

だがそれに気付く者は食堂内におらず、やがて外は冷たい雨。主婦は慌てて洗濯物を取り込み、店主は店先の物を片付けて、戸板を立て始める。

「おとといきやがれ、このクソガキ！！」

怒鳴り声と共にほろ酔い亭の裏口が勢い良く蹴り開けられ、ボロ雑巾のようになった少年が一人、放り出される。

少年は受身も取れず頭からゴミ集積場に突っ込み、嫌なニオイと残飯を付近に撒き散らしながら倒れ込んだ。

「手前みたいな奴の事を身の程知らずって言うんだよ！」

「ついでに恩知らずともな！！」

「野垂れ死ね、このクズ！」

激しい罵声と共に、裏口の扉が壊れそうな勢いで閉められた。と同時に食堂内の騒がしい声が遠退き、辺りは雨の音に包まれる。

「へっ……良く言うぜ。お前ら、尻馬に乗っただけのクセに……」

ゴミ塗れの少年ヤマトは、痛む頬の内側を舌で探り、誰に言うでもなく愚痴を漏らす。咥内にゴロリとした物を感じ、血の混じった唾と共に吐き出すと……それは折れた奥歯だった。

舌打ちと共に鼻先を擦った手の甲には鼻血が擦り付き、雨に溶けて流れて行く。他にも体中、至る所から鈍い痛みを感じる。自分で

は良くわからないが、随分とやられてしまったようだ。

「畜生……やっぱ強いんだな、レベル３２って……」

つい先程。

怒りと、憎しみと、多分嫉妬と……その他諸々、胸が破裂してしまいそうな感情に任せて、サークスへと殴りかかったヤマト。渾身の拳は的確にサークスの頬を捉え、白銀の二つ名を持つ男をよろめかせた。

だがそれは軽く……少しだけ。しかも、お情けを貰っての一発だった。

「これで満足したかい？」

涼しげに言って、薄く笑うサークス。その端整な顔に、パンチによるダメージはほんの少しも見当たらない。

「ンの野郎ッ！　ムカつくんだよ！！」

再度殴りかかるヤマト。だがサークスはそう何度も殴らせてはくれなかった。

細い竹がしなるかの如く上半身を反らせ、悠々と拳をかわしたサークスは、ヤマトの腕を取って背負い投げの要領で勢い良く投げ飛ばす。

重く風が唸り、破砕音と共にヤマトの叩きつけられたテーブルが壊れ、椅子が倒れて食べ物や食器が宙に舞う。騒然となる食堂内。

「や、やめっ……！　二人とも……ヤマトっ！！」

「くっ……どいてろ、ノエル！」

ノエルが割って入ろうとしたが、ダメージを堪えて立ち上がったヤマトは彼女を押し退けて、サークスへと再三挑む。

今度は脚に組み付き引き倒そうと腰を落とし、低い体勢から地を這うようなタックルを仕掛けるヤマト。速度、タイミング共に申し分無い鋭いタックルであったが……。

「青いな、ヤマト君」

「あぐっ！？」

サークスはそれを、振り下ろす拳一つで易々と撃退した。

後頭部に岩を打ち砕かんばかりの一撃を受け、地に這い蹲るヤマト。そこへ他の冒険者たちがやってきて、彼を取り押さえる。

「この馬鹿、サークスさんに何しやがる！」

「女取られたからってキレてんじゃねぇよ。少し落ち着け」

そんな冒険者たちの声も、今のヤマトには届かない。

「うるせぇ！　すっこんでろ！！」

そう怒鳴り、人々の手を振り切って憎きサークスへと迫る。だが……。

「キミでは無理だ。釣り合わない」

そんな言葉と、無造作に突き出されたサークスの正拳がヤマトの顔面にめり込み、鼻っ柱を砕く。

ずしん、と重たい一撃。目の前の景色が下へ流れ、ほろ酔い亭の天井が現れる。そして少年の怒りは、意識と共に軽く飛び……気付いたら、床に倒れていた。

「……う」

気絶していたのは、ほんの一秒にも満たない一瞬だったろう。しかし受けたダメージは計り知れず、視界が揺れて焦点が定まらず、身を起こそうにも手足に力が入らない。

しかし、それでも立ち上がろうとするヤマトに、周囲の冒険者たちが苛立ちを募らせる。

「もう止めろ。サークスさんに、お前が敵うわけ無いだろ？」

「この勘違い野郎が……多少痛い目にでも遭って、身の丈ってヤツを判らせてやった方が後の為かもな」

誰かが言った言葉が、やけに耳へ残る。

勘違い野郎――。そう、ヤマトは勘違い野郎なのだ。

幼馴染の天使を自分の女だと勘違いし、お似合いの相手に嫉妬する口だけの能無し駄目野郎。それがヤマトという男……自分なのだ。

「う……う、るせぇ。黙ってろ、この……ハゲ！」

「なんだと、この小僧！」

ハゲと言われたスキンヘッドの大男が、立ち上がりかけていたヤマトの顔面を殴る。たたらを踏んでよろめき、他の冒険者にぶつかるヤマト。

「仕方ねぇ……ちょっと頭冷やして来い」

ぶつかった冒険者もまたヤマトの腹を殴り、屈んだ所で下から上へ、突き上げる拳を顎に見舞う。更に続けて二発、三発と叩き込まれる拳。避ける事はおろか何の防御も出来ず、受身さえ取れず、ヤ

マトは薄汚れた床へ無防備に倒れこむ。
そこへ次々に飛んでくる容赦の無い蹴り。顔へ、脇腹へ、太股へ。何度も何度も、何人もの冒険者がヤマトという名の勘違い野郎に身の程を弁えさせようと蹴りを放ち、痛めつける。

「も、もう良いでしょう!?　皆さん、止めて……もう許してあげて下さい!」
「放っておこう、ノエルさん。ヤマト君には良い薬だ。それに心配はいらない。皆、加減くらいわかってる……死にはしないさ」

ヤマトへの暴行を制止しようと声を上げるノエルを、サークスが抱き止める。他の冒険者たちも、ノエルはもうあんなカスに関わるべきじゃ無いと、寄って集ってヤマトへの接近を阻み、引き離す。
そして……。

「おとといきやがれ、このクソガキ!!」

冒頭へと戻る。
屋根の下から叩き出されたヤマトに、降り出した雨は冷たく未だ止む事を知らず、次第に激しさを増すばかり。
立ち上がる事も出来ず、ゴミに紛れて濡れ鼠となった少年の身体は冷え切り、痛みはやがて冷たさ、そして寒さへ。

「いてて……ポーションは……と」

震える指先で懐を探り、薬の小瓶を探す……そして溜息。そういえば全部、ザックに纏めて部屋に置いてあるんだった。ノエルと合流したから、しばらく使わないだろうと思ったのだ。

「しくじったな、くそぉ……」

別のポケットにでも紛れ込んでいないだろうか？　そう思って弄った服の隠しポケットに、硬い手触りがあった。

取り出してみると、それはグシャリと潰れた布張りの箱。開けてみると、中身は砕けた髪飾り――ピンクの花びらが安っぽくて子供っぽい、到底ノエルには似つかわしくない……玩具のような髪飾りだ。

「悪ぃ……もう、いらなくなっちまったんだ。すまねぇ……」

迂闊にも自分に買われてしまったばかりに、役目を果たす事の出来なくなった髪飾り。いや、今や哀しげに雨の雫を落すだけのガラクタとなったソレへ、深く詫びる。

「……？」

その時、ギシギシと木の擦れる音がして、ほろ酔い亭の二階窓が開いた。何だろうかと見上げるヤマトの瞳に、輝く光輪と白い翼、そして見知った顔の天使が映る。

「……ノエル」

二階の窓から、ノエルが半身を乗り出していた。そしてゴミ捨て場に倒れたヤマトを見つけると、慌てて窓から飛び出し、翼を広げて舞い降りて来る。

「ヤマト、大丈夫？」

すぐ側に降り立った彼女は、気遣わしげにそう聞いてきた。その表情は、ヤマトがいつも良く見る……頼りない弟を心配する、姉の

顔。
少年の胸が、強く痛む。
「ボコボコにされちゃったね。いま治すから、力を抜いて……」
そう言って手をかざし、癒しの光で傷口を癒そうとしたノエル。
だがヤマトは、そんな彼女の手を無造作に払い除けた。
「……ヤマト？」
「いらねぇ」
それだけ言って、ヤマトが立ち上がる。相当な無理をしているのは誰の目にも明らかだったが、それでも彼は震える手足で立ち上がり、ノエルに背を向けた。
「ヤマト……あの、怒っ……私の、サークスさんとの事、だよね？あれはね、前にちょっと私、色々……」
「わぁってるよ。そんな事、わかってる。なんか事情があんだろ？色々と……お前やサークスでないとわかんねぇ事情が、さ」
背を向けたまま、震えるノエルの声に応えるヤマト。
自分の居なかった数ヶ月の間で、サークスとノエルの間に何があったのか？　そんな物、大体想像が付いている。そこで色々な事情があったであろう事。それだって、何となくわかっている。そしてきっと両方に共通しているのは、自分のような非力な人間ではどうしようもない「何か」だったという事――。
「そんな話……聞きたくねぇ」
痛む拳を握り締めて、滲む血のように声を絞り出す。

そうしてヤマトは顔を上げず、ノエルの顔を見る事無く、一歩ずつ闇へと向って歩き出す。

「ま……待ってヤマト！　話を……ううん、話は聞かなくていいよ！　だからせめて、傷の治療だけでも……！」

光で雨を弾く事も忘れ、ずぶ濡れとなりながら追い縋るノエル。
そんな彼女へヤマトは最後に一度だけ立ち止まり、酷く聞き取り辛い声で言った。

「これ以上、俺を惨めにさせないでくれ……！」

その後、彼は一度も振り向く事無く、立ち止まる事も無く、涙ぐむノエルを残して暗い雨の中へと消えて行った。

第二十九話：暗雲

日も高い時間帯。いつものほろ酔い亭一階の、いつもの場所。いつものように軽食が並ぶテーブルを囲み、いつも居る六人の姿がある。

「そろそろ次の武具を探しに出ようと思うんだ」

塩気の効いた生ハムを噛み千切り、サークスが口を開いた。彼の眼前には、いつものように羊皮紙が、これまたいつものようにジョッキを重石として広げられている。

「これは多分、手甲の類だと思うんだ。名前は『幻魔のなんとか』……資料に不明な点が多くてね、全部は読み取れなかった。でも場所の特定は出来てる」

新たに広げられた別の羊皮紙には、詳細な地図と様々な但し書きが交易用の標準語で書かれていた。どうやら現在地から馬車で十日程の距離にある洞窟内部が目的地であるようだ。

「最新の地図で確認すると、近くに小さな村がある。そこで準備を整えて……洞窟は狭い場所みたいだから、前のような人海戦術は使えない。だから少数精鋭、このメンバーで……」

「すまぬサークス殿、暫し宜しいか」

太郎丸の低い声が言葉を遮り、強引に話を中断させた。普段から無口な彼が、こういった形で口を挟む事は珍しい。

「どうしたんだい太郎丸。珍しい事もあるじゃないか」

「うむ……いやなに、少々気になっている事があってな。実は某、ここ数日ヤマト殿を見かけておらぬのだが……誰か知らぬか」

その言葉で、テーブルの空気が変わる。

サークスとバラ、ガイランの三人は「ああ、その事ね」といった雰囲気。

ノエルは目を逸らし、俯いてしまった。その話題には触れないで欲しい、聞いて欲しくないと、あからさまな態度だ。

アデリーネは、質問を投げ掛けた太郎丸と同じ。貴方が聞かなければ私が聞いていた……そう目で訴えている。

「何か心当たりがるようだな、サークス殿」

「ああ、すまない。別に隠すつもりは無かった……というか、ちょっと言い出し辛くてね。先に結論だけを言うと……彼は、パーティーを抜けたよ」

サークスの台詞に、少なからず動揺を見せる太郎丸、そしてアデリーネ。

「恥かしい話だけど、数日前に僕がちょっと揉めてしまってね。ヤマト君は、出て行った。どこに居るのかは、僕も知らない」

サークスの言葉を確かめるように、太郎丸の視線は俯くノエルの方へ。

見られている事を敏感に感じ取ったのだろう。少しだけ顔を上げて太郎丸を見つめ返したノエルだったが、すぐに辛そうに目を伏せてしまう。

「ノエル殿、一体……」

何があった？
ノエルに問いかけようとした太郎丸を、静かに首を振ってアデリーネが制した。その代わり、発言を引き継いでサークスへと質問を向ける。
「それではサークス様。この手甲の探索はヤマト様抜きで？」
そのつもりだよ、と頷くサークス。彼の左右に控えるバラとガイランも頷き、口々に言い放つ。
「大丈夫だよアデちゃん。あんな弱っちい奴一人くらい居なくても、俺様がキッチリ守って見せるからさぁ」
ブヒヒと唇を震わせて笑い、自信満々の様子を伺わせる馬の獣人バラ。
「レベル３２の剣士とレベル２０の天使が居る。戦力に不足は無い」
太い腕を組み、淡々と告げる虎の獣人ガイラン。直後、レベルの低い小物など邪魔なだけだと、独り言のように呟いたのが耳に残る。
「左様……か」
全員の様子を伺い、息を吐いた太郎丸。自分が少し場を離れていた間に、一体どれほどの事が起こったというのか。故郷からこの街へと戻る際もしきりにノエルの事を気に掛け、事あるごと口にしていたヤマト。そんな男が、華奢な身体を悲しみに沈ませるノエルを捨て置いて、独りどこかへ行くなど俄かには信じられない。
ちらりと、傍らのアデリーネに視線をやる。すると彼女も太郎丸と同じく、固い意志を湛えた瞳でもって頷いた。

「すまぬサークス殿。今回の案件、某は一緒に行けぬ」

ガタリと椅子を蹴るようにして立ち上がり、そう宣言する太郎丸。テーブル上の食事もそのままに、憮然とした表情で立ち去ろうとする。

「どうしたワンちゃん？　臆病風にでも吹かれちったか？」

「……用事が出来た」

からかうようなバラの台詞に意を解さず「御免」と言い残しテーブルを去る太郎丸。それに続き、アデリーネも席を立つ。

「申し訳ございません。せっかく誘って頂いたのに恐縮なのですが、私も暫しお暇を頂きたいと思います」

「おいおい、マジかよアデちゃん！　一緒に行こうぜぇ！　俺が守ってやるってば！！」

「いいえ、バラ様。お気持ちは嬉しいのですが、そもそも私はヤマト様に身請けして頂いた身。主人の下を離れる事自体が、有り得ないのです」

盛大に唾と不満をぶちまけるバラをやんわりと嗜め、丁寧に頭を下げるアデリーネ。

「それでは、これにて失礼致します」

そう彼女が言って頭を上げた時――ノエルと目が合った。

とても哀しげでとても心配そうな、今にも泣き出してしまいそうな、脆く弱い印象の天使。ノーウェイの屋敷で最初に見かけた時の、優しく穏やかな、暖かい太陽の光を思わせる女性の姿など、今の彼

女からは想像も付かない。

「あ、あのっ……」

何かを言おうと、口を開きかけるノエル。だがしかし、何が邪魔をするのか声になる前に掻き消え、意味を成す言葉とならない。周囲に伝わるのはもどかしさだけ。

だがアデリーネには伝わっていた。

「大丈夫です、ノエル様。あの方を信じて、いまはお待ち下さい。彼は、必ず戻ります。貴女の元へ……」

気休めにもならない、無責任な言葉だったかもしれない。しかしアデリーネの言葉は、心細さに震え、凍えかけていたノエルの心を包み、暖める。

「では」

もう一度頭を下げて、太郎丸の後を追うアデリーネ。遠ざかり、雑踏へと消える二人の背中を、ただ見送る以外に無いノエル。

そうしてしょんぼりと項垂れる天使を前に、黙ってテーブルに残る干し肉を口に運んでいたサークスが呟く。

「……気に入らないな」

彼の一言を、耳に留めた者は誰一人として居なかった。

第三十話：傷付いて、失って（前書き）

このお話の戦闘シーンにおいて、非常に残酷な表現がございます。
苦手な方は十分にご注意下さい。

第三十話：傷付いて、失って

ほろ酔い亭のある街から、徒歩で三日程の距離にある宿場町。目立つ建物は何件かの宿のみで、町としての規模は小さく、長く住んでいる住民も多くない。

だが大きな街と街を繋ぐ街道の中間にあって交易の拠点として栄え、旅人が多く立ち寄り疲れを癒す事から「旅人の家」と呼ばれ、各方面から親しまれている。

人通りが多い道の周辺に見えるのは、踏み固められた土くれ剥き出しの地面に直接ゴザを引き、思い思いの商品を並べて売り捌く露天商たちの姿。彼らの品揃えは多岐に及び、道行く者たちの多彩な要求を満たし、目を楽しませる。

そんな露天商から少し離れ、町からも少し外れ、少しだけ森に入った辺り。朽ちた切り株に、酷く憔悴した様子で腰を下ろすヤマトの姿があった。

彼は切り株に愛用の短剣を突き刺し、研ぎ澄まされた鋼の刃を長い時間じっと見つめている。

「はぁ……」

溜息を付くヤマト。

短剣は、冒険者であった父の形見だ。

ずっと前に流行り病で亡くなった父と母。幼かった妹のスダチと、飛べない天使であったノエルを養う為、遺品の多くは二束三文で売り払ってしまった。だが実家の建物と飼っていた牛、そしてこの短剣だけは食うに困っても売らず、大事に持ち続けていた。

しかし今、ヤマトは悩んでいる。

「売っちまおうかな……」

何度目かもわからない自問自答。
彼は形見の短剣を、露天商に売ってしまおうかと悩んでいたのだ。
勿論、ヤマトとしては売りたく無い。どこにでもある普通の短剣ではあるが、父の形見であるし、長い間使い込んだという愛着もある。トドメには至らなかったが、ミノタウロスの頭蓋に突き刺してダウンを奪ったのも、この短剣だ。
父と同じ冒険者になろうと……強くなろうと決めた日からずっと、片時も離れず一緒に歩んできた大事な短剣。

「でも冒険者辞めたらもう、使わねぇもんな……」

何度も研いで磨り減った刃が、寂しげにヤマトを見つめ返す。

「しょうがねぇだろ？　金も無いし……」

短剣へと言葉を返す。
数日前の夜。サークスに伸され、ノエルに八つ当たりして、雨の中を着の身着のまま逃げるように街から去ったヤマト。その為、荷物の大半は宿に置きっぱなし。手元にあったのは僅かな銀貨と形見の短剣だけ……売れば小金程度にはなるかと思った壊れた髪飾りだが、どうやらゴミ捨て場に落して来たようだ。
以前から評判の良くなかったヤマトであったが、ついにここに来て「英雄サークスと揉めたカス」とレッテルの貼られた彼に、人々の目は特に冷たい。宿へ荷物を取りに戻ろうかと何度か考えたが、一昨日、顔も知らない通りすがりの小さな男の子に「この悪者め！」と石を投げられて……諦めた。嫌われ者にも程がある。宿に戻ろう物なら何をされるかわかったものではない。
かといって金は無く、食い扶持も無く、頼るものも無い。もう一昨日から水しか飲んでいない。

冒険者としての仕事で日銭を稼ごうと、冒険者組合へと足を運んでもみたが「英雄サークスと揉めたクズ」に回す仕事は無いとにべも無く断られ、冒険者としての仕事は完全に干されてしまった。

「仕事もしねぇで武器もってウロウロしてるだけって、もう冒険者じゃねぇだろ？　そりゃ単なるゴロツキだ」

自分の台詞に、自分で苦笑いする。今の自分はつまり、ゴロツキというわけだ。

「それに……もう冒険者やる意味、無くしちまったしな……」

あの日の誓い。柔らかな手を取り、光の中、胸に刻んだ強い想い。この娘を守る。傷つかないように、笑顔が失われぬように。その為に少年は強くなる事を望んだ。

強さ。

それは彼にとって、自分や妹、そしてノエルを守り育てた父の背中だった。父と同じ冒険者となれば、自分も強くなれるのではないか？

「そう思って必死こいてたけど、俺じゃ無理だった。結局は弱っちい俺が邪魔で、強い奴の方が……っていう話だよ」

あの夜、ほろ酔い亭で見た光景が鮮明に浮かび上がる。

ノエルを親しげに抱き寄せるサークス。それを拒む事無く、されるがままのノエル。そして二人は口付けて……。

「……もう、嫌だ！」

切り株へ、拳を強く打ち付けるヤマト。

「忘れちまえ、何もかも！　冒険者なんて辞めて、普通に働いて、普通に暮らすんだ！　そうだ、スダチにだって金を送らなきゃなんねぇ……いや、向こうで働けば良いんだ。きっとアイツだって、その方が喜ぶ！　よし、そうしよう！」

誰でも良い。中古屋にでも短剣を叩き売って飯を食べて、田舎へ帰ろう。そして一からやり直すんだ！

半ばやけくそ気味に声を上げ、ヤマトは短剣を切り株から抜き取り立ち上がる。そして一歩を踏み出した時……。

「……！！」

それは冒険者として危険の中に身を置いた男に呼び起こされた、微かな野生の本能だったかもしれない。

背中に感じた悪寒。森の中から忍び寄る危険の気配。音も無く、首筋へと迫る鋭い刃の予感。

何か根拠があったわけではない。だがヤマトは確信を得て前方へと飛び、同時に身体を捻って背後の「何か」へ短剣で切り付けていた。

激しい火花が散り、甲高い金属音が響き渡る。座っていた切り株が砕け、砂煙と共に宙を舞う。

「チッ……カンだけは良いか」

地面を転がって体勢を立て直したヤマトに、何者かの声が届いた。聞いた事の無い、しゃがれた老人のような声だ。

自分がさっきまで座っていた切り株。今は砕けて形も残っていないその場所に、大男が立っていた。

ヤマトよりも二回り以上大きな身体。前屈みでいる為に正確な所

はわからないが、純粋な身長は二メートル以上あるだろう。身に着ける軽甲鎧の上からでも確認できる太い腕と厚い胸板は、かつて見た者の中でも一番だろうと思える。

「何モンだ、てめぇ？　俺はヤマト……人違いじゃねぇのか？」

問いかけたヤマトに、件の大男は勢い良く腕を振って応える。この手で貴様を仕留めに来た。そう言っているのだ。

「……なんか良くわかんねぇが、俺で正解って事か。言っとくが金なんて持ってないぞ、この包帯野郎！」

大男を包帯野郎と呼ぶヤマト。

そう、大男には目立つ特徴があった。全身を隙間無く包帯で包んでいるのだ。顔も、目の部分だけを残して包帯でグルグル巻き。鎧の下まで全く地肌が見えないよう徹頭徹尾の巻き具合は、正体を隠す気満々の格好であると言えた。

とはいえ、包帯の上からでも確認できる事はある。例えば、骨格。そして尻尾の有無がそれだ。

「その体型と尻尾……肉食系の獣人か。名前は聞くだけ無駄なんだよな？」

ヤマトの問いに低い唸り声で応える包帯男。その迫力に怯えたように見せかけて……ヤマトはジリジリと下がって間合いを取る。相手が正体を隠す気満々であるなら、ヤマトだって逃げる気満々だ。

この世界において、太郎丸やバラ、ガイランのような獣人の割合は少なく、珍しい。多くの人目に止まれば止まるほど、彼らは目立つ。正体を隠したい目の前の包帯男にとって、人目は最も避けたい物の一つだろう。

そうなれば答えは一つ。人込みまで逃げれば良いのだ。
現在置から、人の多く集まる「旅人の家」までは、そう遠くない。全速力で走れば三十秒と掛からないだろう。今の内になるべく距離を取って、一気に走り去れば……。
ヤマトがそう考え、素早く振り返って逃げ出してやろう……と両脚に力を溜めた、その時。包帯男がしゃがれた声で言ったのだ。

「貴様が逃げた場合、町の者を殺す」
「なっ……なんでだよ！　町の連中、関係無ぇだろ！？」

疑問がヤマトの口を付いて出た。町の人は関係無いはずだ。知り合いなど一人も居ない……精々、自分に投石をくれた男の子くらいだ。だから別に誰が死のうと、ヤマトの知った事では無い。遠慮なく逃げる事が出来る。
出来るはずだ。

「足が止まっているぞ」
「しま……ッ！！」

ヤマトが見せた一瞬の隙。それを包帯男は見逃さなかった。
巨体が、地面を蹴った……次の瞬間、彼の者は目の前に居た。振りかぶった腕の指先に巻かれた包帯が千切れ飛び、鋭い鉤爪が飛び出す。そして爆風を伴った一薙ぎ！

「ぐぁっ！！」

呻き声と共に、ヤマトの小さな身体が弾き飛ばされた。そのままの勢いで雑木林へ飛び込み、太い木の幹に激突する。
息が出来ない。目の前がクラクラする。背中が、腕が……ヤマトの全身が悲鳴を上げていた。辛うじて鉤爪の一撃は短剣で防いだも

のの、受けた衝撃を殺す事は出来ずにこの様だ。

「がはっ！　ぼ……冒険者引退しようと思った途端にコレかよ……ツイてねぇな」

よろめきながらも、激突した木に掴まって立ち上がる。数日前に受けた打撲がぶり返し、新たに脇腹が酷く痛んだが、座ったままでは次に対処できない。どれほど辛くとも生き延びる為には立ち上がる以外に無い。

「くそっ、やれるトコまでやってやらぁ！」

雄叫びを上げて木に背中を預け、右手に短剣を構えて、周囲に注意を向けるヤマト。吹っ飛ばされ、包帯男を見失ってしまったのだ。

相手は獣人。しかも狼や虎といった肉食系の種族……生来の狩人だ。その驚異的な身体能力は人間の反射神経を軽く凌駕して余り有る。森という遮蔽物の多いフィールド。どの方向から攻撃がやってくるかわからない。神経を張り詰め、微かな異変に対しても即座に反応できるよう、命を削るような思いで集中する。

だが……。

「……っ！？　あぐっ……！！」

ざくっ、と固い木を抉る音が聞こえた直後、短剣を握る右手が、灼熱の棒を押し付けられたような激痛を訴えた。見れば腕の中ほどから、血に濡れた鋭い爪が四本、肉と皮を貫き飛び出している。

包帯男はヤマトの背後から、木を貫いて攻撃を加えて来たのだ。

「どうやら、当たったようだな」

言って、爪を捻る包帯男。貫かれた木の幹が、ホールケーキに突き刺したフォークを捻ったようにくり貫かれ、湿った音を立ててささくれ立つ。

グシャグシャとなって木片を散らす幹……そしてそれは、ヤマトの腕も同じだ。

「ぐぅ……うぎゃあぁぁぁぁぁッ！！」

爪が捻られた事により、腕の筋がパチパチと音を立てて切れ、骨と筋肉が剥がされる。引き裂かれた皮の間からは鮮血が漏れ出し、流れ落ちた血溜りの中に、右手から零れた短剣が力無く落ちた。

「くっ、うがあぁッ！」

覚悟を決めて、刺さった爪から右手を引き抜くヤマト。ズタズタとなった右腕の付け根を、抜いた腰紐で縛って止血する。だがもう既に、痛み以外で右手の肘から先の感覚は無く、指はピクリとも動かない。

「その右手、もう二度と元には戻らんだろうな」

嬉しげに言って爪の血を拭った包帯男は、邪魔な木を小枝のようにへし折り、軽々と押し倒してヤマトに迫る。

「久し振りの、喋る獲物だ……楽しませてもらおう」

包帯男が口にした台詞の前半を、ヤマトは自分の前で聞いていた。だが台詞の後半は、自分の背後から聞こえてきた。ヤマトにとって包帯男の敏捷性は、レベルや経験では補い切れない絶対的な力の差として立ちはだかる。

土を蹴立てる音を聞き取った時、そこに敵はいない。背後に気配を感じて振り返っても、振り返る首の動きよりも速く敵は移動し、死角へと回り込む。

「どこを見ている?」

「後ろっ!?　ぐっ……ギャアァァァ!!」

「ほら、どうした。早く逃げないと左手も使い物にならなくなるぞ」

包帯男がヤマトの背後から、握手でもするようにして彼の左手を掴んだ。ただそれだけでヤマトは絶叫を発し、苦しみ悶える。

がっちりと握り合わされた二人の手……その隙間から、搾り出されるようにして血が滴り落ちる。包帯男が凄まじい握力でもって、ヤマトの左手を握り潰しているのだ。

骨が砕け、筋肉が潰れる。必死に引き抜こうともがいても、包帯男の手は開かない。それどころかヤマトの肘に手を伸ばし、更には肩にも手を伸ばし、がっちりと捕まえて力を掛け始めた。

「ギャアァぁ……ぐぁ……がアァァァッ!!」

「脆い骨だ。簡単に折れ曲がる」

ごき、ごきっと鈍い音が響く。左腕の関節が一つずつ、順に破壊されて行く。肘があらぬ方向を向き、肩が肩甲骨と共に折れ曲がった。胸を締め付け、頭を割るような痛み。冷や汗が全身から噴出し、吐き気が込み上げてくる。

だが動かぬ右手では反撃どころか反抗さえままならず、振り切って逃げようにも、振り切る事さえ出来ない。

だが、それでも……。

「ゴルァ!!　舐めンなぁッ!!」

ヤマトが反動をつけて右手を振り、包帯男の顔面にブチ当てた。
威力は皆無。だが流れ出した血糊が視界を塞ぎ、残忍な獣人の行動を阻害する。

「チッ！　面倒な」

両手を離し、目に付いた血糊を拭い出す包帯男。
今だ。チャンスは今しか無い！
左手の痛みをこらえ走り出すヤマト。だがそれは逃亡では無い。
倒れた木の根元……落ちている形見の短剣を目指しての疾走だ。
包帯男は素早すぎて、ヤマトの速力では人目に付く場所まで逃げ切る事は不可能だ。それならば乾坤一擲……攻撃に転じて隙を突く、それしかない。彼はそう考えた。

「一か八か……ッ！」

血溜りの中にある形見の短剣を口で咥え上げて、くるりと振り返る。
柄をしっかりと噛んで固定し、包帯男へと狙いを定める。そして全力で大地を蹴り、勢いを付け、未だ視界の晴れない包帯男の首根っこを、体重を乗せた刃で叩き切った！
包帯が切り裂かれ、隙間から首が垣間見える。そして……。

「フン……これで全力か？　命を賭けてこの程度……人間風情の力など、知れた物だ」
「……！！」

切れたのは、首付近の包帯だけだった。首を叩き切るどころか、包帯の下に見えた赤と黒の毛皮から、毛の一本を切り落とす事さえ出来ていない。

「そうやって、剣を口に咥え攻撃するのなら……」

包帯男は顔の下半分に巻かれた包帯を緩め、口の辺りを露わにした。

顔の横付近まで割れた、大きな口。そこから見える咥内には鋭く太い牙が生え揃っている。

「せめて、この程度の力は欲しいものだ」

首筋に当たって止まっている短剣を手に取る包帯男。そして鋼の刃を口に挟む。

「あ……！！」

包帯男の牙が、鋼の刃に食い込む。徐々に曲がり、穴が開き、ひび割れて行き……そしてヤマトの見る前で短剣は粉々に砕け、地面に落ちた。磨り減った刃も、汗の染み込んだ柄も、全てバラバラだ。

「どうした、そんな哀しそうな顔をして。この剣が唯一の武器だからなのか……それとも大事な物だったか？」

反撃に失敗した上、形見の短剣までも失い、ヤマトの動きが止まる。そんな彼の首を易々と掴み、吊り上げる包帯男。

手は尽くした。精一杯頑張った。だが、どうしようもない事だって――その時、脳裏にノエルとサークスが抱き合う姿が浮かび上がり……ヤマトから抵抗する為の気力、その全てが失われた。

どんなに頑張っても、どうしようもない事だって……ある。

「つまらん。諦め、活力を失ったか……だが我が渇きを癒す為……

今しばらく、付き合ってもらうぞ」

そう言って、包帯男がヤマトの顎を掴み、無理矢理口を開かせる。

「剣も振れぬような役に立たぬ歯なら、もう要らんだろう」

「……！！　あがっ……がッ……！！」

前歯と前歯の間に鉤爪が強引に差し込まれた。歯と歯の間が開き、歯茎から血が滲む。ただそれだけでも、歯が根元から折れてしまいそうだというのに、包帯男はその鉤爪を……捻った。

「ギャッ！！」

バギン、と音がして白い物が二つ、口から飛び出す。森に落ち、土に紛れて見えなくなったそれは……ヤマトの上前歯だ。直後に上顎から真っ赤な血が流れ出す。

「ぐァ……！！」

「上の歯だけではバランスが悪い。下も……ついでに奥歯も面倒を見てやろうか」

「ひ、ひゃめ……ガっ、あぐっ……ギャ……！」

「遠慮は要らん。もう一生、虫歯で悩む必要が無くなるぞ……」

バキバキとへし折られ、零れ落ちて行く永久歯。その上、凄まじい握力によって顎までも砕かれる。

「どれ、もっと楽しませろ……次は、どこを責めて欲しい？」

森の中に木霊する無力な少年の悲鳴。その声は、その後も長く長く……いつまでも響き続けていた。

第三十一話：闇の胎動

光の無い状態を暗闇と呼ぶのなら、この場所は間違いなく暗闇といえる。

ただ一面の赤。赤が支配し、赤以外に何の要素も無く、光さえも無い空間。だから暗闇。真紅の暗闇だ。

その中で独り、彼は考えていた。赤の中に浮かび、休む事も、眠る事も無く、ひたすら考えていた。

人や動物など生き物の多くは、肉や野菜を食べ、それをエネルギーとして活動する。

肉体を持たぬ精霊たちは、風の動きや炎の揺らめき――それら大自然の営みそのものをエネルギーとして活動する。

そして悪魔は、生き物の欲望をエネルギーとして活動する。

では天使は？

天使の力は無限だという。湯水の如く何処からか湧き出し、人々を守り、人々を癒す。連続使用によって多少は疲れたり、精度が落ちたりする事はあるようだが、力そのものが枯れて無くなるような事は無いらしい。

おかしいではないか。

人や動物は餓えれば死ぬ。精霊たちに至っては、エネルギー源たる自然の営みが無い場所では存在する事すらできない。例えば炎の精霊が水の中に存在できず、逆もまた然りであるように。

悪魔だって同じだ。契約を交わした相手の欲望が弱ければ力は弱まり、欲望が消失した場合には完全に力を失い、場合によっては消滅してしまう。

なのに何故、天使だけが無限の力を得ているのだ。

生き物の欲望を糧とする悪魔。その実体は形を持たず、どちらかと言えば精霊たちに近い。

生き物たちに甘い声で囁きかけ、欲望を煽って契約を交わす。そして契約を交わした相手に取り付き、次第に欲望と力を増大させて、最後には肉体も記憶も精神も、魂さえも我が物とする。

非常に強力であると思われがちな悪魔――だが制約も多い。

まず取り付く相手と契約を交わさねばならず、それまでは心に囁きかける程度の力しか無い。首尾良く対象と契約を結べても、完全に相手を乗っ取るまでは本来の力を振るう事は出来ず、取り付いた相手の能力を増強する程度の事しか出来ない。

しかも悪魔は力を振るう度に魔力を消耗する。悪魔にとって魔力はスタミナのような物だ。休めば回復するし、仮に尽きたとしても死にはしないが、力は大きく減退する。

比べて、天使にそのような制限は無いという。

おかしいではないか。

彼は暗闇の中で考え続ける。

どうしてこうまで天使ばかりが優遇されているのか。

人形生物の中にあって飛べるというだけでも異質な存在だ。なのに、それに加えて強力かつ無制限に振るえる能力の数々……しかもそれらは、生まれた時から何の苦労も無く身に付いている天賦の才だというのだ。こんな物、ズルいの一言で済まされる問題では無い。神に愛されるにしても程があるだろう。

大体が、万物の長たる神でさえ……。

そこまで考えて……彼は、思考を止めた。

神でさえ……そう、神でさえ。ならば天使は？　神の使いたる天使はどうなのだ？

真紅の暗闇に包まれ、彼はほくそ笑む。
闇は、次第にその度合いを深く、濃くして行った。

第三十二話：悪魔の姦計（一）

ほろ酔い亭のある街から、馬車で十日ほど。街道からは少し外れた山間部にある人口は五百ほどの小さな村は、地産地消を地で行く、農業主体の穏やかな村だ。

「次の方どうぞ。深呼吸して、気を楽にしてて下さいね」

深夜。村の中央にある小さな集会所で、ノエルは年老いた老婆の背中に手を当て、柔らかな光を流し込んでいた。

長年の経験を刻むシワだらけの肌。年季を感じさせる曲がった腰。手にしているのは使い込み、磨り減った杖――どうやら肩と腰、あと足にも疾患があるようだ。高齢の方に多くみられる典型的な症状に、ノエルは寄る年波の残酷さを感じながら、丁寧に慎重に、人生の先輩へと癒しの力を発動させる。

「……はい、これで悪い所は治りました。けれど、あまりご無理はなさらないで下さいね」

しきりに頭を下げる老婆を優しく見送り、次の者を迎え入れる。今日はこれで二、三百人くらいは診ただろうか？

ノエルが訪れる村々で恒例となっている臨時診療所。伝説の手甲探しの道中に立ち寄った小さな村でも、それは例外無く行われていた。

「ノエル、外はもう暗くなっている。明日には出発なんだ、あまり遅くまでは……」

サークスが集会所の扉を少し開け、声を抑え渋い顔でノエルに告

げた。
　扉の隙間からは冷たい夜風が室内へと滑り込み、そこから覗いた空は薄暗く、微かに星の瞬きさえ見える。
　今朝早くに村へ到着したサークス、ノエル、そしてバラの三人。もう一人の獣人ガイランは何か用事あるらしく、別ルートでの行程となっている。その用事とやらを済ませたら合流する手筈だ。
　サークスはこの村で食料の補給と小休止を済ませた後、伝説の手甲が眠ると噂の洞窟へ挑むつもりだったのだが……村人に頭を下げられたノエルが「少しだけ」と、治療を始めてしまった。
　いつものパターンだ。

「申し訳ありませんサークスさん。明日の出発には間に合わせますので……」

　申し訳なさそうな表情で頭を下げるノエル。そういう意味で言ったのでは無いのだが……と、サークスは溜息をついた。
　天使は清く正しく美しい生き物であるが、助けを乞われると断れず、融通の利かない面がある。臨機応変な対応が求められる冒険者という職業にあって、これは少々面倒な話だ。
　だが集会所入り口で治療の順番待ちをする村人たちから「天使様の邪魔すんじゃねぇよ」という意思の込もった冷たい視線を一身に受け、サークスは一歩下がらざるを得ない。お門違いではあるが、どこぞの少年が感じていた苦労が偲ばれるというものだ。
　だが、まぁ……これはこれで、丁度良いのかもしれない。心の中で、何かがそう思考した。

「わかった。明日の朝、迎えに来る」

　諦めの表情でそう言い残し、立ち去るサークス。そんな彼の背中を見送って……ノエルは軽く肩を落とした。

いつもなら、このくらいの人数とっくに癒し終えているのだけれど――。

自分を中心に円を描くように並んでもらい、広範囲に及ぶ癒しの光でもって、多人数をまとめて癒す。そして治療の終わった人から順に後ろの人と交替してもらい、特に酷い症状の人だけを個別に診る。ちょっと機械的で人情味の薄い効率優先のシフトではあるが、タダで診てもらえると聞いて体調の良い人までやってくるのだから、ある程度は仕方ない。

これまではこの方法で、千人程度であれば一日で癒し終える事ができていた。だが今は違う。同じ方法を取ろうとしても人が集まり過ぎて混雑し、我先にと押し合う事で怪我人まで出てしまう。そうなってしまえば治療どころでは無い。

以前はヤマトが、多少強引とも横暴ともいえる態度で、集まった人たちを誘導してくれていた。

『ガキと年寄り優先だ！　若ぇヤツぁ顔洗って出直して来い！』

そんな怒鳴り声が、今は懐かしい。

癒しの光を迸らせながら、ノエルは想う。

どうして私は行かなかったのだろう。ヤマトが姿を消したあの夜に。太郎丸とアデリーネが席を離れた、あの瞬間に。

言い訳なら、いくらでもある。だが何時だって……無理を言って強引に後を追う事が出来たはずなのだ。

降り頻る冷たい雨の中を歩み去るヤマトに追い付き、無理矢理にでも治療を施す事くらい簡単だったはず。だがあの時は、ただそれだけの事が酷く難しかった。

自分を拒絶するヤマトの背中に……足が、指先が。一寸たりとも動かず、彼を追う事がどうしても出来なかった。

「……次の方、どうぞ」

まだ小さかった頃……神の命を受けて空から舞い降りた日の事だ。ノエルは風に流されて落下地点を誤り、翼を傷めて、うまく飛べなくなってしまった。

翼を失えば天使ではいられない。飛べない天使など、天使では無い。

傷付いた翼に絶望し、幼いノエルの目からは涙が零れた。悲しくてどうしようもなくて、ただひたすらに泣き続けた。一体、どれ程の時をそうして過したろう？　一日、二日、三日……昼夜が幾度となく繰り返され、景色の色が何度も塗り変わった。

やがて幼い彼女の頭から何もかも、神の命さえも消え去り、悲しみだけが溢れるようになった頃、不意に現れた小さな男の子――目付きは悪く小汚い格好で鼻水を垂らしており、頭も悪そうなヤンチャ坊主――それがヤマトだった。

彼はぶっきらぼうな言葉遣いで、泣きじゃくるノエルに話しかけた。そして思いつく限りの言葉と態度で彼女を励まし、勇気付けた。格好良い言葉も、スマートな立ち振る舞いもそこには無かったが、ノエルは確かに感じたのだ。

少年に宿る、暖かで優しい心を。

「お大事に……次の方……」

当時、冒険者をしていたヤマトの両親は、突然息子が連れてきた天使の少女に驚きはしたものの、柔軟な対応で彼女に理解を示し、家族として迎え入れて我が子のように愛情を注いだ。その頃、丁度スダチが生まれたばかりで、新たな家族が増える事に抵抗が無かったという事情もあっただろう。

こうして丘の上に立つ小さな家で、家族五人での生活がスタートした。

裏庭には牛が一頭のんきに草を食み、鳥が歌い、風が踊る平和な

日々。そんな中でノエルは、ひたすら空を飛ぶ練習を繰り返した。広い草原の坂道を走って下り、勢いを付けて飛び上がるのだ。

一年が過ぎ、二年が過ぎた。だが折れた翼を上手に動かす事が出来ず、全く飛ぶ事が出来ない。落ち込み、もうダメだと諦め、ヤケになって癇癪を起こした。一度や二度では無い。数えるのも面倒になるほどの回数だ。

「……どうしました、天使様？　何か、可笑しい事でも？」

「あ、いいえ。なんでもありません」

苦笑するノエル。面倒な子供だったろうな、と思う。今になって思えば当時の自分は――いや、今でも――本当に我侭で、困った子だった。

だがそんな自分を、家族は見捨てたりしなかった。

特にヤマトだ。何度も怒られたり叱られたりしたが、根気強く毎日毎日飽きもせず、一日中練習に付き合ってくれた。やがてその練習にヨチヨチ歩きのスダチが加わり、賑やかさと楽しさが増した頃……不幸が訪れる。

流行り病だ。

凶悪な死病であったその病は瞬く間に近隣地域に広がった。ほどなく、優しくてのんびり屋だったヤマトの母が倒れ、健康だった父も病魔の前に屈した。

あの頃の事を思い出すと今でも胸が痛み、目の奥が熱くなる。

幼いノエルは天使の力でもって、ヤマトとスダチを全力で守りながら、必死に両親の治療を試みた。だが力が弱く空さえ飛べず、天使としての能力も扱いきれていない彼女に、流行り病という敵はあまりに強大だった。

力及ばず痩せ細って行くヤマトの両親……いや、その頃には自分の両親も同然の、かけがえない存在となっていた父と母。自らの無力を嘆くノエルに、二人は死の間際、こう伝えた。

『ノエル、いままで良く頑張った。流石はウチの子だ。お前なら必ず、立派な天使になれる』

『私たちなら大丈夫。だってもう、十分すぎるくらい幸せだもん。だからこれからは、他の人たちにも幸せを分けてあげて』

この時、初めてノエルは気付いた。我が子を思う親の偉大さを。自分以外の人を思いやる気持ちの尊さを。どんなに辛くとも……文字通り死ぬほど苦しい時でも、愛する者の為ならば人は笑顔を見せる事が出来るのだと。

必ず立派な天使になる。そしてみんなに幸せを！

そう誓ったノエルに、満足そうな顔で頷いた両親が力尽きた――

その瞬間。世界が、光に包まれた。

「はい、お疲れ様でした。骨は繋がってますから添え木はもう必要ありませんけど、筋力が弱ってるでしょうから気をつけて……お怪我をなさらないように」

ノエルが天使としての能力を覚醒させたのは、それがきっかけだったろう。後で聞いた所、周辺の村々からも流行り病は消え失せ、病床にあった人たちも元気になったという。

翼は生え変わったかのように癒えて、練習の甲斐もあり空も飛べるようになり、光を自在に操る術も身に付いた。トントン拍子で各種能力も飛躍的に上昇し、天使として一人前になって行くのだが……それを一番伝えたかった人たちは、もうこの世に居ない。

そして、その頃からだ。ヤマトが冒険者を目指すと言い出したのは。

日々の糧を得る為に家財道具を売り払った彼は、安い賃金ながらも配達などの仕事をこなし、コツコツと身体を鍛えていった。俺は強くなるんだと、口癖のように繰り返しながら。

「……はい、お大事に。気をつけて帰って下さいね」

小さな女の子を連れた母親が、丁寧に頭を下げてから席を立つ。ウトウトと舟を漕ぐ幼子を胸に、集会所を後にする母親。彼女によって開けられた扉から見えた外の世界は真っ暗。既に月は空の頂点を越え、明日と呼ぶべき時間帯へと突入している。

「次の方……は、居ないみたいね」

まだ村人全員を診たという感じはしなかったが、流石にもう時刻が時刻だ。特にご老体に夜の散歩は少々骨が折れる事だろう。きっと明日の早朝、駆け込みで何人かが訪れるはずだ。そうしたらもう、この村ともお別れ。帰りにもう一度……とは思うものの、サークスはきっと足止めを嫌い、立ち寄りたがらないだろう。

「……ヤマト、何してるだろ？」

集会所から一歩踏み出し、空を見上げるノエル。その時に吐き出した息が白くなった事に気付き、薄手のカーディガンを羽織る。

ヤマトの事が気になって仕方ない。あの夜からずっと……特にここ数日は、胸騒ぎさえするようになった。

元気で冒険を続けているのだろうか？　それとも違う事をしているのだろうか？　この広い世界のどこに居るのか、何をしているのか。夜になると、今すぐ飛んで行きたいという気持ちを抑えられなくなる。ヤマトは嫌がるだろうが、今すぐ会って、伝えたい事が山ほどあるのだ。

「会いたいな、なぁんて……」

呟き、頭を振る。駄目だ、会えない。

『これ以上、俺を惨めにしないでくれ――』

彼はそう言った。

強い拒絶。近寄るなという意思。それらを感じ……嫌われた、と思った。

以前から感じていた事。自分がヤマトの重荷になっているという事実。

これまではヤマトの優しさに甘えていた。天使の真実を知る彼にだけは心を許す事が出来た。だから彼と一緒に居たいと冒険者になったし、少しでも力になりたいと天使の力を振るった。

「でも……そうだよね。自分より圧倒的に強い娘なんて、側に居たら嫌だよね」

薄々それにノエルが気付いたのは、二人のレベルがダブルスコアを刻み始めた頃だ。

差を埋めようと焦ったのだろう。次第にヤマトが無茶をし始め、大怪我をする機会が増えた。背伸びをして難しい依頼に挑むようになって失敗が増え、せっかく依頼に成功しても上がるのはノエルの評価だけ。実らない努力だけが降り積もり、なかなか成果は上がらない。

ヤマトは強くなりたいと言って冒険者になった。きっと父親のように家族を守りたいと願い、その力を欲したのだろう。だが彼の目的を、自分が邪魔してしまっている。

「私が自立しなきゃ、とは思うんだけど……」

そう思うものの、度々大怪我をする彼を放っておけず、また居心

地の良さに決意が定まらず、ズルズルと時間だけが経ち……とうとう愛想を尽かされ、彼はどこかへと行ってしまった。

きっかけとなった、ほろ酔い亭での一件は……思い出すだけで心も身体も鉛のように重くなる。

突然のキス……サークスが、前触れも無くあんな事をするだなんて今でも信じられない。思わず突き飛ばしてしまうくらい、物凄くショックだったが……英雄と謳われるサークスの面子を大勢の前で潰すわけにも行かず、強く否定できなかった。

あの時ヤマトは、どんな気持ちでサークスに殴り掛かったのだろう？　守るべき家族に手を出された怒りか、それとも――。

「はぁ……とっておきだったんだけどなぁ……」

唇に触れ、再度の溜息。切り札であったファーストキスは、くれてやろうと思っていた者の前で、別の男に奪われてしまった。といっても幼い頃のキスや応急処置の人工呼吸やらで、本当の初回分は遠の昔に失っているのだが……それとこれとは、また別物だろう。

それに嫌われてしまえばキスなどする機会も永久に失われたわけだし……。

そう思うと、またも溜息が漏れて陰鬱な気分がぶり返す。

「私が、もっとはっきり意思表示しとけば良かったのかな？　でも今更……自分勝手過ぎるよねぇ？」

見上げた夜空に問いかけると、悩みと共に、深い後悔が押し寄せる。

ヤマトにはもうアデリーネが居る。賢く思慮深い彼女なら、自分などよりも遥かに上手く彼と寄り添って行けるだろう。もう彼に、ノエルという天使は必要無い。むしろ邪魔だ。

「でも……」

会って、話をしたい。誤解を解きたい。あの時は動揺してて上手く言えなかった色々な事を、とにかく伝えたい。

我侭なのはわかっている。だが、あの雨の夜に出来なかった事を……形振り構わず我を通す行為を、今ならば出来る気がする。

今すぐ飛んで行こう、彼の元へ。その能力が今の自分にはある。今なら指先も翼も自由に動かせる。もう取り返しなんてつかない、終わってしまった事だ……でも後悔はしたくない。また拒絶されてしまうかもしれないが……こんなに心ざわめく夜を過すのは、もう嫌だ！

「……うん、行こう！」

カーディガンを投げ捨てて集会所に駆け込むノエル。自分の荷物をひったくる様にして小脇に抱え、誰にも見つからないよう頭を低くして外に出る。そして翼を大きく広げ、一気に夜空へと舞い上がった。

あっという間に周囲の建物が下に流れ、眼下に開ける景色。肌を刺すような冷気の中、真っ暗な世界を月が照らし、山々や村の建物を紫色に光らせている。

サークスや村の人たちには悪いが、出発を告げるわけには行かない。きっと引き止められてしまうから。半ば衝動的にこんな事をして……皆の信頼を裏切って。天使のくせに……いや、一人の責任ある大人として、本当に酷い事をしていると思う。

「そういえば私……昔は我侭だったとか思って、苦笑いしてたんだっけ」

だが結局は、あの頃から何も変わっていなかったようだ。三つ子

の魂百まで――いくら取り繕っても、我侭で臆病で泣き虫で……優しいあの人につい甘えてしまう、ノエルの性格は変わらない。

「……ごめんなさいっ！」

翼をはためかせ、村の上空を離れようとしたノエル。その目に……明りが映った。

揺れ動く、オレンジ色の明り。松明だろうか？　一つではない、数えるのが面倒なくらいの数だ。それらが村の中央付近、広場と呼ばれている辺りに集まっている。

草木も眠る丑三つ時。日が昇れば目を覚まし、日が落ちれば眠る文化が根差すこの世界で、こんな真夜中にどうしたのだろう？

何か、あったのかもしれない。

ノエルはヤマトへの想いに後ろ髪引かれながらも、高度を落とし、ゆっくりと光へ近付いて行くのだった。

第三十三話：悪魔の姦計（二）

村の中央広場。普段の昼間ならば主婦たちが集って語らい、子供が駆け回り、秋にはちょっとした祭りでも開かれているのだろう。

暗闇の中、松明を手に広場に集まる人々……村人、ほぼ全員だろうか？　夜である事もあってか高齢者の姿は少なく感じられたが、それでもかなりの人数だ。

彼らは広場の片側に集まり、どこか浮かない表情で広場の反対側をじっと見ている。

「ああ、来たのかノエル。もう少し経ってから呼びに行こうと思ってたんだけど、手間が省けたよ」

村人たちがじっと見る先……広場の中で最も見通しが良い位置に陣取っていたサークスが、家の影から広場をこっそり覗き見ていたノエルに気付き、声を掛けた。

しまった、と思ったノエルだったが、こうなっては仕方ない。大人しく皆の前へと姿を現す。

「どうも……」

「やあノエル、良い夜だね。天使は色々と光って目立つから、隠密活動には向かないようだ。今も物陰から光が漏れていたよ」

「お恥かしい限りです……それはそうとサークスさん。こんな真夜中に何を？」

視線を感じながら、広場を見渡すノエル。概ね覗いた時と変わりなかったが、少し見え辛い場所に馬の獣人バラが、意味ありげな微笑を湛えて立っていた。

「何の集まりかって？　いや、ちょっとね……村の様子を見てて、実験をしてみたくなったんだ」

ゆっくりとした口調で語り出すサークス。彼は何故か、前回の探索行で手に入れた伝説の装備『賢者の鎧』を身に纏っていた。全ての攻撃を無効化する、ある意味で究極の鎧。しかしノエルには鎧の色……松明の炎を映して輝く、傷口から湧き出す血のような真紅の外装が、白銀のサークスと呼ばれる彼には相応しくないと感じられた。

「僕はずっと前から考えていた。天使の力の源は何なのだろう、と。だって、おかしいじゃないか。殆どの生き物は何かを食べて生き、悪魔でさえ人の欲望を糧とすル。それなのに天使は？　何を糧にして生きてイるんだ？」

「……サークスさん？」

サークスの様子がおかしい。いや……冷静に振り返ってみれば、しばらく前からおかしかった。

どこかドライでビジネスライクな部分がありつつも、基本的には善人でパーティーの為に最善を尽くそうと努力するサークス。伝説の武具捜索に情熱を傾ける、男性らしく熱い一面も持っている――そんな彼のイメージから、今の彼が剥離し始めたのは何時頃からだったろう？

「そして僕は思イ至った。神は、人々の信仰心を力とする。だとすれば、その僕たる天使も同じでは無イのカ？　と」

「あなたは、一体何を……」

ノエルがサークスを問い詰めようと一歩を踏み出した瞬間だ。彼は腰の剣を抜いた。そしてそのままの勢いで、ノエル目掛けて横薙

ぎに刃を振るう！

「食らえ！　滅空ッ！！」

魔力迸る銀の刃から濁流のように膨れ上がる衝撃波。粉塵を巻き上げながら、たった数発で巨大なスライムを蒸発させ、ノーウェイの屋敷を半壊させた威力がノエルに襲い掛かる。

もしも彼女が無力な女性であったなら、今頃跡形も無く吹き飛び、広場に集う人々もまた粉々に砕け散っていただろう。だが、そうはならない。

「何をなさるんです、サークスさん」

軽く手をかざして平然と立ち、天使ノエルが言う。彼女は無事だ、村人たちも傷一つ負っていない。それどころか何が起こったのかさえ理解していないだろう。

サークスの前面に形成された光の膜。ノエルによって作り出されたオーロラのように優雅な動きを見せるその薄い膜が、放たれた必殺の衝撃波を受け止め、風さえも、音さえも防ぎ霧散させたのだ。

「流石は天使！　だが、これならどうだッ！」

下段に構え、剣の刃に魔力を収束させるサークス。集めた魔力を爆発させるのではなく、集中し、切れ味を増す事に特化させた技。名付けて……。

「裂空ッ！！」

空を裂き、鋼さえもバターのように切り裂く刃が、華奢な天使の身体を捉えた……かに見えた。

「無駄ですよ」

魔力を帯びた銀の剣はノエルに届く事さえ無く、彼女の手前で光の壁に弾かれた。剣に集まっていた魔力が弾け、眩いばかりの光を放つ。絶対的な天使の力は、人類最強クラスの実力者が放つ渾身の攻撃でさえも揺るぐ事は無い。

「こんな事をして、何のつもりで……？」

追求を深めようと、口調を強くした時……ノエルは彼の異変に気付いた。

「あの、サークスさん？　それは、その目は……！」

ノエルが見咎めた物。それは彼が身に付ける鎧と同じ、真っ赤な色に爛々と輝くサークスの目だった。その赤色は深く暗く、今までに何度も見た、欲望に負けて魂を売り渡した者たちの色。

「チッ……やっぱりダメだね。全力を出すと影響を隠し切れなイ。ワリと高性能な身体だけど、こればかリは仕方なシか」

「悪魔憑き……！？　まさか、そんなっ！」

あれほど強い男性が、悪魔に魂を売るような事が現実にあるのだろうか？　そんなノエルの先入観が瞳を曇らせ、発見を遅らせた。この所ずっと側に居ながらサークスが悪魔憑きとなっていた事に気付かなかった。対悪魔のエキスパートとも呼べる天使が、なんという体たらくだろう！？

「気に病む事は無いよノエル。この所、ゴタゴタとしていたからね。

天使としての本分に目が向いていなかったとしてモ……誰もキミを責められなイ」

「くっ……サークスさんの口を使って、悪魔がっ！　知った風にっ！！」

声を上げ、翼を広げるノエル。眩い光の粒が風に踊って弧を描き、夜空に星屑となって舞い広がる。

ノエルは怒っていた。サークスを惑わせた悪魔に……それに気付かなかった自分自身に。いくら知り合いでも、世話になった恩人でも、悪魔に魂を売った者を野放しには出来ない。滅ぼすしか無いのだ。サークスが甘言に惑わされるより前に、いくらかでも兆候に気付けていれば食い止める事が出来たかもしれない。だが、もう遅い。こうなってからでは、救う事は出来ない。

「罪をっ！　悔い改めて下さい！！」

ノエルが右手を突き出すと辺りを漂っていた光子が集まって輝く槍となり、その手に収まった。すぐさま投擲の構えを取るノエル。狙うはサークス、ただ一人！

「ブヒッ！　俺を忘れてもらっちゃ困るよ、ノエルちゃあぁぁん！！」

だがノエルの行動を阻止しようと、バラが背後から飛び掛かった。右手にはメイスと呼ばれる金属製の鈍器。当たれば人の頭蓋を粉々に吹き飛ばす威力を秘めたその武器で、ノエルの頭部を狙う――だが！

「どいてて下さいッ！！」

一喝！

ノエルの発した気迫は衝撃波となり、自身の倍はあろうかという巨躯の獣人を、広場の端まで弾き飛ばした。

積み上げられていた角材の山に激突して半ばまでめり込み、目を回すバラ。そんな彼を捨て置いて、ノエルは創り上げた光の槍を改めてサークス目掛けて投げ付ける。

暗闇に光の軌跡が刻まれた……そう認識された直後、狙い違わずサークスの胸板に命中、そして爆発！　聖なる光は質量を伴わず、何かが吹き飛ぶような事は無かったが、あまりに凄まじい光量に人々は目を覆い顔を背ける。

「……こんな事になるなんて……」

呟くノエル。光の槍はサークスの心臓を貫いた筈だ。

悪魔憑きは全身を完全に焼き尽くさぬ限り、その凄まじいタフネスで再び蘇ってくる事も多い。だが人の姿を多く残す今のサークス程度であれば、心臓を失えば命を保つ事は出来ないだろう。

そう考え、彼の状態を確かめる事無くノエルは集中を解く。それは光の槍に貫かれ、無残にも傷付いた恩人の姿を見たくないという無意識が働いての事だったろう。

だが彼女は知る事となる。それがいらぬ心配であったと、目の前に現れた現実によって。

「やれやれ、ヒドいな。相手が悪魔だとわかると、本当にキミは容赦が無いネ」

「……！？」

我が目を疑うノエル。光の槍を受けたはずのサークスが、平然と自分の前に立っている。傷一つ無く、いつもと同じ薄笑いを浮かべ、真っ赤な鎧もそのままに。

「あ……！」
「そうイう事さ、ノエル」
賢者の鎧だ。伝説に名を残す鎧は、あろう事か天使の一撃さえも無効化して見せたのだ。
「ま、天使といえど……こんなモノ、というワケだね」
サークスの台詞に同様を隠し切れないノエル。それはこの場で戦いを見守る住民たちにしても同じだった。悪魔を倒すために創られたと噂される鎧が、悪魔の力となってしまったのだ。
「さて。ではソロソロ、こちらのターンといった頃合か」
余裕の表情で佇むサークス。彼は剣先をノエルに突きつけ、こう宣言した。
「後ろの連中……彼らの命が惜しければ、僕の言う事を聞くんだ」
「……人質のつもりですか？　汚い真似を……ですが無駄ですよ」
人質を取られてもなお、凛とした態度を崩さないノエル。それは天使として、人の命よりも悪魔を滅ぼす事が大事……という意味では無い。
「サークスさんには見えないかもしれませんが、住民の方々と私たちの間に光の壁を展開しています。先程の攻撃くらいで、この壁は破れません」
サークスが悪魔憑きと知れた時、ノエルは光を操ってドーム状の

壁を創り出し、住民たちを囲っていた。それは人質を取られる事を避け、戦闘の余波から彼らを守る為。悪知恵の働く悪魔から人々を守ろうと、ノエルが巡らせた予防線だった。
しかし悪魔の奸策は、天使のそれを上回る。

「キミにも見えてないみたいだね。良く見てご覧よ、住民の皆さんを」
「……？」

サークスに言われるがまま、そっと視線を背後へと移すノエル……そして気付いた。
立ち並ぶ人々。その内の何人かの目が、血のように赤い。サークスと同じ、真紅の輝きを放っている！

「あらかじめ何人か、キミたちの言葉で言う所の悪魔憑きを紛れ込ませてアル。ついさっき目覚めたばかりだから力は弱いけど、お隣さんを縊り殺すくらいなら一瞬だヨ」
「なっ……！」

ノエルの表情から余裕が消えた。今、彼女の位置から見えているだけでも三人。人の影になっている者を含めれば、何人くらいの悪魔憑きが居るのだろう？　四人、いや五人か？　そのくらいなら一気にまとめて滅ぼせるかもしれない。だがそれにしたって、しっかりと位置が判明していると仮定しての話。どこに隠れているかもわからない悪魔だけを一瞬でピンポイントで、しかも複数体倒すのは……無理だ。

「……わかりました、サークスさん。あなたに従いましょう」
「話が早くて結構だねノエル」
「ですが、どうするつもりです？　先に言っておきますが、天使の

防御能力は無意識の物。意図してオフにしたりは出来ないのです。ですから私を倒そうにも、あなたでは傷一つ付ける事はできませんよ」

なるべく言葉を選び説明するノエルに、サークスはいつもの薄笑いを浮かべる。冷たい氷を思わせる、薄気味の悪い笑みだ。

「だから……実験なのさ」

サークスは言った。

神は人々の信仰によって力を得る。もし天使もそれに順ずるのなら、その信仰心を無くしてやればどうだ？

「信仰……すなわち信じる心。偉大な存在を心の拠り所として頼る気持ちだ。人々の、天使に対するそんな気持ちヲ全て奪った場合、一体どうなるのか……気になるよネ？」

語り終えた時、ノエルの顔色が明らかに変わった事をサークスは見逃さなかった。やはり、と確信じみた手応えがある。

これまでに見たノエルの立ち振る舞い……誰にも嫌われないように、大勢の者から好かれるように。ヤマトの前でだけ見せる素の自分を殺し、天使としての体裁を重んじた行動。それらは全て、天使の力の源である信仰を保つ為では無かっただろうか？

そうであるなら色々と合点が行く。

何故ヤマトが必要以上に自身を悪者としていたか、やけに周囲から嫌われていたか――きっと彼は知っていたのだ。ノエルの……天使の止むを得ない事情を。だから自分に悪意を集中させる事で、彼女を庇っていたのだ。

そしてヤマトが去った夜、ノエルは後を追わなかった。太郎丸とアデリーネが去った時もだ。これは天使という種族が持つ防衛本能、

あるいは神の束縛であったのだろう。みんなに平等で、誰からも愛される天使である為に――。

「というわけで、ノエル」

青ざめる天使へと、笑顔のまま剣を突きつけるサークス。あの邪魔な小僧が一人居ないだけで、これほどスムーズに事が進むとは。雑魚は雑魚なりに役立っていたという事だろう。

「キミにはこれから、堕ちてもらウ。後ろの連中が信仰の対象としてキミを見れなくなるまで、徹底的に……ネ」

「……！」

ノエルは思った。自分は、ここで死ぬかもしれないと。

かつて地上に降りたその日に感じた絶望。それと全く同じ物が、足音を立てて直近にまで迫っている。

「まずは、そうだな……服を脱いでもらおうカ」

ノエルはもう少し早く、彼の下へと飛ぶべきだったのだ。

第三十四話：悪魔の姦計（三）（前書き）

このお話には残酷な表現と、性的な表現が含まれます。苦手な方は十分にご注意下さい。

第三十四話：悪魔の姦計（三）

揺れる松明の炎が、夜の広場をオレンジ色に染め上げる。
暖色に染まる世界。その中において唯一白い輝きを放つ者が今、屈辱に震え、華奢な身体を強張らせている。

「聞こえなかったのなラ、もう一度言おう。ノエル、服を脱ぎたまえ。裸になるンだ」

広場の中央に立つノエルのすぐ前でサークスが余裕たっぷりに言って、地面に突き立てた銀の剣に肘を乗せる。その声は聞き慣れたサークスのようでありながら、どこか邪な色を感じさせる不快な物だ。そして、最近どこかで聞いたような声……。だがその事に言及する余裕は、今のノエルに無い。

「は、裸って……こんな所で、こんな大勢の前で!?　そんなの……」
「おっと、ソコまでだノエル」

声を上げかけた天使の少女を、悪魔と化した男が遮る。

「今後、もしキミが僕に対し異論を申し立てたり、不満を陳べたりした場合……一回ゴトに住民を一人殺ス」
「なっ……！！」

剣を指先だけで摘み上げ、住民の方へと向けるサークス。

「そうだな、最初はソコに居る……ガキにしよう」

指し示された目線の先。そこに居たのは母親に抱かれた小さな子供……先程、集会所でノエルが最後に診た親子だ。

状況が飲み込めず不安と恐怖に震える母親と、何も知らず眠り続ける幼子。何の罪も無い、本来ならば何の関係も無い二人だ。

「……わかりました。でもサークスさん、約束して下さい。私が言う通りにしたら、他の方々には手を出さないと」

「ああ勿論。悪魔は契約でメシを食ってイるんだ。約束は破らなイ……絶対にね」

くるりと剣を回し、鞘へと収めるサークス。そして「これで少しは信用してもらえるか？」と、手を広げアピールして見せた。

「さあノエル、わかったのナラ……脱ぎたまえ」

促されて悔しげに唇を咬み、ノエルは自らの服に手を掛ける。腰紐を解き、袖から腕を抜きながら、こんな事になるのなら……と、今更どうしようも無い事に思いを馳せる。

やがて純白のローブが地面に落ちた。その下から現れたのは、同じく純白の下着だけを身に纏った、純白の肌を持つ天使。その姿を遠巻きに見つめる住民たちの間からは溜息にも似た歓声が漏れ、恥辱に震える天使の頬を紅色に染める。

「ナニをしているんだい、下着もだヨ。裸になれって言っただろ？」

サークスの命令に容赦は無い。ノエルはカタカタと鳴る歯を食いしばり、まずは胸元の布地を。次に腰周りを隠す布地を取り払う。

「手や翼で隠しちゃダメだ。今後、少しでもそんな素振りを見せたら……ワカってるね？」

「……はい」

裸体を隠す事さえ禁じられ、大勢の前で一糸纏わぬ姿となり、ただ立ち尽くすノエル。恥かしさで肌はほのかに紅潮し、大きな目は潤んで今にも涙が零れ落ちそうだ。

だがそんな本人の気持ちとは裏腹に、彼女の立ち姿は神々しさを感じる程に美しかった。神が創り出した芸術品、そんな言葉が見る者の心に浮かび上がる。

「良イ格好だねノエル。前に見た時よりモずっと、今の方が美しイ。そうやっテ恥かしそうに唇を噛むキミの姿を、ボクは見たかった」

サークスの言葉に、握り締めたノエルの両手が震える。悪魔の言いなりとなっている自分に腹が立って仕方ない。もし許されるなら今すぐ飛び掛り、卑劣な悪魔の横っ面に拳を叩き込みたいだろう。

「ヨシ次は、四つん這いになってボクの靴を舐めろ」

「っ！！」

だが、この状況でサークスに拳を見舞うなど、夢のまた夢だ。罪の無い人たちの安全を確保する為には、屈辱を受け入れるしか無い。

言われた通りに四つん這いとなり、赤子のように這いずってサークスの足下へと移動する。そして長い髪をかき上げて頭を下げ、賢者の鎧の一部であるブーツ部分へと舌を伸ばす。

ノエルの舌が、サークスのブーツに触れた瞬間……村民たちの間から「あぁ」と声が上がる。それは天使が悪魔に屈したという事実を見せ付けられた、落胆の溜息だった。

その声を聞きながらノエルは思う。今はこうするしか無いのだと。みんな、わかって！　と。

「ナニをシてるんだ？　表面だけじゃなくて、靴の裏も舐めなきゃダメだろ」
「くっ……は、はい」

サークスの言葉に頷き、そっとブーツを持ち上げて足裏にも舌を這わせる。ざらりとした砂の感触と土の味が口一杯に広がり、喉の奥からは何度も嘔吐感が込み上げて来た。だがその度にぐっと堪え、吐き気を飲み下し、またブーツを舐める。右足が終われば次は左足だ。表面だけでなく、今度は言われる前に裏面にまで舌を伸ばす。

「そうだ。良く出来たネ、ノエル」
「ふひっ。ノエルちゃん、次は俺のもキレイにしてもらえるかい？」

ようやくサークスのブーツを舐め終えたノエルの前へ、太い足を差し出したのはバラだ。獣人である彼には足に蹄があり、ブーツを必要としない。つまりノエルは直接バラの足を舐める事になるのだが……ソレはサークスに比べ、あまりに汚かった。泥や小石が割れた蹄の間に入り込み、顔を近づけただけで泥臭い悪臭が漂ってくる。

「どうしたノエルちゃん、嫌なの？　それなら……」
「い、いいえ！　出来ますっ！　よ……喜んで！」

慌てて声を上げ、ノエルは覚悟を決める。息を止め、目を閉じて、思い切って舌を突き出した。

「ぶほほっ、サイコーだねコレ！　気持ちイイし、裸のノエルちゃんを上から眺めるってのもスバラシイ！」

鼻息荒く、ご満悦の表情であれこれと賑やかに声を上げるバラ。更には命令に逆らえないノエルに対し、蹄の間まで舐めろだとか、

もっと舌を出せだとか、ああだこうだと指示を出しては楽しんでいるようだ。

その様子に、村人たちの失望は深まる。この如何ともし難い状況下の中、唯一の希望たる天使が悪魔の手に落ちたのだ。あまりにも他人任せ過ぎるという嫌いも有るだろうが……理性はともあれ、感情は止められない。

「おい、バラ。そろそろ良いだろウ？」

「そんな、大将！　まだ、もうちょっと！　あと百と八つ、試してないプレイがあるんだよぉ！」

「そう焦ルな。楽しミは後に取っておくモノだ」

サークスの説得によって、ようやくバラの足下から解放されるノエル。開きっぱなしだった口が疲れ、舌の根元がダルい。普段であれば少々の事では疲れさえ感じないのが天使なのだが……。

「ふむ。そろそろ、ヤってミるか」

顎に指先を当てて首を捻り、サークスがノエルの髪へと手を伸ばす。

「な、何を……」

不安げなノエルの声に応える事無く、彼女の金髪を二、三本掬い上げるサークス。細くしなやかなその髪をくるくると指に絡め取ると、渾身の力を込め、勢い良く引っ張った。

「痛っ！」

ぷつん、と小さな音と共に根元から抜けるノエルの髪。サークス

の指に絡め取られた美しい金髪は、ほどなく光の粒子と化して虚空へと流れ、消えて行く。

「ふ……ふふふっ！　フハははは っ！！」

自らの手を見つめ、突如、高らかに笑い出すサークス。周囲が唖然とする中、彼の高笑いは続く。

「ヤった、ボクはヤったぞ！　とうとうヤって見せた！　天使に傷を負わせてやったんだ！！」

その行為は端から見れば、細い髪を数本抜き取っただけに見えただろう。だが悪魔にとってみれば、天使という鉄壁の城砦を崩す、大きな綻びを探り当てたに等しい。

「よし、バラっ！」
「あいよ大将、待ってました！」

足を舐められた余韻を楽しんでいたバラが、サークスの声にスキップで駆け寄ってくる。

「お前の馬鹿力で、この天使の羽を全て毟り取ってシマエ」

その台詞に、ノエルの顔から色が失せる。
髪を抜く事が出来たという事はつまり、羽だって……。

「や、やめっ……！！」
「悪いなぁノエルちゃん。大将の命令だからよぉ……俺だってツライんだぜ？　ふひひっ」

ノエルの純白の翼、その片翼がバラに掴まれた。咄嗟に振り払おうと翼に力を込めたノエルだったが、バラの力は思いの他強い……いや、彼女の力が弱まっているのだ。到底、敵う力では無いと感じられる。

「い、いやっ……！　ダメっ！！」

バラは翼の付け根を踏みつけて固定すると、無造作に翼の先端部分を掴む。風切り羽と呼ばれる最も大きな、そして飛行する上で非常に大事な羽が生えている一帯だ。

何をされるのか、されてしまうのか。避けたいが避けられない未来を前に、ノエルは目を閉じて身体を強張らせる。そして……。

「そぉれいっ！」
「うあッ！！」

ブチブチと嫌な音がして、天使の羽がバラの手によって引き抜かれた。光子が散り、激痛が翼全体に広がる。

「続けて行くぜーっ！」
「イヤぁっ！……もう止め……きゃう！！」

力任せに毟り取られ、空に舞う白い羽。それらは髪の毛と同様、すぐに光子へと分解されて輝きながら消えて行く。それが何度も何度も繰り返され、次第にノエルの片翼から羽が無くなり、代わりに地肌が見え始める。

「ふひっ、コレ楽しいねぇ！　まるで鳥の毛を毟ってるみたい！　ぶひひっ！」
「そうか、そんなに楽しいかバラ。ではボクも、参加させてもらお

うカナ？」

サークスがバラが掴むのとは逆の翼を捕えると、ノエルは「ひっ」と短く悲鳴を上げた。その時に見えた彼女の表情は、今にも泣き出してしまいそうな、弱々しく力無い少女の物だ。

「それじゃあ、イクよ？」

「だ……ダメぇっ……！」

ニヤリと笑い、剣を抜くサークス。銀の刃へ急速に魔力が宿って火花が迸り、その切れ味が何十倍にも増して行く。

奥義・裂空。先程ノエルが事も無く、楽々と跳ね返した技だ。しかし今回は……。

「ふははっ！　バラよ、確かにコレは面白い！！　なんと痛快な遊びだ！」

「そうでしょう大将！　いやっほうーーー！」

「イヤあぁぁぁぁっ！！」

翼に押し当てられた銀の刃が動く度、バリバリと音を立てて羽が刈り取られて行く。根元から翼の先まで、羽も羽毛も全て根こそぎ、まるで羊の毛でも刈るような光景だ。

「あぁぁぁぁっ、やめて……お願い……お願いだからっ……！」

どんどん減って行く羽。夜の闇に、光の粒が舞う。

小さな頃に傷付いた天使の翼。それをヤマトが、家族が、長い時間と深い愛情で癒してくれた。天使にとって……ノエルにとって、とても大切な翼だ。その翼が今、二人の暴漢によって踏み躙られ、蹂躙されている。

どうにかして守りたい。失いたく無い！　だが力無き少女には、どうする事も出来ない。

「一本残さず、綺麗に抜くンだぞ。最終的にはノエルを、本当の意味で丸裸にしてヤルのだからな」
「わかってますよ、大将！」

悪魔たちが、そんな会話を交わしてから十数分後。彼らの足下には、地面に伏せて震える、裸の少女が横たわっていた。その背中には茹でた手羽先のような『翼だった物』が一対、所々に血を滲ませながら、くっついている。

「惨めな姿だね、ノエル。アノ時とは、大違いの情けなサだ……」
「なぁ、大将。そろそろ……」

ヨダレを垂らすバラが、揉み手するのも面倒な様子で、鼻息荒くサークスに擦り寄る。

「ソウだな、もう大丈夫だろう」

言って、サークスはノエルの地肌剥き出しとなった翼を無造作に掴み、勢い良く膝に打ち付けた。若い枝が折れるような音がして『翼だった物』が、関節では無い所からグニャリと折れ曲がる。

「念の為、コッチもだ」
「ぎゃうっ！！」

骨を折られ、中程からくたりと垂れ下がる肌色の『翼だった物』。更にサークスはノエルの足首にも剣を走らせ、両脚の腱を切断した。

「コレで、飛ぶ事も歩く事も出来ナイ」
「ひゃっほう！　もう逃げられないね、ノエルちゃん！」

サークスたちの声に、ノエルは応えない。応える事が出来ない。絶望に沈む彼女に出来る事は、せめてこの悪魔たちに、泣き顔を見せないようにする事だけだ。

「じゃあ大将、お待ちかねの……」
「アア、綺麗な顔がグシャグシャになる前に、楽しませてもらうとしよう」

銀の剣を鞘に戻したサークスが、邪悪に歪む表情で言った。

「ノエルの脚を開かせろ」

第三十五話：悪魔の村（一）（前書き）

このお話には残酷な表現と、性的な表現が含まれます。苦手な方は十分にご注意下さい。

第三十五話：悪魔の村（一）

曇天が続く空模様と同じ胸中を抱え、太郎丸とアデリーネがその情報を掴んだのはつい先日。行方知れずとなったヤマトを見付けられぬまま、捜索開始から二週間が過ぎようとしていた日の事だった。

「天使を捕らえ嬲り者にしている村があると聞き、まさかと思い来てみたが……」

「そのまさか、でしたね」

村から少し離れた雑木林の中。木陰に身を潜めて、太郎丸とアデリーネが囁きあう。彼らが見つめる村の広場……そこには十字に組んだ磔台があり、ボロボロとなった天使の娘が逆さに吊るされ、裸で晒し者にされていた。

磔台へ横向きに通された棒。その両端に左右それぞれの足首を縛られて、脚を開いた状態でぶら下げられる天使。体中の至る所が傷付けられて乾いた血がこびり付き、何箇所かの真新しい傷からは、今も血が滲み出していた。

足と違い腕は拘束されていないようだが、脱臼、あるいは骨折しているのだろう。ぶらりと力無く垂れ下がり、ピクリとも動かない。そして腕と同じく垂れ下がる一対の翼。骨を砕かれ羽を毟り取られたむき出しの地肌は、内出血が酷く赤紫色に染まっている。

「ノエル様……でしょうか？」

「そうで無い事を祈るが、多分……な」

あまりにも変わり果てた姿に、遠目からでは本人であると確認できない。だがこの近隣でノエル以外に天使が居ない以上、磔台の天使が彼女である可能性は極めて高かった。

「先に聞いたお話とも、一致しますものね」

アデリーネの言葉に黙って頷く太郎丸。

村を占拠した悪魔たち。そのリーダー格である赤い鎧の男と馬顔の獣人は、捕えた天使の娘をノエルと呼んでいた――。噂の発生源でもある、村から逃げ出した住民たちの言葉だ。

彼らによれば、その天使は成す術も無く悪魔に囚われ、今もなお良い様に弄ばれている、との事だ。

「酷い事をする……ともかく、あれが誰であれ助けぬわけには行くまい」

「はい、太郎丸様。ですが……」

視線の先に見えるのは、磔台の下に群がる真っ赤な肌をした幾つかの人影。村の元住民であり、悪魔の甘言に耳を貸した愚か者たちだ。農具として使っていた鍬や鋤で武装し、見張りの如く磔台を取り囲んでいる。

「さて、どうした物か……」

考え込む太郎丸。悪魔と化した元人間を相手に、どこまで戦えるだろうか？

悪魔は確かに手強い存在であるが、倒せぬ存在では無い。憑いた相手が人間であるのなら、多くの場合において敏捷性で人狼が上回るだろう。ノーウェイの屋敷では不覚を取ったが……あれは別だ。相手が手強かった上に、倒したと思い油断していた。

そういった稀な要素と自らの油断を取り除いて考えた場合、悪魔たちの不意を付いて磔台に飛び乗り、ノエルの拘束を解く……ここまでは良い、多分大丈夫だ。しかし、そこから先はどうだ。

あの様子では、ノエルは自力で歩けまい。そうなれば担いで走らなくてはならない。いくら敏捷性で上回るとはいっても、人を担ぎ、無尽蔵ともいえるスタミナを持つ悪魔を相手に、果たして逃げ切れるだろうか？

多分、無理だ。追いつかれてしまう。

「あの……太郎丸様、ちょっと宜しいですか？」

「む？　どうなされた」

アデリーネが遠慮がちに尋ねる。

「もしも私が悪魔たちの気を引けたなら……太郎丸様はノエル様を連れて、脱出できますか？」

「……！」

可能だ。

一分……いや、たとえ十数秒であっても時間を稼いでくれたなら、ほぼ間違い無く脱出し、身を隠す事ができる。その自信がある。

だが太郎丸はその言葉をアデリーネに告げる事が出来なかった。それはそのまま、アデリーネに囮になれと告げるのと同じ意味であったからだ。

「可能なのですね？　わかりました、では太郎丸様……」

「し、暫し待たれよアデリーネ殿！　そのような事をしても、ノエル殿は喜ばぬぞ！？」

太郎丸が言った言葉はアデリーネを思い留まらせる為、咄嗟に思いついた言葉だった。だが彼は、その言葉を口にした直後に激しく後悔する。自分の使った言葉が様々な意味を含む事に気付いたのだ。

「確かに仰られる通り、ノエル様は私に助けられたと知れば……きっと複雑なご気分になられるでしょうね」
「あ……い、いやその……」
この知的なエルフの娘は、すぐ太郎丸の失言に気付き、チクリとやり返した。
アデリーネは間違いなくヤマトを好いている。そしてノエルもまた、アデリーネの気持ちに気付いているフシがあり……云わばライバル関係の二人だ。そんな状態でアデリーネに助けられ、果たしてノエルは素直に喜べるだろうか？
よりによって、この女に助けられてしまうなんて。これを理由に恩を売られるのではないか？　ヤマトを取られるのではないか？
明確に意識はせずとも、そういった不安に似た考えが頭を過ぎるであろう事は想像に難くない。アデリーネは恋敵を助けた上、そのように勘ぐられてしまうのだ。
「すまぬ、某が軽率だった……謝ろう。この通りだ」
アデリーネは思慮深く、優しい娘だ。自分の存在こそがノエルを不安にさせる要素だと気付き、分を弁えて己を殺し、一歩下がってヤマトとノエルを見守っている。そんな彼女へ、自分はなんと浅はかな事を言ってしまったのか。太郎丸は思慮の足らない自分の言動を恥じ、深々と頭を下げた。
だが彼女はくすりと微笑み、言ったのだ。
「冗談です、太郎丸様。どうぞ頭を上げて下さい――私、少し意地悪でしたね」
申し訳ございません――。そう告げて、アデリーネは立ち上がる。

「私がここに居るのは、勿論ノエル様を助ける為。ですが、それだけではありません。もっと強く思うのは、少しでもヤマト様のお役に立ちたいと……そう思うからです」

言いながらベルトポーチを外し、ソフトレザーの鎧を脱ぎ始めるアデリーネ。

「太郎丸様……私が初めて皆さんとお会いした日の事を覚えてらっしゃいますか？　私は覚えております、昨日の事のように」

最初、ヤマトを屋敷で見た時――半裸の自分をじっと見つめる小柄な少年に、アデリーネは微かな興味を抱いた。

ノーウェイに身体を預ける自分に対し、大半の者は蔑んだ目で見るか、好色な目を向けるか、無関心を貫くか。そのどれかだった。それに当てはめるなら、最初のヤマトは好色な目でアデリーネを見ていた事になるだろう。

だが彼は自分と目が合うと、顔を真っ赤にして目を逸らせた。単純に女性に慣れていないだけかと思って見ていると……直後に鼻血を噴出し、天使の娘に甲斐甲斐しく介抱され始めたではないか。

「初めてヤマト様とノエル様を見た時に思ったのです。なんて可愛らしい二人だろう、と。あの人たちと話をして、一緒に過す事ができれば……こんな私にでも、少しくらいは幸せを別けてもらえるのではないかと」

日々美貌を磨き、互いに蹴落としあうノーウェイの側室というポジション。互いに腹を探り合う屋敷の中にあってアデリーネは、誰かと一緒に過したいと思う事など、完全に無くなっていた。

そこへ彼が現れたのだ。微かにでも興味を抱ける対象……初心で純真そうで正直で、素直に好意を寄せる事のできそうな男性が。

「ですからヤマト様が私を庇って下さった時……本当に嬉しかった。運命という物があるのなら、これの事なのだと真剣に思いました」

鎧を脱ぎ捨て、軽装となったアデリーネ。さらにゴワゴワとした上着とズボンを脱いで、丈の長いペチコート――下着同然のワンピースに似た物だ――それだけを身に付け、ブーツも脱いでサンダルに履き替える。

「そして太郎丸様とお二人、生まれ故郷と古い友人を救って頂き……更には進むべき道まで示して下さいました。いくら感謝しても、し足りない程です」

ザックを開いて小さな手鏡を取り出し、軽く化粧を叩く。そして最後に、小さな花びらの付いた壊れた髪留めを外し……アップにしていた髪を下ろした。

「ん、よし。こんなものかしら……如何です？」

「お、おぉ……」

感想を求められ、太郎丸は思わず言葉に詰まってしまった。

アデリーネは鎧や上着を脱いで、髪型を変えただけだ。しかし先程までからは一転、種族の違う太郎丸でさえも一瞬どきりとさせられる色気が、今の彼女からは漂っている。

女は化けるという言葉の意味を、身を持って知る太郎丸。コクコクと頷く事しか出来ない。

そんな人狼の様子に満足気な微笑みを返し、アデリーネは村の方へと……囚われの天使へと視線を向ける。

「ですから太郎丸様、ご恩を返す機会を私に下さいませ。遠慮はい

りません。私の事は、使えば敵の気を逸らせる道具とでも考え、存分にご活用下さい。ノエル様がどう思われようと、ヤマト様の為に私が出来る事といえばこれくらいしかありませんし……私自身がそうする事を望んでおります」

「あ……アデリーネ殿！」

太郎丸は思う。自分はどこまで無力なのかと。

故郷に居た頃、そしてサークスと一緒に居た頃は、自分は強いと思っていた。評価されているレベルよりも真の実力では上だと、そんな自負さえ持っていた。だがヤマトたちと行動を共にするようになり、本当の強さという物を知る。

好いた女の為に身を削り、形振り構わずがむしゃらに、全力で進む男。

好いた男の為に種族の本分を捨て、常に寄り添い、共に歩もうとする女。

そして叶わぬ想いと知りつつも、好いた男の為に自らの全てを投げ打ち、捧げる覚悟を決める……今、目の前にいる娘だ。

彼らに比べ、自分のなんと弱き事、小さき事、情け無き事……。

「か、かたじけないッ！！　この太郎丸、全力を持って……命を賭して事に臨むと誓う！！」

人狼の両眼から、熱い雫が零れ落ちた。

絶対にやり遂げる。何が何でも、全力で、命の限り、あらゆる手段を持ってしてもアデリーネの気持ちを無駄にはしない。自分がどれほど弱かろうと、無力であろうと関係無い。

今こそ、男を見せる時なのだ。

第三十六話：悪魔の村（二）（前書き）

このお話には残酷な表現と、性的な表現が含まれます。苦手な方は十分にご注意下さい。

第三十六話：悪魔の村（二）

日が落ち、村の広場に篝火が焚かれだすと、暗闇に仄かな橙色の存在として浮かび上がる磔台の天使。

炎に松の枝が投入され濛々と黒煙が湧き上がると、その煙は磔台に絡みつき、容赦無く天使を燻し始める。だが彼女は……ノエルは何の反応も見せず、指一つ動かす事は無い。

「もう死んでるんじゃねぇのか？」

痩せた悪魔が言って、篝火から燃え盛る薪を一本引き抜いた。そしてノエルのアザだらけの胸元へ、その赤熱した先端をおもむろに押し付ける。

水が爆ぜるような音。同時にノエルの身体がビクンと震え、磔台を軋ませた。

「よしよし、まだ生きてるな。このブス、手間ぁ掛けさせんじゃねぇよ！」

苛立ち紛れに痩せた悪魔が、手にする薪でノエルの顔を殴りつけた。衝撃でパッと火の粉が舞い、かつて白磁の様だと褒め称えられた頬に、黒く焼け爛れた傷跡が増える。

「ちっ！　ここまで反応薄いと、何をしてもつまんないぜ。悲鳴ひとつ上げやしねぇ」

「顔も身体も、具合良かったの最初だけだったな。あとは無茶しても壊れない玩具ってくらいのモンだ」

「もう殺しちまっても良いんじゃねぇか？」

「そうだなぁ……お三方は伝説の手甲とやらを探しに出られたんだ

ろ？　わざわざ、ご命令を頂くまでも無いか」

口々に話し合う悪魔たち。その内容が、どうやってノエルを殺してやろうか……といった物に変わった頃だ。

「ちょっと、よろしいか？」

「なっ……！　何モンだテメェ！！」

夜から溶け出すようにして、その人狼は何の前触れも無くユラリと現れた。深い青色の瞳が炎を映し、静かに燃えている。

「怪しい者ではござらぬ。某は旅の商人……この村の噂を聞き付け、足を運んだ次第」

「……商人だぁ？」

武器代わりの農具を構えて訝しがる悪魔たちを他所に、旅の商人を名乗る人狼……太郎丸は続ける。

「お話を窺っておれば、その天使、もう始末なさるおつもりの様子。でしたら某に譲っては貰えませぬか？　勿論、タダでとは申しませぬ……おい、これへ」

太郎丸の声に応え、彼の背後からローブに身を包んだエルフの美女が姿を現す……アデリーネだ。

「見ての通り、これは天使同様に希少なエルフ。ある富豪の下であらゆる技術を仕込まれ、その嬌態たるや千金に値するとまで云われた逸品。これを、天使の代わりに置いて行きましょう」

太郎丸の言葉に合わせて小首を傾げ、にこりと微笑んだアデリー

ネ。一歩だけ前に出ると、艶っぽい仕草でローブの止め具を外して足下へ落とし、ペチコートだけの艶めかしい姿態を悪魔たちの前に曝け出す。

「お……おぉ……！」

ごくり、と生唾を飲み込む悪魔たち。

欲望を糧に生きる彼ら悪魔。村人の大半が逃げ出し、ノエルをボロボロにしてしまった今、彼らは欲望の捌け口に事欠いていた。そんな中、喉から手が出るほど欲しいと思っていたモノが目の前に現れたのだ。目の色も変わろうという物だ。

「この娘、某が言うのもなんですが……ソッチの技術はかなりの物ですぞ。少なくともボロ雑巾のようになった天使よりは、お楽しみ頂けるかと」

いやらしい手付きを交えて語った最後に、太郎丸は口の端を歪めて言った。「どうなさいます？」と。

「……」

一瞬の沈黙。悪魔たちは落ち着かない様子を見せ、ノエルとアデリーネ、そして太郎丸の間で視線を泳がせる。

じわり、太郎丸の手に緊張の汗が滲んだ。

ここまでは予定通り……だが連中がどう出るか、確かな事は何も無い。最悪、一挙両得を狙って襲い掛かって来る事さえ考えられた。そうなれば自分は、ノエルもアデリーネも見捨てて逃げなくてはならない。逃げて、逃げ延びて、仲間を集って再度ここへ……。悔しいが、無力な自分にはそれ以外に無いのだ。

「おい、商人」
「はい」

刹那、緊張による集中が、太郎丸の時間を長く長く引き伸ばす。悪魔が口を開く……あれは『お断りだ』と告げようとする形か――。作戦は失敗だ！　一目散に逃げなくては！

太郎丸が両脚に力を込める。だがそれよりも一瞬早く、隣で動く物があった。

「ふふっ……」

ふわり、風に舞い、流れるような青み掛かった銀髪。澄んだ水の如き輝きが、一同の目に映る。

アデリーネが髪をかき上げ、悪魔たちへと軽く微笑んだのだ。

「……その女を置いて行け。天使は、くれてやる」
「あ……ありがとう、ございます」

流れが変わった。太郎丸の全身から冷や汗がどっと噴出す。横目で見れば、アデリーネもこちらへと軽くウィンクを返して来た。その瞳は「このくらい余裕です」と語っている。

伸るか反るか、こういった瀬戸際での駆け引きを繰り返し、アデリーネはノーウェイの屋敷で側室として生き永らえて来た。欲に塗れた悪魔など、彼女にとってみればヤりたい盛りの若造と同じ。掌の上で転がすのに、何の苦労があるというのだろう？

「では……」

悪魔たちの脇をすり抜け、磔台へと歩を進める太郎丸。その耳に、悪魔たちの内緒話が聞こえて来る。

「良いのか、サークス様に告げず勝手な事して」
「どうせ最後には殺すつもりだったんだ、面倒は無い方が良いだろう」
「それにあれだけの上玉、中々お目に掛かれないぜ？」

何もかもアデリーネ殿の予想通りか。感服の至りだ。
心の中で呟いて、心からの賛辞をアデリーネへと送る太郎丸。だが彼が磔台へと登る頃、そのアデリーネは既に悪魔たちによって乱暴に押し倒されていた。
背後から聞こえる絹が引き裂かれる音と下卑た歓声。自らの無力さに指先を震わせながら、太郎丸は剣を振るい、ノエルを縛る縄を切って捨てる。

「確かに天使、貰い受けた」

しっかりと抱え上げた両の腕の中、ぐったりと横たわり、気を失ったノエル。間近で彼女を見た太郎丸は吐き気を覚える程の怒りに、我を忘れまいと魂を削らんばかりの努力を必要とした。
そこに、かつての可憐な天使の姿は無い。
体中の傷や痣は言わずもがな、特に酷いのが首よりも上だった。陽光を思わせる金髪は滅茶苦茶に毟り取られてざんばら髪となり、頭皮ごと剥れている部分まである。左目は潰れて大きく落ち窪み、右目は無事であるようだったが、目を閉じられぬように瞼が削ぎ落とされていた。鼻は折れ曲がり、歯は折られ、柔らかな唇も上下とも切り取られて歯茎が剥き出しとなっている。そして耳からも出血があり、果たして機能しているのかどうか怪しい所だ。

この……下衆どもがッ！！

今すぐ腰の剣を抜き、片っ端から切り捨ててくれる！　目の前が眩む程の怒りが、太郎丸を支配する。四肢の筋肉が膨れ上がり、全身の毛が逆立った。塵も残さず、木っ端微塵にしてくれよう！！

だが振り向いた先では、アデリーネが悪魔の慰み物となりながらも目で訴えて来る。「早く行け」と。

「……っ！！」

歯を食いしばり、アデリーネに頷き返す太郎丸。彼女の身体を張った頑張りを、自分如きが怒りに任せた行動で台無しにする事は出来ない。それこそが彼女に対する最大の冒涜だ。

ノエルの肩にマントを掛け、その場から離れる太郎丸。

村を抜け、篝火が遠く離れ、嬌声が遠退いてもまだ彼は速度を緩めず、川を渡り、山を越え、更に川をもうひとつ渡ってもまだ走り続ける。

そうして月が空の頂点に達した頃になり、ようやく歩を緩めた。

「ここなら見つかるまい」

山林の中にある岩壁の亀裂。幅は人が一人、横になってギリギリ通れる程度。高さも太郎丸の身長ほどしか無い。だが身を細めて中へと進んでみれば、大人四人程がゆったりと座れる空洞が広がっている。

そこはエルフの隠里からの帰り道、ヤマトとアデリーネの三人で通り雨に降られてさ迷い歩き、偶然見つけた自然の休憩所。それと同時に、アデリーネと申し合わせた隠れ家でもある。

「ノエル殿、もう安心だ。ゆっくり休まれよ」

枯葉のベッドに傷付いた天使を横たわらせると、ベルトポーチか

らありったけのポーションを取り出す太郎丸。それを丁寧にノエルの傷口に振りかけて行く。

傷に反応し、淡い魔法の輝きを放ち始めるポーション。だが案の定、思ったような効果は出ない。悪魔の呪詛が、治癒を邪魔しているのだ。

「う……あ、あぅ……！」

「ノエル殿ッ！」

傷が痛むのか、時折りノエルは苦しげに喘ぎ、身を捩った。額に手を当てれば、熱病にでも侵されたかの如き発熱がある。激しく汗をかき、うわ言のように何かを言っている。未だ目覚めぬ彼女がどんな悪夢を見ているのか、想像するだけで虫唾が走る。

そんな中、太郎丸は聞いた。苦しげな吐息の中で、確かにノエルは呼んでいた。ある男の名を……何度も、何度も……まるで忘れる事を恐れているかのように、何度もだ。

「……ヤマトよ、お前は今、どこで何をしている」

手持ちのポーション、その大半を使い切る頃、ようやくノエルの呼吸が穏やかになってきた。熱も随分と下がり、傷口から流れ出していた血も、とりあえずは止まったようだ。

その事を確認し、太郎丸は立ち上がる。

今、ノエルが最も必要としている男は居ない。自分に彼の代わりは不可能だ。しかし、やれる事はある。今ここに居る自分にしか出来ない事だ。

「ノエル殿、某は暫し留守にする。明日の朝には戻る故、ゆっくり眠るがよかろう」

聞こえていないだろうと思いつつも、その旨を告げる太郎丸。
腰の剣を確認し、鎧の留め具を絞め直すと、岩壁の隠れ家から外へと歩み出る。
未だ月は空にあり、夜明けの時は、まだ遠い。だが……。

「もっと遠く、安全な場所まで逃げろとお主は言うのかもしれぬが……許せ、アデリーネ殿」

太郎丸は道具袋に収められた、小さな布張りの箱に語りかける。
強い衝撃でも受けたのか、その箱はひしゃげ、形を崩している。そして中に収められた品……小さな花びらが可愛らしい髪飾りもまた、壊れていた。

『太郎丸様、これを預かってもらえますか？　私の、とても大切な物なのです』

どこか切なげな、アデリーネの言葉が蘇る。この壊れた髪飾りが如何様な物か計り知れたが、自らの身体を悪魔に差し出す事さえ厭わぬ娘が『大切な物』と言ったのだ。彼女の中でこの小さな物品がどれほど大きな意味を持つのか、それくらいはわかる。

「いま行くぞ！」

揺るぎない決意を胸に、漆黒の人狼が月夜を駆ける。その姿、疾風迅雷が如く。

第三十七話：悪魔の村（三）（前書き）

このお話には残酷な表現と、性的な表現が含まれます。苦手な方は十分にご注意下さい。

第三十七話：悪魔の村（三）

太郎丸はノエルを連れ、安全な場所まで逃げられただろうか？
そしてノエルの受けた傷は大丈夫だろうか？　気掛かりで仕方ない。

「ん？　エルフの姉ちゃん、流石に疲れてきたか？　まぁ夜通しぶっ続けだからなぁ」
「あ……はい。ですが平気です、申し訳ございません」

暫し呆けていた自分に気付き、悪魔たちへの奉仕作業へと意識を戻すアデリーネ。土の上に直接敷いたゴザの上で裸の上体だけを起こし、白み始めた東の空に、時の経過を思う。

心を殺していると、こんなにも無為な時間が過ぎて行くものなのか。そう考えるとノーウェイの屋敷で過した長い年月は、ここ最近の一年にも満たない時間の、ほんの数分の一の価値にも及ばないように思える。

様々な事を考え、仲間と喜びや悲しみを分かち合い、今を精一杯生きるという事。千年に及ぶと云われる長い寿命を得て、エルフという種族はそういった刹那の輝きを失っているのではないか？　そう思える程に、アデリーネにとってヤマトたちと出会ってからの生活は充実し、輝いている。

とはいえ、屋敷で培った技術がこうして役立っているのだから、天の配剤という物を意識せずにはいられない。。

「次は俺の番だ。エルフ、こっちに来い」
「はい、参ります」

肌を合わせていたのとは別の悪魔に呼ばれ、立ち上がろうとするアデリーネ。だが自分でも気付かぬ内に、彼女の体力は既に底をつ

いていたようだ。
　立ち上がろうにも膝が笑い、腰が鉛のように重い。腕も痺れて感覚が薄く、なにやら目の前も霞む。動こうにも、動く事ができない。
「おい、どうした。早く来ないか！」
「も、申し訳ございません。今すぐ……」
　今、ここで頑張らず、いつ頑張るのだ？　気力を奮い立たせ、四肢に力を込めるアデリーネ。
　少しでも時間を稼がなくては。ノエルを安全な場所まで逃がす為……彼の大切な人を助ける為に、自分が出来る最善を尽くさなくては！　それが自分に優しくしてくれた、彼への……せめてもの恩返しとなるのだから。
「うぐ……っ！」
「あん？　どうした、エルフ？」
　アデリーネの脳裏に浮かび上がる、彼の顔。優しくて、不器用で、真っ直ぐな人。小さくて弱いけれど、何度も立ち上がる強さを持った……。
「ぐっ……げほっ！！」
「うひぃ！　この女……吐きやがった！！」
　目の焦点が定まり、穢れた自分自身と、周りにある爛れた現実が見えた時――アデリーネは胃の中の物を全て吐き戻していた。吐しゃ物は彼女の下に居た太った悪魔に降りかかり、情けない悲鳴が上がる。
「この野郎！　なんて事しやがる！！」

「げほっ、申しわけ……きゃうっ！！」

太った悪魔がアデリーネの頬を張った。たかが平手とは思えぬ威力に華奢なエルフは大きくよろめき、ゴザの上から土の地面へと転がり出る。

「げっ……げふっ……」

「こンのクソアマ……俺様が優しくしてやった恩を仇で返しやがって！」

太った悪魔が倒れるアデリーネに迫る。

もう限界だった、自分を騙し続けるのは。いくら彼の大事な人の為と思っても、いくら彼の役に立ちたいからと考えても、彼を……ヤマトを想うたび、胸が張り裂けそうになる。こんな事をしか出来ない今の自分が嫌で嫌で、どうしようも無くなる。

「あの天使と同じ目に合わせてやる……手足を圧し折り目を抉り、髪を毟って歯を抜いて……キレイな顔を滅茶苦茶にしてやる！！」

太った悪魔の目が真紅の輝きを帯び、薄闇に真っ赤な尾を引いて動く。

その目を見つめ、アデリーネは思った。時間稼ぎもここが限界。あとは悪魔たちの拷問に、自分の命をどこまで保てるか……それだけだと。

天使とは違い、脆弱なエルフの身体。ノエルと同じ責め苦を与えられたなら、精々半日も生きていられれば御の字だ。その後、この悪魔たちは自分の死体を捨て置いてノエルを追うだろう。その時までに、どうか太郎丸が遥か彼方の安全圏まで到達していますように……それだけを望み、未だ見ぬ神へと祈る。

「そら、まずはその尖った耳からだ！　両方とも引き千切って、豚の餌にしてやる！！」
「いっ……あぁぁっ！」

悪魔の手が、アデリーネの耳に伸びる。抵抗するも強い力で掴まれ、側頭部にも手が掛かる。力任せに引っ張られ、肉と骨が軋む音が耳そのものから聞こえて来る。ノエルの時と同じ状況が再び繰り返される……誰もが思った時だった。

「……ッ！？　ぐがあぁぁぁぁッ！！」

悲鳴が上がった。野太い、悪魔の悲鳴が。
アデリーネの耳は無事だ。逆に無事で無いのは、彼女の耳を掴んでいた悪魔の腕。両腕とも肘が普通ではあり得ない方向に曲がり、ブラリと垂れ下がっている。

「ギャアァァっ！　俺の腕が！　どうして！？　なんでっ！！」
「どうした、何がどうなった！？」

騒ぎ出す悪魔たち。その視界の隅で、漆黒の影が疾風のように動いた。

「ぎゃっ！」
「ごぶっ！？」
「ぐばぁッ！！」

次々と、何かに弾かれるようにして吹き飛ぶ悪魔たち。ある者は家の壁に突っ込んでぶち破り、またある者は高々と空を舞って礫台へと激突し、砕けた支柱と共に地面へと転がった。

「なっ……！　ど、どうして……！」

驚き、我が目を疑うアデリーネ。

ようやく山影から顔を出した朝日に照らされ、自分を庇うようにして立つ人物。それは黒い毛皮の寡黙な人狼、太郎丸その人だった。

「待たせてすまぬな、アデリーネ殿。走れるか？」

「は……走れるか、ではありません！　こんな所で何をなさっているのです！　予定と……違うではありませんか！！」

珍しく激昂し、声を荒げるアデリーネ。ノエルを助ける為に彼女が立てていた計画はこうだ。

まずは自分が囮となり、ノエルを逃がす。太郎丸はノエルを連れて、可能な限り遠くへ逃げる。その後アデリーネは自力で村を脱出。ノエルを逃がし終えた太郎丸と隠れ家で合流し、逃げる……。

「貴方が戻ってきてしまわれては、私がここに残った意味が……」

「何を言う。そなたとて、最初から逃げる気など無かったではないか」

お互い様だ、と太郎丸は言った。そしてアデリーネにマントを掛けて肌を隠させると、ベルトポーチから数本のポーションも取り出して手渡す。

「今度は某が時間を稼ぐ。今の内に体力を回復させ、この場を離れるのだ」

そうだった。この男もまた、ヤマトと同じく愚直な男だったのだ。

何の得にもならないというのに、危険を冒してまでエルフの隠里で戦った彼。有名人となったサークスと袂を別ち、行方知れずの低

レベル冒険者を探す彼。損得や効率では無く、じぶんのやろうと思った事を黙々とやってのける――太郎丸は、そんな人なのだ。

「さっきの野郎か！　逃げてりゃ良い物を、ノコノコ戻ってきやがって……もう見逃しゃしねぇぞ！！」

痩せた悪魔が、鍬を振りかぶって太郎丸へと襲い掛かる。武器こそ見劣りするが、突進速度はミノタウロスのそれに匹敵し、力では大きく上回る。防御力もまた凄まじく……。

「ふんッ！！」
「ぎゃぶっ！？」

だが様々な分析よりも、上段に構えた太郎丸の剣が悪魔の頭蓋に振り下ろされる方が早かった。

大岩が落ちたような衝撃と轟音が村中に響き、粉塵が巻き上がる。痩せた悪魔は頭の天辺をべっこりとへこませて首を胴体に減り込ませ、更に身体の半分ほどを地面に減り込ませた状態で気を失った。

「なん……だとっ！？」

三下じみた台詞を吐いて、たじろぐ悪魔たち。

もしも彼らが少しでも武術や剣術を嗜んでいたのなら、その目には映っていた事だろう。仁王立つ漆黒の人狼から、陽炎のように立ち上る激しい怒気を。迸る闘気を。

「今日ほど……下衆を斬る刃を持たぬ我が身を、口惜しいと思った日は……無い！」

パッと土煙が上がったかと思うと、そこにもう太郎丸はいない。

次の瞬間には凄まじい衝突音と情け無い悲鳴が上がり、真っ赤な肌の悪魔が地面を抉りながらすっ飛び、別の悪魔と激突して倒れる。

「ひっ……怯むんじゃねぇ、お前ら！　少々ぶっ飛ばされたって、俺達は死にゃしねぇ！　一斉にかかっブギャッ！？」

喋り終える前に顔面へ鋭い突きをもらい、胴を軸としてその場で回転する悪魔。空中で数回転した後に、横腹を薙ぎ払う横一閃の漸撃で他の悪魔たち同様、遥か彼方へと飛んで行く。

「……次はどいつだ？」

「あひっ！？」

太郎丸の視線が向いた先に偶然居た悪魔が息を飲む。

「貴様かッ！！」

牙を剥き、迅雷が如く剣を振るう太郎丸。

「オォオォオッ！！」

夜明けの村に、人狼の咆哮が轟いた。

第三十八話：悪魔の村（四）

顔や身体に包帯を巻き、痛々しげに足を引き摺る悪魔たちが村野集会所に集まる。魂を売って強靭な肉体を得た彼らの、そんな姿を見る機会など滅多にありはしない。

「逃げらレた、だと？」

情けない顔で頭を下げる悪魔たちへ、サークスは多分に怒りの色を含んだ声を浴びせ掛けた。

「その……天使を連れて逃げた狼の獣人が滅法強くて……あとエルフの女も……」

「結構追い込んだんスよ？　でも逃げた先に罠がいっぱいあって……」

「くっ……！　太郎丸とアデリーネか。油断モ隙もあったモノでは無イな」

悔しげに呻き、かつての仲間を思い返すサークス。

自分たちが伝説の手甲を探す為に村を離れた、ほんの一週間程の期間。その間に乗っ取っていた村が襲撃を受け、戦力は半壊。その上ノエルまで奪われた。無残な天使の姿をなるべく多くの人々へ見せつけ、その信頼を削ごうと生かしておいた事が裏目に出た形だ。

僅かな隙を突いて、見事に目的を達した彼ら二人。何十体もの悪魔がうろつく村へ、たった二人での天使奪還作戦はあまりに無謀と感じられる。

しかし太郎丸はベテランの冒険者、アデリーネは高い知力を誇るエルフ。覚醒したばかりで能力が低く、しかも冒険経験の無い悪魔たちでは一度でも見失ってしまえば追跡は困難だ。それを見越して

の大胆不敵な行動……敵ながら天晴れという以外に無い。
しかし、天晴れなどという言葉では収まりがつかないのが、以前よりアデリーネに目を付けていたバラだ。鼻息荒く脚を踏み鳴らし、手近な者に食って掛かる。

「ばるるっ！　で？　お前らはイイ思いしたのか？　アデちゃんに、イイ事してもらったのかっ！？」
「え、ええ。まぁ一応……あんだけの別嬪さんだモンで、ヤっとかないと損かと思っ……」

その悪魔は最後まで言葉を続ける事ができなかった。激昂したバラに、頭部を丸ごと食い千切られたのだ。
ボリボリと頭部は噛み砕かれ、残った胴体からは真っ黒な血が勢い良く笛のような音を立てて噴出し、ゆっくりと崩れ落ちる。

「ぶおぉぉぉッ！！　お前らッ！　よくも俺より先にッ！　ア、ア、アデリーネに手ェ付けやがったなあアァァァッァッ！！」

茶褐色だったバラの肌がサッと赤銅色へと変色し、深い赤色だった目から真紅の輝きが漏れ始める。

「ゆッ！　るッ！　さッ！　んッ！　ぞおぉぉぉぉッ！！」

地団太を踏んで地を揺らし、一言発する度に腕を振うバラ。運悪く丸太のような彼の腕に巻き込まれた悪魔たちはまとめて薙ぎ倒され、踏み鳴らす蹄によって体の各所を踏み砕かれる。
苦しげな悲鳴を上げる悪魔たちだが、肉体の強化された彼らがそう簡単に死ぬ事は無い。だがそれ故に、とことん運の悪い者は何度も何度もバラに踏まれ、死ぬ事も出来ずに地獄の苦しみを味わう事となった。

「バラ、その辺にシておけ。辺りがクサくなる」
「ぶふっ、ぶふっ、ぶはーーーっ！　くっそ、くっそぉ……！」

サークスに言われて仕方なく動きを止めるバラ。まだ腹の虫は収まらない様子だったが、これ以上にダダを捏ねても仕方がない。

「ソレにしても……」

サークスは思う。生物の大半を遥かに凌駕する能力を持ちながら、悪魔は何故これほどまでに脆く、この世界に進出する事が出来ないのか。理由は幾つかあるが、その内の一つが、この理性と協調性の無さだろう。

欲望を糧とする悪魔。それ故どうしても己の欲望に忠実となってしまう。私利私欲を捨てて目標の為に協力するという事を知らず、物欲や性欲に溺れて目の前にある餌に食いつき、隙を突かれてしまう。

天使の始末よりも、己が欲望である武具探索を優先させた自分に言えた義理では無いが、本当にどうしようもない馬鹿さ加減だ。特に悪魔憑きとなったばかりの悪魔は飢えており、そういった傾向が強い。

「クソ……仕方ない。武具捜索を一旦打ち切ッテ、太郎丸たちヲ……」
「まあ、そう焦らなくても良いではありませんか、ボス」

サークスの声をやんわりと遮る者があった。一連の騒ぎには関与せず、少し離れた場所で寛いでいたガイランだ。腕を組む彼の両腕には、黄金色に輝く見事な手甲が装着されている。伝説の武具に名を連ねる『幻魔の爪』だ。

「伝説の装備でも探しながら、ゆっくりと向えば良いのです。賢者の鎧が天使の力にも有効だと判った今、我らに敵はおりません」

組んでいた腕を解き、ゆるりと立ち上がるガイラン。虎の獣人は音も無くサークスへ近寄り、小さく耳打つ。

「我らが嬲り、ポンコツとなったあの天使がいくらか回復した所で、たかが知れております。それならば今の我らに必要なのは、攻撃力。信仰を失っていない天使にでも通用する、巨大な破壊力です」

鋭い目を赤く爛々と輝かせ、ガイランが手甲から伸びた爪を擦り合せる。この獣人が欲するのは、強さ。敵を蹂躙し、嬲り者に出来る圧倒的なチカラだ。

「狩りを、楽しみましょう」

「ソウだな……」

彼の言葉に頷くサークス。伝説の鎧と盾を得て天使の光が脅威では無くなった今、仮にノエルが復活したとしても焦る必要は無い。むしろ……。

「ボスが気に掛けていたチビも、俺の手にかかれば簡単に虫の息。自分の女が滅茶苦茶にされた事を知れば、ベッドの上でさぞ悔しがる事でしょう」

「アア、ソウだ……その通りだ。奴だけは生かさず殺さず、苦しみを与え続ける必要がアル」

ヤマト。奴を嬲る事こそが先決だ。

サークスは……いや、サークスを乗っ取った悪魔は思い出す。光

の奔流に飲まれ、聖なる力に身体を焼かれながら吐き出した言葉を。

『ヤマト！　お前ダケは何千、何億回生マレ変ワロウとも見ツケ出シ、最高の屈辱と絶望を与エテ、必ズ殺ス！！　覚えてイロ、必ズだ！！』

長い時間を掛けて欲に肥え太った人間に囁き続け、やっと魂が手に入った……と思った途端に滅ぼされる口惜しさ。しかも、最も大きな障害となったのがレベル４程度の小童なのだから、余計に許し難い。

「ぶひ？　確か大将が前にゲットした身体って……ノーウェイとか言いましたっけ？」

サークスの中に住まう悪魔が頷いて返す。

「アレは中々だった。身体の性能は低かったガ、家柄と資金力だけは比類無く……邪魔さえ入らなければバ、酒でも女でも、金で手に入るモノなら全て得られていただろう。ソレだけに、奴らの妨害は腹立たしイ」

サークスの口を借りて、軽く舌打つ悪魔。

だがかつてノーウェイに憑いた自分を滅ぼしたパーティーも、サークスは自らの手の中へ堕ち、ノエルは再起不能。ヤマトもガイランの手によって蹂躙されて半死人となっている筈だ。残るは太郎丸のみだが、その太郎丸とて悪魔の軍勢を前にノエルを連れて逃げるのが精一杯だった様子。アデリーネの協力を得てもその程度なのだから、恐れるに足りない。

「よし……全員、身支度ヲ整えテおけ！　明日カラ動くぞ！」

サークスの声に、おう！　と声を上げる一同。

「覚悟しろヤマト。お前の大切な物は全て、この僕が破壊してヤル……お前の目の前で！　そして最高の屈辱と絶望の中、優しく縊り殺シてあげるよ……」

革グローブを軋ませて拳を握り込み、にやりと笑った金髪の青年。真面目で責任感が強く、ドライだけれど仲間思い――そんなかつての面影は、今のサークスには微塵も残されていなかった。

第三十九話：コーヒー・ブレイク（一）

夢を見ていた――とても懐かしい夢だ。

木漏れ日の中、大樹に寄りかかるようにして天使の少女が泣いている。背に生える純白の翼には痛々しい傷――そう、これはあの時の――彼女と初めて会った時の夢だ。

夢とはわかっていたものの、少女のあまりに痛々しい様に見ていられず、手を差し伸べようか――そう思った時だ。どこからか現れた小汚い少年が慣れない様子で天使に近付き、あれこれと声を掛けて、慰め始めた。だがあまりにも乱暴な言葉遣いと荒っぽい態度に、夢の主は――ヤマトは思わず苦笑してしまう。

『もっと上手い言い方があるだろうが、ったく。ちったぁ女心ってモンを考えたらどうなんだ？』

夢の中の少年へ――過去の自分自身へ、誰かさんを棚に上げてダメ出しをするヤマト。その声が届いたのか否か、やがて少年は天使の少女へと手を差し伸べ、少女も――ノエルも涙を拭き、ヤマトの手を取って立ち上がる。

もしかすると、二人が一番幸せだったかもしれない時。何もかもが溢れていた、満たされた時代。

『あの頃は良かった……なんて、な』

もう二度と取り戻せない時間。夢の中でしか見る事は叶わない。

やがて時が経ち、翼の癒えた天使の少女は、少年の手を離し大きく羽ばたいて舞い上がる。強く、頼りになる男と共に。空を駆ける二人の速度は速く、高度は高く、とても自分の足ではついて行けない。どんなに全力で走っても、追い縋るどころかぐんぐん離され、

終いには見えなくなってしまう。

『……これが地虫と、鳥の差か。どうしようも無ねぇな』

息を切らせて立ち止まり、痛む胸を押さえてヤマトは呟く。

少女が、少年に歩調を合わせてくれる時期は終わった。これからは互いに、相応しい場所で生きる方が良い。暗く湿った地面と、明るく広大な大空で――と、その時だ。

『……！？　なんだ？』

突如、晴れ渡っていた青空に暗雲が広がり、陽光が遮られた。夜のように暗くなった世界に滝の如く降り出した雨は激しく地面を叩き、雲の間には雷光が走り雷鳴が轟く。

突然の出来事に呆然と空を見上げるヤマト。その目に、何かが映った。雲の切れ間から、真っ直ぐに落ちて行く白い物。あれは――。

『ノエル！』

くるくると回転して羽を撒き散らし、遥か遠くをゆっくり堕ちて行く天使の少女。

今すぐ助けに行かないと！　受け止めてやらなくちゃ！

ぬかるんだ地面を蹴って走り出すヤマト。しかし何時の間に負ったのか、全身に受けた傷が彼の走りを遅らせる。走るべき足は折れ、受け止めるべき両腕も動かない。だがヤマトは地面を這って――それこそ地虫のように這いずって、落下地点へと急ぐ。

『おいおい、何やってんだよ。馬鹿じゃねぇのか？　行っても無駄だぜ？　あの下じゃサークスの野郎が準備万端で構えてんだ』

『ふざけんな！　受け損なうかもしれねぇだろ！？　行かなくてど

うすんだ！』

『這って行ったんじゃ、どうせ間に合わねぇって。楽しそうにしてる連中を、間近で見る羽目になるだけさ』

『だとしても、何もしねぇよりマシだ！　黙って見てるだけなんざ、糞食らえだ！！』

弱い自分を怒鳴りつけ、這いずり続けるヤマト。だがその間にもノエルは高度を下げて地面に迫る。堕ちる天使は遥か先。這って到達するには遠すぎる距離だ。どんなに手を伸ばしても届く事は無く、落下地点には誰も居ない。そして……。

『うわあぁぁぁぁッ！！』

叫び、薄いシーツを跳ね上げて、ヤマトは飛び起きた。瞬間、押し寄せてくる現実感――。

夢から覚めたのだ。

「こ、ここ……どこ、だ？」

見覚えの無い室内。小ぢんまりとした部屋に、ぽつんと置かれたベッド。そこでヤマトは眠っていたようだ。

清潔な白いシーツが敷かれたベッドの脇には水差しが置かれており、床に落ちている氷嚢はきっと、今し方まで自分の額に乗っていたのだろう。少しだけ開いた窓からは涼しい風と陽光が差し込み、微かに小鳥の声も聞こえる。どこか遠くからは明るい人の話し声と、妙に懐かしさを感じさせる香ばしいコーヒーの香り。

一体、どうして自分はこんな所に寝ているのか？　何がどうなったのか？　確か包帯男にやられて……？

ボンヤリとした頭でそれらを考える内、部屋の外から小さな足音が近付いて来た。やがてドアを乱暴に足で押し開け、姿を現した人

物。それは……。

「んぉっ？　おぉっ！　やっと目が覚めたか、糞チビぃ！」

元気良く、明るい声が室内に広がる。水の入った桶と手拭いを抱えて満面の笑みで登場した幼い少女……かつてコーヒー収穫の依頼を受けて訪れた村で出会った、スミという娘だった。

半年……いや、一年ぶりくらいだろうか？　久しぶりにみた彼女は相変わらず田舎のオテンバ娘といった風情で、健康的な小麦色の肌を簡素な貫頭衣で包み、深い赤毛の髪も以前と変わらず頭の天辺で雑に結んでいるだけ。もう少し格好に気を配れば光る物がある容姿ではあるのだが、齢十程度の彼女に、それはまだ少し早い話なのかもしれない。

「スミ!?　おま、なんっ……ゲホ、ゲホッ……！」

「おいおい無理すんな糞チビ。お前、喉も潰れてんだから。大声出さずに、横になっとけ」

スミはそう言って手拭いを絞り、寝かせたヤマトの額に置いた。ヒンヤリと心地良い感覚が、頭の中にまで染み込んで行く。

「糞チビ。お前、自分がどうしてココで寝てるか、わかるか？　ま、わかんねぇよなアレじゃ……」

何かを思い出すように、視線を落すスミ。歳の割には、妙に大人びた仕草だ。

「ココはアタシの村。お前が運び込まれて、もうずっと寝たままで二週間……三週間くらい？　そんくらい経ってるんだぞ？　途中で何回か飛び起きてたけど……その顔じゃ覚えて無いな？」

微かに頷くヤマト。この場所がスミの村だという事さえ初耳だ。
それに加えて、自分が謎の包帯男に襲われてから、既に一ヶ月近くが経過しているという事実にも驚いた。

「よし、暇潰しにアタシが教えてやるよ。糞チビがどうして、この村に居るのか」

窓枠にひょいと腰掛け、話し始めるスミ。
語り自体があまり上手で無く、しかも時間軸が前後してわかり辛い彼女の話をまとめると、こうだ。
ヤマトたちが幻のコーヒー『コピ・ルアク』を手に入れ、村を去った後からスミの話は始まる。
村人たちはヤマトが発見した、ネコの糞から豆を集める方法を使って、コピ・ルアク生産販売に着手した。幸いにも競合他者が居なかった事や、富豪ノーウェイが悪魔憑きとなった事件が丁度良くコピ・ルアクの宣伝となった事もあり、商売は非常に順調。正に順風満帆となった。
そんなある日、スミと村人がコピ・ルアクを売り歩いていた時の事だ。町と町とを繋ぐ街道の中程、『旅人たちの家』に差し掛かると、森の茂みから聞き覚えのある、悲痛な声が聞こえて来た。何事かと思い、こっそりと覗きに行くスミたち。するとそこには全身傷だらけで倒れる血塗れのヤマトと、包帯を体中に巻いた怪しい獣人が立っていたのだ。

「そん時に見た獣人……多分、ありゃあトラだな！　ブチのめしてやろうと思ったんだけど、そのトラ野郎はアタシたちに恐れをなして、お前を置いて、あっという間に山の中に逃げちゃった」

ほっと息を吐くヤマト。下手をすれば、スミたちも自分と同じ目

に遭っていた所だ。複数人で居た事と、街道に近く、一目に尽き易かった事が幸いしたのだろう。

「で、フルボッコで死に掛けの糞チビを村まで運んで、チヤホヤと養ってやってたってワケだ。感謝しろよ？」

確かに、これは感謝しないわけにはいかないだろう。もしスミたちが通り掛からなければ……あるいは傷付いたヤマトを見捨てていれば、きっと今頃命は無かったのだから。

声が出せないヤマトはスミと目を合わせ、軽く頭を下げて感謝の意を表した。そんな彼からスミは、何故か恥かしげに顔を背ける。

「ヤメロよ、気持ち悪い！　イイんだよ、そんなの。ありがとうなのは、こっちなんだから」

首を傾げるヤマト。だがその疑問は、すぐに氷解する。

「お前のお陰で、村は潤ったし……コイツも助かった」

スミが目をやると、窓の隙間からするりと入り込む小さな生き物。しなやかな身体とふわふわの毛並みが美しい、それは茶色い一匹の猫だった。その顔付きにはどこか見覚えがあり、ヤマトが記憶を紐解いて行くと……コピ・ルアク発見のヒントをもたらした子猫の存在が思い浮かぶ。

「そ。あん時の山猫だよ。アタシが飼ってるの……っていっても、半分野良だけど。名前は……ま、まぁイイか」

何故か口澱むスミを他所に、ヤマトはその猫に視線を寄せる。

そっか、元気でいたんだな――。

ヤマトの気持ちを察したのか軽やかにベッドへと飛び乗り、頬に頭を擦り付けるスミの猫。何が気持ち良いのか、ごろごろと喉を鳴らして目を細めている。

「村を助けてくれた冒険者っつって、みんなお前らにゃ感謝してんだ。そんなワケだから遠慮せずに、ゆっくりして行けよ糞チビ！アタシはお前が起きたって知らせて来る！」

ひらりと窓枠から飛び降りて、とたとた軽い足音と共に走り去るスミ。その背中を見送り終えると、途端にヤマトへ睡魔が押し寄せて来た。

（村を救ってくれた冒険者、か……）

なんだか、まだ良くわからない事も多いが、今はとにかく眠い。何もかも忘れて、とりあえず眠ろう……どうせもう、何の目的も無いのだから。

目を閉じ、猫と一緒になって寝息を立て始めたヤマト。

彼はまだ、何も知らない。遠い空の下で起っている、辛い現実を。

第四十話：コーヒー・ブレイク（二）

ヤマトが目覚めてから三日。

その頃になると体力もある程度は回復し、ふらつきながらもベッドから起きて自力で用を足せる程度にはなっていた。何をするにも一々介添え人の手を借りなければならなかった彼にとって、これはかなり嬉しい進歩だ。

といっても筋肉や腱が何箇所も断裂し、骨も折れていた両脚。杖を使った上で壁に寄りかかり、ゆっくりと移動するのが精一杯で、完全回復には程遠い状態なのだが。

「ほら、見ろよ糞チビ。村の真ん中に砂場みたいなのあるだろ？あそこで猫がウンチすんだ。凄いだろ？　前みたく、わざわざ山の中まで取りに行ったりしないんだぜ！」

良く晴れた空の下、病み上がりのヤマトを介助しつつ、リハビリも兼ねて村を案内してくれるスミ。

日中のヤマトは、歩行訓練をひたすら繰り返していた。自由に動かない身体を引き摺っての運動はかなり辛いものだったが、見上げた空の如く明るく、どこまでも澄み渡るスミの笑顔と元気な声が陰鬱な気分を吹き飛ばしてくれる。

かつて訪れた村は、以前よりもずっと活気に満ちていた。

以前発見した猫の糞からコピ・ルアクを回収するという採集法。村人たちはそれを更に発展させたようだ。

猫が同じ場所で用を足すという習性を利用し、大胆にも村の中央に巨大な猫トイレを作り、そこへ山猫たちを招いているのだ。山猫たちは森でコーヒーの実をたらふく食べた後、村にやってきて用を足す。村人たちはそれを回収する……という一連の流れ。最初に猫トイレで用を足すように躾ける必要はあるが、それ以降は特別に何

かするような事は無い。加えて村そのものが猫たちを守る柵となり、凶暴な肉食獣や密猟を企む不届き者から、猫とコピ・ルアクを同時に守る事が出来る。

「上手いこと考えたモンだな」
「おう！　いま村は絶好調だ！」

ようやく声が出せるようになったヤマトが言うと、スミはぐいっと親指を立ててケタケタと笑った。他の村人にも聞いてみたが、随分と儲かっているらしく、しきりに感謝されてしまった。

まさか自分が考えたその場凌ぎの方法で、こんなにも状況が変わるだなんて思ってもみなかったヤマトにとっては寝耳に水の話。だが村人たちは義理堅く、ヤマトへの恩返しだと言って無一文の彼に寝床と食事を用意してくれた上、手厚い看護までしてくれている。この上ない厚待遇だ。

他人から良くされる事に慣れていない彼はこんな時、どのような顔をすれば良いのか困ってしまう。

「おい糞チビ！　そろそろ腹減ったろ。メシにすっか？」

別にそれほど腹は減っていなかったが、激しく唸りを上げるスミの胃袋を慮って、ヤマトは昼食の提案を受け入れる。

山間部の貧しい村では、朝と夜、一日二回の食事が普通。しかしこの村では、軽くではあるがみんな昼食を摂っている。お昼に食べるご飯は、村が豊かになった、目に見える証といえた。

「よし出来たぞ、食え！」
「お前さぁ……もうちょっと他に言い方無いのかよ？　まぁいいや……いただきます」

ベッドのある部屋に戻ったヤマトは、床に敷いたゴザの上に足を伸ばして座り、行儀良く手を合わせてからスプーンを手に取った。スミもそれに習い、少し遅れて手を合わせる。

裏返した木箱をテーブル代わりにした、質素な昼食。置かれたお椀の中には、軽く湯気の漂う薬草粥が盛られている。柔らかな米とシャキシャキした薬草の歯応えが心地良い、療養時の定番食だ。

「……おい糞チビ、食わせてやろうか？」

「いや、これも練習だ。一人でやる」

スミの気遣わしげな言葉をかわし、ヤマトは震える右手でスプーンを握る。そろりそろりとお粥にスプーンを潜り込ませ、持ち上げようとするが……。

「うあっ！」

最後まで持ち上げる事が出来ず、スプーンを取り落としてしまった。湿った米粒が散らばり、スプーンも床で跳ねる。

「悪い、スミ！　またやっちまった……」

慌てて詫びるヤマト。そして包帯が巻かれた自分の右手を恨めしそうに見つめた。

彼の右腕、その肘から先は、もう殆ど動かない。包帯によって隠された右腕は破壊し尽されてグシャグシャとなり、それは酷い有様なのだ。

「ま、気にすんな。ほれ、無理せずに左で食えよ」

差し出されたスプーンを左手で受け取るヤマト。だがその左腕と

て肩から上には持ち上げられず、万全とは言い難い。
そして薬草粥を運ぶ口も同様だ。ズタズタにされた咥内と、中程で折れた歯については、ポーションによってほぼ再生している。だが完全に抜き取られてしまった多くの歯は元に戻らず、今も失われたまま。昼食メニューがお粥なのも、それが理由だった。

「糞チビ……やっぱポーションじゃダメか？　全部は治らないか？」
「いや、気長にやってりゃ、そのうち治るだろ」

そのうち治る――自分の言葉に拙い嘘を感じるヤマト。彼が受けた傷の多くは、ポーションの効果をほとんど受け付けなかった。これはほぼ間違い無く、悪魔の呪詛が乗った傷……つまりヤマトを襲った包帯男は悪魔だったという事だ。
先の通り、悪魔が付けた傷はポーション等の効果をほとんど受け付けない。『ほとんど』だ。言い換えれば『悪魔の付けた傷であっても、多少であればポーションの効果がある』という事になる。
毎日欠かさず、昼も夜も絶え間なく傷口へポーションを注ぎ続ければ、ヤマトの言ったように『そのうち治る』だろう。だがそれには、どれほどの金と、どれほどの時間が必要か見当も付かない。きっと莫大な物になるであろうと予想できるのみだ。

「おぉっ！　そっか、治るのか！　んじゃあメシ食ったら、ポーション飲んどけよな糞チビ！」

白い歯を見せて笑うスミ。治ると聞いて、我が事のように喜んでいる。とても無邪気な、屈託無い素直な笑顔だった。
真っ直ぐに自分へと向けられる好意に、ヤマトの胸は痛む。いくら鈍い彼であっても、色々と明け透けなスミの気持ちには気付いていた。幼い彼女の想いが、恋だとか愛だとかの類であるかまでは判然としないが、少なくとも好いてくれてはいるようだ。そういえば

前に来た時も、背負ってやったら大ハシャギして、別れ際にはションボリしてたっけ……。

「なぁスミ、いまココのコーヒー収穫ってさ、人手足りてんの？」
「ヒトデ？　さぁ？　んでもジイちゃんとか、毎日忙しそうにしてるぞ。じぎょうかくだい、とか言って」
「そっか……」

スミの言う『ジイちゃん』とは、村長の事だ。彼女の口ぶりから察するに、もう少し手広くやりたいが、そこまで手が回らない……といった所なのだろう。

薬草粥を口に運びながら、ヤマトは今後の事を考えていた。もう少し体力が回復したら、この村で住まわせてくれと頼んでみようか？　手足が完全に回復しなくても、豆拾いくらいであれば出来るだろう。

この身体では、もう冒険者には戻れない……戻る理由も無い。以前サークスに言われたように、自分と妹が慎ましく生活できる程度の金と、退屈だが平和な毎日があれば……。

「どうした糞チビ、何考えてる？　また何かウンコの中から掘り出すつもりか？」
「な、なんか引っかかる言い方だな……人をウンコの専門家みてぇに言いやがって」

だけど、それだって悪くない。この村の人に喜んで貰えるなら、何回だって掘り返してやろう。

ヤマトはスプーンを置いて椀を持ち、粥を息に喉へと流し込む。弱っていた喉と内臓が悲鳴を上げたが、お構いなしだ。良く食べて良く眠り、早く動けるようにならないと。それである程度治ったら、村長に話をしてみよう……。脳裏に浮かぶ冒険仲間の顔を振り払っ

て意思を固めるヤマト。
そして、それから一週間という時間が流れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7526w/

英雄予備軍冒険譚

2011年11月2日11時55分発行